

一本杉・茶屋下・改田遺跡 栗坪遺跡

2004

財団法人 岐阜県教育文化財団

序

一本杉・茶屋下・改田遺跡、栗坪遺跡が所在する美濃市は、市の総面積の8割が山林で北に至るほど高くなり、市内を南流する長良川と、長良川に東流して合流する板取川という大きな川を持ちます。栗坪遺跡は板取川沿いに広がる盆地にあり、一本杉・茶屋下・改田遺跡は長良川の西南岸に広がる沖積地に位置します。美濃市は自然豊かで林業などを中心に川を利用して栄えた地域で、特に中世には川沿いに遺跡が多く分布します。

一本杉・茶屋下・改田遺跡の調査は、主要地方道岐阜美濃線道路改良工事に伴うもので、美濃市西南部長良川右岸の極楽寺地内に所在します。極楽寺とは、中世に東山口郷一带（極楽寺・横越・笠神・生櫛・志摩・大矢田）を治めた佐竹氏の菩提寺であると伝えられていますが、今回の発掘調査では13～16世紀の遺物が多く出土するとともに中国製陶磁器や土師器皿などが出土し、伝承の寺や中世の屋敷跡の広がりを考えるうえで一つの手がかりになるものと思われます。また、縄文時代早期の石器や自然流路等が確認され、南西方向に位置する縄文時代草創期の渡来川北遺跡との関連や、周辺の遺跡分布を考えるうえで重要な成果が得られました。

栗坪遺跡は県道御手洗立花線道路建設に伴うもので、調査区周辺には多くの中世の遺跡が分布しています。当遺跡は真木倉神社の近くに位置し、南に古道と宗教関連遺跡の分布の可能性が考えられます。

本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、美濃市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 岐阜県教育文化財団
理事長 日比治男

例言

- 1 本書は岐阜県美濃市大字極楽寺に所在する一本杉遺跡（岐阜県遺跡番号21207-09211）・茶屋下遺跡（岐阜県遺跡番号21207-09908）・改田遺跡（岐阜県遺跡番号21207-08755）と、岐阜県美濃市大字御手洗字栗坪に所在する栗坪遺跡（岐阜県遺跡番号21207-09647）の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、一本杉・茶屋下・改田遺跡が主要地方道岐阜美濃線道路改良工事に伴うもの、栗坪遺跡が県道御手洗立花線道路建設に伴うもので、美濃建設事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター（平成14年度までは財団法人岐阜県文化財保護センター）が実施した。
- 3 発掘調査は、宇野隆夫国際日本文化研究センター教授の指導のもとに平成14年度に実施した。整理作業は平成15年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当などは、本文第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆及び編集は近藤正枝が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削などの業務と、遺物の洗浄・注記、地形測量及び空中写真測量は株式会社岐阜テクノスに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影はSTUDIO SKYに委託して行った。
- 8 石器の実測・観察表・執筆は株式会社アルカに委託して行った。結果は第3章中に掲載した。
- 9 自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託して行った。結果は第5章に掲載した。
- 10 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、五十音順）
飯沼暢康・家田清司・清山健・高木宏和・長屋幸二・幅勝次・三島美奈子
藍見自治会・極楽寺自治会・御手洗自治会・美濃市教育委員会
- 11 本文中の方位は、一本杉・茶屋下・改田遺跡は日本測地系第Ⅶ系の座標北を、栗坪遺跡は世界測地系第Ⅶ系の座標北を示している。
- 12 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1998『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 13 調査記録及び出土遺物は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターで保管している。

凡例

- 1 出土遺物の実測の縮尺は、石器が2/3、1/3、土器・陶磁器が1/3、古銭が1/1、釘が1/2である。
- 2 遺構の略号は下記のものを用いた。

柱穴・小穴	P	土坑	SK	溝	SD
自然流路	NR	石列	SI	不明遺構	SX

なお、遺構番号は地区別に遺構別に1番から通番で付した。地区名・遺構名は調査時のものをそのまま使用している。一本杉他遺跡の遺構図版・写真図版は遺跡別に西から東の地区へと順番に掲載している。遺物番号は一本杉他遺跡の石器を1～、一本杉他遺跡の土器・陶磁器を101～、栗坪遺跡の遺物を301～とした。

目次

序

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過と方法	3
第2章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	13
第1節 地理的環境	13
第2節 歴史的環境	14
第3章 一本杉・茶屋下・改田遺跡の調査	25
第1節 基本層序	25
第2節 遺構・遺物の概要	35
第3節 遺構と遺物	(近藤・角張) 47
第4節 包含層の遺物	86
遺物観察表	90
第4章 栗坪遺跡の調査	95
第1節 基本層序	95
第2節 遺構・遺物の概要	95
第3節 遺構と遺物	98
遺物観察表	102
第5章 自然科学分析	103
第1節 一本杉・茶屋下遺跡の粘土層の薄片観察と化学組成	(藤根・今村・小村) 103
第2節 茶屋下遺跡の花粉化石群集	(新山) 112
第3節 一本杉・茶屋下遺跡の放射性炭素年代測定	(山形) 116
第4節 茶屋下遺跡出土炭化材樹種	(植田) 118
第6章 まとめ	119
第1節 一本杉・茶屋下・改田遺跡について	119
第2節 栗坪遺跡について	125

図版

挿図目次

<p>第1図 調査遺跡位置図……………2</p> <p>第2図 調査前地形測量図・試掘位置図 グリッド配置図・調査範囲図(1)…4</p> <p>第3図 調査前地形測量図・試掘位置図 グリッド配置図・調査範囲図(2)…10</p> <p>第4図 周辺遺跡分布図(1)……………16</p> <p>第5図 周辺遺跡分布図(2)……………22</p> <p>第6図 東西方向断面図……………26</p> <p>第7図 一本杉遺跡(A・B区) 北壁・西壁断面図……………27</p> <p>第8図 一本杉遺跡(G区) 東壁・南壁断面図……………28</p> <p>第9図 一本杉遺跡(F・G区) 南壁・西壁断面図……………29</p> <p>第10図 茶屋下遺跡(C・H区) 北・南・東壁断面図……………30</p> <p>第11図 茶屋下遺跡(H・I区) 西壁・南壁断面図……………31</p> <p>第12図 茶屋下遺跡(D・J区) 北・東・南壁断面図……………32</p> <p>第13図 茶屋下遺跡(J区)・改田遺跡(E区) 南・西・東壁断面図……………33</p> <p>第14図 一本杉・茶屋下遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層 分布状況図……………34</p> <p>第15図 遺構全体図……………36</p> <p>第16図 A区遺構全体図……………37</p> <p>第17図 B・F区遺構全体図……………38</p> <p>第18図 G区(上層面)・C区遺構全体図…39</p> <p>第19図 F・G区遺構全体図(下層面) ……40</p> <p>第20図 F・G区遺構全体図……………41</p> <p>第21図 H区遺構全体図……………42</p> <p>第22図 I・D区遺構全体図……………43</p> <p>第23図 J区上層・下層面遺構全体図…44</p> <p>第24図 E区遺構全体図……………45</p>	<p>第25図 一本杉遺跡下層面(Ⅳ層検出状況) NRG01平面図・断面図……………48</p> <p>第26図 NRC01・02平面図・断面図……………49</p> <p>第27図 SXH02平面図・断面図……………50</p> <p>第28図 一本杉遺跡F区Ⅱ・Ⅲ層出土石器…53</p> <p>第29図 一本杉遺跡F区Ⅱ層出土石器…54</p> <p>第30図 一本杉遺跡G区Ⅱ・Ⅲ層出土石器…55</p> <p>第31図 一本杉遺跡G区Ⅳ・Ⅴ層出土石器1…56</p> <p>第32図 一本杉遺跡G区Ⅳ・Ⅴ層出土石器2…57</p> <p>第33図 茶屋下遺跡H区SXH02出土石器1…59</p> <p>第34図 茶屋下遺跡H区SXH02出土石器2…60</p> <p>第35図 茶屋下遺跡H区SXH02出土石器3…61</p> <p>第36図 茶屋下遺跡H区Ⅰ・Ⅲ層、Ⅰ区Ⅰ層 D区Ⅳ層、J区Ⅰ・Ⅲ層、SK 出土石器……………62</p> <p>第37図 一本杉遺跡石器出土状況図……………63</p> <p>第38図 茶屋下遺跡石器出土状況図(1)…65</p> <p>第39図 茶屋下遺跡石器出土状況図(2)…66</p> <p>第40図 NRC01・02出土遺物……………68</p> <p>第41図 A区PA01～PA10平面図・断面図…69</p> <p>第42図 A区SKA01～SKA03、SDA01 平面図・断面図……………70</p> <p>第43図 A区SXA01・02平面図・断面図 ……71</p> <p>第44図 B区PB01～PB20・22・23 平面図・断面図……………72</p> <p>第45図 SKB01、SXB01平面図・断面図…73</p> <p>第46図 一本杉遺跡B・F区石列平面図…74</p> <p>第47図 一本杉遺跡石列平面図・断面図…75</p> <p>第48図 SXF01～03平面図・断面図……………77</p> <p>第49図 PG01～10、SKG01・02 平面図・断面図……………78</p> <p>第50図 茶屋下遺跡H区石列平面図…80</p> <p>第51図 PD01～08平面図・断面図……………81</p> <p>第52図 SDD01平面図・断面図……………82</p>
--	---

挿図目次

第53図	PJ01~03、SKJ01~04 平面図・断面図……………83
第54図	SDJ01~03、SXJ01・02 平面図・断面図……………84
第55図	SDE01・02、PE01・04・05 平面図・断面図……………85
第56図	一本杉遺跡（A・B・F・G・C区） 出土遺物……………87
第57図	茶屋下遺跡（H・I区）出土遺物…88
第58図	茶屋下遺跡（J区）出土遺物…89
第59図	茶屋下遺跡（H・I区）出土遺物…89
第60図	栗坪遺跡全体図……………95
第61図	栗坪遺跡東西方向断面図……………96
第62図	栗坪遺跡頂上部断面図……………97
第63図	栗坪遺跡集石平面図・断面図①…99
第64図	栗坪遺跡集石平面図・断面図②…100
第65図	栗坪遺跡集石出土遺物 ……101
第66図	粘土及び灰釉陶器胎土中の粒子 組成 ……109
第67図	Al ₂ O ₃ - SiO ₂ 分布図……………109
第68図	[Na ₂ O・MgO] - SiO ₂ 分布図 ……110
第69図	[K ₂ O・CaO] SiO ₂ 分布図 ……110
第70図	J区SDJ03（最下層）の 花粉化石分布図 ……113
第71図	地籍及び字絵図 ……121
第72図	土器組成グラフ ……122
第73図	遺物分布図……………123, 124
第74図	遺物分布図 ……125

カラー巻頭図版

カラー巻頭図版 1	一本杉・茶屋下・改田 遺跡全景
カラー巻頭図版 2	栗坪遺跡遠景 栗坪遺跡遺構全体

表目次

表 1	周辺遺跡一覧表（1）……………17
表 2	周辺遺跡一覧表（2）……………23
表 3	遺構一覧表……………35
表 4	遺構観察表……………46
表 5	土器観察表……………90
表 6	石器観察表……………93
表 7	遺物観察表 ……102
表 8	薄片観察及び蛍光X線分析試料の 詳細 ……108
表 9	粘土及び灰釉陶器胎土中の粒子組成 一覧 ……108
表10	蛍光X線分析による試料の 主成分元素と微量元素 ……108
表11	弥生時代中期土器胎土の 粘土と砂粒の特徴 ……108
表12	花粉化石産出一覧表 ……113
表13	放射性炭素年代測定及び 暦年代較正の結果 ……117
表14	器種別土器組成表 ……122
表15	用途別陶器、磁器組成表 ……122
表16	石器組成表 ……123
表17	石材別個数表 ……123
表18	器種別土器組成表 ……126
表19	器種別土器組成表（質量）……………126
表20	用途別陶器組成表 ……126

文章中図版

文章中図版 1	粘土及び灰釉陶器薄片の 顕微鏡写真 ……111
文章中図版 2	産出した花粉化石 ……114
文章中図版 3	産出した花粉化石 ……115
文章中図版 4	茶屋下遺跡 出土炭化材樹種…………… 118

図版目次

- 図版 1 調査前風景、一本杉遺跡A区 検出・壁断面
- 図版 2 一本杉遺跡A区 SDA01、SKA01・03、SXA02断面・完掘状況
- 図版 3 一本杉遺跡B区 SKB01、PB02・06・08・09、石列、木杭検出・断面・完掘状況、壁断面
- 図版 4 一本杉遺跡B・G・F区 SKB01、SXB01断面・完掘、F・G区壁断面
- 図版 5 一本杉遺跡F・G区 F区壁断面、完掘、石列
- 図版 6 一本杉遺跡F・G区 SXF02・03、PG01・02・04・05・09検出・完掘状況
- 図版 7 一本杉遺跡F・G区 SKG01・02、NRG01検出・完掘状況
- 図版 8 一本杉遺跡G・C区 石器出土状況、NRC01・02断面・完掘状況
- 図版 9 一本杉遺跡C区・茶屋下遺跡H区 NRC01流木出土状況、H区壁断面
- 図版10 茶屋下遺跡H・I・D区 SXH02石器出土状況、D区壁断面、PD01完掘状況
- 図版11 茶屋下遺跡D区 PD02～05検出・完掘状況
- 図版12 茶屋下遺跡D・J区 SDD01、PD07、SDJ01断面・完掘状況、J区壁断面
- 図版13 茶屋下遺跡J区 SDJ02・03、PJ03、SKJ04検出・断面・完掘状況
- 図版14 茶屋下遺跡J区 SKJ02断面・完掘、上層・東側完掘状況
- 図版15 改田遺跡E区 PE01・04、SDE01・02検出・断面・完掘状況
- 図版16 一本杉遺跡出土石器（1）1～21
- 図版17 一本杉遺跡出土石器（2）22～32、H95V
- 図版18 茶屋下遺跡出土石器（1）33～41、43、44、46
- 図版19 茶屋下遺跡出土石器（2）42、45、47、下層の礫に混じっている石、I層出土石器
- 図版20 SXH02出土石器接合状況（1）33、34
- 図版21 SXH02出土石器接合状況（2）35、36
- 図版22 一本杉遺跡出土遺物101～104、107、109～114、124～130、137～142
- 図版23 一本杉・茶屋下遺跡出土遺物105、106、108、115～123、131～136、143～148、166、167、
184～186、189～196
- 図版24 茶屋下遺跡出土遺物149～154、158～165、168～172、181～183、187、188、197、198、201
205～207
- 図版25 茶屋下遺跡出土遺物155～157、173～180、199、200、202～204
- 図版26 栗坪遺跡 調査前、遺物出土状況
- 図版27 栗坪遺跡 集石検出状況、頂上部・東西方向トレンチ断面図
- 図版28 栗坪遺跡 完掘状況、集石検出状況
- 図版29 栗坪遺跡 礎石検出、礎石下断ち割り、II層掘り下げ状況、頂上部断面
- 図版30 栗坪遺跡 出土遺物301～325

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

一本杉・茶屋下・改田遺跡

当遺跡は美濃市大字極楽寺字一本杉・茶屋下・改田に所在する。市域南部は、長良川が開析した沖積平野の北限にあたり、当遺跡は標高64mの沖積平野上に位置する。当遺跡は主要地方道岐阜美濃線道路改良工事に伴い、現道の北側への道路拡幅部分の本発掘調査で、3遺跡とも周知の遺跡である。試掘調査は平成13年3月16日～3月21日の期間で美濃市教育委員会が行っている。試掘トレンチ4カ所を設定（2×4mトレンチ3本、2×8mトレンチ1本）して（第2図）、表土掘削を重機で、包含層掘削を人力で実施した。第1トレンチでは良好な包含層を検出し、須恵器甕、天目茶碗、山茶碗が出土している。第1トレンチは美濃市教育委員会が調査した垣内遺跡にあたる。第2トレンチでは、東西方向に溝状遺構を検出し、須恵器坏底部が出土している。第3トレンチでは、一部に重機による攪乱が検出されているが、良好な包含層を検出している。第4トレンチでは黒褐色土の遺物包含層が検出され、竪穴住居跡の竈石と考えられる川原石が検出され、土師器甕、須恵器坏が出土している。美濃建設事務所から岐阜県教育委員会に本発掘調査の依頼があり、岐阜県教育委員会から本発掘調査を実施するよう委託を受けるに至った。

栗坪遺跡

当遺跡は美濃市字御手洗字栗坪に所在する。美濃市は市の総面積の8割が山林で、北に至るほど高くなる。市域を南北方向に長良川が貫流し、中心部やや東寄りで東流する板取川が合流する。当遺跡は板取川沿いの開けた盆地に位置する。当遺跡は県道御手洗立花線道路建設に伴う本発掘調査で、美濃市教育委員会の試掘調査で本発掘調査が必要となった遺跡である。試掘調査は平成13年3月14日～平成13年6月4日の期間に行われ、2m幅のトレンチを道路建設範囲内で11カ所設定している。表土掘削は重機で行い、その後人力で掘削している。当調査区東の1・3区、当調査区西の5～9区は砂及び砂利層が近く、旧河川の影響を受けわずかに山茶碗の小破片が出土している。10・11区は植樹時の削平を受けている。4区は石組と山茶碗の破片が多く出土しており、中世墓の可能性が考えられた（第3図）。また、中世墓は群集するため山の尾根上に広がる可能性もあった。美濃建設事務所から岐阜県教育委員会に本発掘調査の依頼があり、岐阜県教育委員会から本発掘調査を実施するよう委託を受けるに至った。



国土地理院発行 1:50,000地形図

美濃(平成8年発行)

第1図 調査遺跡位置図 (S=1/50,000)

第2節 発掘調査の経過と方法

一本杉・茶屋下・改田遺跡

1 調査期間

平成14年6月10日～平成15年2月7日

2 調査区の設定（第2図）

一本杉・茶屋下・改田と3遺跡の発掘調査であるが、地形的には東西方向に長く連続しており、遺跡の性格がはっきりしないため、一連のものと見て調査を進める方法をとった。そのため調査区は遺跡ごとに分けずに地区を設定している。

当遺跡の調査区は東西方向に長いが、未買収地2ヵ所、道路3本、水田などへの乗り入れ口2ヵ所で細かく分断されており調査地点は連続していない。また、調査前の5月中旬に地元自治会から「9月上旬までは水田に水をひくため、水田の水が抜けないようにしてほしい」との要望があり、水田に隣接していないところから調査に入った。そのため調査区は調査に入った順にA～J区としている。さらに、排土置き場の確保が難しく、水田隣接地とそれ以外を反転で調査を行っている。以上のように調査区を設定しているため遺跡ごとに地区名を分けると以下ようになる。なお、地区の呼称は遺構の名称にも用いている（A区のSK01→SKA01）。遺構に関する挿図、文章、図版もすべて遺跡ごとに地区別で西から東の順に記載している。

一本杉遺跡：A・B・F・G・C区（西→東）

茶屋下遺跡：H・I・D・J区（西→東）

改田遺跡：E区

3 グリッドの設定方法（第2図）

調査開始前に業者委託によって調査区の地形測量を行い、磁北を基準として4m×4mのグリッドを設定した（調査区の南北幅が狭く、5m×5mのグリッドより適していると判断したため）。また、美濃市教育委員会が発掘調査を行った調査区の南にある改田遺跡や西の垣内遺跡に近いので、日本測地系に合わせて杭を設定している。グリッド杭の名称は北から南へA～S、東から西へ1～125として、グリッドの名称は北東杭で呼称している。

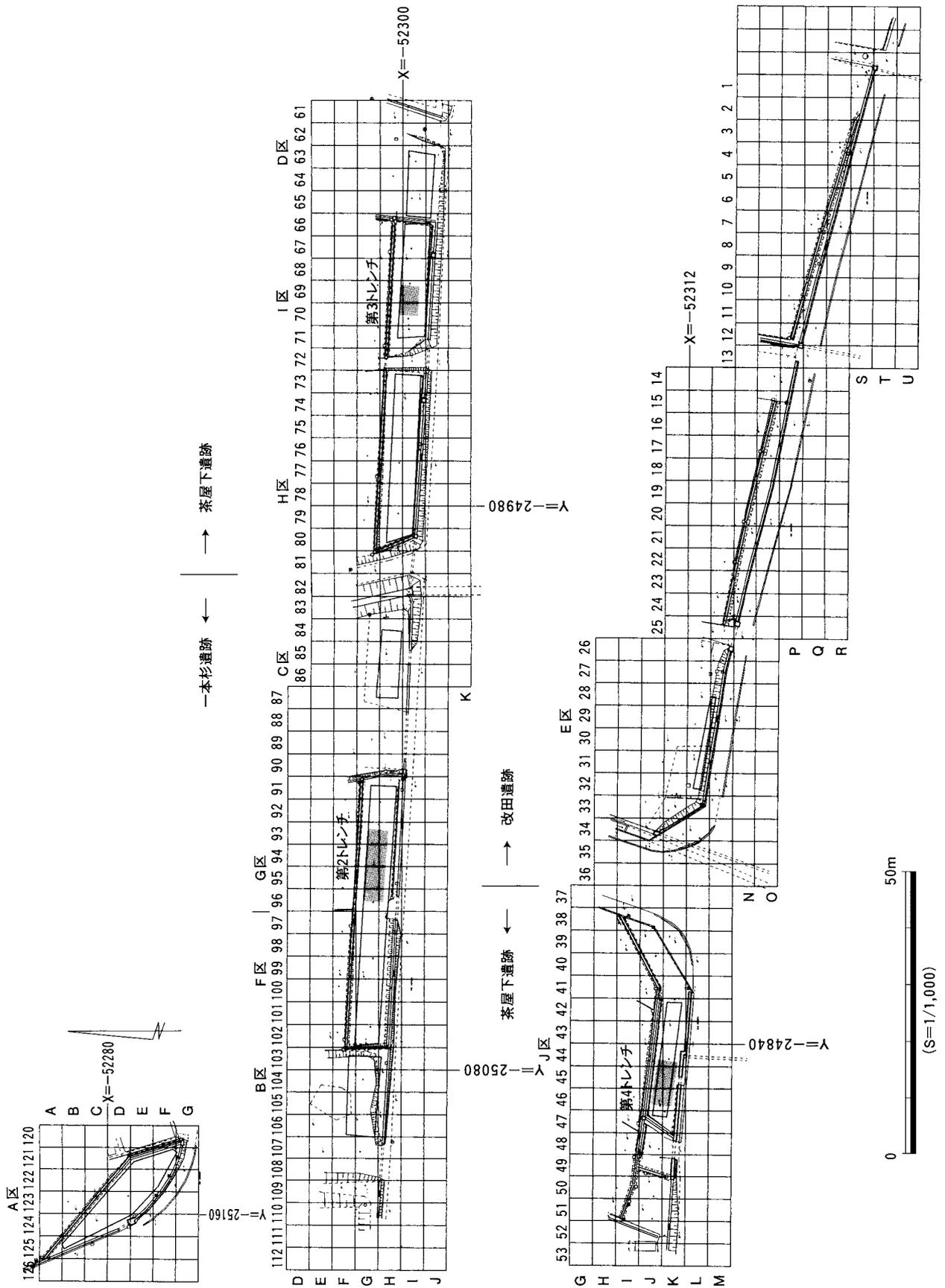
4 層序

詳細は第3章で述べるが、遺物包含層を中心とする基本層序はI～Vのローマ数字、遺構内の埋土は算用数字で呼称している。

5 調査対象面積

試掘調査 32m²

調査対象面積 2,000m²



第2図 調査前地形測量図・試掘位置図・グリッド配置図・調査範囲図(1)

6 調査の経過

調査は水田に隣接していないところを6月10日～7月26日、隣接しているところを9月20日の止水以降に10月7日～1月28日の期間で調査を行った。空中写真撮影は7月23日と12月20日の2回行った。調査区は県道のすぐ脇で、交通量が多いこと、藍見小学校の通学路にあたることから、県道側にはフェンスを回し、フェンス以外にはロープを回して安全対策を行った。

C・D区は客土が深く、壁崩れを防ぐため、コンパネ、杭で土止めを行い、法面を保護するためにシートをかけた。C区は客土が2 mと深かったため、法面を2段にして掘り下げた。E区は調査範囲が深さ1.2m幅2 mと狭く、表土掘削はバケット幅1 mの重機で行った。土止めにコンパネと杭を打ったが、地山が硬く人力では杭の打ち込みに限界があり、壁崩れを防ぐために支柱で支えた。J区も水田に関連する耕作土・敷き土が厚く、コンパネ・杭などで押さえたが、E区と土質が同じで地山が硬いため、木杭を人力で打ち込む深さにも限界があった。また耕作土はやわらかく、地山付近からの湧水も多く、そのためよく壁が崩れた。D・J区は包含層と地山が粘性の強い土で、削った土がねじり鎌にべったりとくっついてしまうため、検出に時間がかかった。また、D区とJ区東側は地山の粘土はやわらかく、掘削中に体重で足が沈んでしまうため、足場の上から掘削しなければならない状況だった。両地区からはともに、粘土採掘跡が検出されている。

調査区は大きな谷の中にあるようで、どこを掘っても湧水した。そのため遺構面の掘削を進め掘り下げると、調査区壁際の水切り溝が浅くなるため、随時溝を掘り下げて調査を進めていった。事務所から離れた調査区は、当初発電機でポンプを動かしていたが、燃料切れ後は水没したため、6月14日以降は仮設電気の設置でポンプを常時動かした。何度か調査区が水没し、湧水地点ではよく壁が崩れ、調査以外の作業にかなりの時間と労力を費した。

6月10日から掘削作業を開始、A・B区から始める。A区は近くに排土置き場がなく、表土掘削の際に北側隅に遺構が見えなかったため、手掘りで遺構がないことを確認してから排土置き場にした。A区の東側には包含層が残っており、包含層の掘削から開始した。B区の排土は東隣のF区に一輪車で運んだ。B区西側には、ほ場整備の際のキャタピラー痕が残っていた。B区の包含層からは石器、土器、中近世陶器が出土している。6月13日からE区の掘削を開始した。E区の排土は調査区内東側に置いた。6月21日からE区の遺構の掘削と実測を行い、C区の掘削を開始した。C区の排土は西側のG区に一輪車で運搬した。E区の壁が空撮までもたないため、6月24日にE区の測量を行い、7月2日には埋め戻した。6月26日、D区の壁が崩れコンパネと杭で押さえて、水切りの溝を調査区の北と西につくった。6月28日からD区の調査を開始した。D区の排土は西側のI区に一輪車で運搬した。7月2日、大雨でA区のすぐ脇にある用水にごみがつまり、用水の水があふれて調査区が完全に水没した。7月3日にA区の水を抜き、4日に掃除を行った。7月18日にA～D区の掘削作業を終了し、7月23日に空撮を行い、7月24日に実測作業を終了した。A～D区の調査では遺構出土の遺物がほとんどなかったため、石列付近から出土した木杭や、自然流路から出土した流木をAMSの分析用にサンプリングした。7月26日に宇野隆夫氏に御指導いただき、8月7日～9日にA～D区の埋め戻しを行った。

9月24日～9月30日にF～J区の重機による表土掘削を行い、10月7日から人力による掘削作業を開始した。10月8日にI・J区の壁崩れを直し、10月11日にG区の東側から包含層の掘削に入る。G区

の排土はF区西側のB区に一輪車で運んだ。F・G区は排土を一輪車で運ぶ距離が長いので、作業員10人で掘削した。10月15日からF・G区の土層断面の実測を開始した。10月21日にH区の壁崩れを直し、10月22日からF・I区の掘削を開始した。I区の排土は東隣のD区に一輪車で運搬した。G区で遺構を検出し、23日から遺構を掘削した。10月31日にF区で遺構を検出し始める。11月6日からH・J区の掘削を開始し、両地区とも山茶碗などの遺物が包含層から多数出土する。H区は排土置き場が近くに確保できなかったため、調査区の東側にたためて、数回調査区外の仮置き場へ運搬した。J区では、調査区内の西側隅と東側隅に排土置き場を確保した。11月21日に、H区の遺構面は北側より南側が低くなることがわかり、南側に水切りの溝を切った。調査途中の12月3日に宇野隆夫氏に御指導をいただく。

12月5日、パレオ・ラボの藤根氏が、花粉分析と胎土分析の粘土のサンプリングにくる。7月のサンプリングの際に、藤根氏から「地山の粘土が陶器にむいている粘土である」ということを聞き、当遺跡の南西部にある古窯出土の陶器との比較をするためのサンプリングを行った。胎土分析のサンプリングで、どの地区の粘土をサンプリングするか調査区全体の堆積状況を見ていただいたところ、当遺跡西にある渡来川北遺跡（縄文時代草創期）と同じ硬い褐灰色の粘土があるということで、急埤美濃市教育委員会に渡来川北遺跡と同じ粘土であることを確認してもらった。また、渡来川北遺跡では、硬い褐灰色の粘土の下にある黄褐色粘土を白色粘土が出るまで掘り下げたところ、石器が出土したと御教示をいただいた。さらに、当遺跡の包含層から出土している土器や石器には渡来川北遺跡に類似するものがあると御教示いただいた。調査に入るにあたり、試掘調査で出土した遺物や遺構面から、中近世の時期の遺構面のみと判断していたが、以上のことから、下層の調査の必要があると判断し、1月末までという期限で調査を行うことになった。黄褐色粘土が残存する地区は、F・G・H区で、F・G区は近世の遺構面が大幅に掘り下がることになるため、12月20日の空中写真撮影後に12月24日から掘り下げを行うこととなった。H区は、ほ場整備の際の攪乱が激しく遺構もほとんど確認できなかったこと、黄褐色粘土の残存が少なかったこと、空撮後に時間があまりとれないことから、空撮前に黄褐色粘土の掘削を行った。H区の黄褐色粘土には、チップと炭がI77グリッドに混じっていた。H区では石器を伴う土坑を検出したが、土坑の西半分は昭和の暗渠で遺構の全容が分からず検出面直上は攪乱が激しく、遺構であると断定しにくい状況であった。

12月21日～26日にH～J区の埋め戻しを行った。出土遺物の洗浄は出土とともに随時行い、掘削がほぼ終了した12月25日から注記作業に入った。

F・G区の掘り下げ作業は、まず南壁沿いにトレンチを入れて、黄褐色粘土の堆積状況から掘り下げる深さを確認することから始めた。G区の東端が一番黄褐色土が濃く深く堆積しており、次に黄色いところはF区の西端であるが、こちらは黄褐色が薄く堆積が浅かった。F・G区の調査範囲の中央から検出された自然流路よりも東側が、黄褐色粘土の堆積の中心となっている。B区にも薄い黄褐色粘土の堆積が見られたが、F・G区の調査状況から、縄文時代の遺構の中心となるものが出る可能性が低く、時間も限られていたため、B区は下層の調査を行っていない。F・G区中央の低い部分には、黄褐色粘土の堆積がなく、黄褐色の粘土上の硬い灰色粘土の堆積がみられそれを掘削したところ、自然流路を検出した。1月8日にG区の湧水地点で壁が崩れ、コンパネ、杭で押さえた。G96で剥片1点、H95で剥片2点、磨石2点、G91で剥片1点出土した。1月27日の大雨でG区北側の壁が大きく崩れ、コンパネで押さえた。出土した石器を取り上げ、調査終了後の状況を写真撮影し、1月28日

に掘削作業を終了した。その後1月29日に岐阜テクノスが地形測量を行った。測量終了後に、道具、テント、休憩所を撤去し、2月5・6日にF・G区を埋め戻し、事務所を2月7日に撤去し、2月13日に美濃建設事務所に現場を引渡した。

7 遺跡・遺物の公開・広報

現地の公開は、調査区が東西に長いこと、調査区の壁が崩れやすいこと、調査区南側に近接して県道があり交通量が多く危険であること、駐車場が確保できないことなどの理由から行っていない。また、藍見小学校から発掘調査体験の要請があったが、希望時期と体験可能時期の不一致と、粘土質の土で足元をとられやすい状況で、小学生の体験活動には不適當であるとの判断に従って行っていない。

遺物の公開は、岐阜県博物館で開催された平成15年度発掘速報展において実施した。

8 遺物・調査記録の整理作業

平成15年度に、出土遺物・調査記録の整理作業を行った。遺物の洗浄・注記は現地で完了したため、平成15年度の整理作業はこれらの作業以降の段階から始めている。

9 発掘調査及び整理作業の体制

	平成14年度	平成15年度
理事長	服部卓郎	日比治男
副理事長兼事務局長		高橋宏之
副理事長		平光明彦
専務理事兼事務局長	成戸宏二	
常務理事兼センター所長		福田安昭
常務理事兼経営部長	福田安昭	
経営部次長兼経営課長	福田照行	
経営課長		川瀬崇敏
調査部長	武藤貞昭	武藤貞昭
調査部次長	片桐隆彦	
担当調査課長	坂東 肇	高木徳彦
担当調査員	近藤正枝	近藤正枝
整理作業従事者	春日井典子 後藤悦子	野尻みどり

8 第1章 調査の経緯

10 調査日誌抄

平成14年

5月23日	重機による表土掘削開始。A・B区掘削。B区の排土はF・G区へ、A区の排土は仮置き場へ。	10月22日	F・I区掘削開始。G区遺構検出。
5月24日	B・D区表土重機掘削。	10月23日	遺構の掘削開始。
5月27日	C区表土重機掘削。客土、攪乱が2 mと深い。	10月31日	F区遺構検出。
5月29日	E区表土重機掘削。	11月6日	F区石列検出。H・J区掘削開始、遺物多数出土。
5月30日	杭打ち。	11月7日	J区遺構検出。
6月10日	発掘調査開始。A・B区から掘削始める。	11月20日	H区排土を仮置き場へ運搬。
6月12日	台風4号で大雨のためC・D区水没。A区遺構検出。B区石列検出、遺物出土。	12月3日	宇野隆夫氏指導。
6月13日	E区掘削開始。	12月5日	パレオ・ラボ、サンプリング。美濃市教育委員会高木氏、清山氏、三島氏来訪。
6月14日	E区遺構検出。	12月10日	美濃市教育委員会高木氏、三島氏来訪。
6月21日	C区、遺構の掘削開始。C区で流木出土。	12月11日	降雪。
6月24日	E区測量。	12月13日	美濃市教育委員会高木氏、三島氏来訪。
6月26日	美濃市農林課古田氏来訪。地権者と水の取り入れ口について、現地で協議。D区壁崩れ直し。	12月18日	岐阜県博物館長屋幸二氏来訪。
6月28日	D区掘削開始。	12月19日	空撮前掃除。
7月2日	C・D区壁崩れ直し。用水の水あふれA区水没。	12月20日	空中写真撮影。パレオ・ラボ、粘土サンプリング。
7月10日	台風対策。	12月21日	J区埋め戻し。
7月16日	C区壁崩れ直し。	12月24日	F区石列はずし。F・G区掘り下げ開始。
7月22日	空撮前掃除。	12月25日	H・I区埋め戻し。注記作業開始。
7月23日	空中写真撮影。	12月26日	H区埋め戻し終了。
7月26日	宇野隆夫氏指導。	1月5日	積雪約20cm。
7月31日	パレオ・ラボ、粘土サンプリング。	1月7日	現場仕事始め。除雪作業を行う。
8月7日	B、D区埋め戻し。	1月9日	G区壁崩れ直し。
8月8日	C区埋め戻し。	1月14日	G96で剥片1点、H95で剥片2点、磨石2点出土。
8月9日	A区埋め戻し。	1月20日	石器出土状況実測。
8月26日	フェンスを後半の調査区へ回し直す。	1月21日	G91で剥片1点出土。自然流路検出。美濃市教育委員会三島氏。
9月24日	G区表土重機掘削。	1月28日	昨日の大雨で調査区北側の壁が大きく崩れる。石器取り上げ。掘削作業終了。
9月25日	F・H区表土重機掘削。	1月29日	岐阜テクノス測量。
9月26日	I・J区表土重機掘削。	1月30日	積雪。
9月30日	J区表土重機掘削。	1月31日	道具撤去。
10月7日	人力掘削開始。	2月4日	テント、休憩所撤去。
10月8日	I・J区壁崩れ直し。	2月5日	F・G区埋め戻し。
10月11日	G区東から掘削開始。	2月6日	埋め戻し完了。
10月21日	H区壁崩れ直し。	2月7日	事務所撤去。
		2月13日	美濃建設事務所に現場引渡し。

栗坪遺跡

1 調査期間

平成14年8月5日～平成14年9月13日

2 グリッドの設定方法（第3図）

調査開始前に業者委託によって調査区の地形測量を行い、世界測地系に合わせて4 m × 4 mのグリッドを設定した。グリッド杭の名称は北から南へA～G、東から西へ1～8として、グリッドの名称は北東杭で呼称している。

3 層序

詳細は第4章で述べるが、遺物包含層を中心とする基本層序はⅠ～Ⅲのローマ数字で呼称している。

4 調査対象面積

試掘調査	16㎡
調査対象面積	400㎡

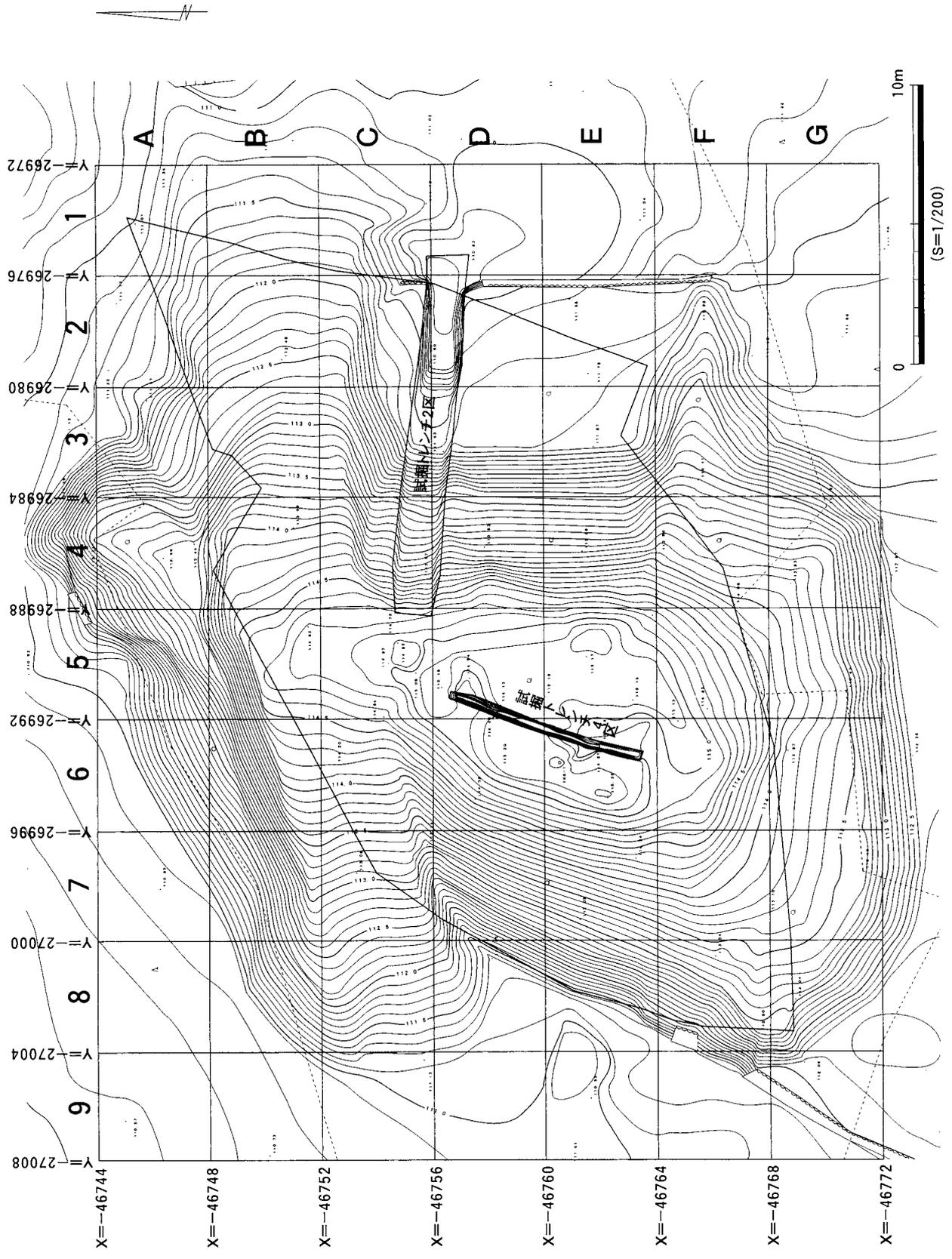
5 調査の経過

栗坪遺跡の本発掘調査は、年度当初の計画では他の調査員が11～12月に行う予定であったが、美濃建設事務所から、工事の発注の関連で栗坪遺跡の調査を早く行ってほしいという要請を7月上旬に受けた。調査工程を検討し、一本杉他遺跡の後半の調査が9月20日以降にしか入れないこともあり、一本杉他遺跡の反転調査前半の空中撮影終了後、期間が2ヶ月空いたため、栗坪遺跡の調査を8～9月に行った。

美濃市教育委員会の試掘調査では、中世墓である可能性があるという報告されていた。調査区は小さい山に見え、古墳である可能性も考えられたが、地形図や現地の踏査で、舌状に伸びた尾根が植樹以前の削平で独立してできたもので、古墳の可能性はないと判断した。調査開始前に、調査区が真木倉神社の所有地であるという記載が丈量図にあったため、真木倉神社に関連する言い伝え等がないかと自治会長に問い合わせたところ、真木倉神社に詳しい家田清司氏と他1名を紹介していただいた。話をうかがうと、「へんべ(へび)山と呼ばれ、小さい頃から山で遊んではならないと言われており、馬を埋めたという話もあり、古墳や塚である可能性が高い。丈量図を良く見ると山の頂上から所有地ごとに線が引いてある。終戦後に土地を分けたという話を聞いたことがある。個人が所有しない共有の土地を神社が所有するので、神社に関わりがあるかどうかは一概に言えない。調査区周辺の石垣は猪避けである。」とのことで、中世墓の可能性を考えて調査にのぞんだ。また、蛇が多く、漆が多いと調査前から聞いていた。連日35℃をこえる暑さと木の根の多さで進捗状況はよくなかったが、蛇は少なかった。

木の伐採は買取済みの範囲で試掘調査前に行われており、調査区には多くの木の根が残っていた。伐採や伐採後の木を除去するための工事中用進入路が、調査区の北側に、山の斜面を埋めてつくられていた。調査区内の木根は、地山が砂地で遺構を壊す可能性もあったため、重機での除去を行わずに調査を開始し、調査中に除去可能なものは人力で除去した。

調査開始前7月30日に、調査区北側に盛土をしてつくられた工事中用進入路を、重機2台で除去した。



第3図 調査前地形測量図・試掘位置図・グリッド配置図・調査範囲図(2)

この盛土は、工事予定地内で調査区の西側と東側に分けて置いた。この時点で、調査区東側にある石垣については、調査を進めていった段階で、新しい時期のものかどうか判断し、重機で除去することにした。

8月5日から調査を開始した。試掘調査から丘陵裾部で山茶碗が出土しており、斜面に遺物が転落している可能性が考えられたため、約20cmの表土は人力で掘削することにした。試掘調査で確認されていた集石と出土遺物の調査から開始し、その後東斜面、西斜面の順に調査を行った。頂上の石の周辺からは山茶碗、陶器、鉄釘が出土した。石の多くは表土上にあるものが多く、空撮終了後に石をはずして下を掘削し、中世墓かどうかを確認しようと考えた。

現場に訪れた地元の方の話では「聞いた話だが、昔山の上に猪狩小屋を作りそこで火を焚いて畑に猪がこないように見張っていたそうだ。植樹の前は、山の斜面は茶畑にし、山の周辺には畑をつくっていた。」とのことで、山の頂上付近の石や炭はその時のものかということ念頭におきながら調査を行った。炭が多いためたまっている中にはガラスなどが入っており、それらはすべて除去した。

斜面は急でベルトコンベヤーが使用できなかったため、土を上から順に下におく方法で、何度も掘削を繰り返し行った。排土は工事予定地内で調査区の西と東に、それぞれ斜面を掘削した土を置いた。東斜面側には石垣があり、試掘調査のトレンチを利用して遺構であるかないかの確認を行った。石垣は植樹の際に土を埋めて平らな面を作り、その土止めに作られたもので時期は新しいと判断し、8月26日に埋め土の分を重機で除去し、その後人力で掘削を行った。

斜面を掃除していくと、川の堆積を思わせる大小の礫が、礫の大きさ別に何層も見え、地山が段丘礫層であると分かった。この段階で古墳である可能性はほとんどなくなったが、空中撮影後の9月13日に、頂上部に重機で3m×8m、深さ2.8mのトレンチを入れ、自然堆積であり古墳でないことを確認した。

9月9日に宇野隆夫氏に御指導いただいたところ、「調査区の山は舌状に伸びた尾根を削平してできたもので、山のすぐ南側はまっすぐに切り立ち、古道が山裾に通っている。古道の南側の広い平地は遺跡の可能性があり、山岳宗教に関連する宗教施設や中世墓が群集している可能性がある」と御指導いただいた。山頂上部の石については表土の上の浮いた石をはずして据えてある石を残し、中世墓かどうかを確認するよう御指導いただいた。浮いた石をはずしたところ、にぶい黄褐色土の上ののっている石は3個、このうち2つはレベルがそろっていた。石の下を掘削し、中世墓ではないことを確認した。

出土遺物は頂上平坦面で出土したものはトータルステーションで取り上げ、斜面の表土から出土したものはグリッド一括で取り上げた。調査終了後は改田一次整理所で、遺物の洗浄・注記作業を行った。

6 遺跡・遺物の公開・広報

調査区は地元では昔から「へんべ(へび)山」と呼ばれ、小さい頃には近寄らないように言われていたそうで、古墳や塚ではないかと想像し、調査で真実が明らかになると関心をもっていただいた。そのためか、発掘調査当初から地元の方々が多数調査区に訪れ、調査に対して興味をもっていただけた。調査後、自治会長の幅氏に古墳や中世墓でないことを報告し、現地公開の要不要を相談したところ、回覧で調査結果を報告してほしいとのことで、現地公開は行わなかった。

遺物の公開は、岐阜県博物館で開催された平成15年度発掘速報展において実施した。

12 第1章 調査の経緯

7 遺物・調査記録の整理作業

一本杉・茶屋下・改田遺跡に同じ。

8 発掘調査及び整理作業の体制

一本杉・茶屋下・改田遺跡に同じ。

9 調査日誌抄

7月12日 自治会長に挨拶。家田清司氏他1名に話をうかがう。美濃市教育委員会に挨拶、協力依頼。

7月29日 調査区草刈。

7月30日 調査前重機掘削。

7月31日 杭打ち。

8月2日 お祓い（神主さんは片知から）。

8月3日 調査事務所設置。電気、水道は無し。水は改田事務所から。

8月5日 調査開始。頂上部分の掃除から始める。地元の方2名来訪。

8月6日 東西斜面の草の根除去終了。試掘トレンチの掃除。地元の方2名来訪。

8月7日 集石、遺物の平面図。遺物トータルステーションで取り上げ。東斜面の表土掘削開始。

東斜面から近世陶器2点出土。地元の方1名来訪。

8月19日 頂上部にサブトレンチを入れる。

8月21日 頂上部表土除去、出土遺物平面図。

8月23日 東斜面掘削終了、西斜面掘削開始。

8月26日 東斜面裾部重機掘削。

8月27日 東斜面裾部人力掘削。西斜面から陶器出土。地元の方来訪。

8月28日 東斜面裾部杭打ち。東斜面裾から陶器出土。

9月2日 空撮前の掘削終了。

9月4日 空撮前掃除。

9月5日 空中写真撮影。自治会長来訪。

9月9日 宇野隆夫氏指導。自治会長来訪。浮いた石をはずし掘削、鉄釘6点出土。

9月10日 中世墓かどうか断ち割る。家田清司氏来訪。

9月11日 美濃市教育委員会高木氏、三島氏来訪。頂上部黄褐色土を掘り下げ褐色土を出す。

9月12日 家田清司氏来訪。

9月13日 頂上部重機断ち割り。自然堆積であることを確認後、崩れる危険があり写真記録後埋め戻す。

調査終了。調査区東側整地。

9月17日 道具撤去。

9月18日 事務所撤去。

9月30日 美濃建設事務所に引渡し完了。自治会長に地元回覧資料提出。

第2章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

美濃市の総面積の約80%は山林で北境の瓢ヶ岳(1,161m)を最高所とする。その間を長良川が北より貫流し、中央で板取川が西よりこれに合流し、平地は南部の長良川沿岸で沖積層砂壤土が形成されている地域である。

美濃市内の沖積層は、現在の長良川、板取川の河床近くの平野部や山間の小盆地、及び藍見から大矢田地内にかけて広く分布する平坦地を構成する地層である。砂、レキ、粘土などより構成され、かつては表土を取りのぞくと良質の粘土を産するところでは瓦を焼くのに利用されたことがある。

美濃市を全般的にみると北西に1,000mを越す山岳地帯をひかえ、南側には美濃平野に連なる平地が開け起伏の差が大きいが、地質は単調である。

市内の大半を占める山地は貫流する長良川、板取川により三ブロックに分けられ、牧谷北側ブロックは古生層の他に、火成岩類が広く分布するが、他のブロックはほとんど古生層よりなっている。また市街地より中有知にかけて分布する河岸段丘や、長良川、板取川沿いにみられる小規模な沖積平野のほか、藍見、大矢田地内の平坦地にはいずれも、第四紀層が古生層をおおうかたちで分布している。

板取川は、濃越国境に源を発し、板取谷より洞戸村を経て美濃市牧谷に入り東流して、市の中央部で長良川に合流する。板取川は美濃紙として著名な手抄和紙を牧谷にはぐくんだ清流である。

一本杉・茶屋下・改田遺跡

長良川西岸の藍見地区では、小河川により開析された沖積面が広がり、多くの遺跡が所在する。当遺跡は、この長良川西岸の藍見地区に所在し標高63m前後の緩やかな沖積面上に位置する。遺跡周辺には水田が広がる。調査区からは、西の渡来川北遺跡で確認されているのと同じ粘土層が堆積している。

栗坪遺跡

天王山の北側丘陵端部にあたり、北に板取川が東流する。当遺跡北西には真木倉神社があり、周辺は板取川の両岸に小盆地が広がっている。

第2節 歴史的環境

美濃市の遺跡分布

縄文時代の遺跡は美濃市内河川流域の、高地を除くほぼ全域に点在する。渡来川流域では井守山遺跡がある。井守山遺跡では平成10年から発掘調査が行われており、集落の検出が期待される。

弥生時代の遺跡は、長良川流域にある上河和遺跡周辺と藍見地区、大矢田地区に偏在している。板取川流域では分布調査で所在の確認がされておらず今後の調査を待たなければならない。

古墳時代～白鳳期の遺跡は、観音寺山古墳、平曾洞2号墳、日室古墳以外の30基は後期古墳で、築造時期は6世紀後半～7世紀中頃に集中する。分布は市域南半に偏っており、前野地区、松森地区、藍見地区に大分することができる。その中でも藍見地区笠神に所在する殿岡1号墳は横穴式石室の規模や石材から見ても飛び抜けた存在である。またこの時期の須恵器窯は丸山古窯跡群の4基の他に、桜洞2号窯があり、いずれも大矢田地区に所在する。散布地の分布は市域北半の長良川流域にも見られ、上河和遺跡、下河和遺跡は広大な散布地である。市域南半では比較的密に分布するが、特に長良川右岸の段丘上に立地する改田遺跡の散布状況は濃厚で、立地条件もよく拠点的な遺跡である。また、長良川左岸の古城跡城下町遺跡では5世紀～6世紀の集落跡が確認されている。板取川流域では遺跡の所在が確認されていない。

奈良時代の遺跡は、市内の河川流域の、高地を除くほぼ全域に点在する。市域北半の長良川流域では上河和遺跡、下河和遺跡を中心に分布する。市域南半では小俣川流域の観音堂遺跡の散布状況が濃厚である。また、渡来川流域の南山遺跡、南出遺跡、渡来川北遺跡では発掘調査の結果竪穴住居跡、掘立柱建物跡等が検出されており、西接する井守山遺跡を含めて比較的大規模な集落の存在が想定される。板取川流域では散布地が点在する。

平安時代の遺跡は、分布が奈良時代と近似しているが、ややまばらになっている。桜洞1号窯、大洞窯、松毛窯の白瓷窯がある。

中世の遺跡は、市内の河川流域の高地を除くほぼ全域にわたり濃厚に分布する。

一本杉・茶屋下・改田遺跡周辺の遺跡

改田遺跡の調査区のすぐ南では、平成8年度的美濃市教育委員会による改田遺跡の調査が行われており、水田の耕作土の下から中近世の山茶碗や播鉢などが出土している。遺構は12世紀の掘立柱建物跡や14世紀以降の溝などが確認されている。

少し離れているが、調査区西の南山遺跡からは、古墳時代初頭の竪穴住居跡や8世紀後半頃の住居跡などが、S字甕や須恵器坏を中心とした遺物を伴って確認されている。

更に西の渡来川北遺跡では縄文時代草創期・中期の土器・石器、弥生時代の土器・石器が出土している。井守山遺跡では縄文時代早期・中期～後期にかけての土器・石器、弥生時代の土器・石器、平安時代の竪穴住居19軒、掘立柱建物8棟が、南山遺跡・基盤洞遺跡では古墳時代の竪穴住居跡・掘立柱建物が検出されている。

通称「愛宕山」と呼ばれる独立丘陵に所在している6基の窯跡（桜洞2号窯（7世紀の須恵器窯）、桜洞1号窯・大洞窯・松毛窯（白瓷窯）、亀蔵庵窯・権蔵窯（江戸末期から明治にかけての陶磁器窯））

は昭和63年に調査されている。

愛宕山の西にある丸山古窯跡は昭和32年に一部発掘調査されている。関市に所在する国指定史跡弥勒寺の瓦を併焼した7世紀代の須恵器窯で、国指定史跡に指定されている。

『極楽寺について』

当地域の字名にも残る極楽寺は、鎌倉時代に京都から分派して当地域に建立され短期のうちに廃絶したとされ、建立された所在は不明とされているが、中屋敷遺跡で確認された溝跡は、それに伴う水路である可能性も考えられる¹⁾。

極楽寺という地名は中世に実在したと伝えられる寺院由来のものと考えられている。応永八年(1401)の「京都南禅寺慈氏院蔵東禅院文書」には、「極楽寺」と、また同年の「足利義持御教書写」(彰考館蔵古簡雑纂)には「美濃国東山口庄極楽寺」とみえる。中世この地は武儀郡東山口郷に属しており、承久の乱の恩賞で常陸から移ってきた佐竹氏の所領であった。この佐竹氏によって極楽寺は建立された。寺の規模は不明であるが極楽寺住職の景南英文が後に京都五山の南禅寺住職となったことを考えると相当の規模のものであったと考えられる²⁾。

極楽寺がどこにあったかについては現在の調査では判明していない。また、字絵図を見る限りでは、当遺跡は水田であったようだ。

〈山口郷と美濃佐竹氏〉極楽寺に関連するもの

藍見、大矢田地区より武芸谷にかけての一带を山口郷(山口庄)といい、ここの地頭職として関係の深かったのは美濃佐竹氏である。以下、山口郷と美濃佐竹氏の関係である。

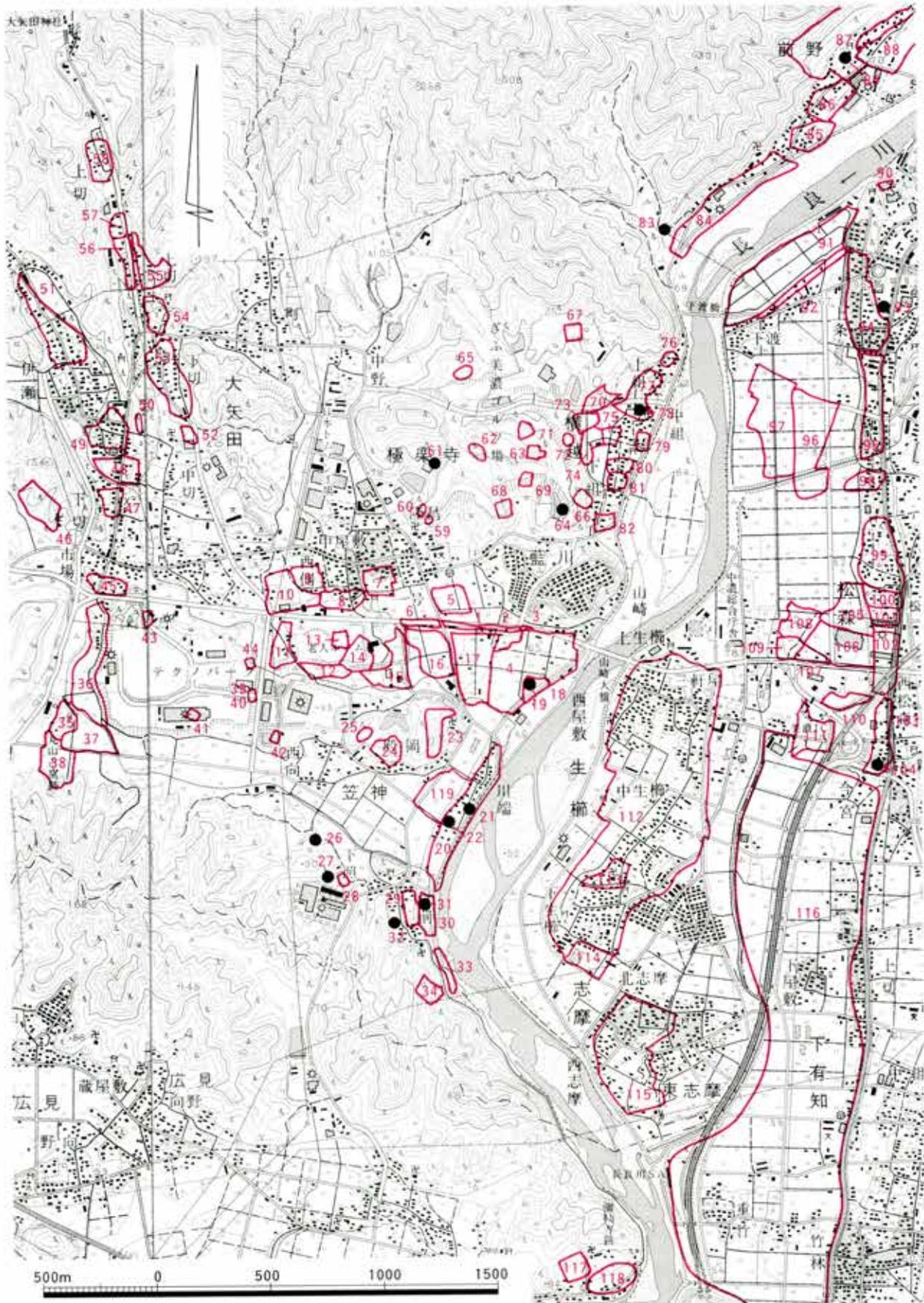
元弘の乱の時、山口郷と弾正荘(本巢郡)の地頭職佐竹弥六光基(季義の曾孫)は元弘三年(1333)五月二五日足利尊氏の軍に加わり六月八日着到状に評判を得ている。佐竹氏の光基が尊氏に味方したことはこれで明らかである。その後尊氏によって、まもなく中興政権が崩壊すると、再び争乱となり佐竹一族は官方(南軍)、武家方(北軍)に分裂して争うことになった。建武四年(1337)武家方の佐竹義基は根尾山の南軍と戦い、南軍に味方していた一族の佐竹義教を攻めその城、清水寺、馬場尾(本巢郡弾正荘内か)を焼きはらった。

この佐竹義基は光基の弟で、この前年(建武三年—1336)尊氏の下文で山口郷東西、上有知荘、弾正荘を勲功として宛行なわれている。兄光基の所領が弟に宛行われた理由は不明しないが死亡したのかもしれない。山口郷東西とは大矢田から東と西の武芸谷とに分かれていたからである。

これより南北争乱期がつづいたのであるが、応永八年(1401)佐竹入道常尚(基尚)の美濃知行分には山口郷東西があげられているが、上有知荘、弾正荘はみえない。

「金蓮華院領美濃国上有知荘管領文書」によると貞和四年(1348)の上有知荘領家職は勘解由小路兼綱であり、観応元年(1350)の文書は貞和四年年貢未進を雑掌から地頭言範の代官光長(浅野光長)が訴えられたものであるから、この時すでに上有知荘は佐竹の手からはなれていたのである。

山口郷も応永一三年(1406)以後に一旦佐竹氏からはなれていたが応永一五年(1408)山口郷東方のみを佐竹基永に返付され、このまま永く佐竹氏の手の中にあり大永八年(1528)にも佐竹常秋の知行分であった。美濃佐竹氏が山口郷東方から全くはなれた時は不明であるが佐竹氏の本家は関東、奥羽の名族として繁栄し江戸時代には秋田二〇万石余の大名となった。



国土地理院発行 1:25,000地形図

岩佐(平成13年発行)美濃(平成8年発行)

第4図 周辺遺跡分布図(1)(S=1/25,000)

表1 周辺遺跡一覧表(1)

番号	名 称	内 容	備 考
1	一本杉遺跡	本報告遺跡。	
2	茶屋下遺跡	本報告遺跡。	
3	改田遺跡	本報告遺跡。	
4	改田遺跡	水田の耕作土下から中近世の山茶碗やすり鉢などが出土している。遺構は12世紀の掘立柱建物跡、14世紀後半と18世紀末の溝、河道跡などが確認されている。	平成8年発掘調査。
5	一本杉遺跡	縄文・奈良・中世の散布地。石器・須恵器・山茶碗・陶器出土。	
6	垣内遺跡	縄文・古代・中世の集落跡。古代の竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟。縄文土器・土師器・須恵器・山茶碗・石器など出土。	平成13～14年発掘調査。
7	中屋敷遺跡	縄文・中世～近世の集落跡。中世の大溝。	平成10年発掘調査。
8	西側遺跡	奈良・中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。	
9	西出遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。	
10	大屋敷遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。	
11	井守山遺跡	縄文時代早期・中期～後期にかけての土器・石器、弥生時代の土器・石器。奈良・平安時代の中核的な集落で、竪穴住居跡19軒、掘立柱建物9棟確認。	平成10年発掘調査。
12	渡来川北遺跡	縄文～中世の集落跡。縄文時代草創期・中期の土器・石器、弥生時代の土器・石器出土。縄文時代の石器製作跡。石器の全点数は約4万点にも及ぶ。	平成8～13年発掘調査。
13	南出遺跡	古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡3軒、掘立柱建物2棟が確認されている。中世の集落跡。	平成7年発掘調査。
14	基盤洞遺跡	縄文～古墳・中世の集落跡。古墳時代の竪穴住居跡3軒・掘立柱建物跡、中世墳墓3基。	平成7年発掘調査。
15	南山遺跡	縄文・古墳・中世の集落跡。通称南山と呼ばれる独立丘陵の東側に展開する沖積地に位置し、古墳時代初頭(廻間Ⅱ式に併行)の竪穴住居跡3軒、8世紀後半頃の竪穴住居跡が2軒、S字甕や須恵器坏を中心とした遺物を伴って確認されている。	平成5年発掘調査。
16	樋口遺跡	縄文・古墳・奈良の散布地。石器、須恵器、山茶碗、陶器。	
17	玄入遺跡	古墳～近世の散布地。土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶器。	
18	岡ノ下遺跡	奈良・平安・中世の集落跡。土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶器。	平成10年試掘調査。
19	道光寺塚古墳	須恵器、直刀、鉄鎌、馬鈴、勾玉、金環。	
20	古村遺跡	弥生時代後期の竪穴状遺構・古墳時代初頭の方形周溝墓18基、中世の居館に伴う水路・溝・土坑等が確認されている。特に方形周溝墓出土一括遺物の古式土師器群は中濃地域における基準資料となるものである。長良川は現在の流路と異なり東寄りに流れていたと考えられており、古村遺跡・大門脇遺跡は同一の遺跡であった可能性が高い。古村遺跡で確認されている方形周溝墓に伴う集落跡の所在が不明で、現在の長良川流路上に展開しているものと考えられている。	平成5年発掘調査。
21	黄金塚古墳	古墳。	
22	古村古墳	径9mの円墳。須恵器出土。	
23	山後遺跡	古墳時代の散布地。須恵器出土。	
24	殿岡古墳(1～5号墳)	1号墳：横穴式石室。	
25	西向遺跡	中世墓。	

番号	名 称	内 容	備 考
26	雉射田	古事記の喪山神話に関連する伝承地。	
27	神田洞古墳	横穴式石室。須恵器、土師器、金環、直刀、鉄鏃。	
28	神田洞遺跡	古墳・中世の散布地。土師器、山茶碗出土。	
29	森坪遺跡	弥生～奈良・中世の散布地。土師器、須恵器、山茶碗、陶器。	
30	弦賀遺跡	縄文・奈良・中世の散布地。石器・須恵器・山茶碗・陶器出土。	
31	宮前古墳	直刀、須恵器出土。	
32	鍛冶屋洞古墳	横穴式石室。	
33	正林寺前遺跡	奈良・中世～近世の散布地。土師器、須恵器、山茶碗、陶器。	
34	三井寺跡	中世の寺院跡。	
35	丸山1～4号窯跡	関市に所在する国指定史跡弥勒寺跡の瓦を併焼した7世紀の須恵器窯で国指定史跡に指定されている。	昭和32年に1・2号窯発掘調査、3・4号窯試掘調査。
36	丸山北遺跡	古墳・奈良・中世の散布地。須恵器・山茶碗・陶器。	
37	立長遺跡	古墳・中世～近世の散布地。須恵器、山茶碗、陶器。	
38	丸山南遺跡	縄文・古墳・中世の散布地。須恵器、山茶碗、瓦出土。	平成9年一部試掘調査。
39	桜洞1号窯跡	10世紀末の白瓷窯。	昭和63年発掘調査。
40	桜洞2号窯跡	7世紀の須恵器窯。	昭和63年発掘調査。
41	大洞窯跡	10世紀末の白瓷窯。	昭和63年発掘調査。
42	松毛窯跡	10世紀末の白瓷窯。	昭和63年発掘調査。
43	亀蔵庵窯跡	江戸時代末期から明治にかけての陶磁器窯。中世墳墓（五輪塔）。	昭和63年発掘調査。
44	権蔵窯跡	江戸時代末期から明治にかけての陶磁器窯。	昭和63年発掘調査。
45	市場西屋敷	古墳・中世～近世の散布地。須恵器、山茶碗、陶器。	
46	北高田遺跡	縄文・中世の散布地。石器、山茶碗出土。	平成8年一部試掘調査。
47	中切道西遺跡	中世～近世の散布地。須恵器、山茶碗、陶器。	
48	高橋北遺跡	縄文・古墳～近世の散布地。石器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶器、銭貨他。	
49	観音前遺跡	平安～近世の散布地。土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶器。	
50	喪山古墳	古墳。	
51	西洞伊瀬遺跡	縄文・中世～近世の散布地。石器、土師器、灰釉陶器、山茶碗、陶器。	
52	寺屋敷遺跡	中世の集落跡。掘立柱建物跡、溝跡。山茶碗。	平成10年発掘調査。
53	羽瀬倉遺跡	平安～近世の散布地。須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶器。	
54	大門東遺跡	縄文・中世～近世の散布地。石器、土師器、山茶碗、陶器。	
55	戸膳名遺跡	縄文・中世～近世の散布地。石器、山茶碗、陶器。	
56	大門西遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。	
57	祭場西遺跡	中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。	
58	倉洞遺跡	奈良・中世～近世の散布地。土師器、須恵器、山茶碗、陶器。	
59	犬石洞古墳	横穴式石室。	

番号	名 称	内 容	備 考
60	平曾洞古墳群	古墳。	
61	平曾洞1号墳	径10mの円墳、横穴式石室。	
62	平曾洞2号墳	古墳。	平成4年一部試掘調査。
63	観音寺山古墳	全長20.5mの前方後方形墳丘墓で、埋葬主体部からは流雲文方格規矩四神鏡1面（破碎鏡）、小型仿製鏡1面・勾玉2点・水晶小玉2点・ガラス小玉18点が出土している。	平成4年発掘調査。
64	徳祥寺古墳	横穴式石室。	
65	日室古墳	全長約80mの前方後方墳。	平成4年一部試掘調査。
66	徳祥寺跡	近世の寺院跡。	
67	長福寺跡	中世墳墓。	平成4年発掘調査。
68	西観音寺跡	中世の寺院跡。基壇跡。	平成4年発掘調査。
69	東観音寺跡	中世墳墓等。	平成4年発掘調査。
70	建良寺跡	中世寺院跡。	
71	宝珠堂跡	近世の寺院跡。近世陶器出土。	
72	明光院跡	近世の寺院跡。	
73	寺後遺跡	古墳時代の散布地。須恵器、山茶碗、陶器出土。	
74	岩下遺跡	古墳・中世～近世の散布地。土師器、須恵器、山茶碗、陶器。	
75	西屋敷遺跡	古墳・中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。	
76	清願寺跡	中世の寺院跡。	
77	外堂遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器出土。	
78	薬師前遺跡	古墳・中世～近世の散布地。須恵器、山茶碗、陶器。	平成9年一部試掘調査。
79	紋十郎屋敷遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。	
80	奥屋敷遺跡	古墳・中世の散布地。須恵器、山茶碗出土。	
81	七右衛門屋敷遺跡	平安・中世～近世の散布地。灰釉陶器、山茶碗、陶器。	
82	祖端屋敷遺跡	奈良・中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。	
83	前野5号墳	径16mの円墳、横穴式石室。	
84	溝添遺跡	中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。	
85	井戸尻遺跡	中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。	
86	尾崎遺跡	中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。	
87	前野遺跡	縄文・中世の散布地。石器、縄文土器、山茶碗出土。	昭和44年一部試掘調査。
88	坂東遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。	
89	前野2号墳	須恵器出土。	
90	港町岩陰遺跡	縄文、中世～近世の散布地。石器、縄文土器、近世陶磁器他。	昭和52年発掘調査。
91	沖ヶ島遺跡	奈良・平安時代の散布地。山茶碗出土。	平成7年一部試掘調査。
92	百間堤跡	近世の堤防跡。	
93	上条小山古墳	須恵器出土。	
94	上条遺跡	古墳・平安～近世の散布地。土師器、灰釉陶器、山茶碗、陶器。	

番号	名 称	内 容	備 考
95	段遺跡	中世の散布地。土師器、山茶碗。	平成7年他発掘調査。
96	古町遺跡	古墳・中世の散布地。山茶碗。	平成6年一部試掘調査。
97	古城跡城下町遺跡	古墳・中世の集落跡。土師器、須恵器、山茶碗他。	平成6年発掘調査。
98	金屋街道遺跡	中世～近世の集落跡。土師器、山茶碗、陶器出土。	平成6年一部試掘調査。
99	乾遺跡	古墳～近世の散布地。須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶器。	
100	水戸遺跡	中世散布地。山茶碗出土。	
101	善応寺遺跡	奈良・中世の散布地。土師器、須恵器、山茶碗。	
102	上巾上遺跡	奈良・中世の集落跡。	昭和61～62年発掘調査。
103	下巾上遺跡	古墳・中世～近世の散布地。須恵器、山茶碗、陶器、瓦。	平成6年発掘調査。
104	下巾上古墳	横穴式石室、削平。須恵器、鉄鏃、玉類。	
105	松森寺下遺跡	奈良～近世の散布地。土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶器。	
106	上竹下遺跡	奈良～近世の散布地。土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗。	平成5年一部試掘調査。
107	古屋敷遺跡	古墳～近世の散布地。土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶器。	
108	明戸遺跡	古墳・奈良・中世の散布地。土師器、須恵器、山茶碗、陶器。	
109	観音堂遺跡	古墳・奈良・中世の散布地。土師器、須恵器、山茶碗、陶器。	昭和46年一部試掘調査。
110	下竹下遺跡	奈良・中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。	
111	池田遺跡	中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。	
112	生櫛遺物散布地	古墳～近世の散布地。土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶器。	
113	大門脇遺跡	中世の遺物散布。長良川は現在の流路と異なり東寄りに流れていたと考えられており、古村遺跡・大門脇遺跡は同一の遺跡であった可能性が高い。	平成7年一部試掘調査。
114	鍋屋遺跡	古墳・中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。	
115	西志摩遺物散布地	奈良・中世～近世の散布地。須恵器、土師器、山茶碗、陶器。	平成10年一部試掘調査。
116	重竹遺跡	縄文～近世の集落跡。	昭和53～57年関市発掘。 平成13～14年センター発掘。
117	弥勒寺跡	白鳳寺院。国指定史跡。	昭和28、31年発掘。昭和62年～平成元年、関市範囲確認調査。
118	弥勒寺東遺跡	律令体制下の美濃国武義郡衙跡。	平成6年～関市発掘。
119	石橋遺跡	古墳・中世の散布地。石鏃、古式土師器、土師器、須恵器、山茶碗、陶器。	平成10年一部試掘調査。

慶長十二年、尾張国に徳川義直が配置され、その所領は次第に拡大されて、元和以降は美濃国に及び、元年、五年の両度に武儀郡は殆ど尾張藩領に編入された。美濃市内の旧二七村中、横越、極楽寺、笠神、生櫛の四村は幕府旗本領で、その他は尾張藩領となった。

栗坪遺跡周辺の遺跡

周辺には板取川両岸の盆地に、奈良・平安・中世・近世の遺跡が分布している。発掘調査が行われているところはないが、古い伝承も多く、美濃和紙で栄えた地域でもあり、未確認の遺跡が分布する可能性も今回の調査で考えられる。

『御手洗について』

「和名類聚抄」には、武芸郡として、次の九郷をあげている。御佩、跡部、生櫛、有知、白金、大山、稲朽、菅田、揖可である。その中の御佩郷（みたらしごう）は現在の牧谷の地をさしたものとされている。牧谷に御手洗^{みたらし}という地名があり、そこに牧谷総社と伝える真木倉神社がある。真木倉の倉は谷のことであり、牧谷の中心的神社があったことでも、御手洗付近をみたらし郷の中心にあてることができそうである。

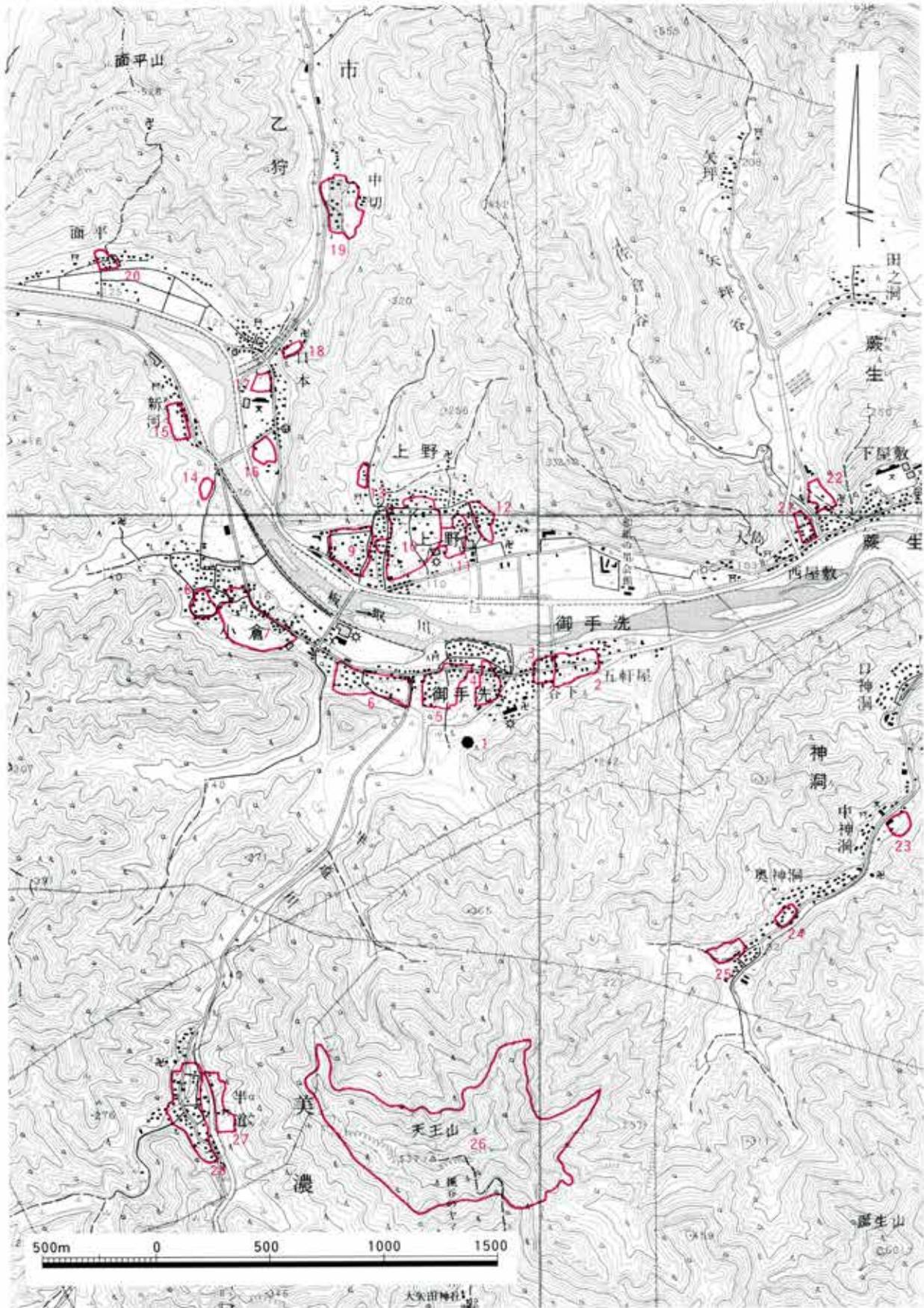
8世紀はじめに書かれた「古事記」に喪山の神話が載せられている。この喪山は市内大矢田の喪山がそれであると昔からいわれていて、江戸時代からいくつかの論証がなされているが、美濃国、武儀郡神名帳記載の古社の中にこの喪山神話の神々を祭神として祀る神社が四社ある。古い伝承をもつこれらの古社は、真木倉神社、上神神社、^{かさかみ}大矢田神社、喪山天神社である。

平安時代初期に編された「延喜式卷二十三、民部下」の「年料別貢雑物」の項の、諸国からの貢進物中に製紙原料としての「紙麻」の量は、美濃国六〇〇斤とあり、他の国々をはるかに引き離して多量に納めている。これは美濃国が豊富な製紙原料をもち、したがって製紙も盛んであったことを示し、製紙が国府の紙屋のみでなく各地でも行われていたことを推測させる。官営製紙のほかに盛んになった民間製紙が発達する所は、原料が豊富で、谷が浅く清く、ゆるやかな川のほとり等の条件に恵まれていたことは当然で、牧谷（武儀郡）、谷合筋（山県郡）、揖斐谷（揖斐郡）、根尾谷（本巢郡）などの地方で次第に紙抄きが行われるようになり、平安時代になると年間一定時期だけ紙を抄く半農半工の生活形態ができたといわれている。

なお、奈良時代に行われた製紙は溜抄（ためずき）といわれる方法によったもので、現在行われている方法は流抄（ながしずき）といい、ねべしを使用するようになったのは延暦年間以後のことであるという。

いずれにしても、牧谷地方が中世以降、美濃紙として全国に知られた紙生産の中心地として、今日までその伝統を持ち続けて来たのは、美濃国製紙が奈良時代から特殊の地位を占めていたという歴史的背景に根ざしているものといえる。

江戸時代の「濃州徇行記」をみると薬師堂をまつる村々には、生櫛、上有知、河和、立花、須原、片知、神洞、御手洗などがあり、いずれも中世からまつられたと推定され、薬師信仰の普及のようすがうかがわれる。御手洗、薬師堂は曹源寺の境内にある。薬師堂の由来は曹源寺より古く永正三年銘の鰐口（県重文）があり少なくとも室町時代には既にあったものである。本尊薬師如来（市重文）は



国土地理院発行 1:25,000地形図

岩佐 (平成13年発行) 美濃 (平成8年発行)
下洞戸 (平成10年発行) 刈安 (平成8年発行)

第5図 周辺遺跡分布図(2) (S=1/25,000)

表2 周辺遺跡一覧表(2)

番号	名称	内容
1	栗坪遺跡	本報告遺跡。
2	左倉遺跡	平安～近世の散布地。灰釉陶器、山茶碗、陶器。
3	谷下遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。
4	谷切遺跡	中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。
5	三本榎遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。
6	上野遺跡	縄文・中世～近世の散布地。石器、山茶碗、陶器。
7	表屋敷遺跡	奈良・中世～近世の散布地。土師器、須恵器、山茶碗、陶器。
8	南屋敷遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。
9	谷西遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。
10	源屋敷遺跡	奈良～近世の散布地。土師器、須恵器、山茶碗、陶器。
11	御堂ノ下遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。
12	下切遺跡	中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。
13	八幡洞遺跡	縄文の散布地。石器。
14	奥田之洞遺跡	縄文の散布地。
15	新河遺跡	中世の散布地。山茶碗、陶器。
16	岩鼻遺跡	中世の散布地。山茶碗、陶器。
17	下島遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。
18	上名古遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。
19	焼原遺跡	縄文・中世の散布地。石器、山茶碗。
20	乙狩中屋敷遺跡	中世の散布地。山茶碗、陶器。
21	蕨生西屋敷遺跡	中世～近世の散布地。土師器、山茶碗、陶器。
22	中野遺跡	奈良・中世～近世の散布地。須恵器、山茶碗、陶器。
23	山下モ遺跡	中世の散布地。山茶碗。
24	古井戸遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。
25	細畑遺跡	中世の散布地。山茶碗。
26	天王山城跡	中世城館跡。
27	半道白山神社遺跡	中世墓。
28	寺下遺跡	中世～近世の散布地。山茶碗、陶器。

室町時代の作と推定される優美な木彫坐像である。

註)

1. 美濃市教育委員会1999『中屋敷遺跡』美濃市文化財調査報告第11号。
2. 美濃市教育委員会2002『垣内遺跡』美濃市文化財調査報告第19号。

参考文献

- 美濃市教育委員会1999『美濃市遺跡分布地図』美濃市文化財調査報告第12号
美濃市教育委員会1979『美濃市史』通史編上巻
岐阜県教育委員会1990『改訂版 岐阜県遺跡地図』
多田誠1996「室町幕府奉公衆美濃佐竹氏について」『皇學館論叢』第二十九卷第六号
美濃市教育委員会1989『美濃市西南部古窯址群』美濃市文化財調査報告第6号
美濃市教育委員会1997『改田遺跡』美濃市文化財調査報告第10号
美濃市教育委員会1997『南山遺跡』美濃市文化財調査報告第8号
美濃市教育委員会1999『中屋敷遺跡』美濃市文化財調査報告第11号
美濃市教育委員会2002『垣内遺跡』美濃市文化財調査報告第19号
美濃市教育委員会2002『山ノ神遺跡』美濃市文化財調査報告第17号

第3章 一本杉・茶屋下・改田遺跡の調査

第1節 基本層序

重機による表土除去は、敷き土を少し残した段階で、水道工事に使うミニユンボで調査区北側に溝を切り、重機でどこまで剥ぐかを調査区ごとに確認して行った。敷き土をはずすとすぐに包含層が出てきた。多くの遺物は黒褐色土の包含層から出土している。水田の敷き土のⅠ層は深さが調査区の平均で1 mあったが、すべて重機で掘削し、その後人力掘削で平均11cmを掘り下げている。調査区は大きな谷の中にあるため、どこを掘っても湧水があった。

調査区の中ではC区とJ区東が一番低く62.6m、D区も他の地区より低く63.0mで、A区が一番高く64.75mである。調査区全体の地形は、西が一番地形が高く、西から東へ傾斜している。C区とJ区東が一番低く、流路となっている（第6図参照）。E区は北に傾斜している（第13図参照）。

- Ⅰ層 10YR3/1 黒褐色粘土：表土、客土、水田耕作土、水田敷き土。
- Ⅱ①層 10YR2/1 黒色粘土：近世遺構面の遺物包含層。
- Ⅱ②層 10YR4/1 褐灰色粘土：硬い。渡来川北遺跡と同じ層。近世水田の敷き土にそのまま利用。
- Ⅲ層 2.5Y5/4 黄褐色粘土：硬い。近世遺構面。
縄文時代包含層。石器・炭が出土する。
- Ⅳ層 2.5Y4/1 黄灰色粘土：ややしまりあり。縄文時代遺構面。
- Ⅴ層 5GY6/1 オリーブ灰色砂：しまりなし。

Ⅰ層

水田に関連する土層である。やわらかく、耕作土と敷き土の色の違いは、重機による表土掘削の際にはほとんど感じられなかったため、Ⅱ層直上まで重機で掘削している。G・J区など地形が低い個所のⅠ層がかなり深かったのは、近世の水田の耕作土と、さらにその上に土を入れてつくったほ場整備後の水田の耕作土があったためである。近世の水田の土は地形の低い所にのみ入れられている。地形の高いところは畑として利用され（宇野氏御教示による）、ほ場整備のキャタピラー痕が残っている。B・C・D区は客土が多く、E区は水田の上に盛土をして畑にしていたため1.2m重機で掘削している。特にC区は客土が多く、西隅はⅤ層まで攪乱を受けており、2 m重機で掘り下げている。

Ⅱ層

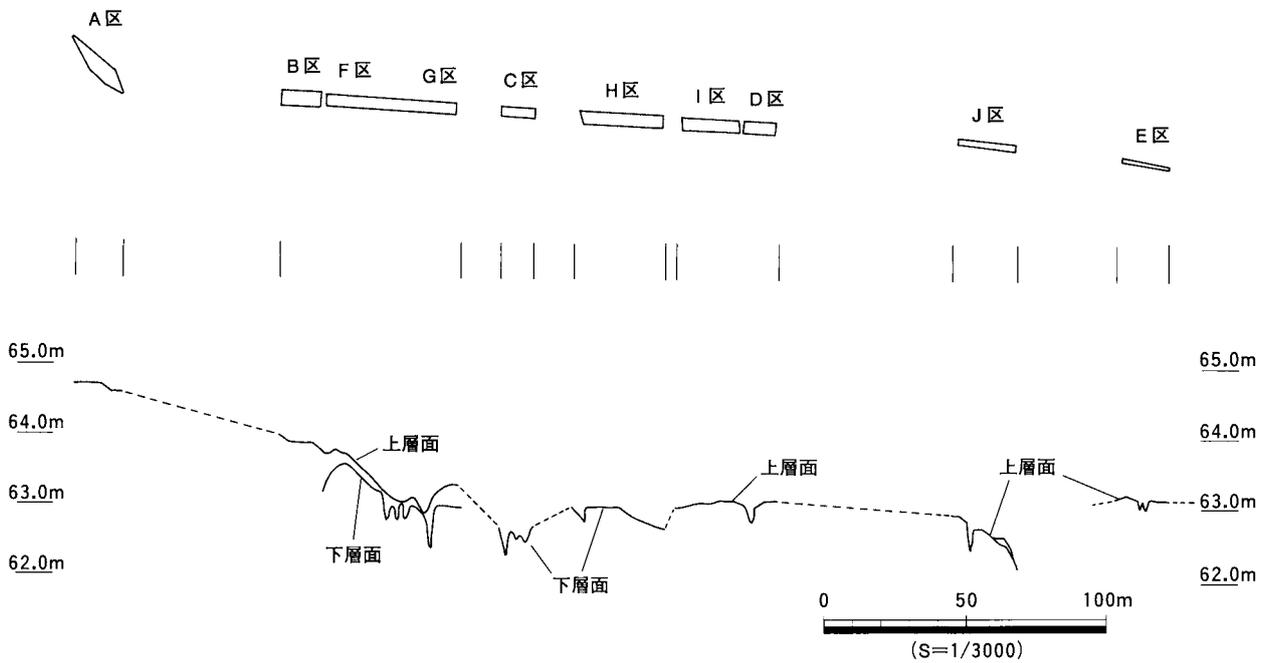
Ⅰ層を剥ぐとすぐ現れる層で、部分的に残存しており、多くはほ場整備の際に削られている。遺物が多く出土しており、当遺跡出土遺物のほとんどがこの層からの出土になる。A区は東側に包含層が残存していた。C区は包含層も攪乱を受けており、残存状況は良くなかったが、多数遺物が出土している。D区はほとんど包含層が残存していなかったが、表土に陶器が混じっていた。G区では東側に多く包含層が堆積していた。B・E・F区は浅く残存しているのみである。

Ⅲ層

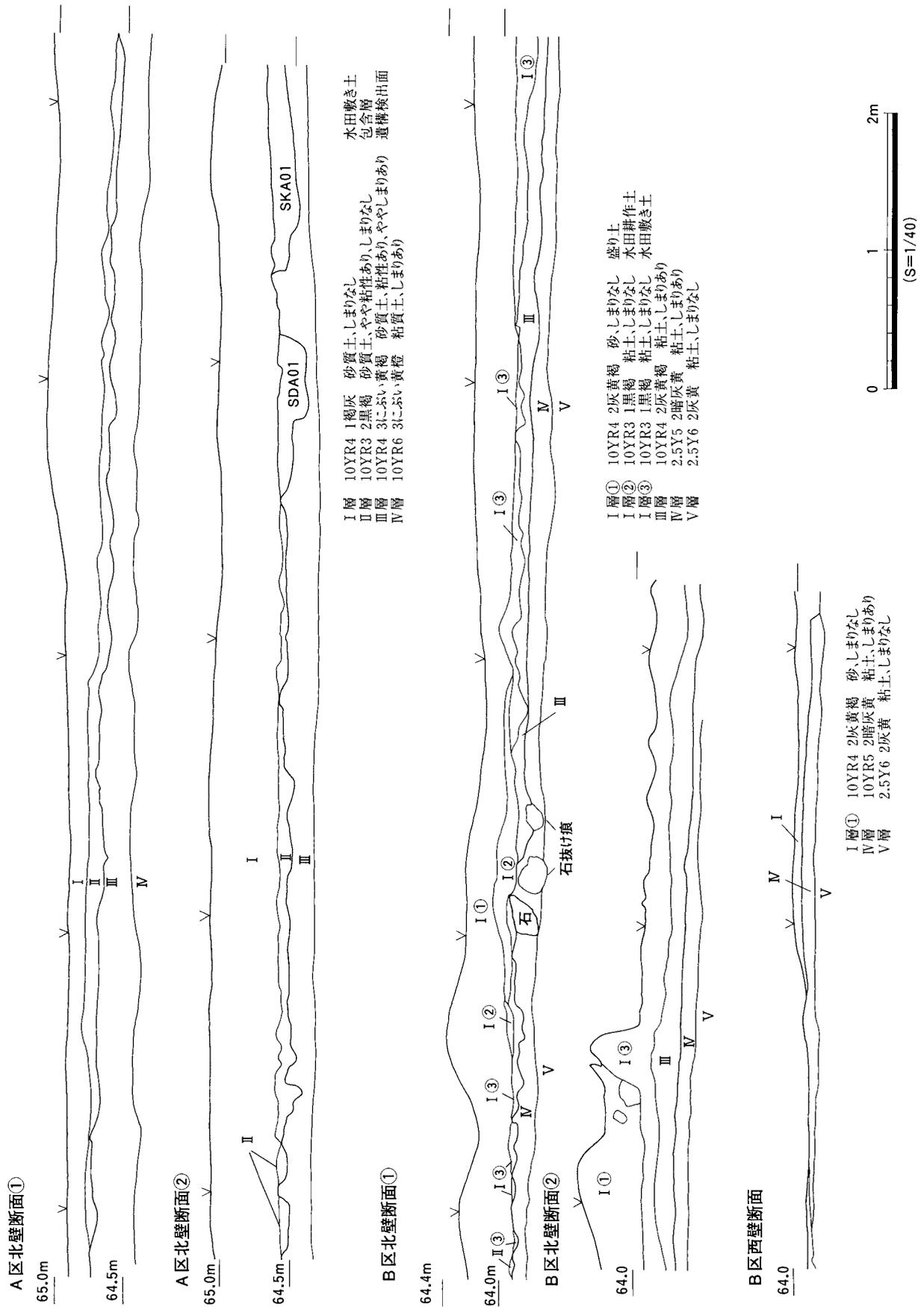
Ⅲ層は、起伏の激しいⅣ層の地形が低くなっているところに堆積しているため、部分的に存在する。F区ではG102付近にあり、地形は西へ低くなってB区につながっていく。F・G・H区ではⅢ層の掘り下げを行っているが、F区西側で石器の出土が少なく、Ⅲ層の堆積も薄かったため、B区では掘り下げしていない。黄褐色粘土が一番濃いのは、G区の東端 H92周辺で、頁岩の剥片が1点出土している。このあたりからH区西半分にかけてが縄文時代包含層堆積範囲の中心になる。H区の中央部にも黄色い粘土が残存している。I78グリッドでチップ、I77グリッドで細かい炭が混じっていた。

Ⅳ層

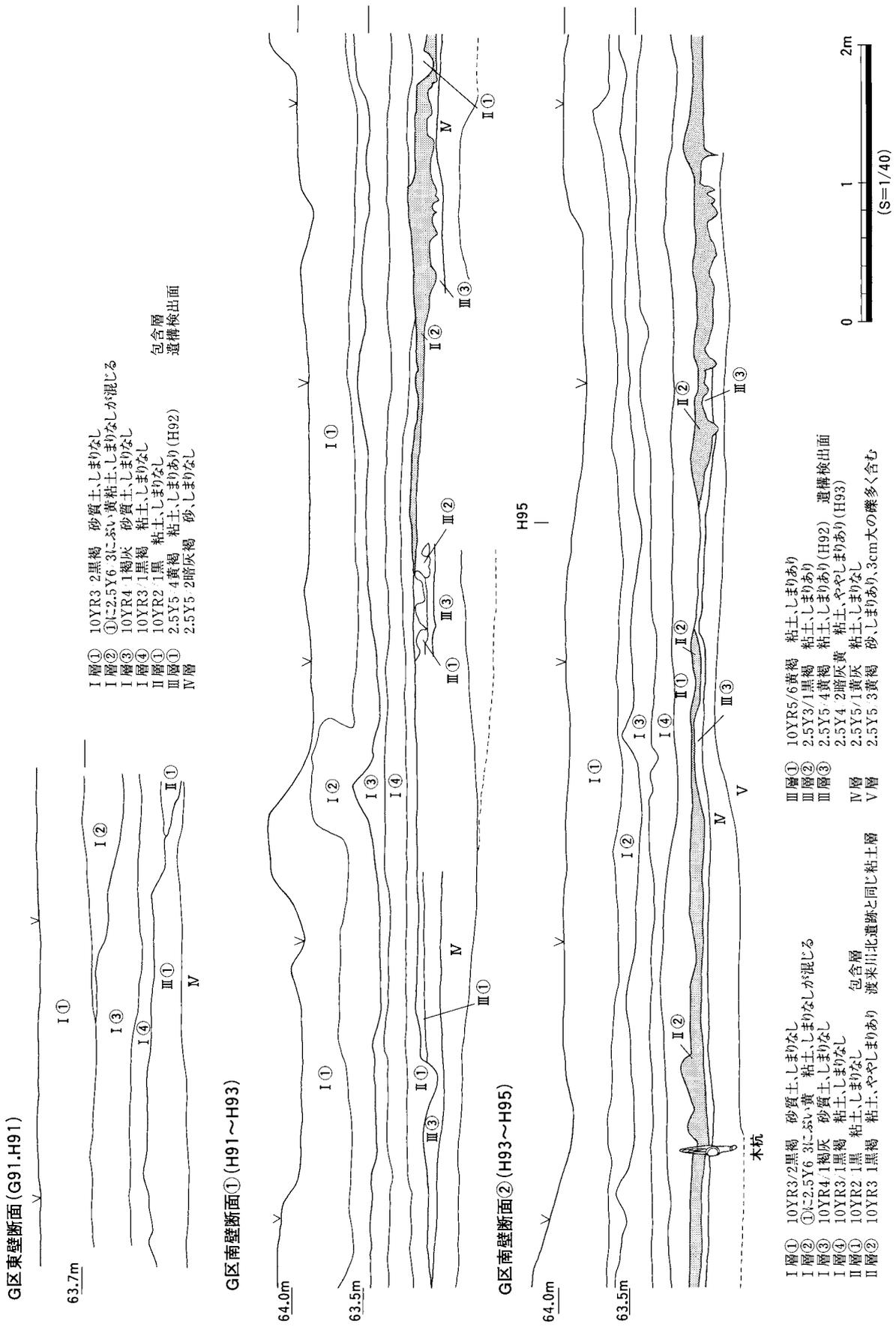
Ⅲ層を掘り下げると、Ⅳ層はかなり起伏の多い地形になる。G区で地形の低いH95周辺には黄灰色粘土があり、それを下げるとⅤ層になり自然流路が検出された。自然流路周辺からは磨石3点、剥片(珪岩)1点が出土している。



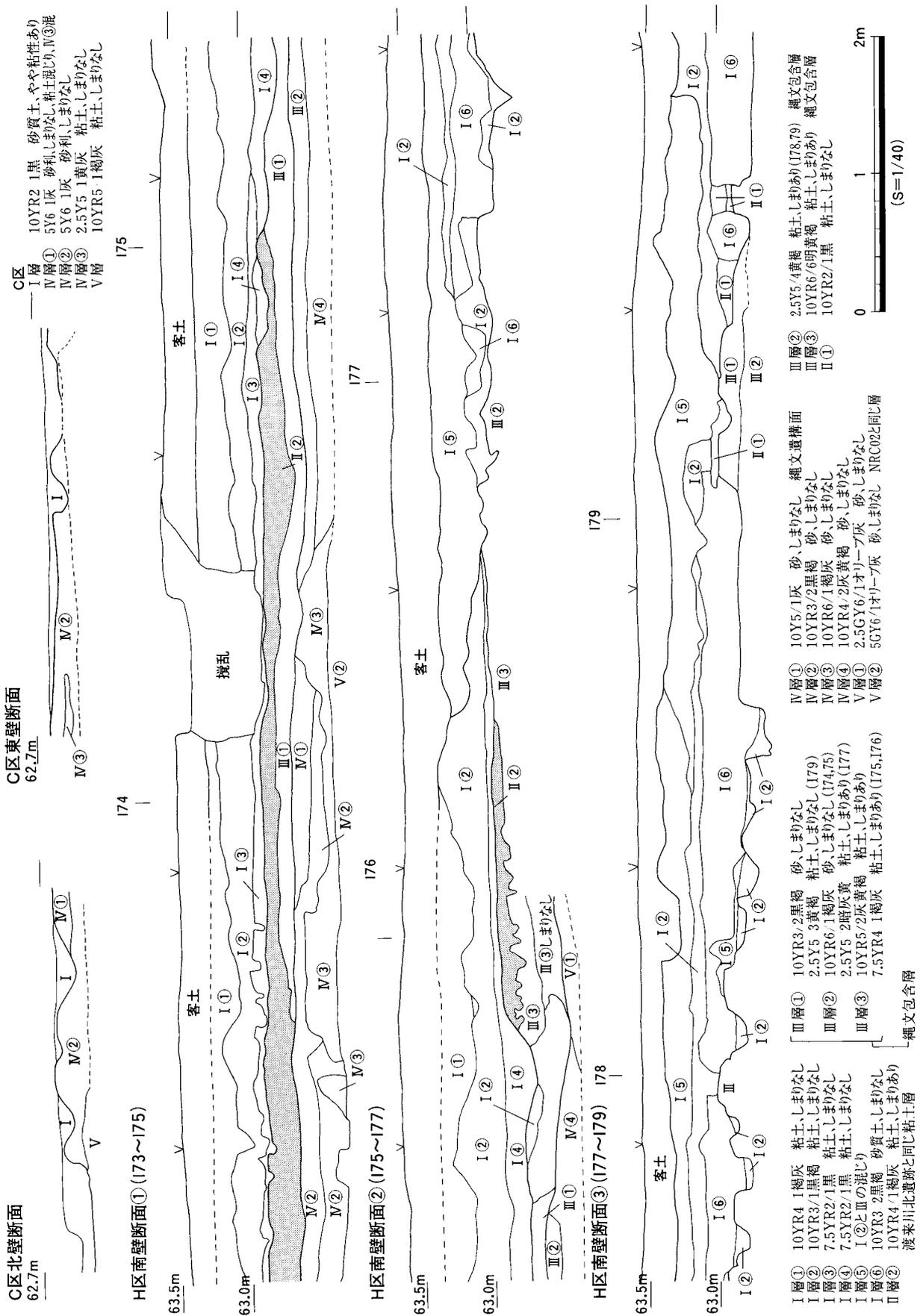
第6図 東西方向断面図



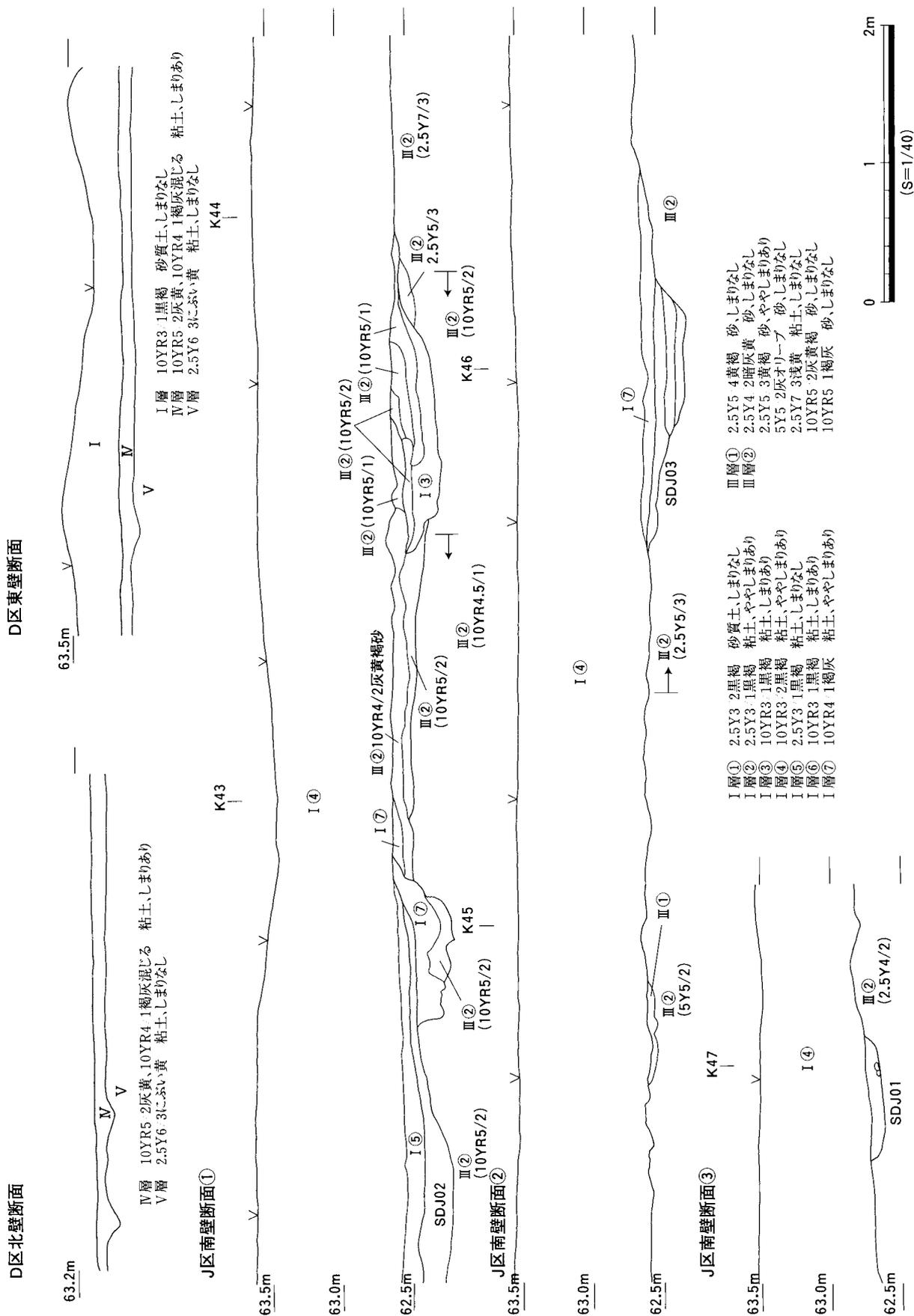
第7図 一木津遺跡 (A・B区) 北壁・西壁断面図



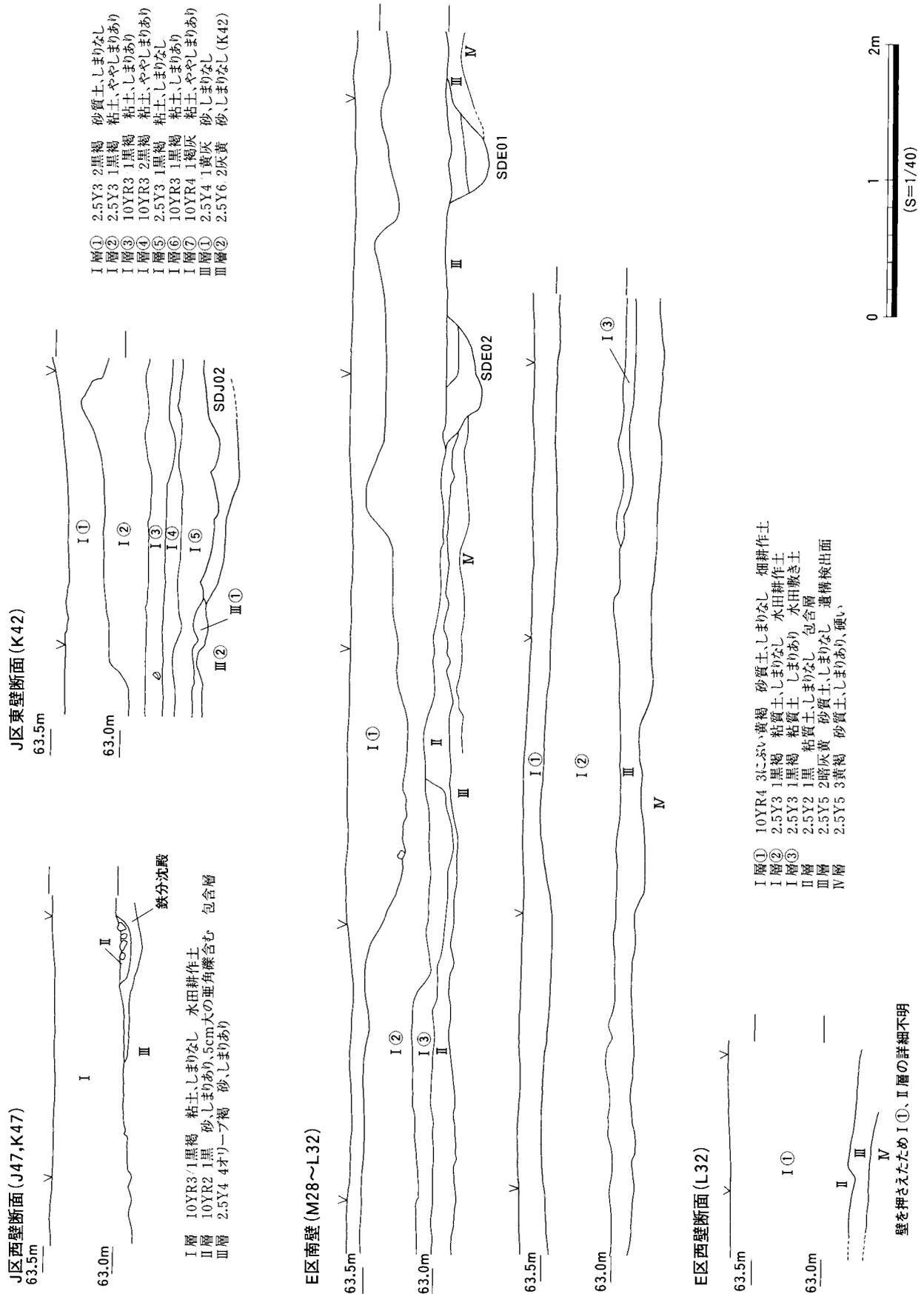
第8図 一本杉遺跡 (G区) 東壁・南壁断面図



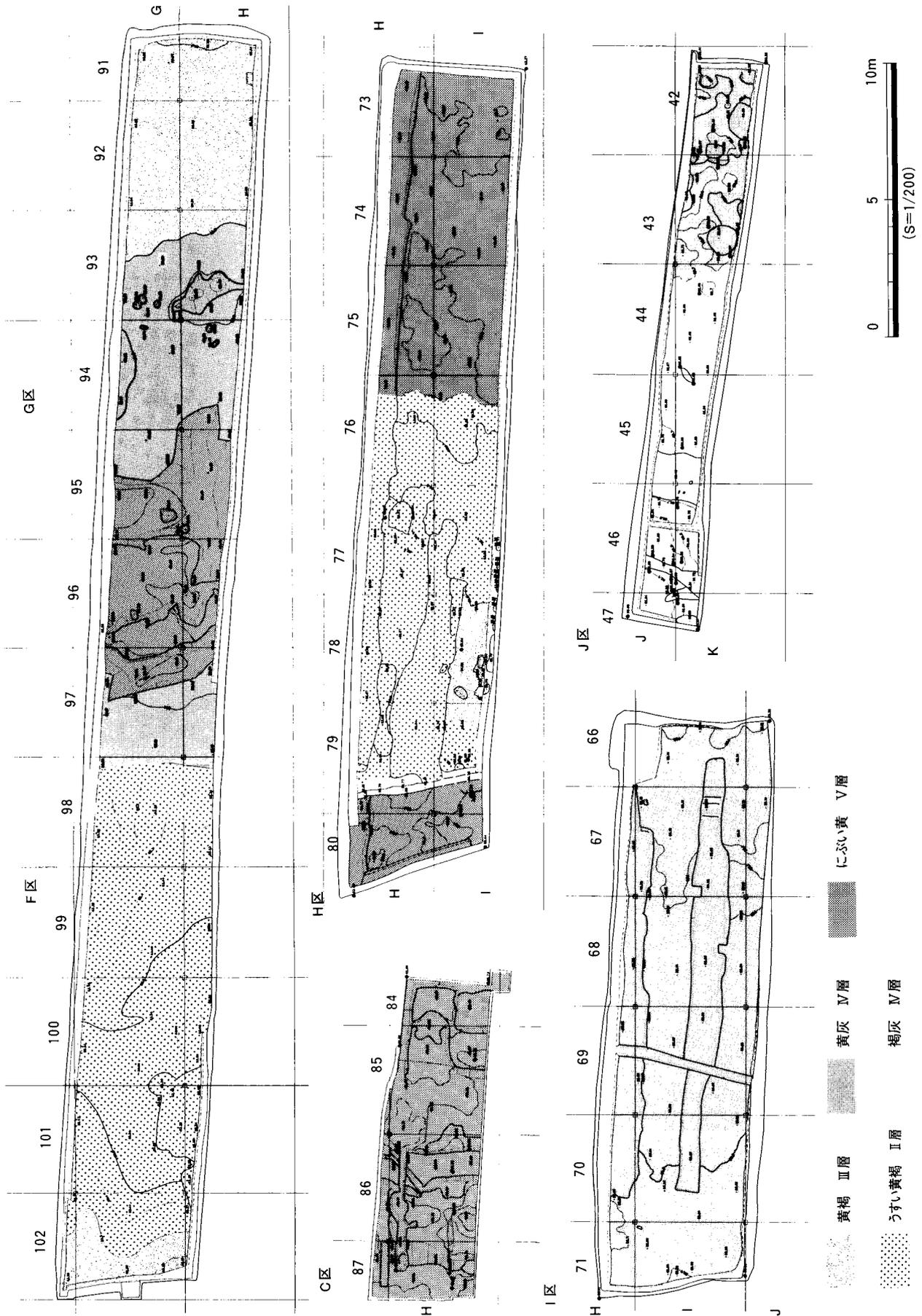
第10図 茶屋下遺跡 (C・H区) 北壁・南壁・東壁断面図



第12図 杉屋下遺跡 (D・J区) 北壁・東壁・南壁断面



第13図 茶屋下 (J区) 改田遺跡 (E区) 南壁・西壁・東壁断面図



第14図 一本杉・茶屋下遺跡 III・IV・V層分布状況図

第2節 遺構・遺物の概要

下層（縄文時代）の遺構・遺物

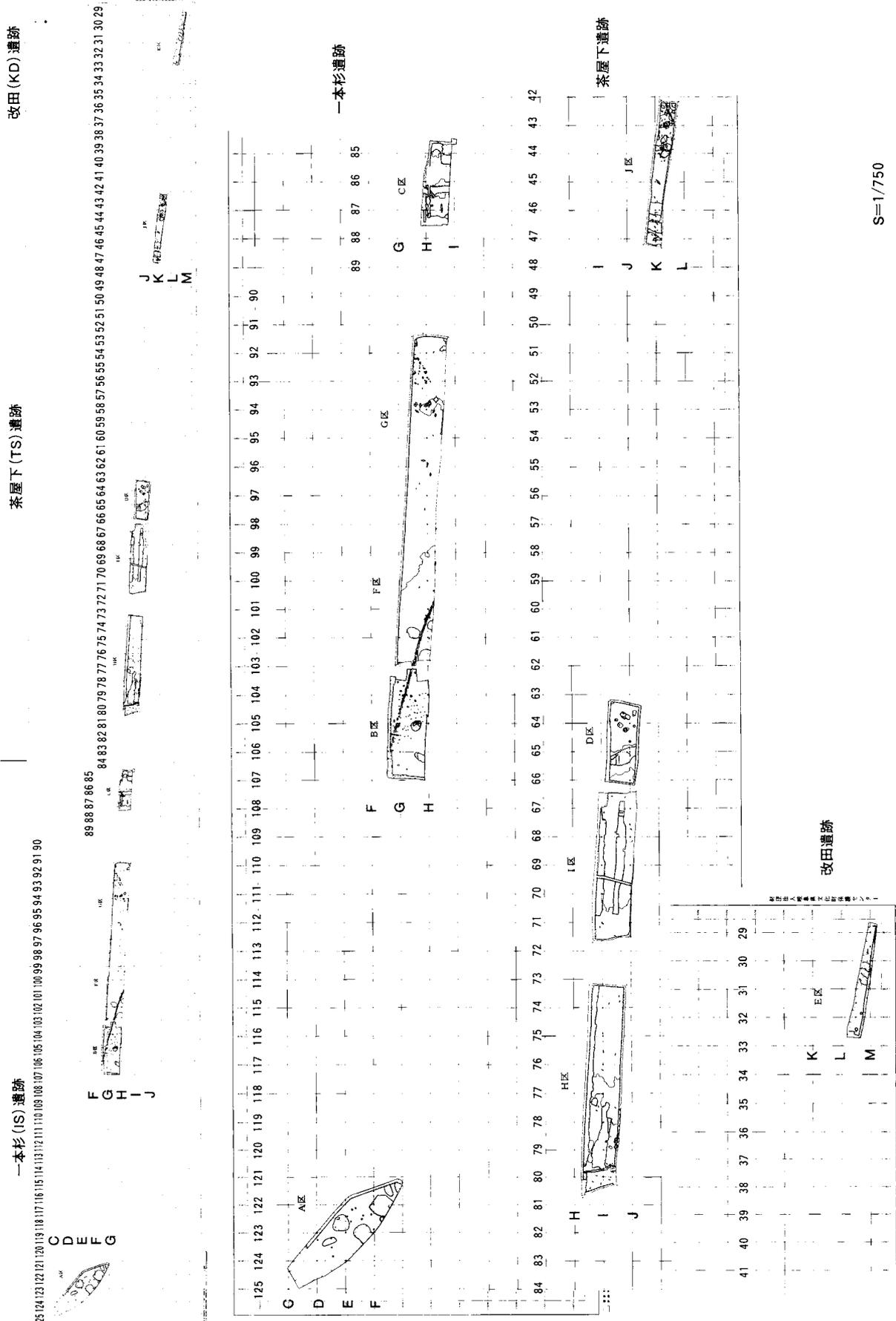
下層の調査は第1節にも記述したが、F・G・C・H区の一部でのみの検出である。下層の調査では、G区G95付近で自然流路を検出し、自然流路付近のⅣ層から二次加工剥片（29）、石核（30）、礫2点（31、32）が出土している。また、自然流路東のG91で剥片（21）がⅢ層から出土している。なお、石器は上層の包含層（Ⅱ層）からも出土している。

上層（中世・近世）の遺構・遺物

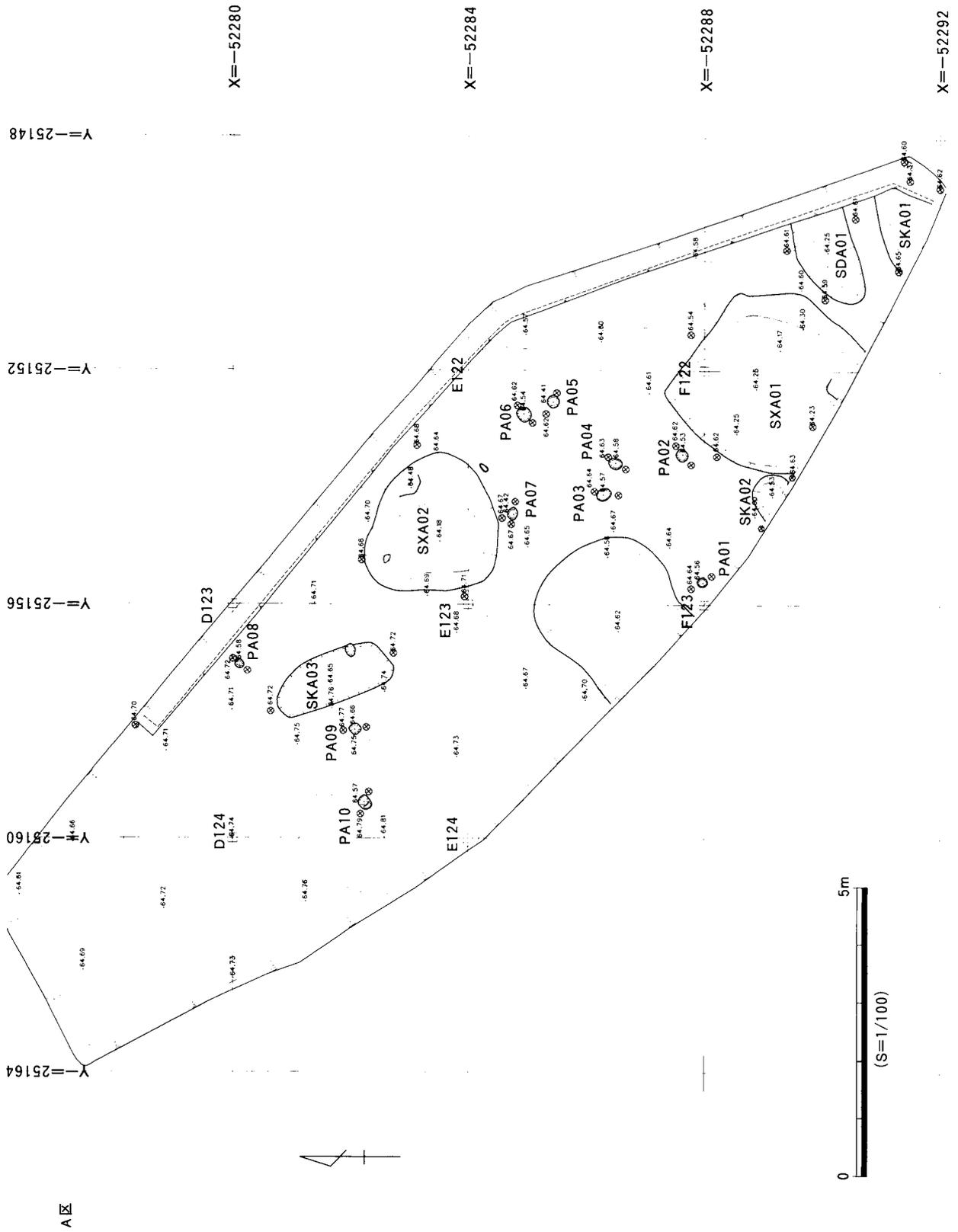
当遺跡での検出遺構の中心は近世の低湿地水田開発跡である。水田になる前に部分的に粘土採掘跡が見られるが、遺物を伴わないため時期は特定できない。中世の遺構はJ区とE区で検出している。遺物はほとんどがⅡ層（包含層）から出土しており、縄文土器、石器、須恵器、灰釉陶器、土師器皿、12～15世紀の山茶碗・陶器、18～19世紀の陶器が出土している。包含層出土の遺物はグリッドごとを一括で取り上げている。遺構出土の遺物はNRC01の埋土上層から14～15世紀の山茶碗（101～104）が出土し、SDJ02・03の埋土上層から14～15世紀の山茶碗が出土しているのみである。また、SIB01周辺からは18～19世紀の陶器が多く出土している。

表3 遺構一覧表

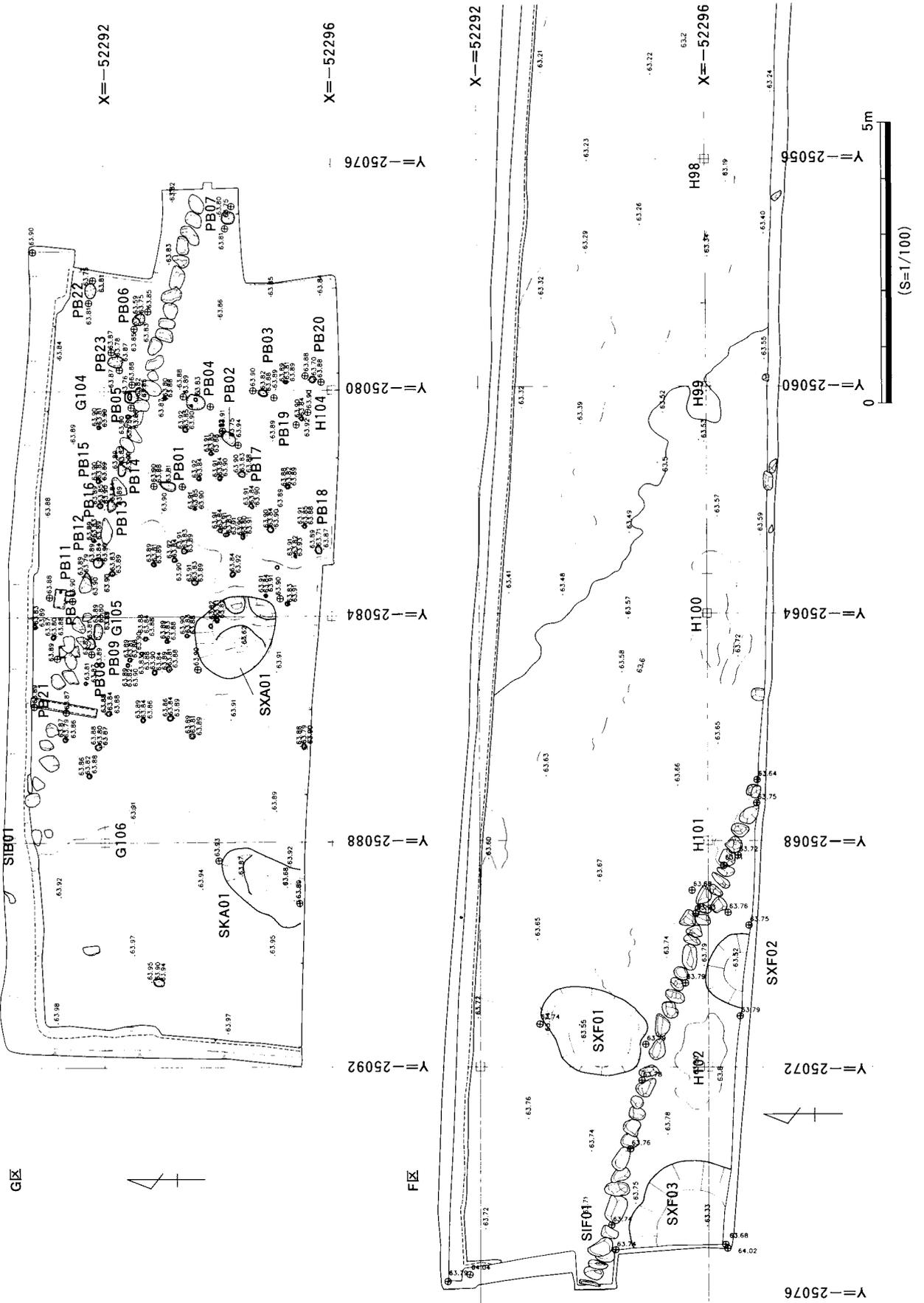
一本杉遺跡								
地区	A区		B区		F・G区		C区	
遺構層序	遺構	出土層序 遺構確認面	遺構	出土層序 遺構確認面	遺構	出土層序 遺構確認面	遺構	出土層序 遺構確認面
下層					NRG01	Ⅳ（遺物包含層） Ⅴ（確認面）	NRC01, NRC02	Ⅱ（遺物包含層） Ⅳ（確認面）
上層	PA01～PA10 SKA01, SKA02 SDA01 SXA01.02	Ⅱ（遺物包含層） Ⅲ（確認面）	PB01～PB23 SKB01 SIB01 SXB01	Ⅲ（遺物包含層） Ⅳ（確認面）	SIF01 SXF01～SXF03 PG01～PG10 SKG01, SKG02	Ⅱ（遺物包含層） Ⅲ（確認面） Ⅱ（遺物包含層） Ⅳ（確認面）		
茶屋下遺跡								
地区	H区		I区		D区		J区	
遺構層序	遺構	出土層序 遺構確認面	遺構	出土層序 遺構確認面	遺構	出土層序 遺構確認面	遺構	出土層序 遺構確認面
下層	SXH02	Ⅲ（遺物包含層） Ⅳ（確認面）						
上層	SIH01	Ⅱ（遺物包含層） Ⅲ（確認面）			PD01～PD08 SDD01	Ⅱ（遺物包含層） Ⅳ（確認面）	PJ01～PJ03 SKJ01～SKJ04 SDJ01～SDJ03 SXJ01, SXJ02	Ⅱ（遺物包含層） Ⅲ（確認面）
改田遺跡								
地区	E区							
遺構層序	遺構	出土層序 遺構確認面						
下層								
上層	PE01, PE04 SDE01, SDE02	Ⅱ（遺物包含層） Ⅲ（確認面）						



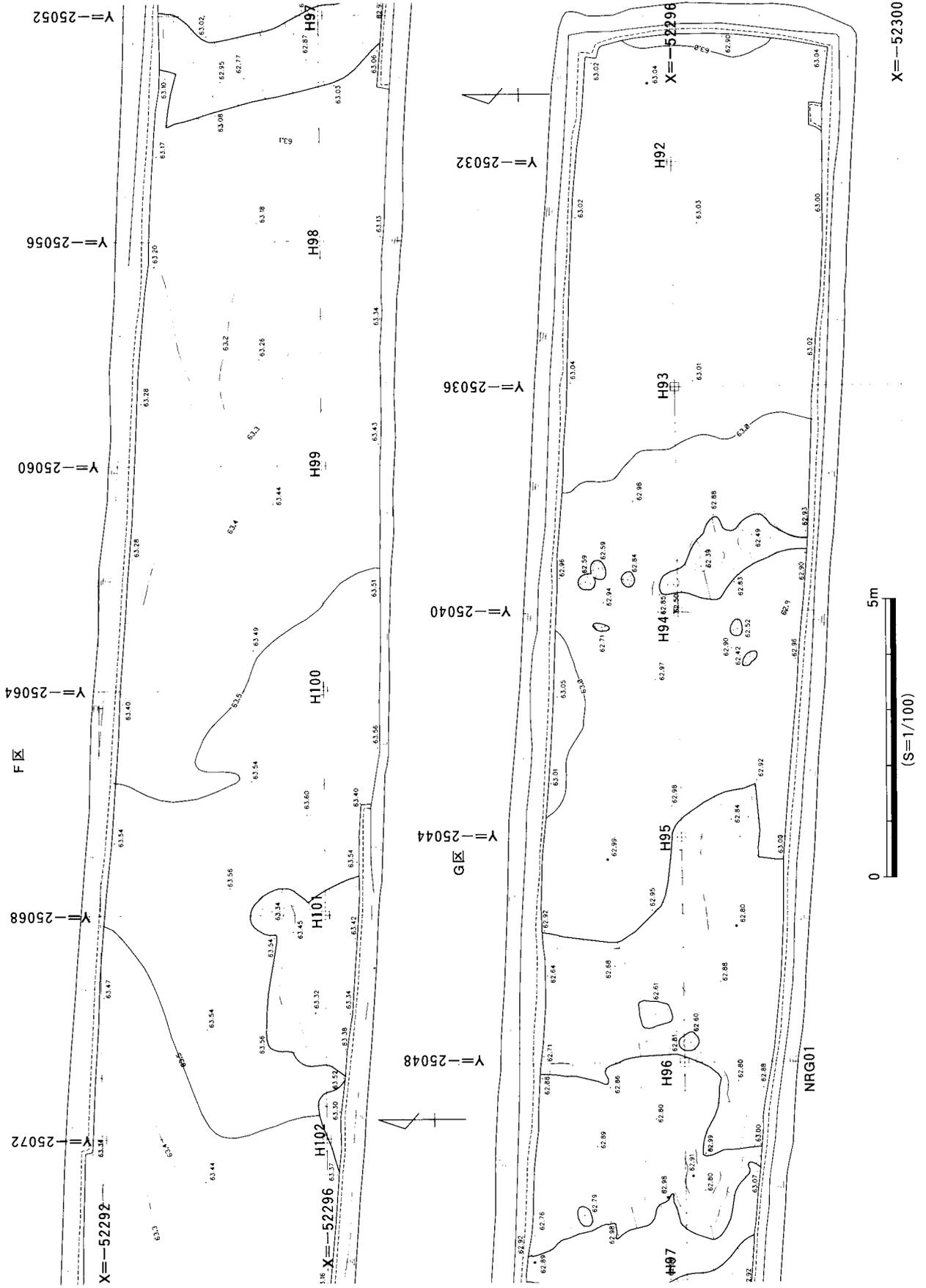
第15図 遺構全体図 (S=1/1500, 1/750)



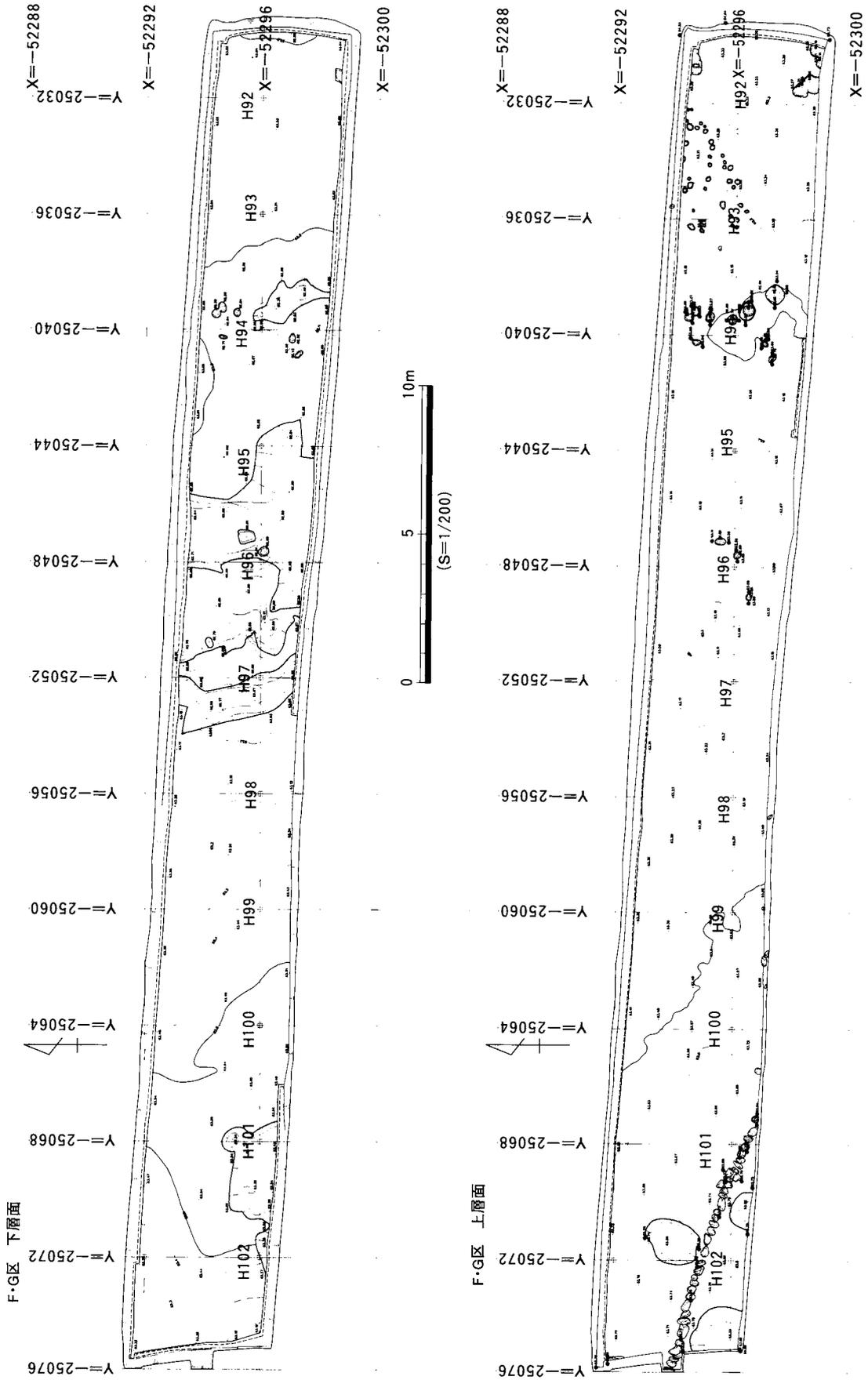
第16図 A区遺構全体図 (S=1/100)



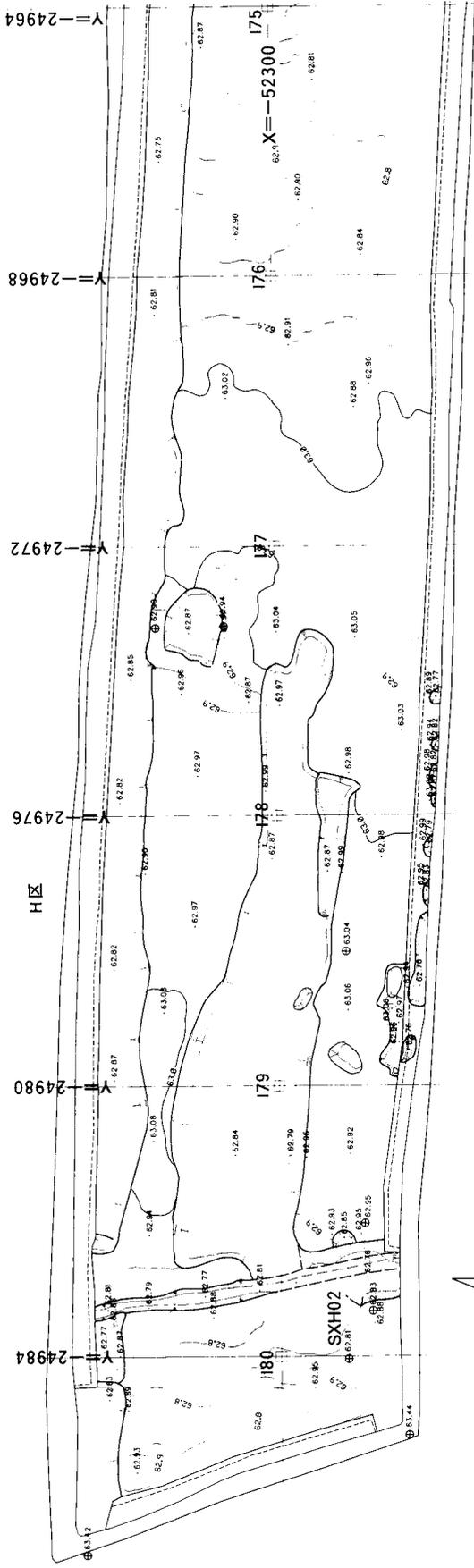
第17図 B・F区遺構全体図 S=1/100



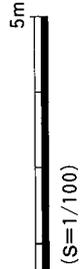
第19図 F・G区遺構全体図(下層面)(S=1/100)



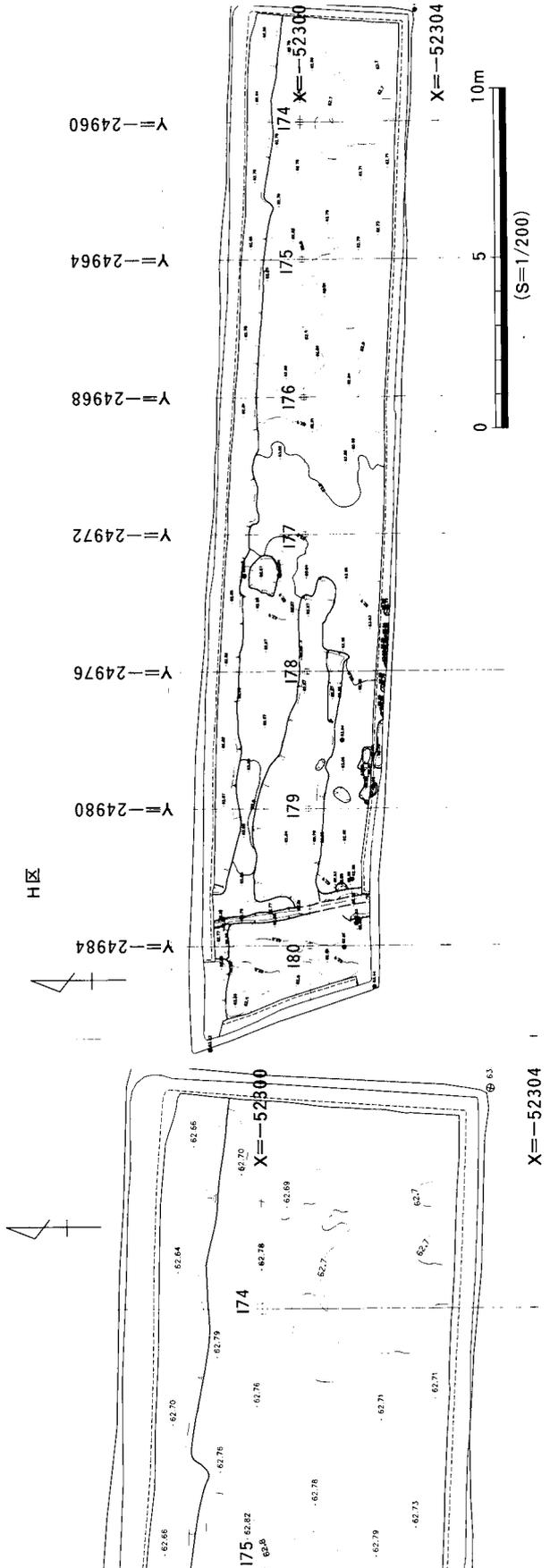
第20図 F・G区遺構全体図 (S=1/200)



X=-52304



(S=1/100)



X=-52304



(S=1/200)

第21図 区H遺構全体図 (S=1/100, 1/200)

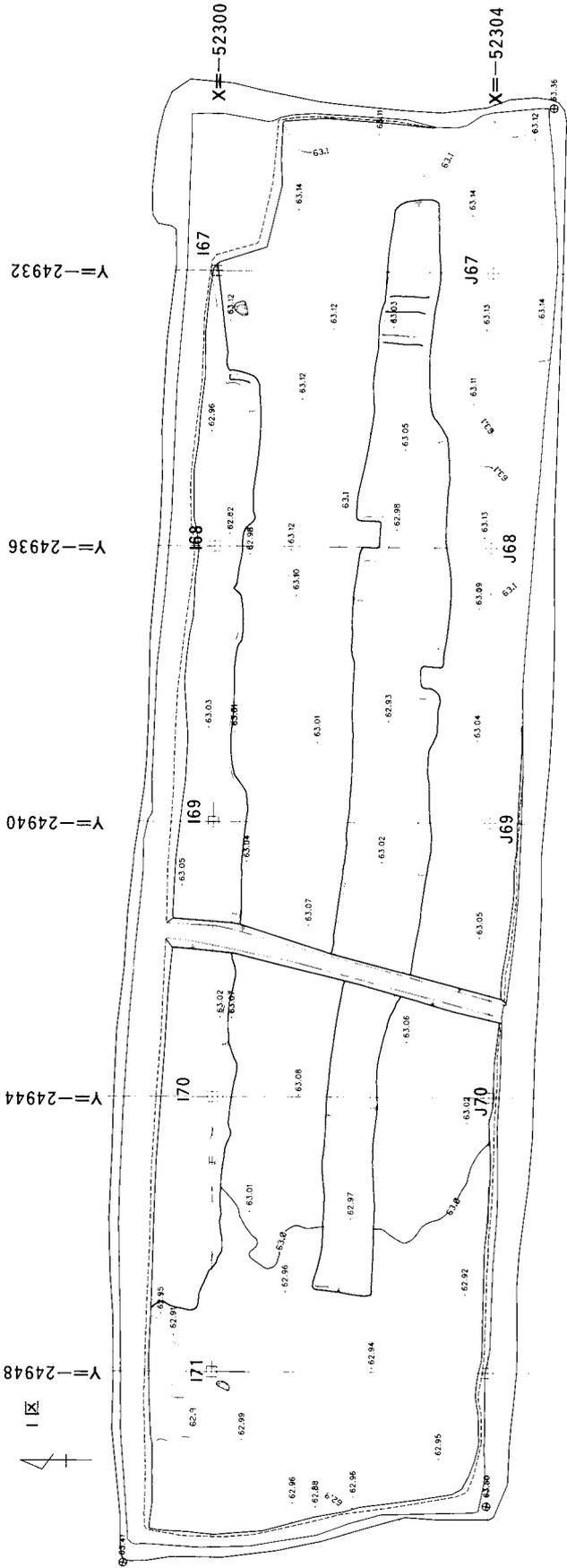


図22

第22図 図D・I区遺構全体図 (100/1=S)

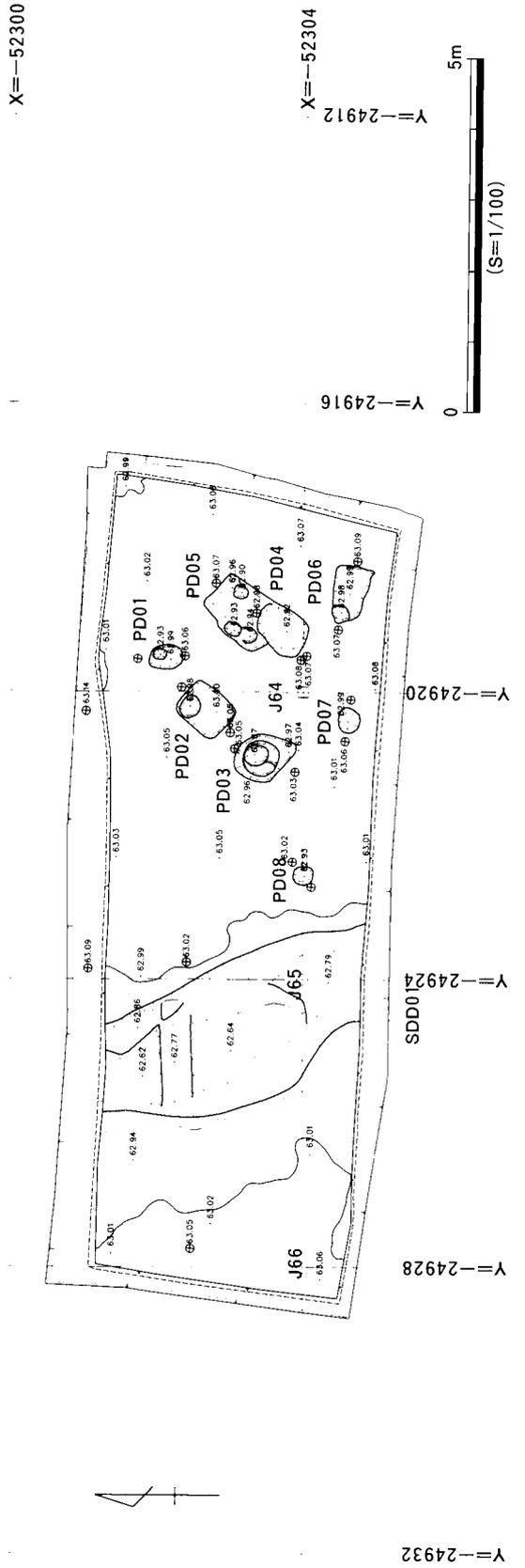
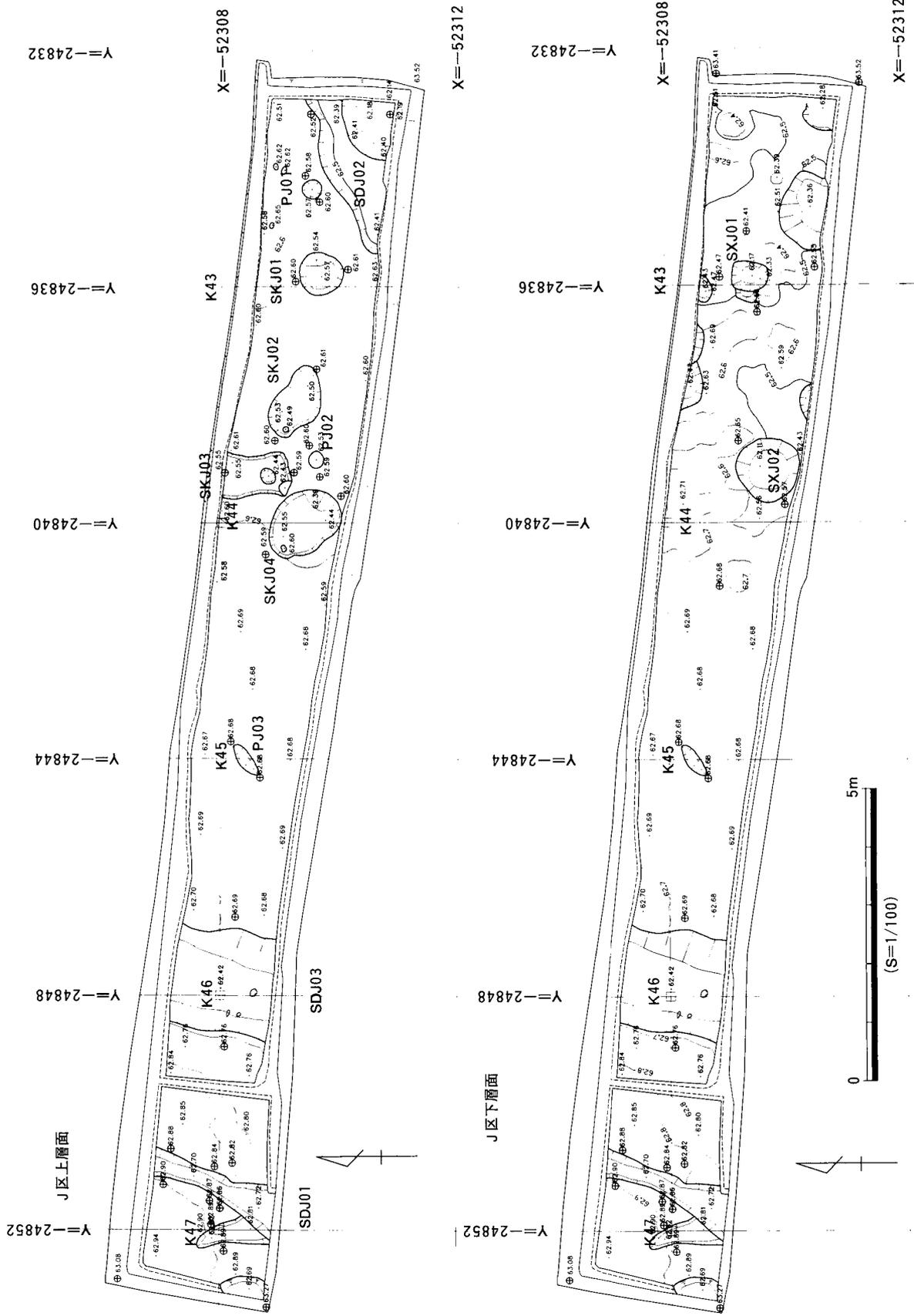
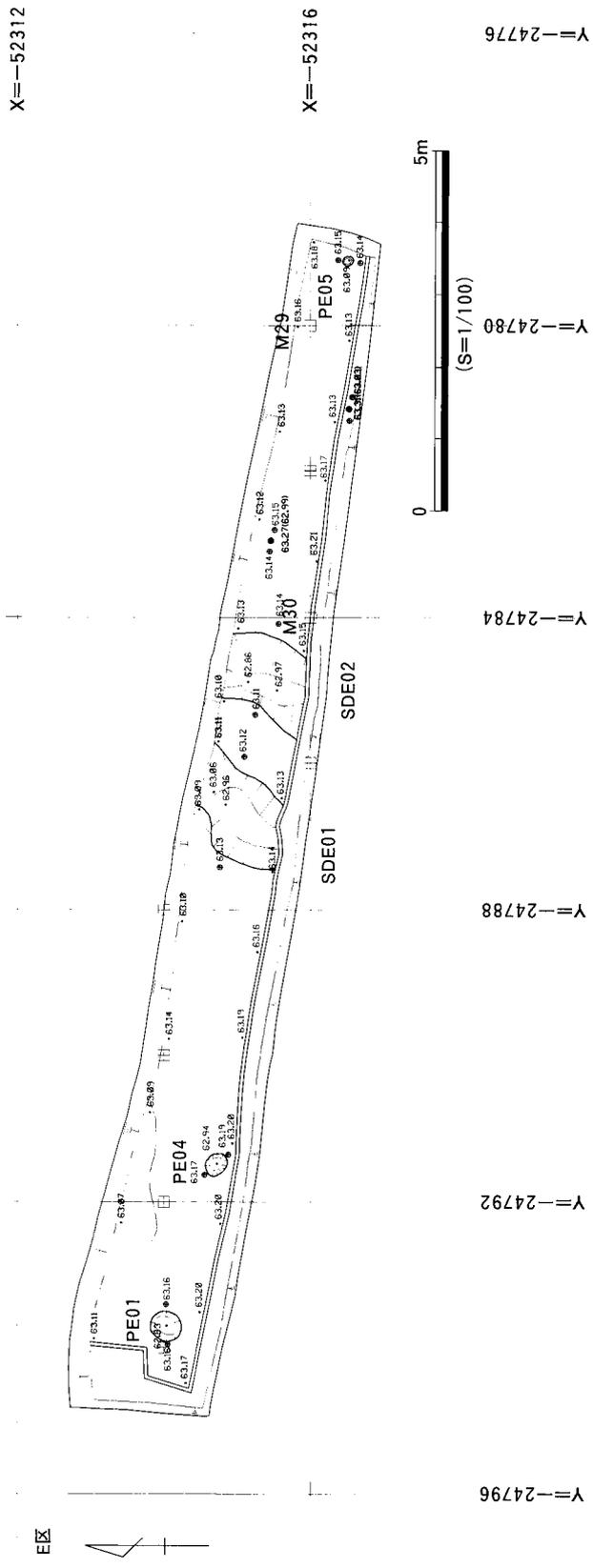


図23

第23図 図D・I区遺構全体図 (100/1=S)



(001/1=S) 図23 第23図 J区上層・下層遺構全体図



第24図 E区遺構全体図 (S=1/100)

表4 遺構観察表

遺跡名	地区名	遺構名	グリッド	検出面土色	遺構面	検出高(m)	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	平面形	掲載スケール	備考	
1	一本杉	G区	NRG01	G・H95~97	2.5Y5 3黄褐	V	63.10	(4.50)	9.00	0.19		1/50	南北方向に長い。北に傾斜する。石器出土。
2	一本杉	C区	NRC01	H86	2.5Y4 1黄灰	IV	62.60	(3.00)	3.50	0.36		1/40	南北方向に長い。南に傾斜する。流木出土。
3	一本杉	C区	NRC02	H85	10YR5 1褐灰	IV	62.60	(3.00)	3.00	0.30		1/40	南北方向に長い。木の根出土。
4	茶屋下	H区	SXH02	I79	2.5Y5 4黄褐	IV	62.85	(1.50)	(0.75)	0.20	不明	1/20	石器4点出土。
5	一本杉	A区	PA01	E, F122	10YR4 3にぶい黄褐	III	64.65	0.18	0.17	0.10	円形	1/20	浅い。
6			PA02	E, F122	10YR4 3にぶい黄褐	III	64.64	0.18	0.18	0.10	円形	1/20	浅い。
7			PA03	E, F122	10YR4/3にぶい黄褐	III	64.64	0.22	0.17	0.05	円形	1/20	浅い。
8			PA04	E, F122	10YR4 3にぶい黄褐	III	64.64	0.19	0.18	0.05	円形	1/20	浅い。
9			PA05	E, F122	10YR4 3にぶい黄褐	III	64.62	0.22	0.21	0.16	円形	1/20	浅い。
10			PA06	E, F122	10YR4 3にぶい黄褐	III	64.62	0.22	0.21	0.06	円形	1/20	浅い。
11			PA07	E, F122	10YR4 3にぶい黄褐	III	64.63	0.22	0.18	0.15	円形	1/20	浅い。
12			PA08	D123	10YR4/3にぶい黄褐	III	64.70	0.21	0.20	0.10	円形	1/20	浅い。
13			PA09	D123	10YR4/3にぶい黄褐	III	64.75	0.22	0.20	0.20	円形	1/20	浅い。
14			PA10	D123	10YR4/3にぶい黄褐	III	64.74	0.25	0.22	0.41	円形	1/20	浅い。
15			SKA01	G, F121	10YR4 3にぶい黄褐	III	64.65	1.50	1.00	0.12		1/20	東と南に続く。
16			SKA02	F122	10YR4 3にぶい黄褐	III	64.67	(0.46)	0.82	0.11		1/20	東に続く。
17			SKA03	D123	10YR3/1黒褐	III	64.72	2.10	0.88	0.05	楕円形	1/20	浅い。
18			SXA01	F121	10YR4 3にぶい黄褐	III	64.71	(0.88)	0.53	0.16		1/40	SXA01を切る。南に続く。
19			SXA01	F121,122	10YR4/3にぶい黄褐	III	64.64	3.00	2.70	0.42	円形	1/40	風倒木痕。
20			SXA02	D, E122	10YR4 3にぶい黄褐	III	64.64	2.38	2.32	0.56	円形	1/40	風倒木痕。
21		B区	PB01	G104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.77	0.28	0.18	0.05	楕円形	1/20	浅い。
22			PB02	G104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.79	0.31	0.19	0.14	楕円形	1/20	浅い。
23			PB03	G104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.80	0.21	0.12	0.07	楕円形	1/20	浅い。
24			PB04	G104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.79	0.33	0.27	0.21	楕円形	1/20	柱痕あり。
25			PB05	G104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.75	0.25	0.24	0.10	円形	1/20	浅い。
26			PB06	G103	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.75	0.23	0.20	0.17	円形	1/20	柱痕あり。
27			PB07	G103	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.55	0.24	0.22	0.08	円形	1/20	浅い。
28			PB22	F103	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.70	0.24	0.21	0.04	円形	1/20	浅い。
29			PB23	F103	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.75	0.26	0.19	0.10	楕円形	1/20	浅い。
30			PB08	G105	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.59	0.18	0.17	0.06	円形	1/20	石が抜けた痕。
31			PB09	G105	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.58	0.26	0.16	0.04	楕円形	1/20	石が抜けた痕。
32			PB10	F104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.60	0.15	0.15	0.02	円形	1/20	石が抜けた痕。
33			PB11	F104	2.5Y5/2暗灰黄	IV						1/20	石がずれた痕。
34			PB12	F104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.80	0.18	0.16	0.05	円形	1/20	石が抜けた痕。
35			PB13	G104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.79	0.26	0.14	0.06	楕円形	1/20	石が抜けた痕。
36			PB14	G104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.78	0.20	0.15	0.08	楕円形	1/20	石が抜けた痕。
37			PB21	F105	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.80	0.27	0.10	0.04	楕円形	1/20	石が抜けた痕。
38			PB15	F104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.78	0.09	0.08	0.08	円形	1/20	杭穴。
39			PB16	G105	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.64	0.09	0.09	0.16	円形	1/20	杭穴。
40			PB17	G104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.80	0.12	0.11	0.08	円形	1/20	杭穴。
41			PB18	G104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.61	0.14	0.11	0.08	円形	1/20	杭穴。
42			PB19	G104	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.80	0.08	0.07	0.10	円形	1/20	杭穴。
43			PB20	G103	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.79	0.11	0.11	0.26	円形	1/20	深い。
44			SKB01	G106	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.66	(1.5)	0.90	0.26		1/20	溝跡か？南につづく。
45			SXB01	G105	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.62	1.71	1.30	0.27	楕円形	1/20	風倒木痕。
46			SIB01	F, G103~105	2.5Y5/2暗灰黄	IV	63.80	11.50	0.50	0.15		1/40	東に傾斜する。SIF01とつながる。
47		F区	SIF01	G, H101, 102	2.5Y5/3黄褐	III	63.70	9.50	0.50	0.25		1/40	SIB01とつながる。
48			SXF01	G101	2.5Y5 3黄褐	III	63.70	1.92	1.32	0.25	楕円形	1/40	風倒木痕。
49			SXF02	H101	2.5Y5 3黄褐	III	63.70	(1.55)	1.40	0.40	楕円形	1/40	風倒木痕。
50			SXF03	H102	2.5Y5 3黄褐	III	63.70	(1.70)	(1.48)	0.50	円形	1/40	風倒木痕。
51		G区	PG01	G93	10YR5 2灰黄	IV	63.14	0.34	0.30	0.47	円形	1/20	粘土探掘跡。
52			PG02	G93	10YR5 2灰黄	IV	63.13	0.35	0.33	0.10	円形	1/20	粘土探掘跡。
53			PG03	H94	10YR5 2灰黄	IV	63.08	0.23	0.20	0.37	円形	1/20	粘土探掘跡。
54			PG05	G93	10YR5 2灰黄	IV	63.10	0.28	0.25	0.38	円形	1/20	粘土探掘跡。
55			PG06	G94	10YR5 2灰黄	IV	63.10	0.30	0.21	0.22	楕円形	1/20	粘土探掘跡。
56			PG07	H93	10YR5 2灰黄	IV	62.87	0.37	0.32	0.15	楕円形	1/20	粘土探掘跡。
57			PG04	G95	10YR5 2灰黄	IV	63.22	0.38	0.31	0.35	楕円形	1/20	粘土探掘跡。
58			PG08	H94	10YR5 2灰黄	IV	62.90	0.27	0.22	0.46	楕円形	1/20	粘土探掘跡。
59			PG09	H95	10YR5 2灰黄	IV	63.80	0.27	0.22	0.27	楕円形	1/20	粘土探掘跡。
60			PG10	H96	10YR5/2灰黄	IV	63.84	0.21	0.19	0.10	円形	1/20	粘土探掘跡。
61			SKG01	H93	10YR5/2灰黄	IV	62.97	0.68	0.65	0.29	円形	1/20	粘土探掘跡。
62			SKG02	H93	10YR5/2灰黄	IV	62.80	0.56	0.41	0.33	楕円形	1/20	粘土探掘跡。
63	茶屋下	H区	SIH01	H79	2.5Y5 4黄褐	III	63.00	(4.5)	(2.0)			1/40	石列。
64		D区	PD01	I64	2.5Y6/3にぶい黄	IV	63.06	0.50	0.38	0.20	楕円形	1/20	直径10cmの柱痕あり。
65			PD07	I64	2.5Y6 3にぶい黄	IV	63.01	0.35	0.32	0.09	円形	1/20	
66			PD08	I64	2.5Y6/3にぶい黄	IV	62.95	0.30	0.30	0.11	円形	1/20	
67			PD02	I64	2.5Y6 3にぶい黄	IV	63.04	0.70	0.60	0.10	方形	1/20	粘土探掘跡？
68			PD03	I64	2.5Y6 3にぶい黄	IV	63.01	0.75	0.67	0.19	方形	1/20	直径15cmの柱痕あり。
69			PD04	I63	2.5Y6 3にぶい黄	IV	63.05	0.74	0.63	0.18	方形	1/20	粘土探掘跡？
70			PD05	I63	2.5Y6 3にぶい黄	IV	63.05	1.00	0.80	0.13	方形	1/20	粘土探掘跡？
71			PD06	I64	2.5Y6 3にぶい黄	IV	63.06	0.85	0.50	0.09	方形	1/20	直径10cmの柱痕あり。
72			SDD01	I65	2.5Y6 4にぶい黄	IV	63.06	(3.40)	1.70	0.20		1/40	南北方向に長い。中央部が深い。粘土探掘跡。
73		J区	PJ01	K42	5Y5 2灰オリーブ	III	62.60	0.32	0.32	0.03	円形	1/20	自然堆積の可能性高い。
74			PJ02	K43	5Y5 2灰オリーブ	III	62.60	0.35	0.35	0.10	円形	1/20	自然堆積の可能性高い。
75			PJ03	K44	5Y5 2灰オリーブ	III	62.60	0.64	0.23	0.14	楕円形	1/20	
76			SKJ01	K43	5Y5 2灰オリーブ	III	62.60	0.70	0.65	0.04	円形	1/20	自然堆積の可能性高い。
77			SKJ02	K43	5Y5 2灰オリーブ	III	62.60	1.10	0.75	0.12	楕円形	1/20	自然堆積の可能性高い。
78			SKJ03	K43	5Y5 2灰オリーブ	III	62.60	(1.12)	0.70	0.12	楕円形	1/20	自然堆積の可能性高い。
79			SKJ04	K43	5Y5 2灰オリーブ	III	62.60	1.30	0.85	0.20	楕円形	1/20	自然堆積の可能性高い。
80			SDJ01	J, K46, 47	2.5Y4 2暗灰黄	III	62.80	(1.20)	0.40	0.20		1/40	南北方向に長い。南に傾斜する。
81			SDJ02	K42	10YR5/2灰黄褐	III	62.55	(2.60)	(1.48)	0.30		1/40	南と東の調査区外に続く。
82			SDJ03	J, K45, 46	2.5Y5/3黄褐	III	62.60	(1.70)	1.90	0.40		1/40	南北方向に長い。南に傾斜する。木の根出土。
83			SXJ01	K42	10YR5 1褐灰	III	62.40	1.40	1.40	0.38		1/40	粘土探掘跡。
84			SXJ02	K43	2.5Y4.3オリーブ褐	III	62.50	1.10	1.08	0.60	円形	1/40	粘土探掘跡。
85	改田	E区	PE01	L32	2.5Y5 2暗灰黄	III	63.16	0.41	0.37	0.31	円形	1/20	直径20cmの柱痕あり。
86			PE04	L31	2.5Y5 2暗灰黄	III	63.19	0.33	0.26	0.11	楕円形	1/20	浅い。
87			PE05	M28	10YR2/2黒褐	III	63.15	0.12	0.10	0.04	円形	1/20	浅い。
88			SDE01	L30	2.5Y5/2暗灰黄	III	63.13	(1.40)	1.15	0.30		1/20	SDE02と一連のものの可能性高い。
89			SDE02	L30	2.5Y5 2暗灰黄	III	63.13	(1.35)	1.00	0.28		1/20	SDE01と一連のものの可能性高い。

第3節 遺構と遺物

下層の遺構・遺物（調査区の西から東へ順に記載。F→G→C→H区）

F区（第19図）黄褐色粘土を5～20cm人力で掘り下げて下層を検出した。特に調査区の西端に黄褐色粘土が堆積しており手掘りで掘り下げたが、遺物・遺構は確認できなかった。

G区（第19図）渡来川北遺跡と同じ硬い灰色粘土の層はH93～96にみられる。この粘土の下に黄褐色の硬い粘土が堆積しこの粘土を掘り下げたところ、黄褐色粘土内から剥片が1点（21）出土した。

NRG01（第25図、図版7）

C区のNRC01・02と同じ砂の層がNRG01の底と同じ砂にあたるため、縄文時代の地形であると思われる。埋土は黄灰色の硬い粘土である。付近から二次加工剥片（29）、石核（30）、礫2点（31、32）が出土している。

C区

NRC01・NRC02（第18・26図、図版8・9）

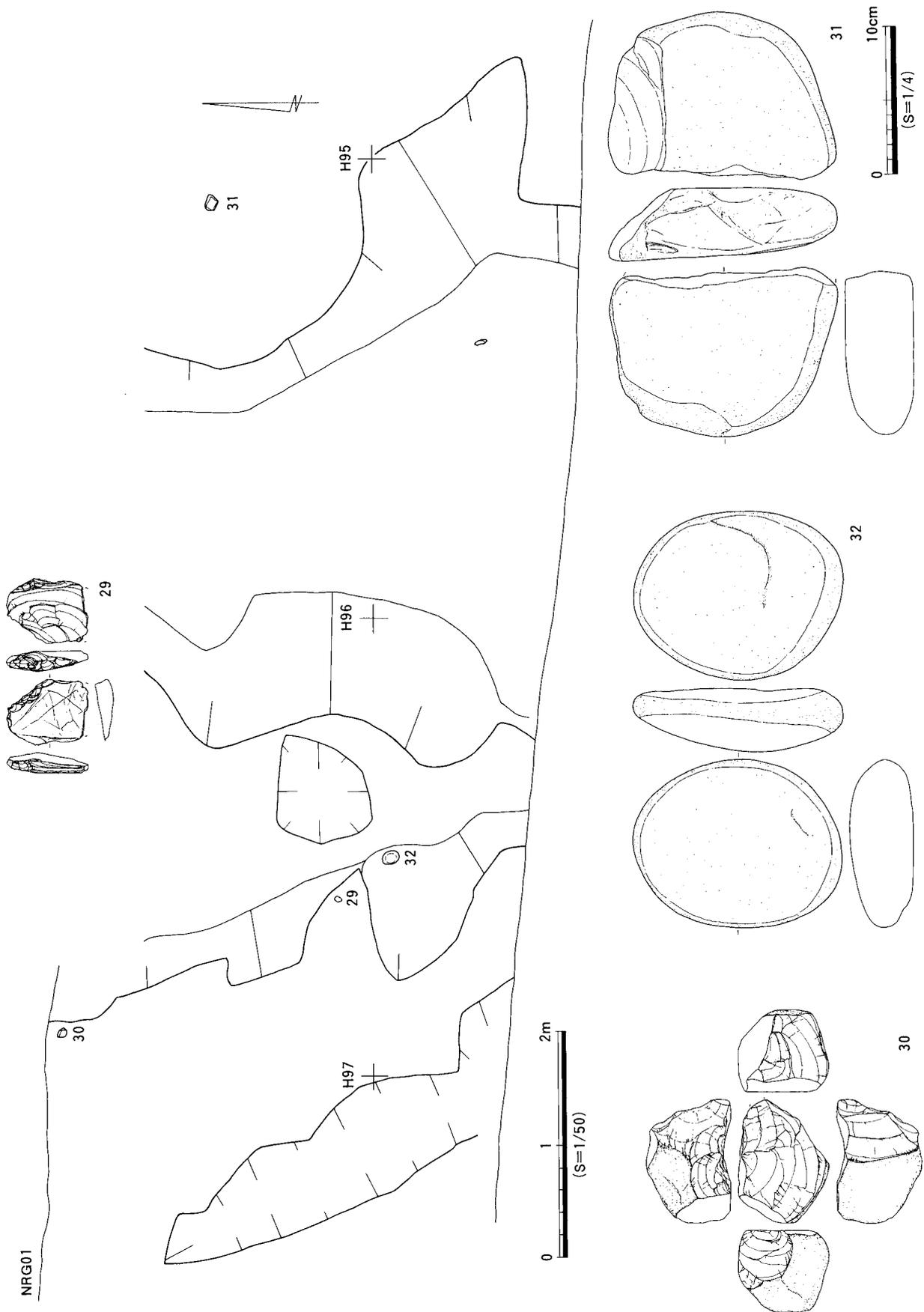
NRC01はC区の西側にある自然流路で、南に傾斜する。上流（北）から流れてきた流木を伴う粘土とその下の砂礫層との間には多くの材が出土している。NRC02はC区の東側にある自然流路で、北東側が攪乱を受けており南側と西側が残存している。岸には流路の時期に植生があったことを示す木の根っこが、粘土の中に多く残存している。

この2本の流路は土質が類似しており、ほぼ同時期のものと考えられる。この土はG区の自然流路（NRG01）とH区東の下層の土と同質のため、これらは同時期のものとする。NRC01の上層から山茶碗（101～104）が出土しているが、NRG01で縄文時代早期の石器が出土しているため、縄文時代にできた自然流路と考える。NRC02底部の粘土内から採取された流木の年代測定結果からみると、自然流路はBC17000の頃にできたようである。NRC01の埋土内から出土した流木は年代測定結果から7世紀頃のもので、この時期に埋まった流木と思われる（第5章参照）。自然流路上部は攪乱を受けて近世の遺構面が残存していないため、他の調査区で検出されている近世の遺構については不明である。現在の用水がすぐ東にあり、用水源は今と変わらないようである。字絵図の水路とも位置が変わらないようである（第71図参照）。

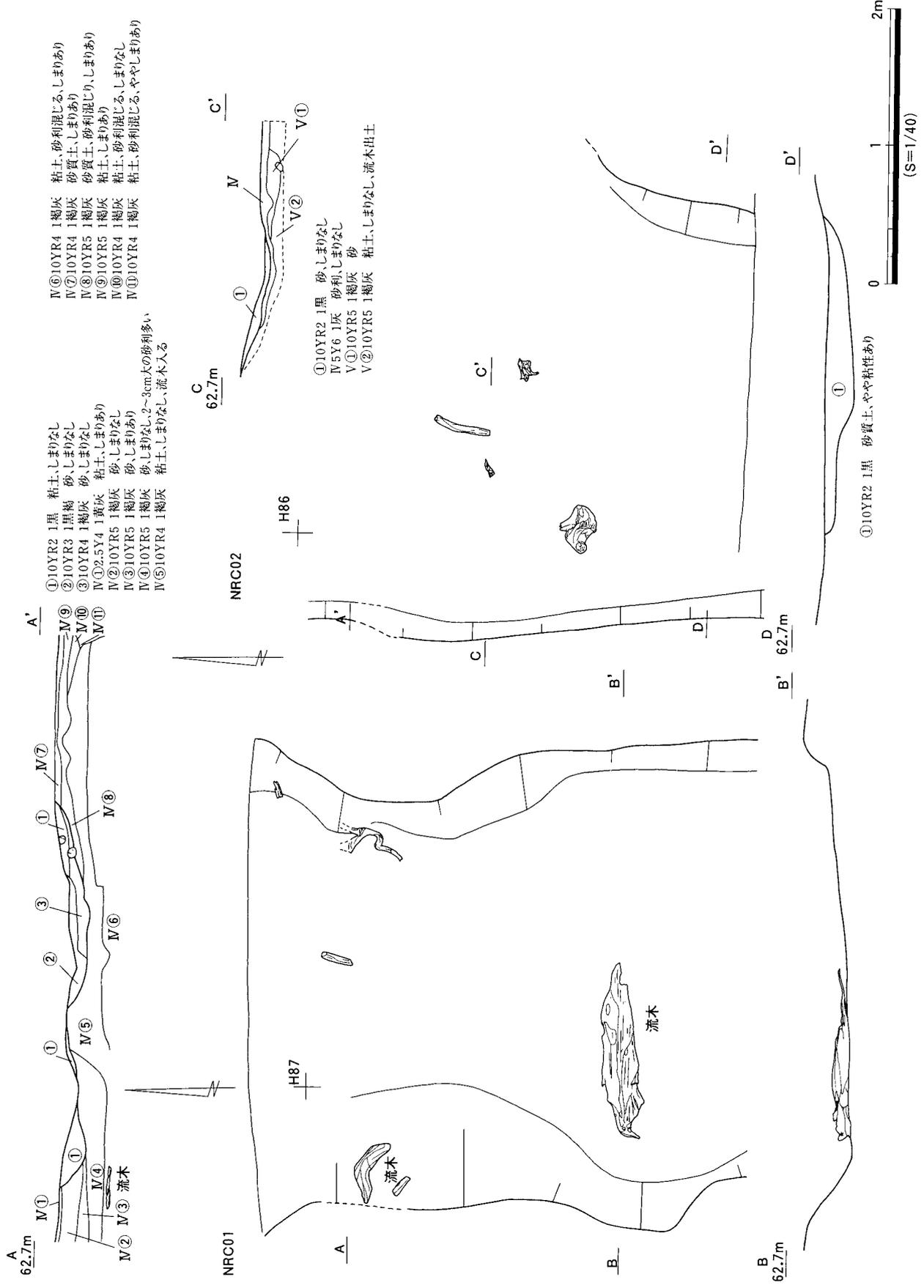
H区（第21図）I76杭から東に、渡来川北遺跡と同じ硬い灰色の粘土層（7.5YR4/1黒色）が堆積している。それより西には2.5Y5/4黄褐色の硬い粘土がH・I76～78に堆積している。検出遺構はSXH02のみであるが、I77グリッドからは小さい炭やチップが出土している。H区の東側にも自然流路がある可能性が高いが、水田への乗り入れ口部分は調査していない。

SXH02（第27図、図版10）

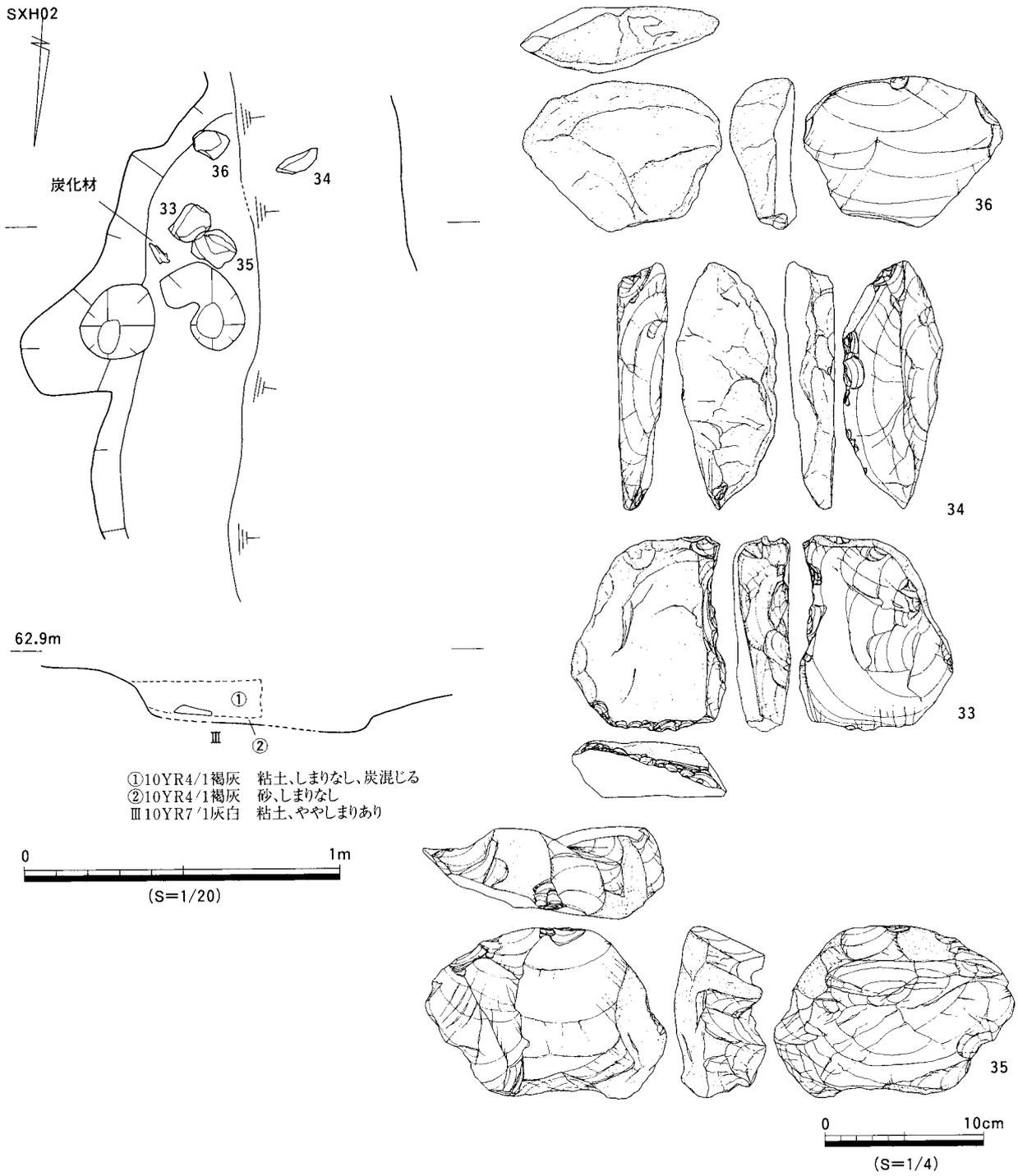
検出時は、竹をたばにして入れてある昭和の暗渠のすぐ横に地山の色に近い10YR4/1褐灰色の土が見えており、埋土の色が薄いため攪乱と判断して掘削を始めた。土坑の底に近いところから、頁岩の削器1点と剥片1点、泥岩の石核1点と剥片1点が出土している。これらは2種類の石材で2点ずつ出土している。33・35・36の3点と炭化材は暗渠の東側から、34は暗渠の竹をはずした下から出土している。炭化材はAMSの分析を行ったところ縄文時代前期という年代が出ている（第5章参照）。北・西・南に攪乱が入っており遺構の本来の形は不明である。



第25図 一本杉遺跡 下層面 (IV層検出状況) NRG01平面図・断面図



第26図 NRC01・02平面図・断面図



第27図 SXH02 平面図・断面図

石器整理の概要

石器は利器を中心に選択し、その図と属性表を作成した。その結果、石器にはいくつかの特徴的な器種が含まれていたため、出土石器分布図も作成した。

一本杉遺跡の石器

F区の石器

(第28図：F区 H97, H93, G98, G100, G91地区、Ⅱ層～Ⅲ層出土の石器)

1：石鏃。珪岩。片面加工。基部に小突起が観察される。この突起に工具を引っ掛け、抉りをさらに深く入れるための突起であろう。押圧剥離は細い先端をもつ変形する工具。裏面の周辺加工は正面の押圧剥離のための打面。

2：石錐。下呂石。両極石器が素材。周辺にハードハンマーの押圧剥離で、抉りによって小さな尖頭部と側辺を形成している。素材そのものはネガ面に覆われ、この石器の素材が両極石器であることを示している。裏面の右側辺は折取加工と推定できる折れ面である。

3：石匙。赤珪岩。素材の主要剥離面を石器の表にして、丁寧な押圧剥離で加工されている。裏面は素材剥片の背面である。とくに摘みを形成する部分に入念な押圧剥離の加工がある。刃部は片面加工である。

4：剥片。珪岩。縦折の剥片で打面は節理面。細いハードハンマーによる剥離。

5：使用痕剥片。珪岩。打面は不整な切子打面。おそらく打面転位を進行させる石核から剥離された剥片。不安定な打面の突端にハンマーが正確に当たっているため、間接打撃の可能性はある。

6：剥片。珪岩。背面は自然面。

7：二次加工剥片。赤珪岩。正面図の左側辺に不整な押圧剥離で整形加工、裏面図の右側辺に刃こぼれ痕が観察される。

8：二次加工剥片。珪岩。打面が小さいが、ハードハンマーによるコーンが明瞭で、強い圧縮力で剥離された剥片。ハンマーが石核の縁をこすったとき、もしくは間接打撃の可能性もある。正面図の左側辺手前角に不整押圧剥離の整形痕がある。刃こぼれ痕は正面図の右側辺である。

9：二次加工剥片。珪岩。自然面打面の厚みのある縦長剥片。正面図左側辺の真ん中より手前は、叩折による形態形成の加工。コーンが明瞭に残る加工である。

10：削器。珪岩。素材剥片は、節理面打面からのハードハンマー直接打撃。裏面図の右側辺にハードハンマー直接打撃で形態形成の加工がある。また正面図の手前の辺に抉りによる形態形成の加工。この抉りは刃部の範囲を限定する抉り加工。刃部は抉りと打面の範囲にある鋭い辺。この鋭い辺の裏面図に微細な剥離痕が観察できる。微細剥離痕は連続的なので、刃こぼれ痕というより、不整な押圧剥離で形成された刃部整形加工である。

11：使用痕剥片。流紋岩。亜角礫を大きなハードハンマーの直接打撃で剥離した横長剥片。横長剥片の末端辺が鋭く割れ、そこに刃こぼれ痕が表裏に付いている。

(第29図：F区 H96, H97, G100, G99地区、Ⅱ層出土の石器)

12・13・14・15：打製石斧。短冊形。刃部欠損。背面に自然面を残していることが特徴で、14を除き横長の礫端片を素材にしている。14のみ両面加工だが、素材を剥離した石核の変異が原因と考えられ、特別な打製石斧とは考えられない。石質は粗粒の硬質砂岩に類似。

16・17・18：磨石。図の白抜きの面が使用による面の範囲。16と17は、使用による敲打痕（石器を手にもって対象物に当てた痕跡）が、片面に観察される。

G区の石器

（第30図：G区 H93, G91地区、Ⅱ～Ⅲ層出土の石器）

19：石匙。珪岩。周辺加工の石匙。刃部は反方向の不整な押圧剥離で整形されている。

20：両極石器。珪岩。図の上面からハードハンマーの垂直打撃が行われている。比較的大きな剥片が剥がされているので、石核の可能性もあるだろう。

21：剥片。シルト岩。打面転位の石核から剥離された剥片。

（第30図：G区 H93, H95, G94地区、Ⅱ層出土の石器）

22：打製石斧。硬質砂岩。刃部に土ずれ痕と推定される顕著な摩耗痕が観察される。背面に自然面を残している。

23：打製石斧。砂岩。22と同様に刃こぼれと摩耗痕が観察される。素材は横長剥片

24：棒状礫。下半分が欠損。ハンマーの可能性も考えられる。

25：磨製石斧断片。輝緑凝灰岩。丁寧な研磨で加工されている。頂部に顕著な敲打痕が残されている。

26：磨石。安山岩。風化顕著、主面部に磨面があったと推定されるが、風化で不明瞭。

27：砥石断片。荒砥。裏面は節理で破損、砥面の湾曲から手持ち砥石の可能性有り。産地不明

（第31図：G区 H93, H95, G94地区、Ⅳ～Ⅴ層出土の石器）

28：剥片。砂岩。尖頭器もしくは両面加工石器の製作剥片。

29：二次加工剥片。両側辺を正反HDで成形加工刃部はおそらく折れ、篋状石器（早～前期初頭）の可能性のある石器。

30：石核。泥岩。円礫を大きくうち割り、剥片を剥離した石核。打面は自然面打面。全く同じ石質の石核が茶屋下遺跡から出土している。

（第32図：G区 G95, H96地区、Ⅳ～Ⅴ層出土の石器）

31：礫。砂岩。風化顕著、台石等の断片の可能性はある。

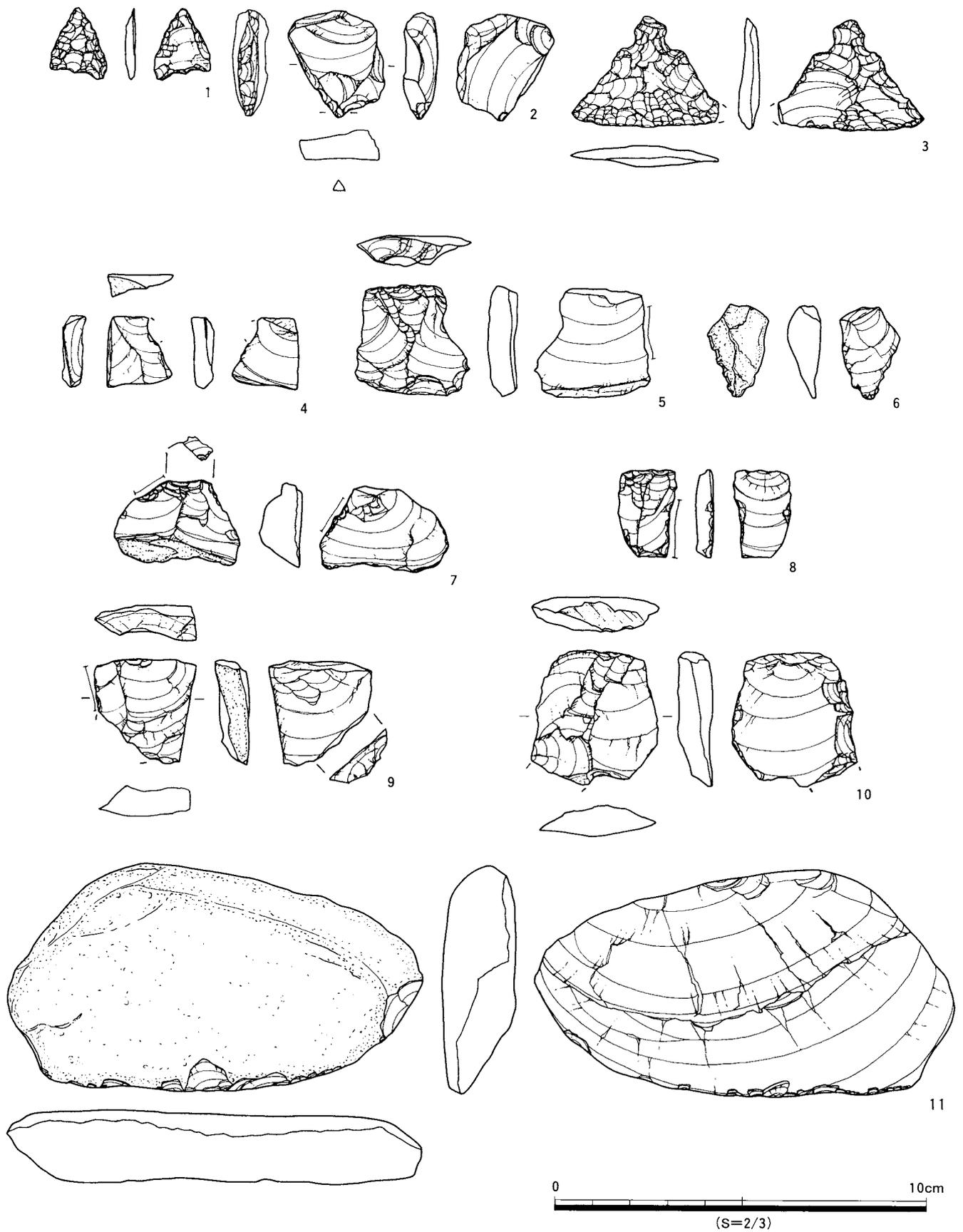
32：礫。安山岩。風化顕著。

一本杉遺跡の所見

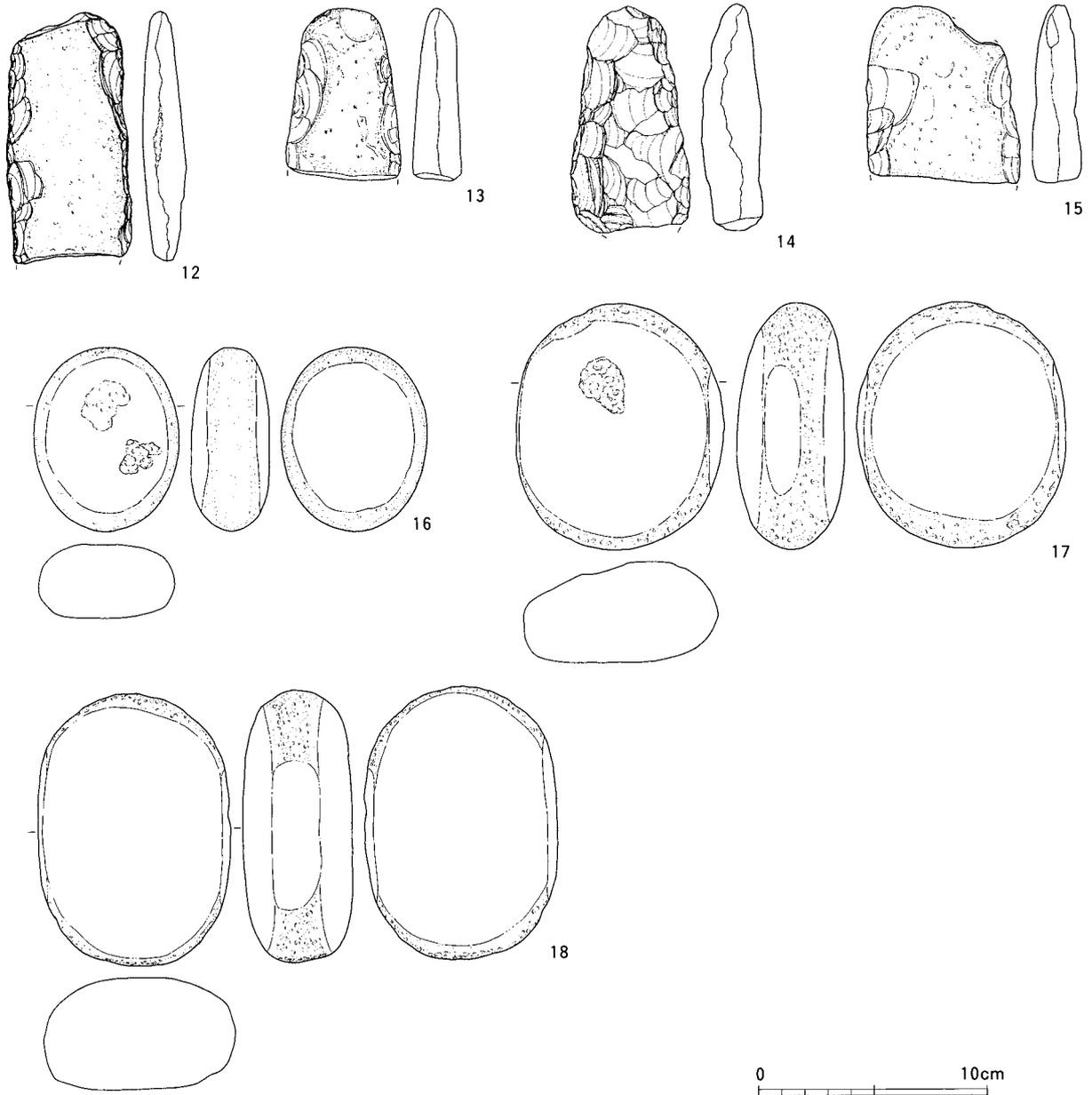
一本杉遺跡は細長く幅の狭い発掘区の中に、ある範囲で石器が集中して出土している。出土した石器は、Ⅱ層～Ⅲ層とⅣ層～Ⅴ層に分かれており、文化層が2枚ある。新しい文化層の石器は打製石斧・磨石が特徴であり、打製石斧は縄文中期の形態を保持している。また磨石も同様であるが、堅果類を叩き割ったと推定されている敲石類が少ないのが特徴であろう。また石匙はソフトハンマーによる丁寧な押圧剥離が特徴で、こうした加工の石匙は、縄文前期中葉から中期初頭にみられるものである（『小島遺跡』木曾広域連合、長野県埋蔵文化財センター2003）。

よって、一本杉遺跡の新しい文化層は、縄文前期末～中期初頭にかけての時期と推定される。

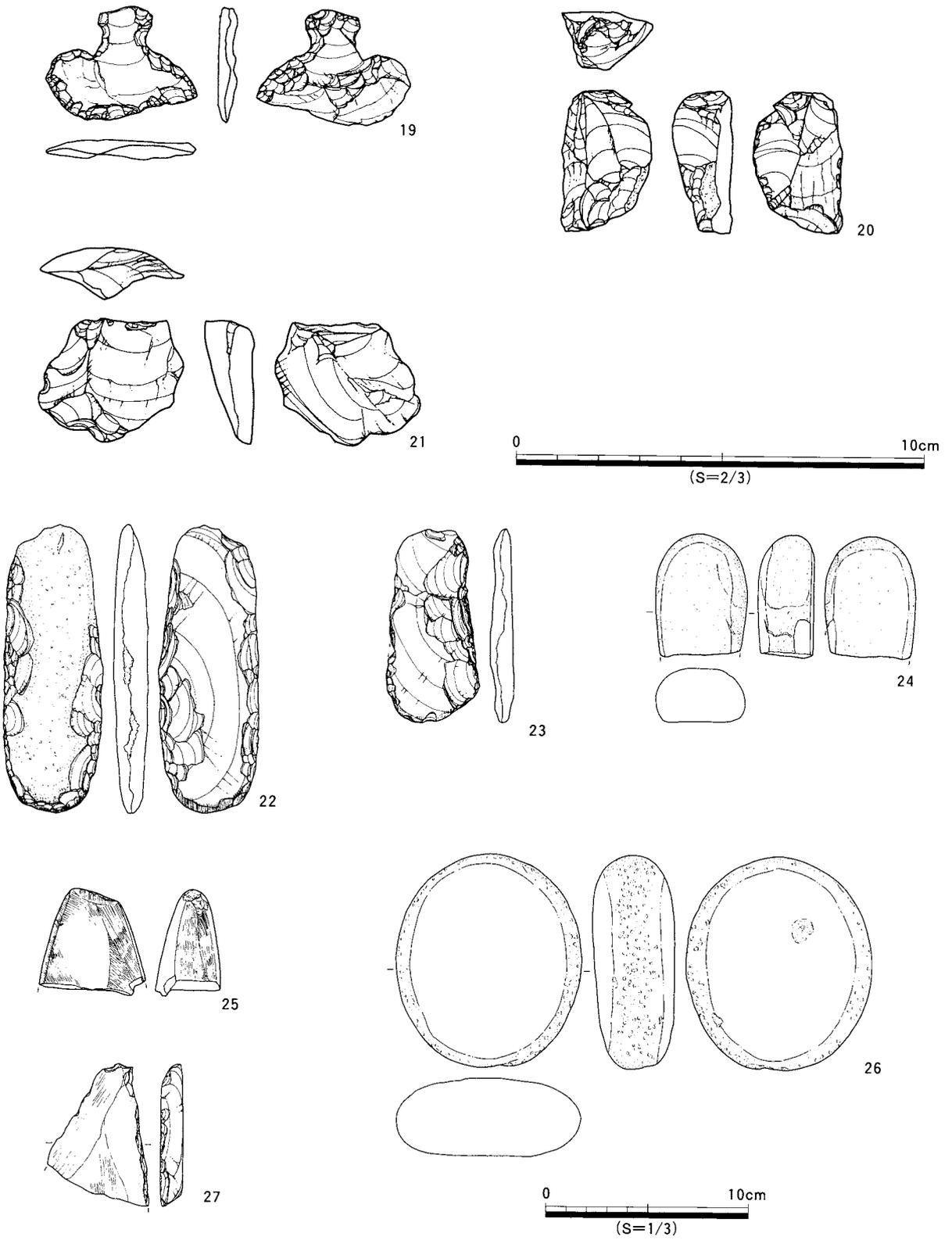
一方、Ⅳ層～Ⅴ層にかけての石器は、両面加工を製作した剥片やへら状石器の未製品と推定される石器が出土しており、縄文前期中葉よりも古い時期の可能性もある。



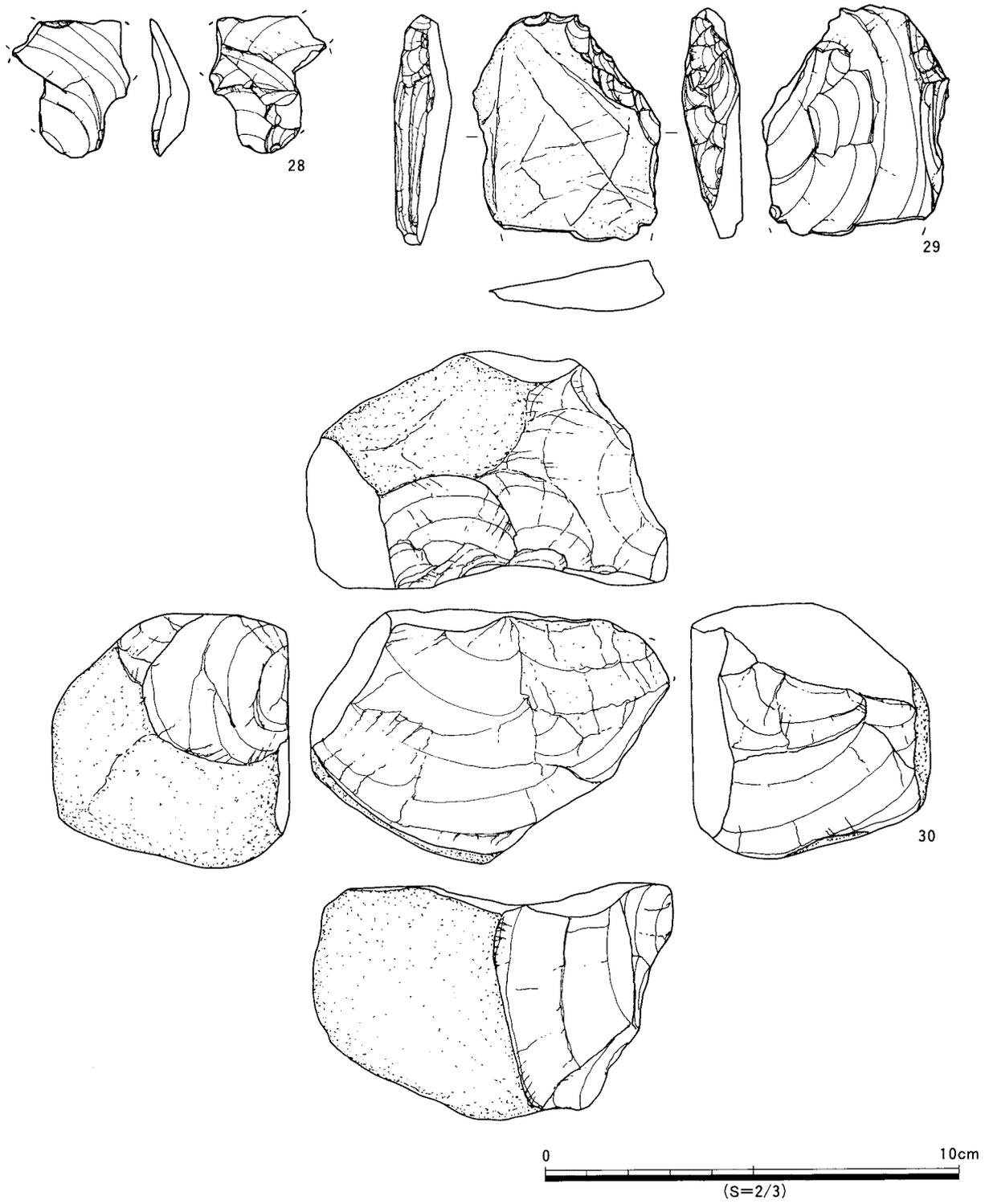
第28図 一本杉遺跡F区Ⅱ・Ⅲ層 出土石器



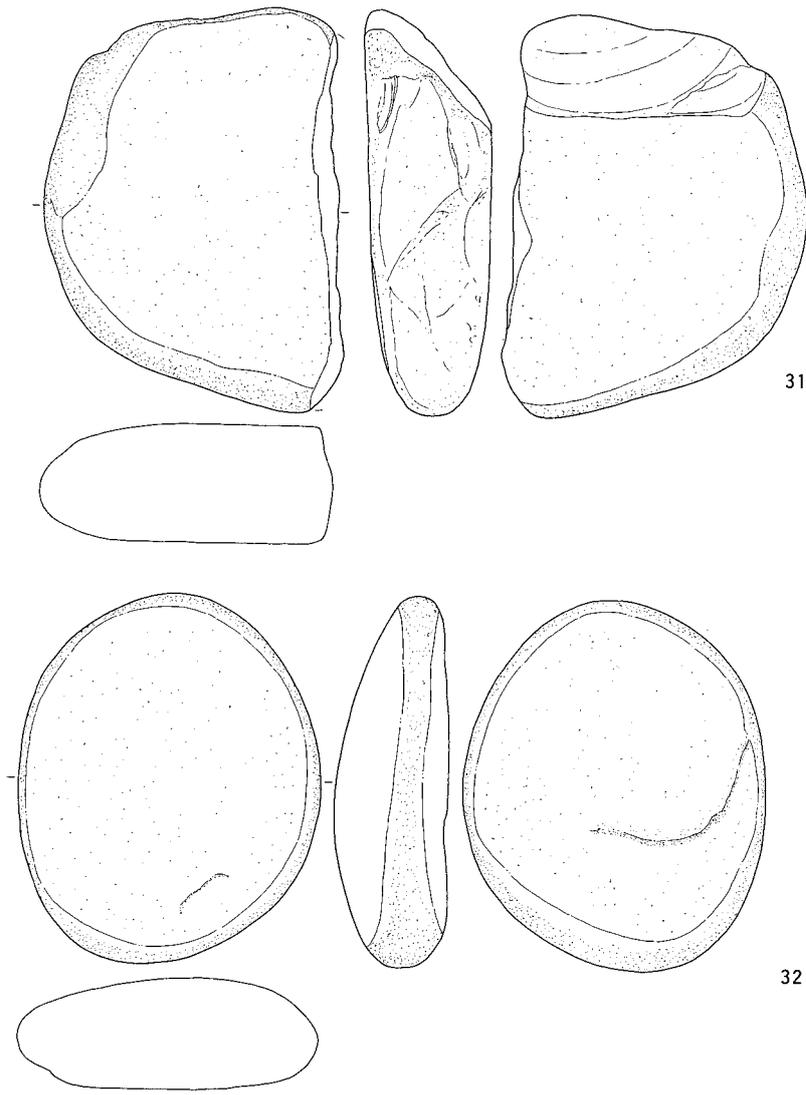
第29図 一本杉遺跡 F区 II層 出土石器



第30図 一本杉遺跡 G区 II・III層 出土石器



第31図 一本杉遺跡 G区 IV・V層 出土石器(1)



第32図 一本杉遺跡 G区 IV・V層 出土石器(2)

茶屋下遺跡の石器**SXH02出土の石器**

4点の大形石器が集中して出土した。2個体の同一母岩で、それぞれは接合する。この遺構は石器で理解するならば、一種の埋納遺構ともいえる。

頁岩の石器は33と34で接合する。33は鋸歯縁削器。刃部は間接打撃による鋸歯縁で、側辺をハードハンマー直接打撃で成形している。背面は自然面。34は剥片もしくは石器未製品。泥岩の石器は35・36の大形石核と剥片。剥離面の風化が激しい。これも接合する。

H区I層、Ⅲ層の石器

37：赤珪岩。細長い礫に、押圧剥離で抉りを入れて縦形石匙の形態にした石器。石匙の模造品か未製品のいずれか。

38：削器。珪岩。両極石器を素材に、押圧剥離によって平刃と基部をつくる削器。ヘラ状石器と形態が類似している。

39・40：偽石器。珪岩。

J区I層の石器

41：剥片。珪岩。大きなバルバスターが裏面にみえる。

42：石核。泥岩。SXH02の泥岩と同じ石質。

SKJ04とSXJ02の石器

43と44は頁岩の剥片。同じ石質。剥離角はともに115度前後。

I区I層の石器

45：壊れたハンマーである。砂岩。

D区Ⅳ層出土の石器

46：打製石斧。流紋岩。図に書かれているのは正面で、素材の主要剥離面側。裏面も素材面が残る素材剥片の背面。

J区Ⅲ層の石器

47：砥石。砂岩。荒砥。正面と両側面に砥面、欠損しているが手持ち砥石の可能性有り。産地不明。

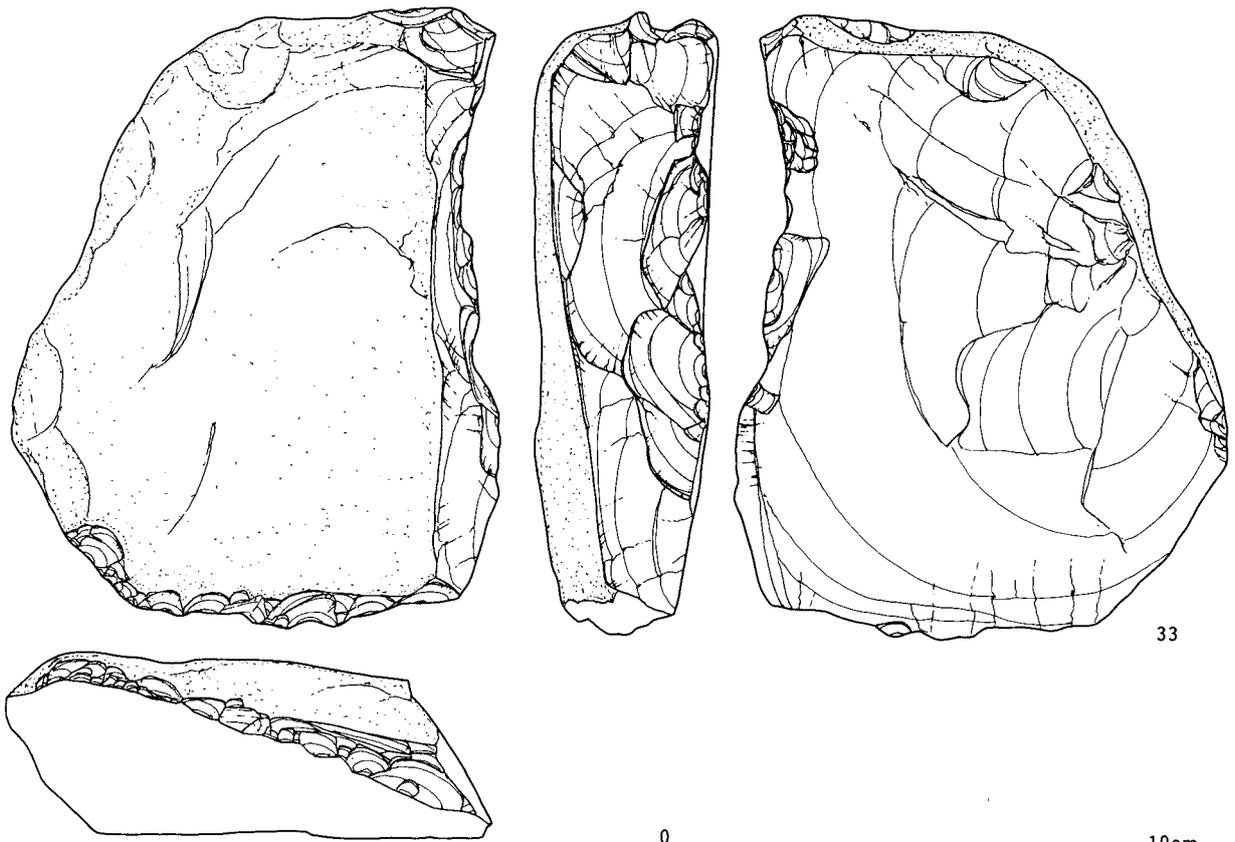
茶屋下遺跡の所見

H区ではSXH02の石器埋納遺構が重要である。炭素年代は縄文前期相当の年代値であるが、石器は縄文早期以前の石器形態である。埋納遺構は頁岩と泥岩の接合する石器が2点ずつ出土したので、セツルメントシステムや石器型式学の資料として非常に重要である。

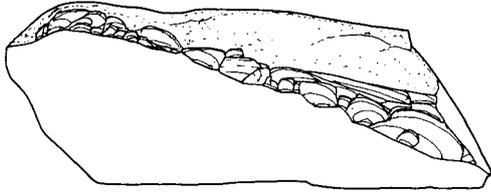
その他のH区の石器は、偽石器が2点みられた。おそらく河川のオーバーフローがあったとみられるが、偽石器を素材にして縦形石匙の模造品（未製品）？があるのは注目される。赤珪岩で作られる石匙は縄文前期中葉から中期初頭にまで類例があり、一本杉遺跡でも出土している。一本杉遺跡と同時期である可能性もある。

I区ではⅢ層に砥石（中世以降）、その上層に縄文の石器があるので地層は攪乱が激しい。また土坑から出土した石器は2点とも白色に風化した頁岩であり、同一の石質である。

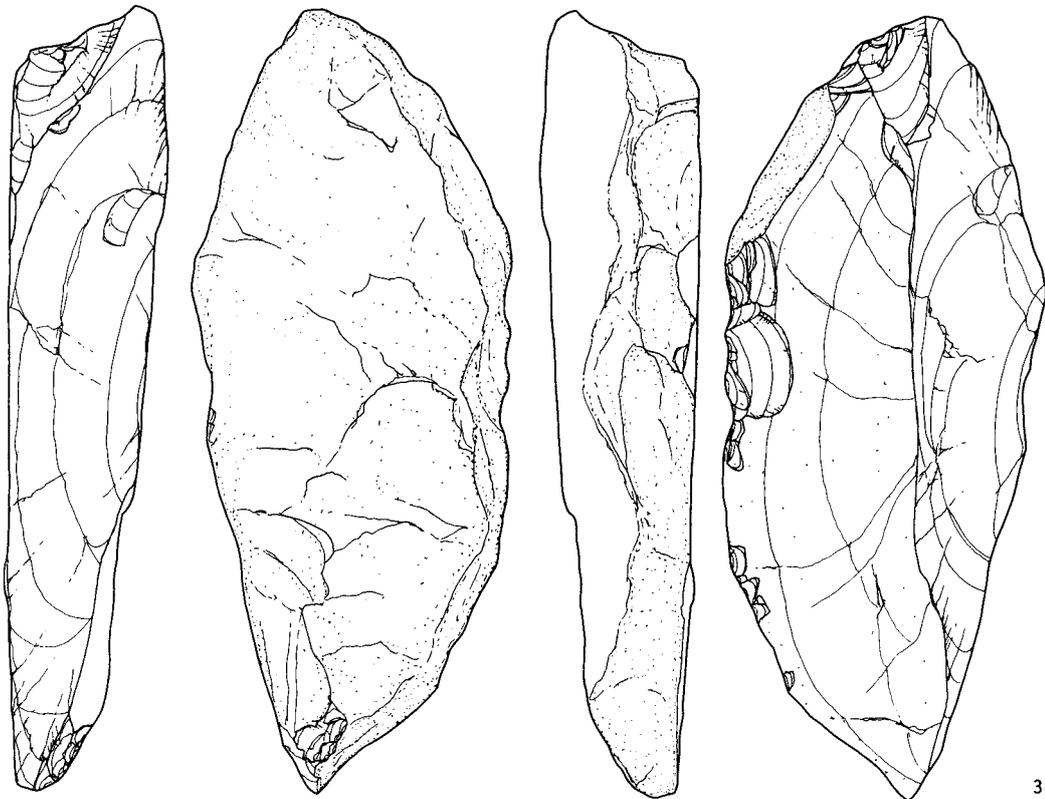
茶屋下遺跡の時期をまとめると、中世、縄文中期（D区の打製石斧）、縄文前期中葉～中期初頭（H区）、縄文中期中葉以前（埋納遺構）となる。（角張淳一）



33

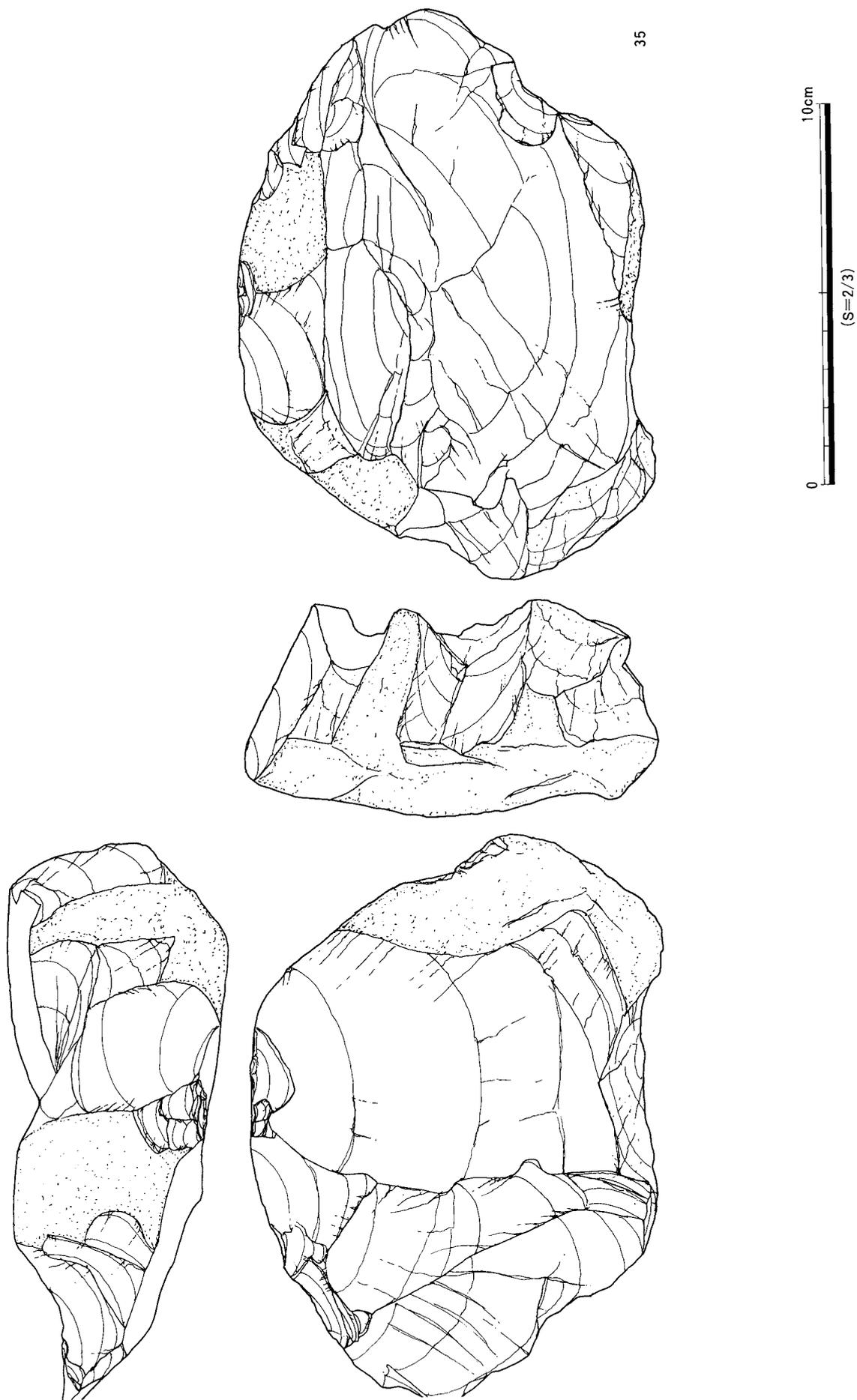


0 10cm
(S=2/3)

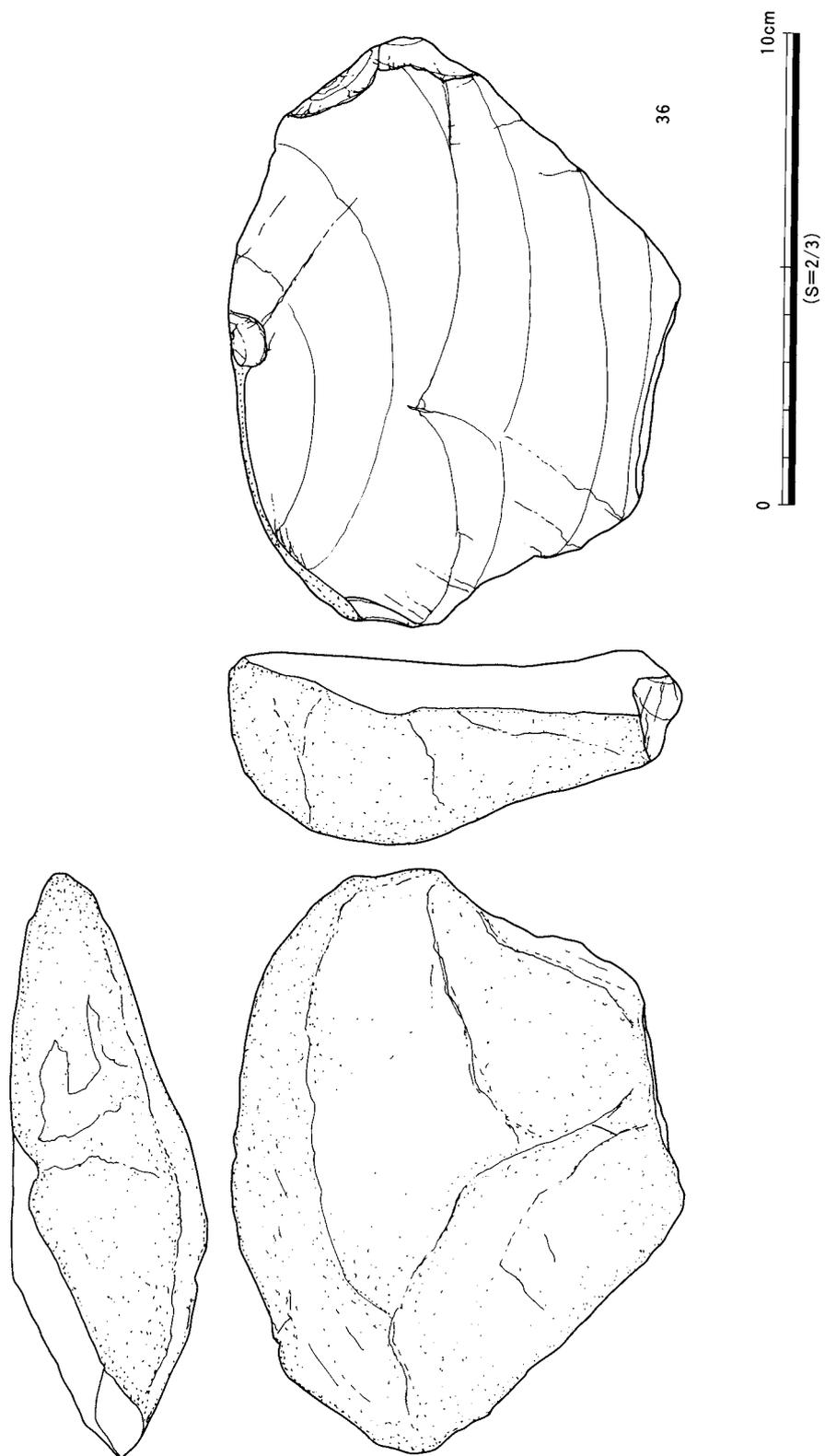


34

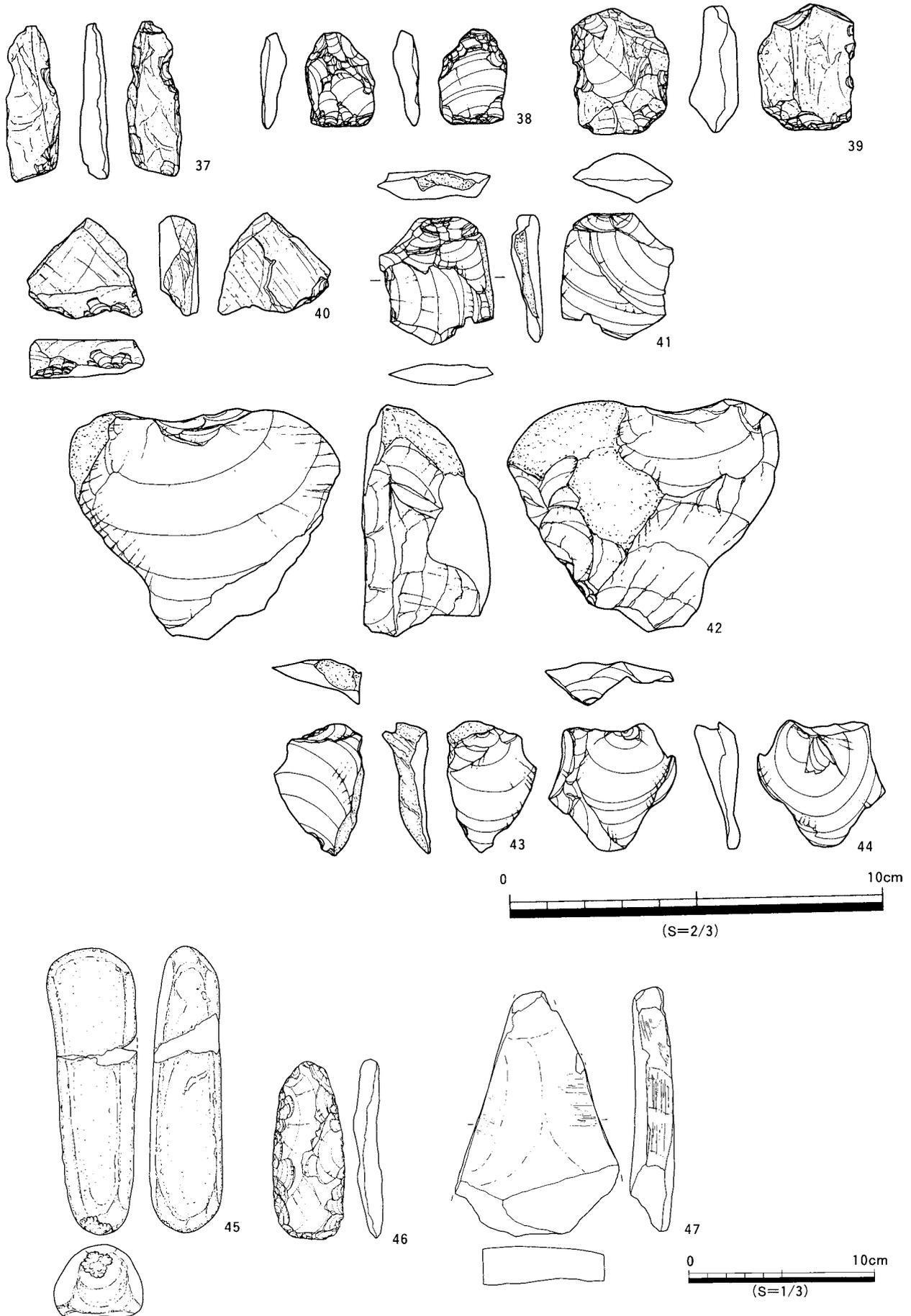
第33図 茶屋下遺跡 H区 SXH02 出土石器(1)



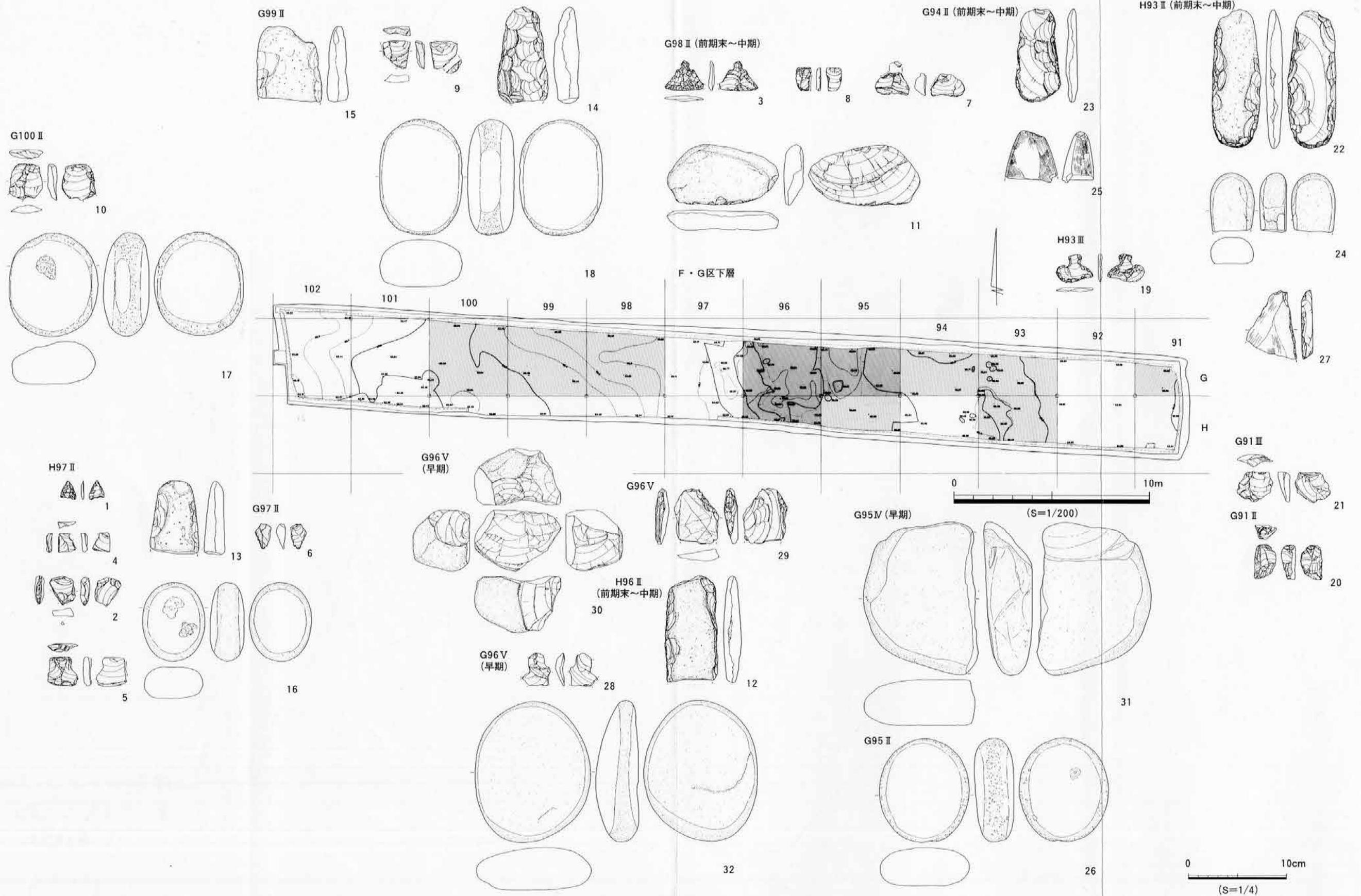
第34図 茶屋下遺跡 H区 SXH02 出土石器(2)



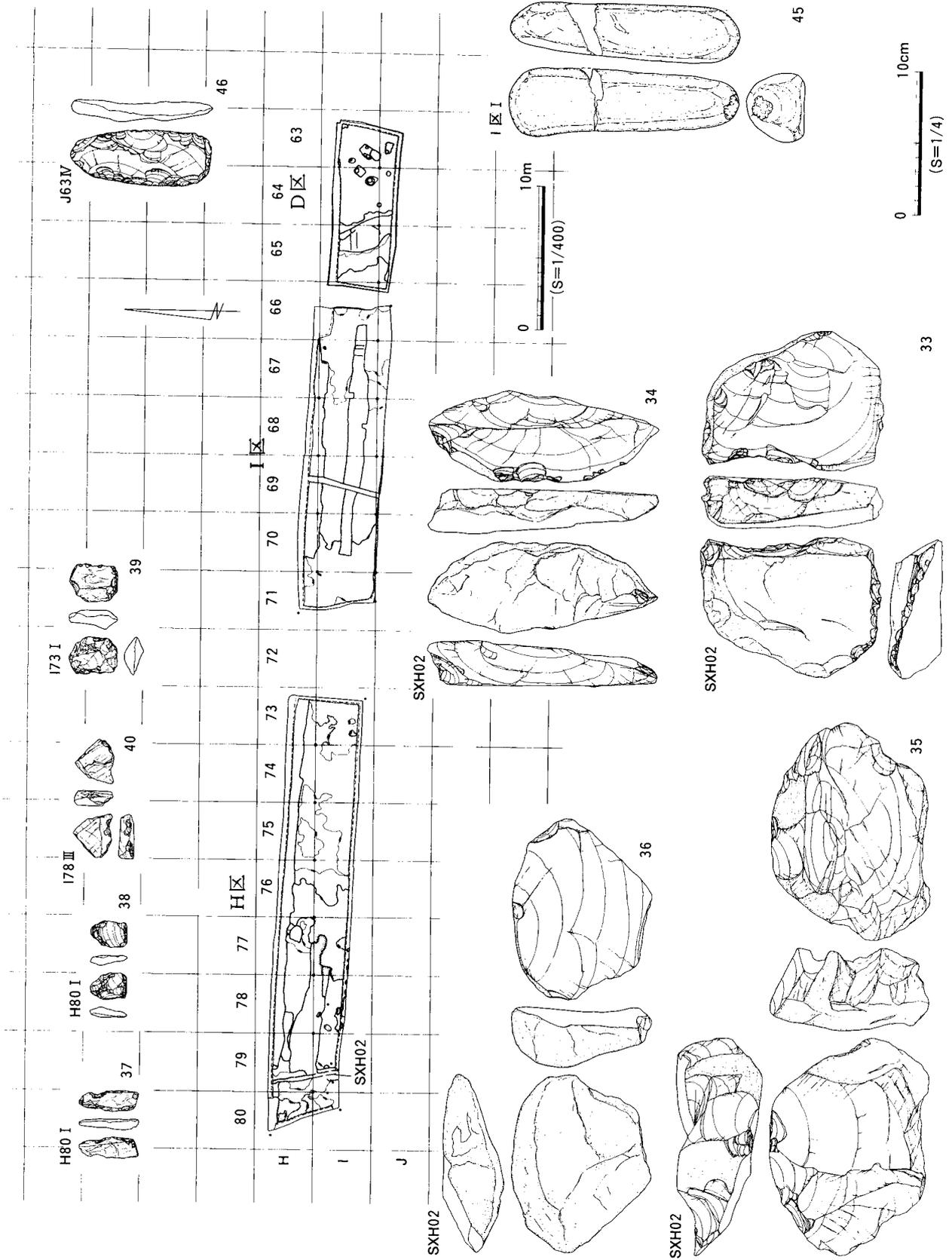
第35図 茶屋下遺跡 H区 SXH02 出土石器(3)



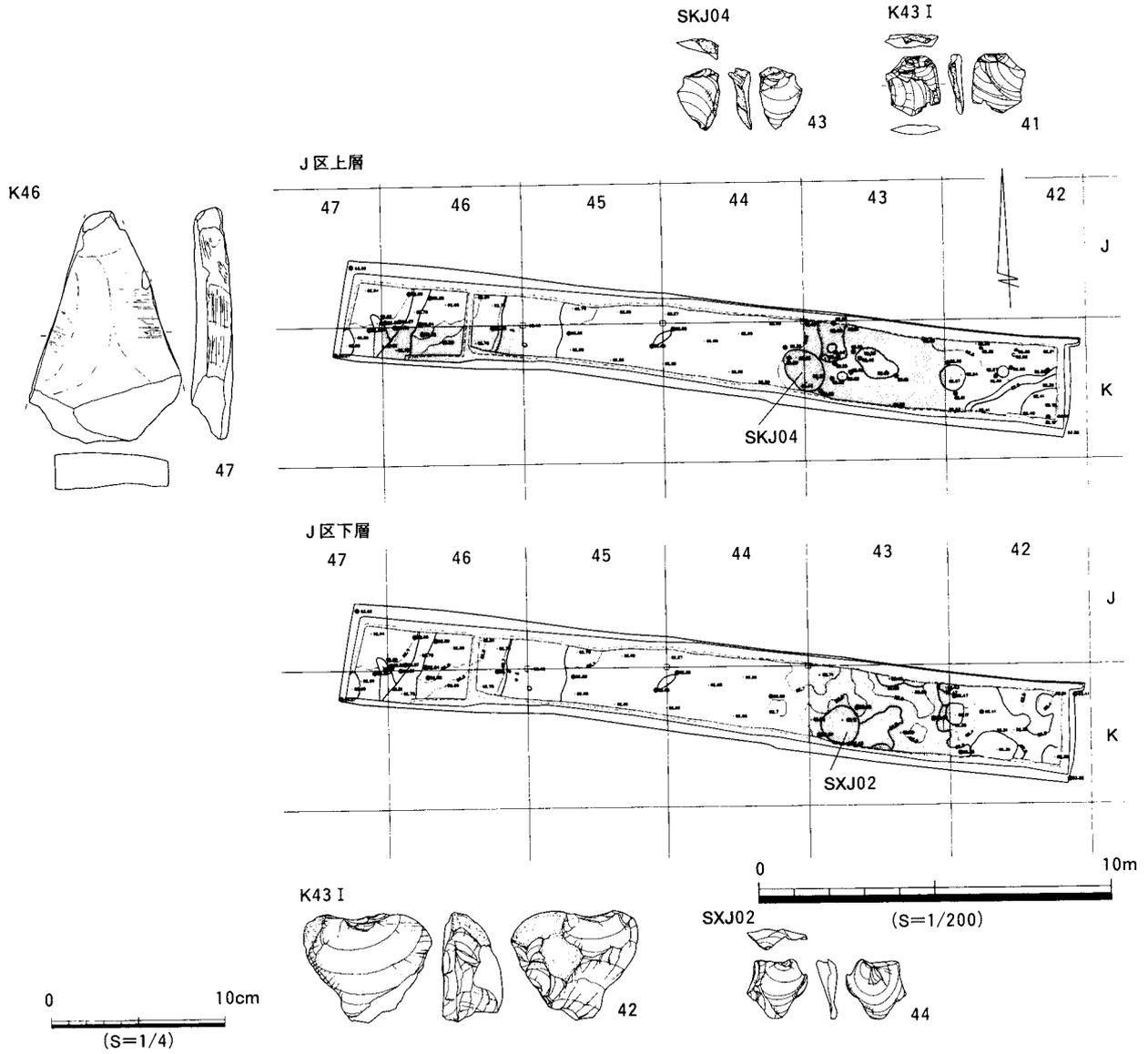
第36図 茶屋下遺跡 H区 I・Ⅲ層、I区I層、D区Ⅳ層、J区I・Ⅲ層 SK 出土石器



第37図 一本杉遺跡石器出土状況図



第38図 茶屋下遺跡 石器出土状況図(1)



第39図 茶屋下遺跡 石器出土状況図 (2)

上層の遺構・遺物

一本杉遺跡（調査区の西から東へ順に記載。A→B→F→G→C区）

A区（第16図）

PA01～PA07（第41図）

ピットは直径10～20cmで浅く並ばないため建物跡にはならない。おそらく稲を干すための柱を立てる穴などで、近世の新田開発跡ではないかと思われる。

PA08～PA10（第41図）

PA01～PA07に比べると深いが、同じ性質のものである。

SKA01・02・03（第42図）

SKA01・02は調査区外南に遺構が続く。浅い。SKA02はSXA01を切っている。

SDA01（第42図）

深さは約20cmで東西方向に長く、東に続く。

SXA01・02（第43図）

風倒木痕で、遺物は出土していない。

B区（第17図）調査区西側には、ほ場整備のキャタピラー痕が石列（SIB01）の直上に残っており、石列の残存状況が悪い。

PB01～PB07、PB22・23（第44図）

直径約10cm、深さ10～20cmの柱穴で、PB04・06には柱痕も見られる。

PB08～PB14、PB21（第44・47図）

石列の石が抜けた穴である。ほ場整備の際に石が抜けたものとする。

PB15～PB20（第44図）

直径約5cmの木杭がささっていた痕である。PB15・16は石列の北側にあり石列に伴うものと思われる。

SKB01（第45図）

南北方向に長く、遺構は調査区南へ続く。

SXB01（第45図）

風倒木痕で、遺物は出土していない。

SIB01（第46・47図）

直径20～30cmの川原石が北西から南東方向に、一列に並んでいる。調査区の北側と東側の壁の断面には石に伴う畦等が見えず、石の上には水田の敷き土と耕作土が直接のっている。石列は東のSIF01につながる。F区の石列よりも残りが悪く、ところどころ石が抜けた痕が見られる。石列には布掘りの掘り形が見られず、石の大きさの穴を一つずつ掘って石を埋めているようである。石はレベルがそろっている。

F104で石列のすぐそばに木杭が2本出土している。PB15とあわせて考えると、石列の両脇に杭を打っている可能性もある。1本は地面にささった部分のみ残存し、1本は南東方向に倒れた状態でほぼ全部残っている。木杭をAMS年代測定したところAD1725-1775という結果が出た（第5章参照）。

F区 (第17・20図) 地形は西が高く東へ低く傾斜する。B区で検出された石列の続きが確認された。
SIF01

西のSIB01とつながる。B区の石列よりも残存状況がよい。石列は水路ではなく土地区画の役割をしているようである。南壁の土層断面から考えると、畦畔は伴わず石が見えている状態であったようである。石列のある辺りは地山が高く、風倒木痕から地形の高い部分に木が生えていたことがわかる。「木は自然に生えたものではなく桑などを植えているものと思われる。石列から南は畑にしている。それに対して石列より北と東は地形が低くなって水田になる。石列は上面のレベルがあっており、石の下を埋めて石の上は区画の境として見せている。小さい石は立てて据えており、立てている石の間の距離は6 mで、工事の単位になるものと思われる。石列は東のG区にある谷をよけて南に曲がっている。水田開発時の耕地区画の例で、通常水田の区画には畦畔をつくり畑の区画には道をつくるが、水田と畑の境の例はあまりない。この辺りの開発をした人にとってはかなり意味のある区画で、土地所有関係を意識していく時期につくられたものである。」と宇野隆夫氏に御指導いただいた。

SXF01～SXF03 (第48図)

石列と同時期の風倒木痕である。遺物は出土していない。

G区 (第18・20図) 「中央部が低く谷になっており、西側は地形が高くなる。低湿地開発の水田跡で、水田の床土(Ⅱ層①)から遺物が出土しているので、近世の水田開発である。すべて水田にするのは18世紀頃なので、畑と水田があるのは近世の前半の時期になる。畑と水田の関係を考える上で有効な調査である。ピット、土坑は谷にあるので、柱穴ではなく小規模の粘土採掘跡である。」と宇野氏に御指導いただいた。

PG01～PG03、PG05～PG07 (第49図)

柱穴にするには、かなりの量で湧水するうえに、谷部に集中するので、小規模な粘土採掘跡か湧水点と思われる。

PG04 (第49図)

G95グリッドで検出、大きく深い。小規模の粘土採掘跡と思われる。

PG08 (第49図)

PG01～PG03、PG05～PG07と同じ性格のもので小規模な粘土採掘跡と思われる。斜めに掘り進み底部で幅が広がっているため、その部分の粘土を取ったものと思われる。

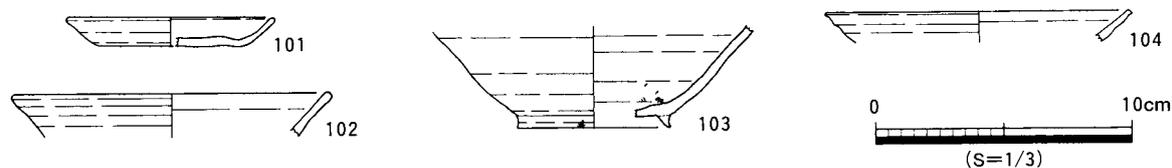
PG09・10 (第49図)

H94グリッド付近のピットと同じ性格のもので、小規模な粘土採掘跡と思われる。

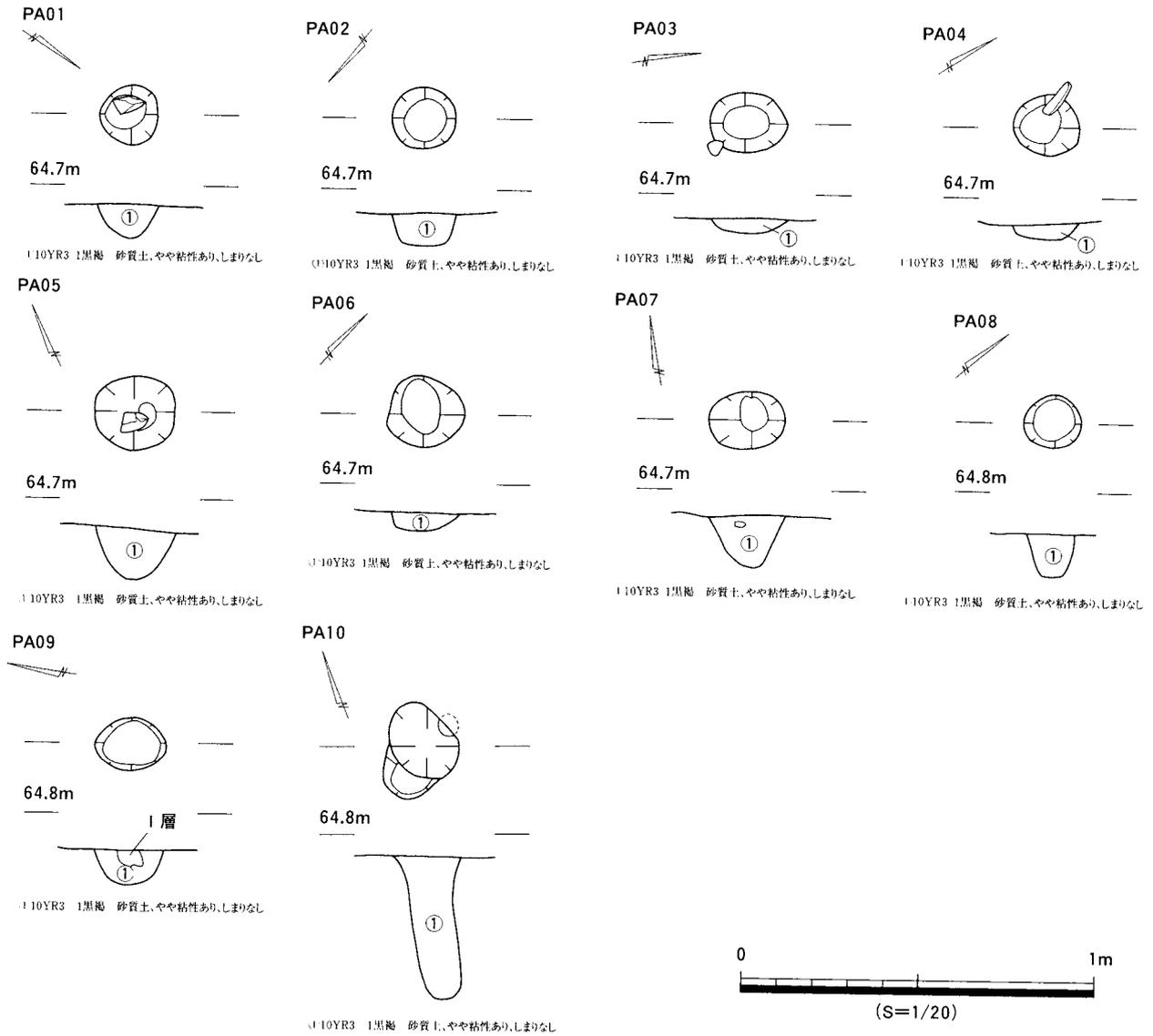
SKG01、SKG02 (第49図)

H93で検出、大きく深く、水がよく湧き、周辺のピットと同様に小規模の粘土採掘跡と思われる。

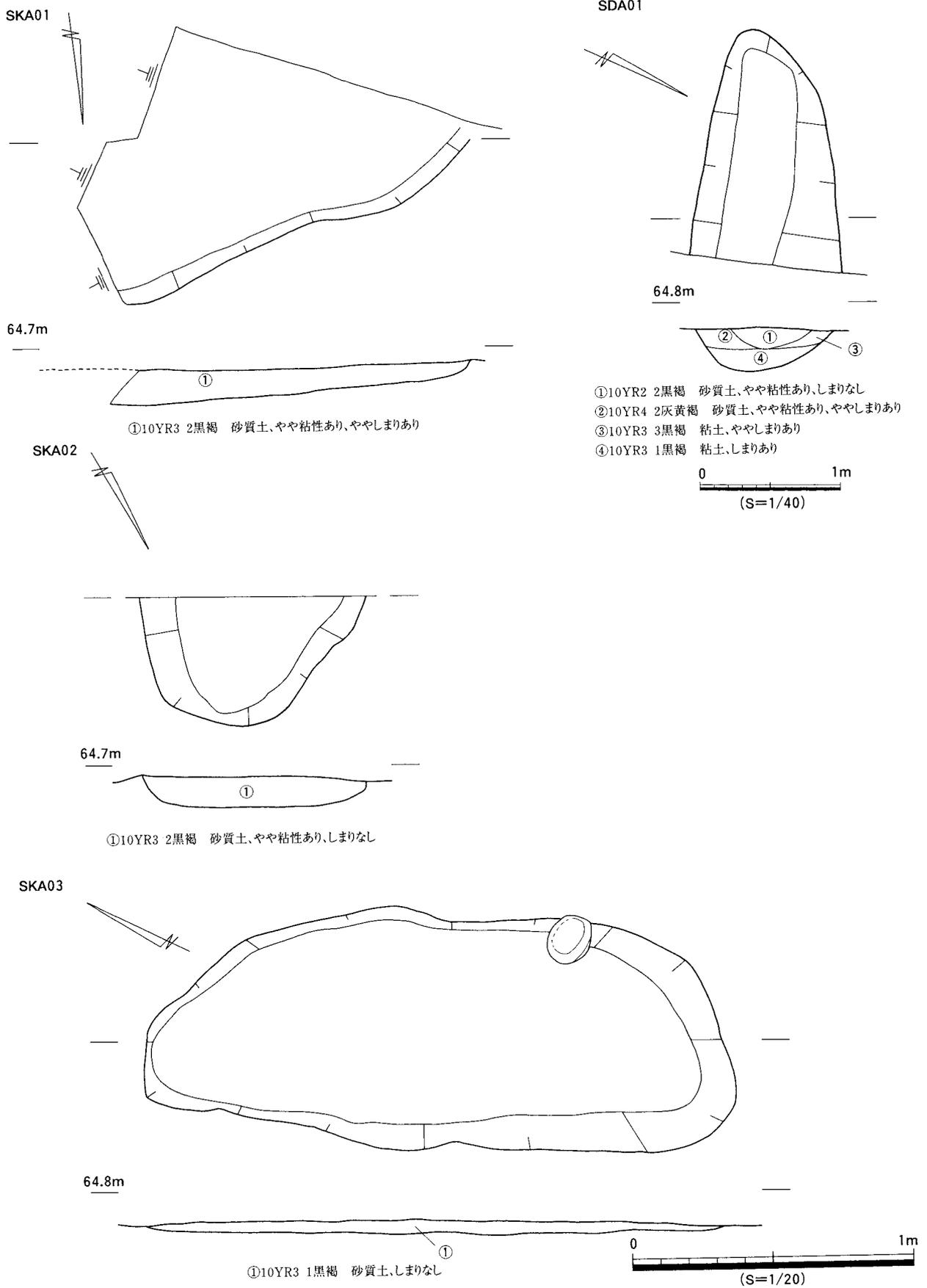
C区 (第18図) NRC01・NRC02の遺構の詳細は下層に記載している。埋土上層で14～15世紀の山茶碗が出土している(第40図)。



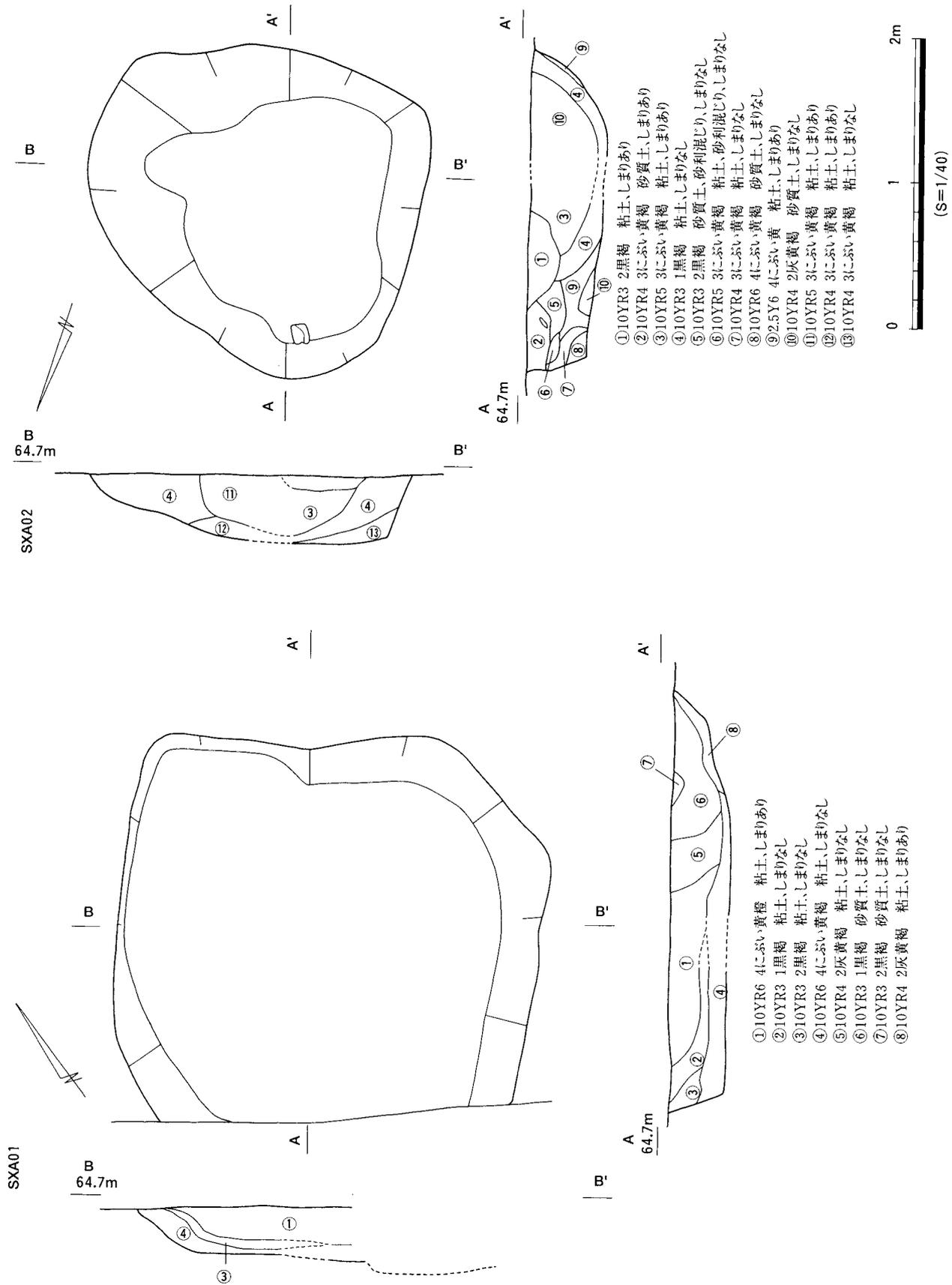
第40図 NRC01・02出土遺物



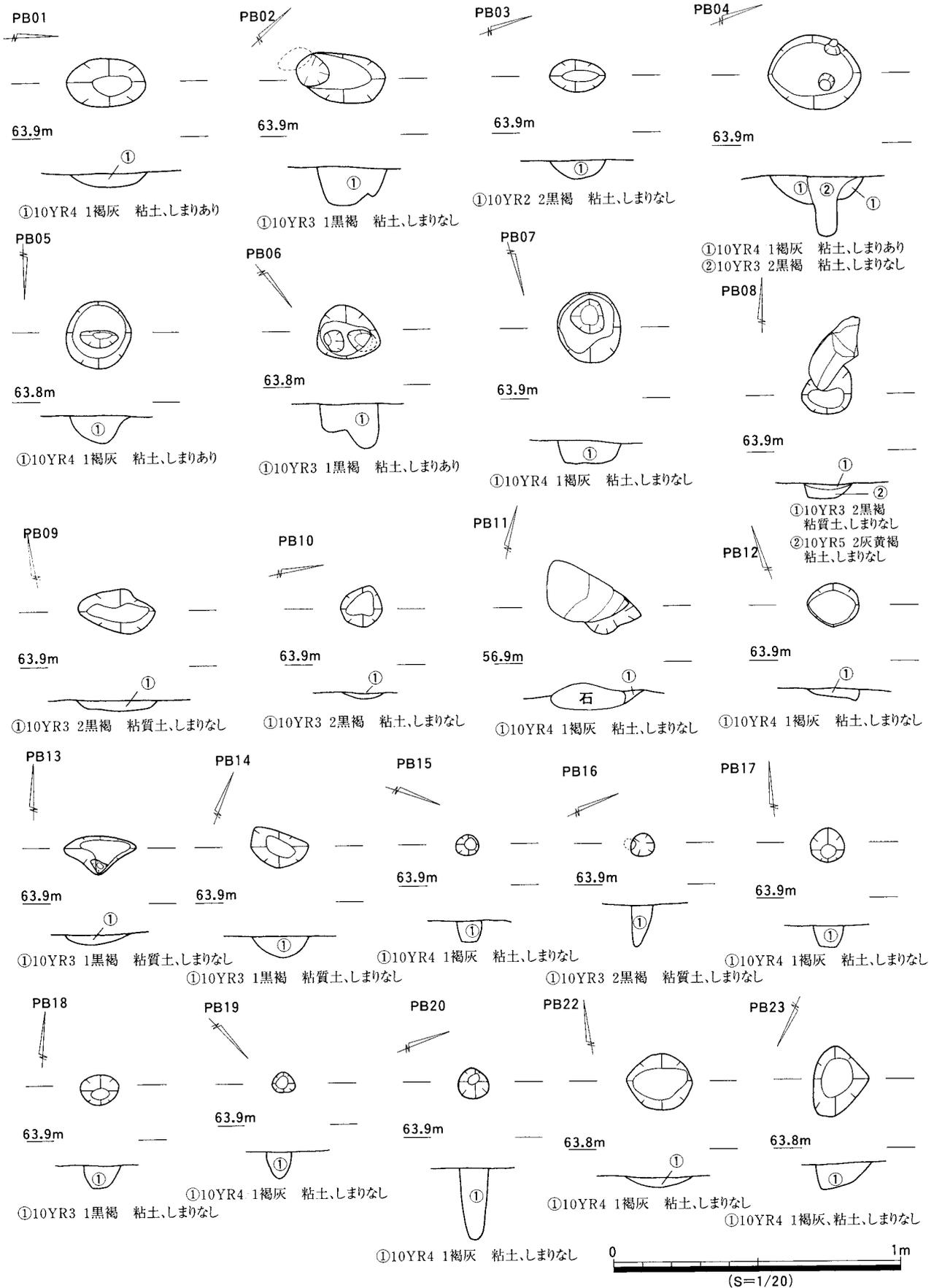
第41図 A区 PA01～PA10 平面図・断面図



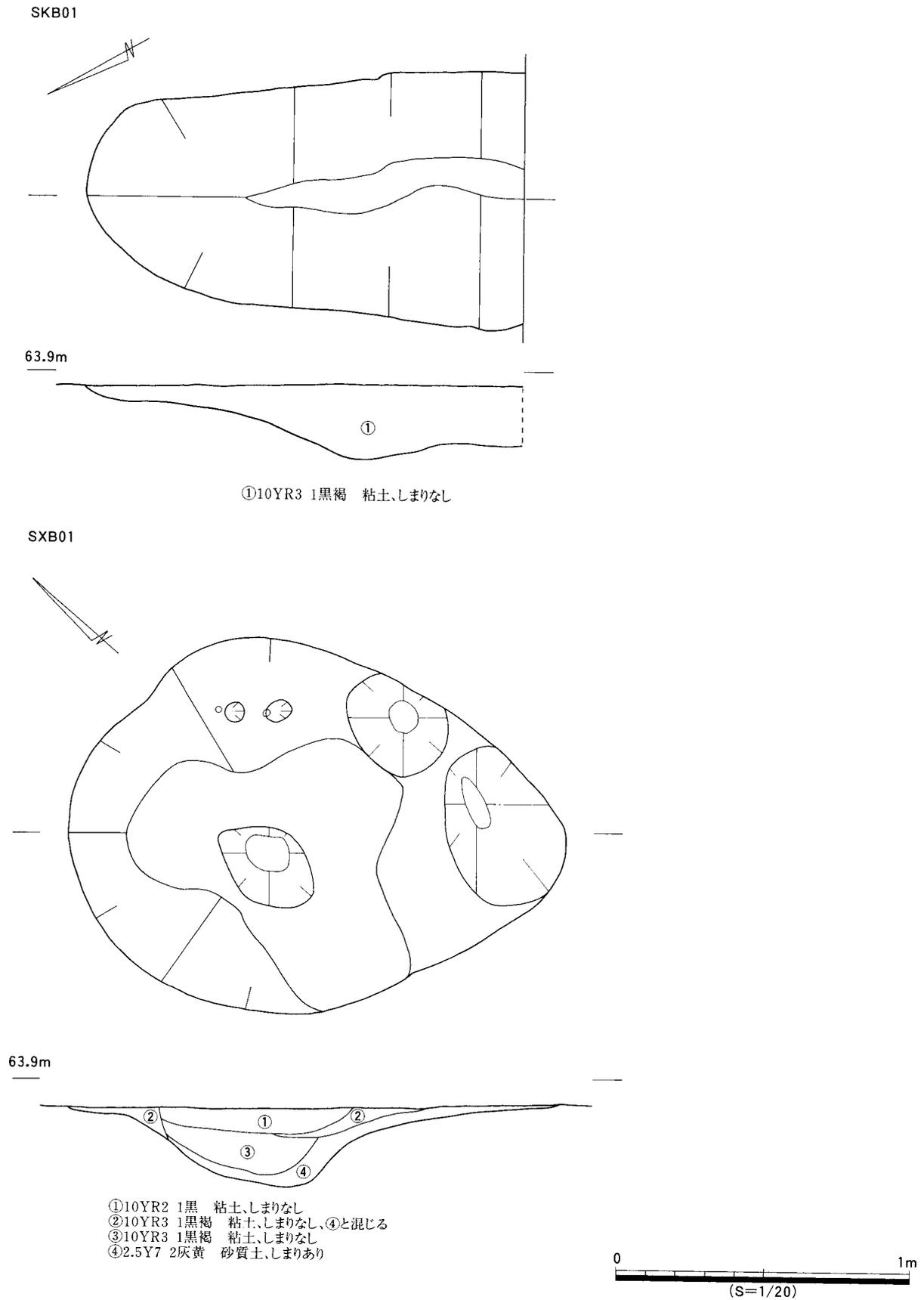
第42図 A区 SKA01～SKA03、SDA01 平面図・断面図



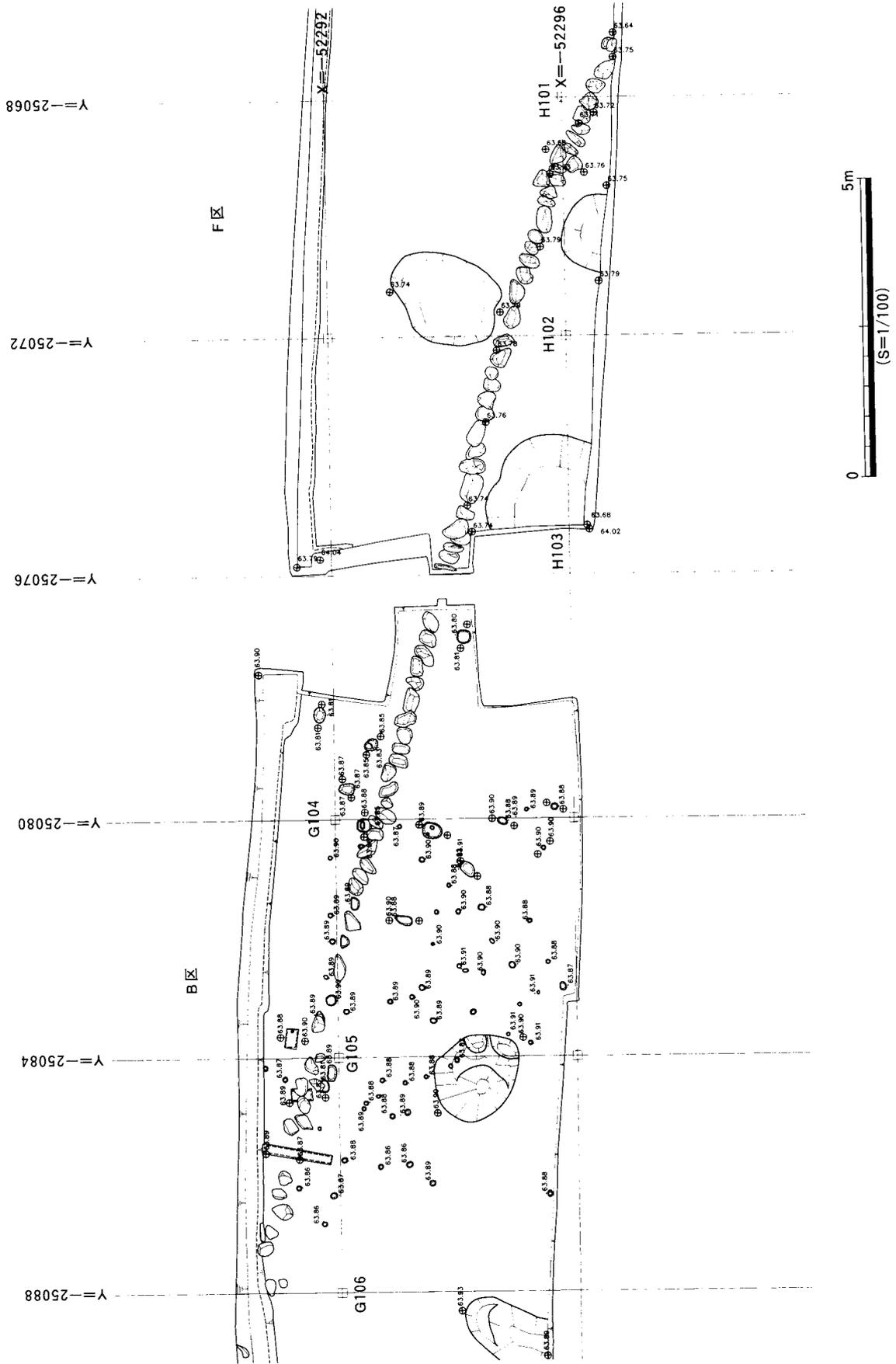
第43図 A区 SXA01、SXA02 平面図・断面図



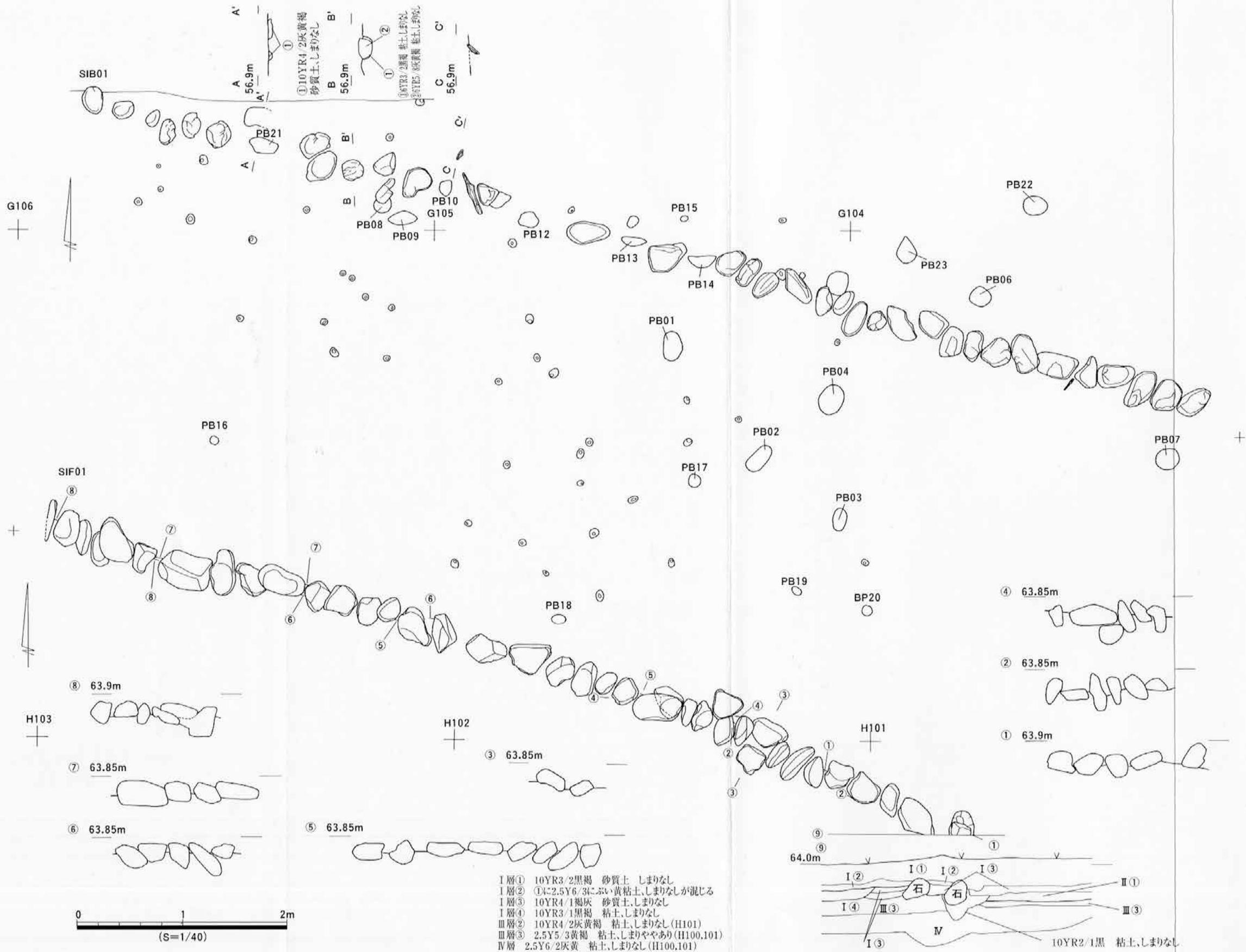
第44図 B区 PB01～PB20・22・23 平面図・断面図



第45図 SKB01、SXB01 平面図・断面図

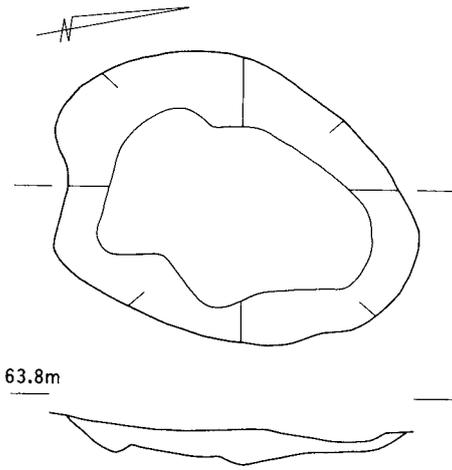


第46図 一本杉遺跡 B・F区 石列 平面図 (S=1/100)



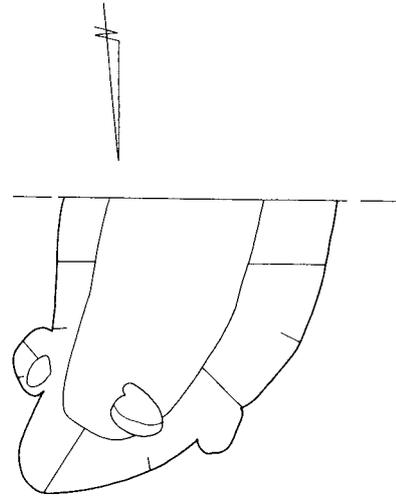
第47図 一本杉遺跡 石列平面図・断面図

SXF01



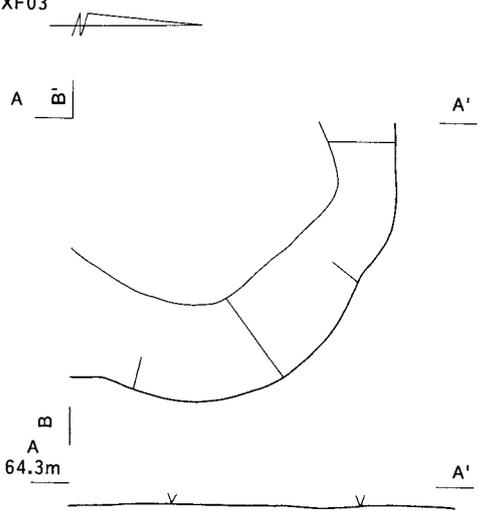
①10YR2/1黒 粘土、しまりあり

SXF02

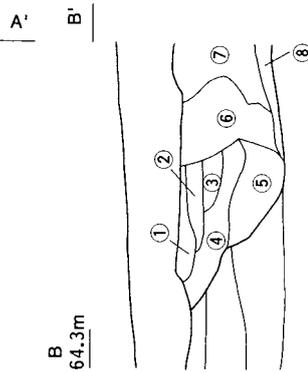


64.0m

SXF03

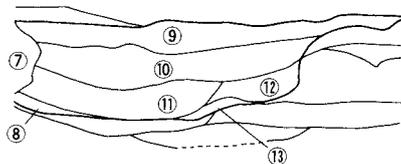


64.3m

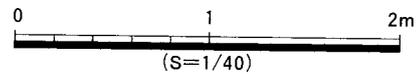


64.3m

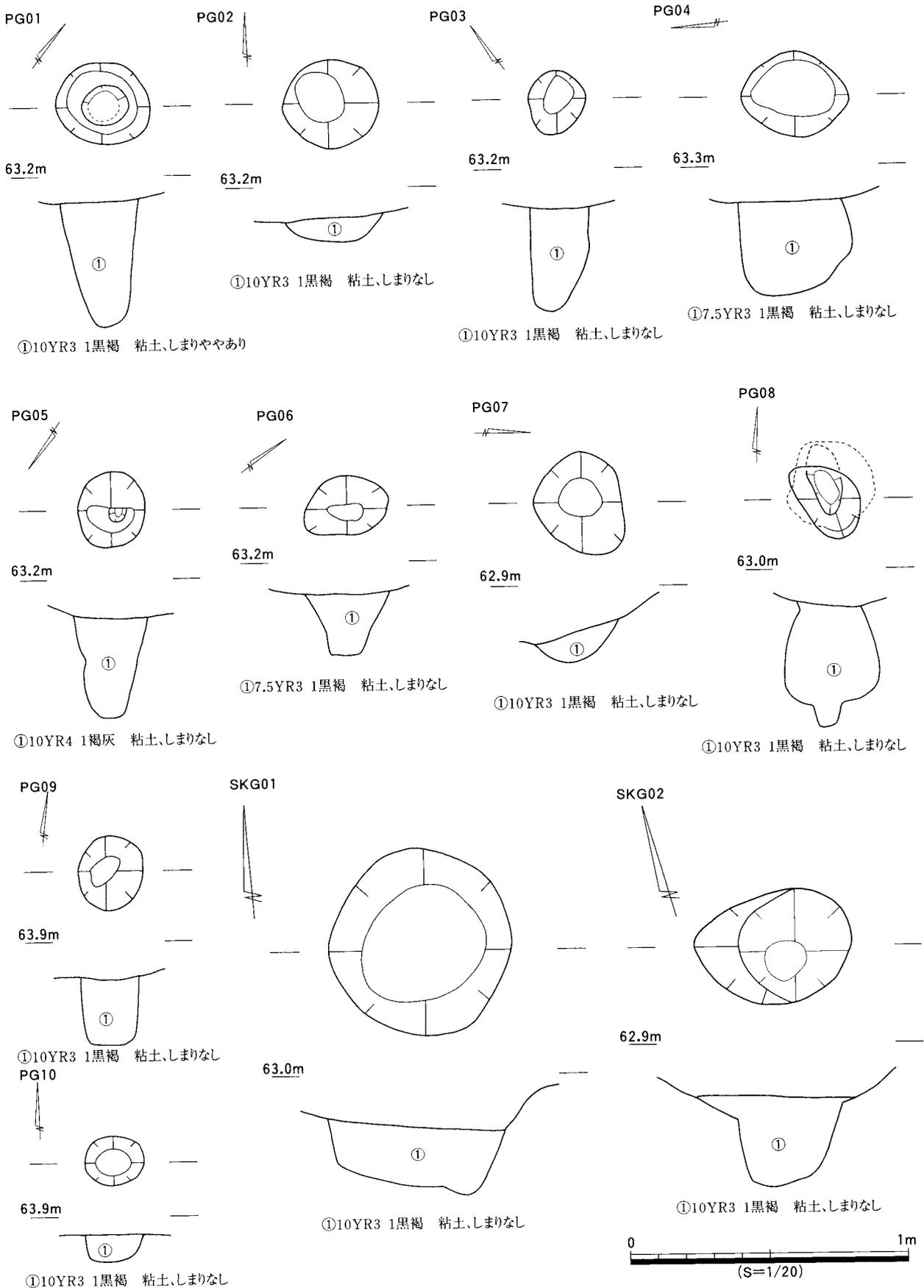
- ①10YR2 1黒 粘土、しまりあり
- ②10YR2 1黒 粘土、しまりなし
- ③10YR3 1黒褐 粘土、しまりあり
- ④10YR3 1黒褐 粘土、しまりあり、かたい



- ①10YR2 1黒 粘土、しまりあり
- ②10YR4 2灰黄褐 粘土、しまりあり
- ③10YR4 1褐灰 粘土、しまりあり
- ④10YR4 1褐灰 粘土、しまりあり
- ⑤10YR2 1黒 粘土、しまりなし
- ⑥2.5Y5 3黄褐 粘土、しまりあり
- ⑦10YR4 1褐灰 粘土、しまりあり
- ⑧2.5Y5 3黄褐 粘土、しまりなし
- ⑨10YR3 1黒 粘土、しまりあり
- ⑩10YR2 1黒 粘土、しまりなし
- ⑪10YR1.7 1黒 粘土、しまりなし
- ⑫10YR3 2黒褐 粘土、しまりなし
- ⑬2.5Y6 4にぶい黄 粘土、しまりあり



第48図 SXF01~03平面図・断面図



第49図 PG01～PG10、SKG01・02 平面図・断面図

茶屋下遺跡（調査区の西から東へ順に記載。H→I→D→J区）

H区（第21図）地山の堆積状況はF・G区とほとんどかわらない。H区の西側には、ほ場整備のキャタピラー痕がつき、調査区北端と南西端には近現代の暗渠があり攪乱が多い。暗渠は竹を束にしたものが埋めてあり、I区のものと同じものである。近世の水田開発跡がある。西側に石列の痕跡がある。I76グリッドから東側の低湿地部分を水田に開発している。

SIH01（第50図）

B・F区で検出した石列と同じ性格のものと思われる。石が4つ残存しているが、周囲に重機のキャタピラー痕が多く攪乱を受けており、原位置をとどめているのは1つのみである。

I区（第22図）ほ場整備の重機の爪あとと、北側に東西方向の暗渠と西側に南北方向の暗渠がある。暗渠は竹を束にしたものが埋めてあり、排水用と思われる。

D区（第22図）近世頃に開発した粘土採掘跡と作業小屋跡があるが、居住地にはむかない土質である。ほ場整備で、遺構上面が削られている可能性が高く、検出した柱穴の深さが浅い。

PD01、07、08（第51図）

この3つは大きさが似ており、並ぶ可能性が高い。

PD02～PD06（第51図）

検出した掘り形が隅丸方形をしており、特にPD03は直径30cmの柱痕がはっきり確認できた。掘立柱建物跡である可能性が高く、粘土採掘跡にも近く、居住にはむいていないため、作業小屋のようなものかもしれない。あるいはPD03以外は粘土採掘跡である可能性も考えられる。

SDD01（第52図）

南北方向に長く、北と南に続く。北側2・3は南へ傾斜しているが、そこから南へは浅くなってしまうため、溝というよりは粘土の採掘跡である可能性が高い。断面を実測したところ以外は、掘削中に作業員の重みで沈んでしまっており、本来の検出レベルではない。

J区（第23図）地山の堆積状況は、東側のE区と同じである。東側1/3は急激に地形が低くなり、粘土採掘跡がある。30～40cm粘土を取った後に10YR4 1褐灰色の砂が自然に堆積し、その上に近世の水田がつくられている。西側は地形が高くなり溝より西側を畑にしていたと思われる。

PJ01・02（第53図）

埋土は砂で、流れの緩い水際の自然堆積の可能性が高いと思われる。

PJ03（第53図）

湧水による砂の堆積である可能性が高い。

SKJ01～SKJ04（第53図）

埋土は砂で、流れの緩い水際の自然堆積の可能性が高いと思われる。

SDJ01（第54図）

浅く幅も狭い。南に傾斜する。調査区内では一番地形の高いところにあるが、水量は少ないが湧水する。埋土は砂で、直径5cmの円礫を多く含む。

SDJ02（第54図）

山茶碗の破片が2点出土している。時期は12・13世紀のものが1点と、14・15世紀のものが1点で、埋土の1層から出土している。

SDJ03 (第54図)

調査区の西側にあり西の高い地形と東の低い地形の境にある。幅が2 mで、深さが約40cmで深い。上層からは12～13世紀の山茶碗の破片が5点、14～15世紀の山茶碗破片が1点出土している。溝の底には10cm大の円礫が多く、木の根が出土している。花粉分析から周辺にはカキノキの栽培も想像でき、溝内にはヨシなどが生育していた可能性が考えられる(第5章参照)。

SXJ01 (第54図)

円形をしており深く、白い粘土を採集した粘土採掘跡である。採集の後は10YR4/1褐灰色の粘土と砂が自然堆積したものと思われる。調査区の東に自然流路があるものと思われる。

SXJ02 (第54図)

方形をしており、白い粘土までを採集した粘土採掘跡である。埋土はSXJ01と同じである。

改田遺跡

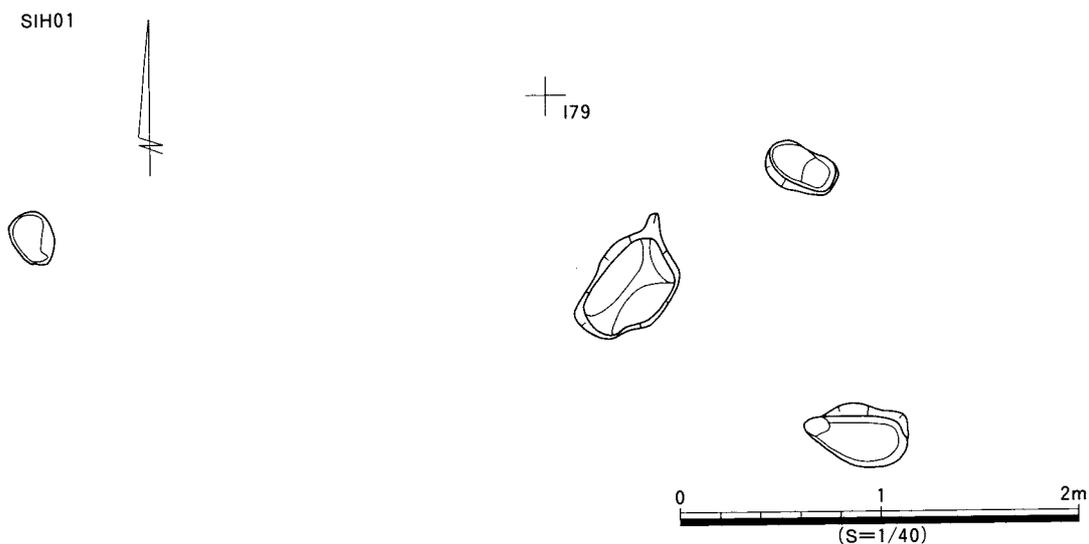
E区 (第24図) 地山は砂地の暗灰黄色土で、地形が北に傾斜しており、包含層が北側に厚く20cm、南側に5cm堆積している。

PE01、PE04・05 (第55図)

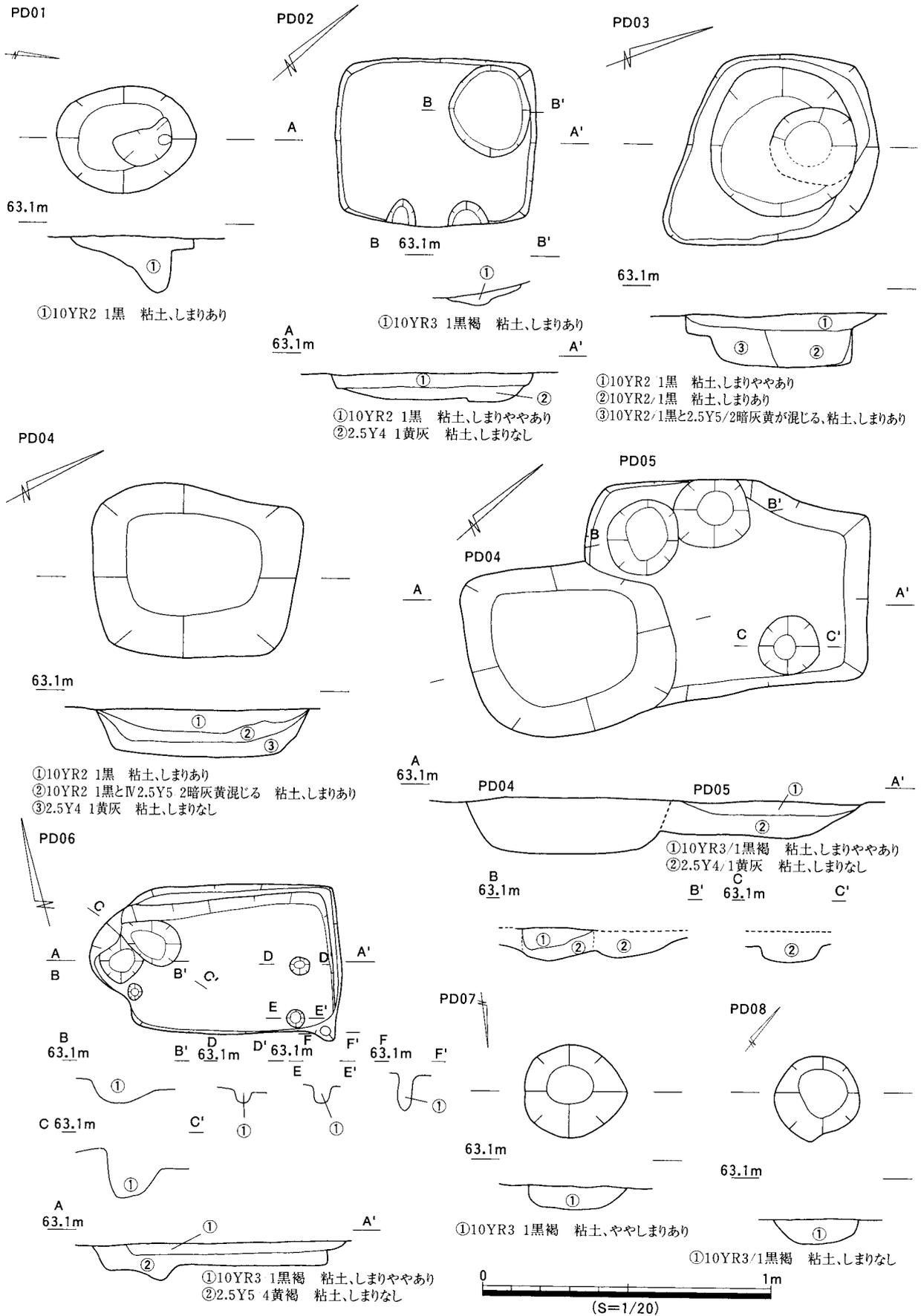
PE01は大きく深い。PE01は掘立柱建物跡の柱穴になる可能性が高い。PE04は浅い。遺物は出土していない。PE05は小さく、木杭の穴の可能性が高い。

SDE01、SDE02 (第55図)

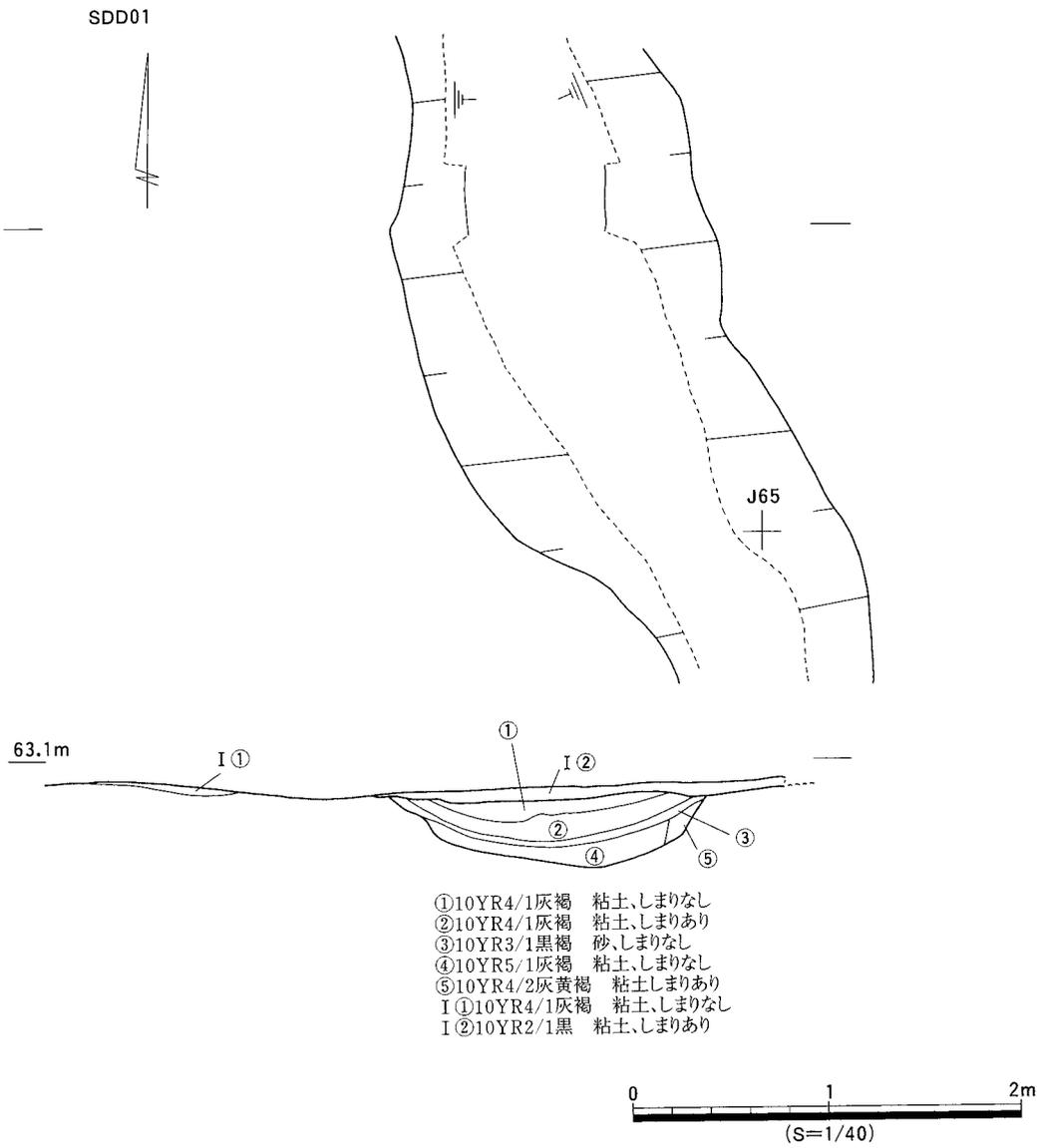
地山は東に傾斜している。SDE01とSDE02は南北方向に長く、調査区外の北と南に続く。この2つは一連のもので、自然流路である可能性が高い。遺物は出土していない。



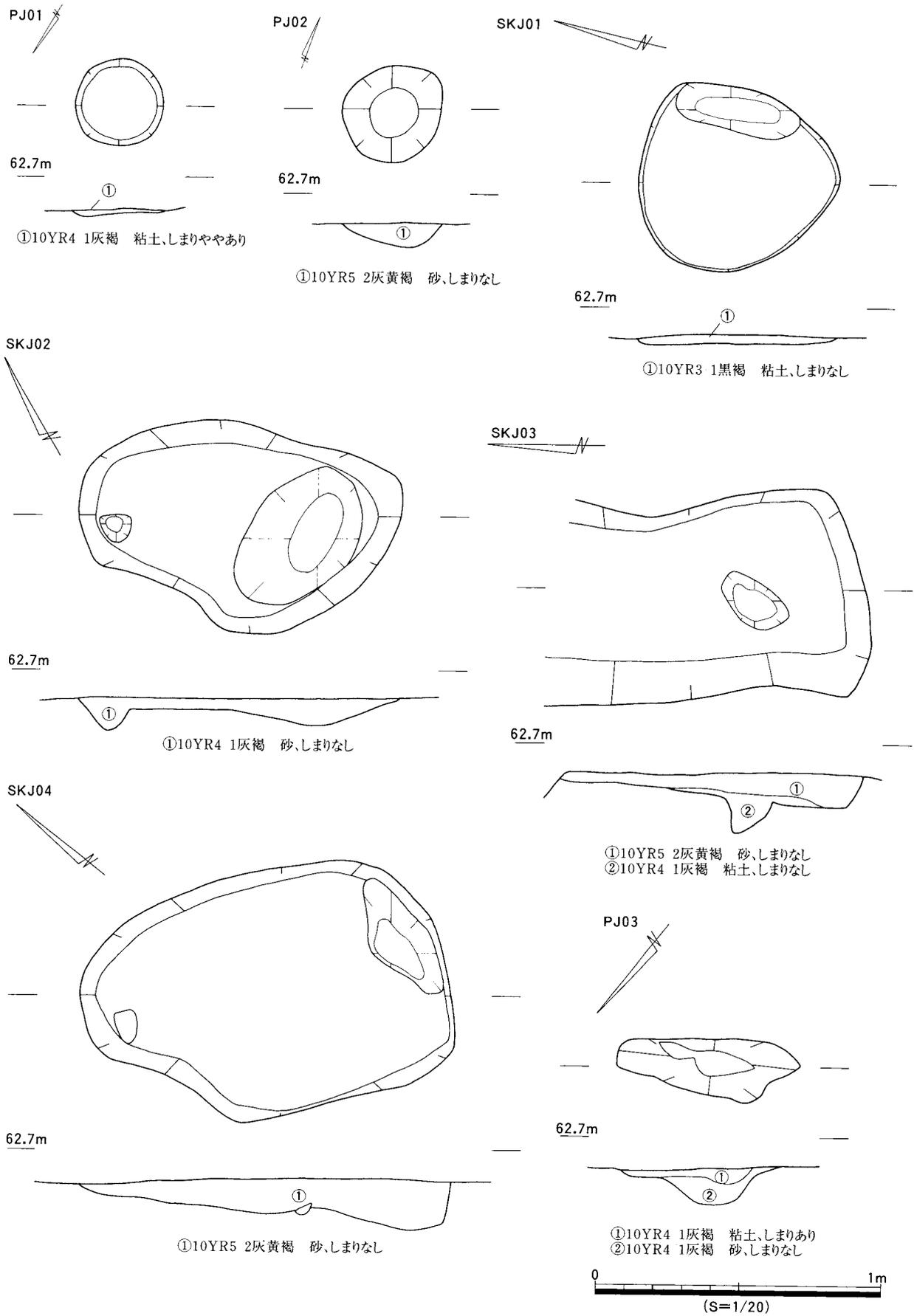
第50図 茶屋下遺跡 H区 石列平面図



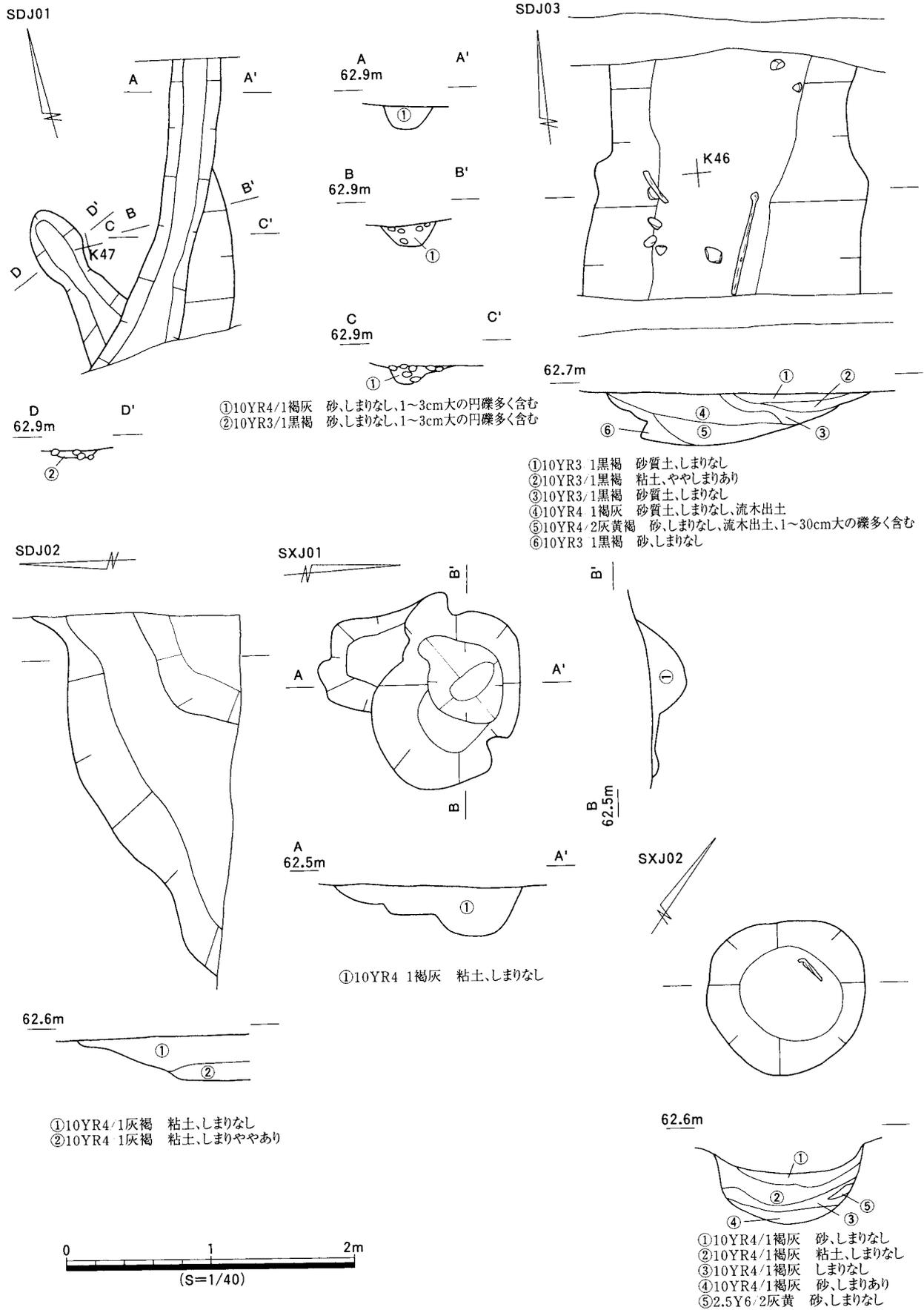
第51図 PD01～PD08 平面図・断面図



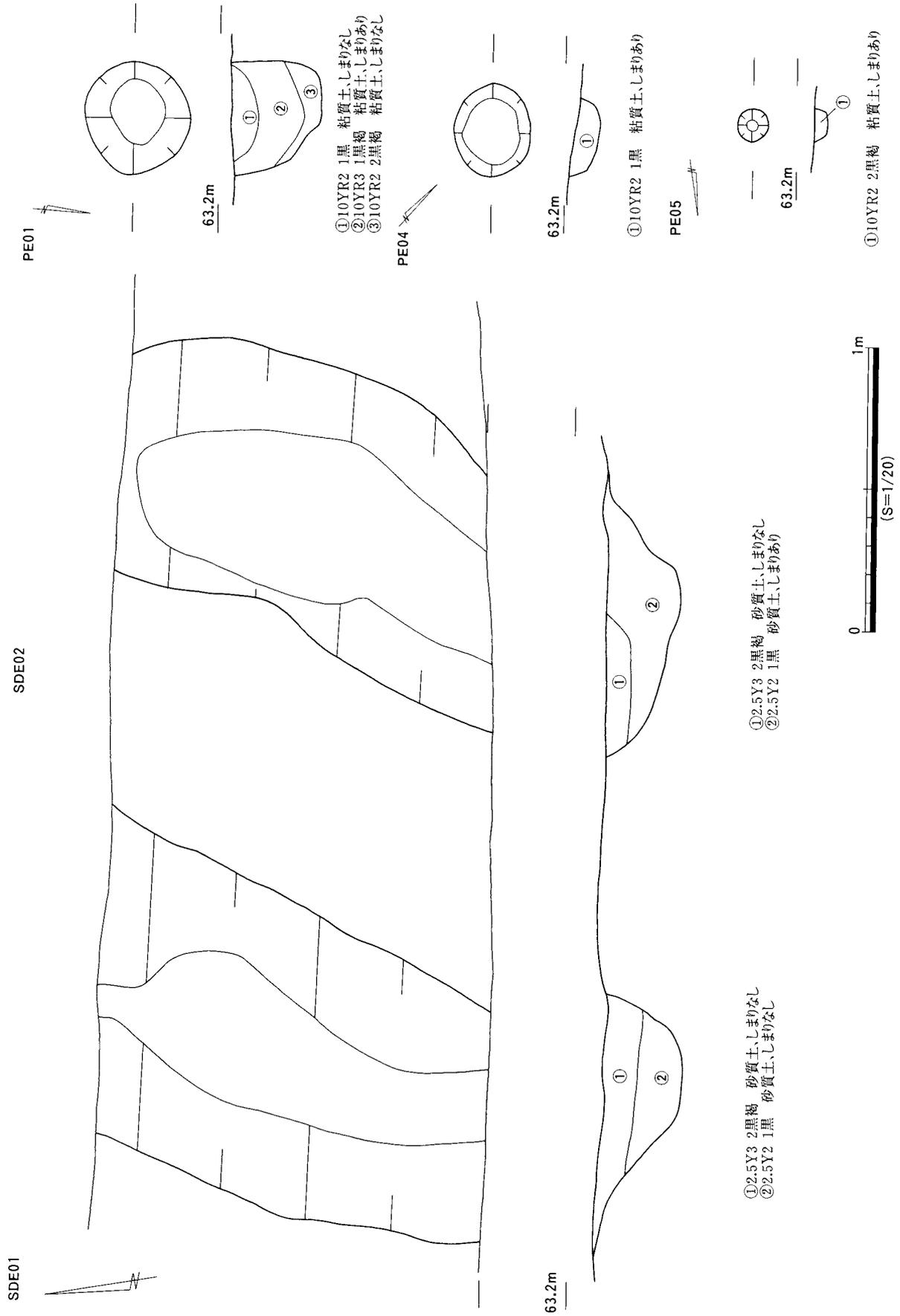
第52図 SDD01 平面図・断面図



第53図 PJ01~03、SKJ01~04 平面図・断面図



第54図 SDJ01~03、SXJ01・02 平面図・断面図



第55図 SDE01・02、PE01・04・05 平面図・断面図

第4節 包含層の遺物

縄文土器・石器の分布

包含層から出土した磨石はG96・99・100・101、H93・95・97、H79（H区）、K43（J区）に分布し、石鏃はH97から出土している。縄文土器は破片で磨耗しているが、G94・97から出土している。

（石器は第3節下層の遺構・遺物を参照）

縄文時代以降の遺物（12～19世紀）

一本杉遺跡

A区 須恵器、山茶碗、天目茶碗の破片が出土している。

B区（第56図、105～108）播磨東部の12世紀の播鉢（106）、14～15世紀の山茶碗（107）、15世紀の京都系土器（105）など、中世後期までが中心で出土している。

F区（第56図、109～119）遺物は13世紀前半の山茶碗（109・110）、14～15世紀の山茶碗（111～114）、18～19世紀の陶器（117～119）が多く、16世紀の遺物が少ない。

G区（第56図、120～134）遺物は13～16世紀が多く、山茶碗が中心で、近世前期が少数ある。掲載遺物は、13～14世紀の伊勢型鍋（121）、中世前半の羽釜（122）、13世紀後半の山茶碗（124）、14～15世紀の山茶碗（125～130）、古瀬戸（131～133）、16世紀前半の端反皿（134）である。13世紀の土師器皿（120）、青磁碗（123）が出土している。「中国製陶磁器が少数あり、極楽寺に関係すると思われる。粘土採掘跡は寺が関係している可能性がある。」と宇野氏に御教示いただいた。

C区（第56図、135～144）山茶碗（137～140）、古瀬戸（143）、15世紀の天目茶碗（144）などの14～15世紀の遺物が中心である。その他に縄文土器、中国製陶磁器、瀬戸、常滑、土師器皿（135・136）京都系の手づくね土器（136）が出土している。

茶屋下遺跡

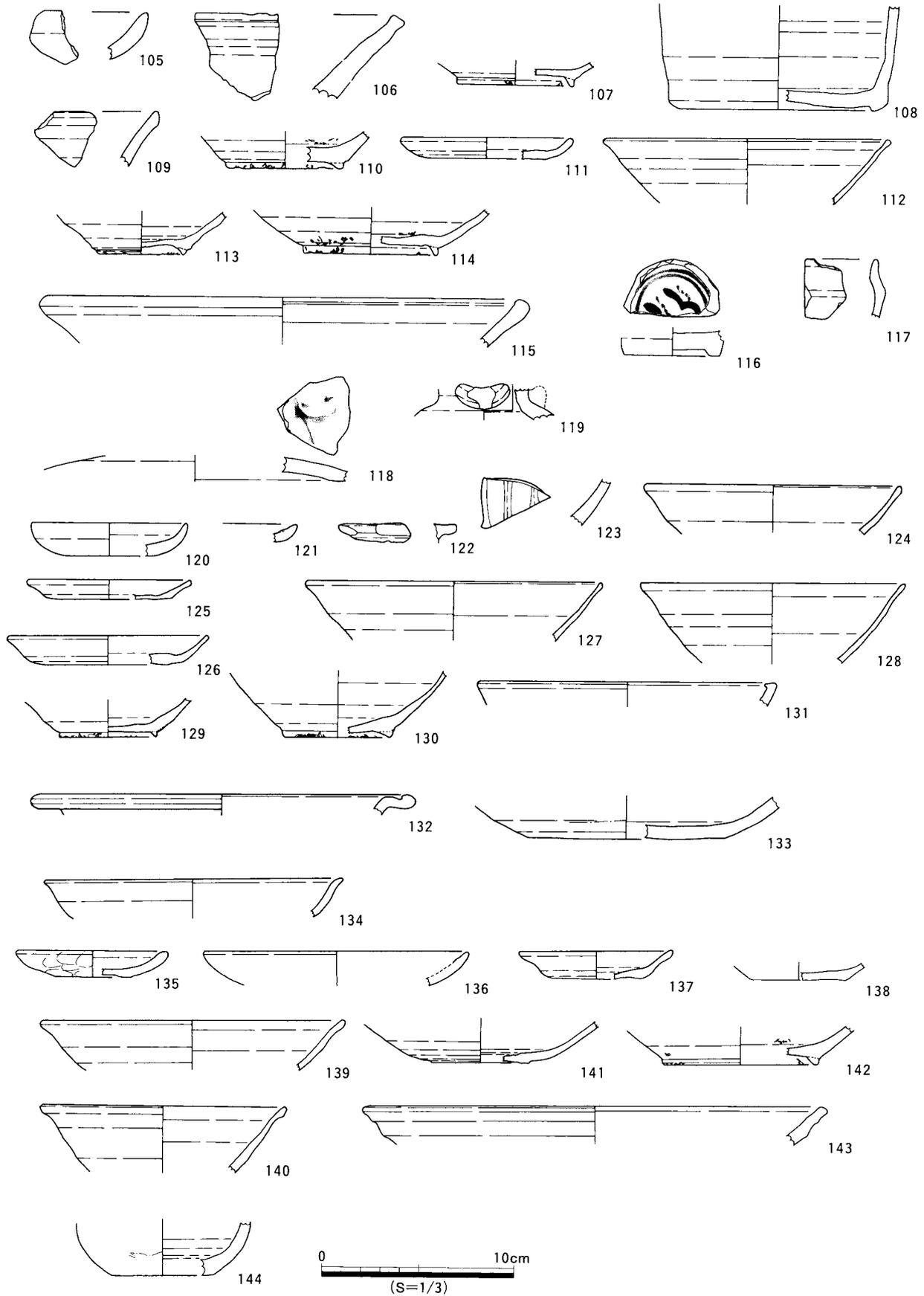
H区（第57・59図、145～165、206）遺物全体では13～16世紀のものが多し。古瀬戸後期（155・156）が多く、149などの土師器皿は14世紀のものが多し。13世紀後半の青磁碗（145）が1点出土している。12～13世紀の山茶碗（146～148）、14～15世紀の山茶碗（150～154）、18～19世紀の陶器（158～165）が多く出土している。H76グリッドから寛永通寶が1点（206）I層から出土している。

I区（第57・59図、166～183、207）遺物は16世紀のもの（175～178）がまとまってある。土師器皿は14～15世紀のものが多し。山茶碗の時期よりも新しい時期の15世紀～19世紀のものが多し。12～13世紀の山茶碗（167）、14～15世紀の山茶碗（168～170）、瀬戸（173）、17世紀の志野（179・180）、18～19世紀（181～183）を掲載している。I67グリッドから銅銭が1点（207）出土している。

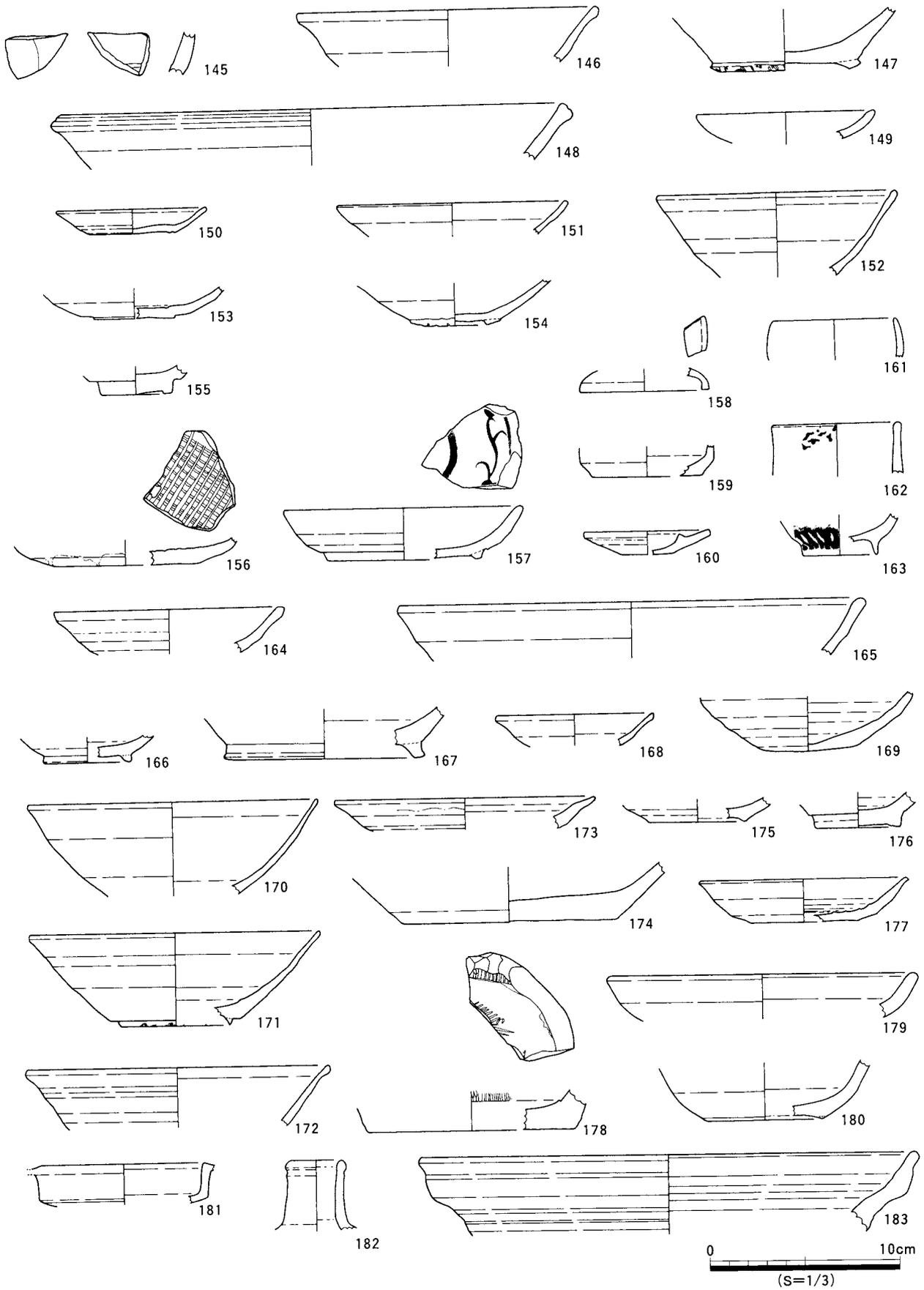
D区 近世陶器、瀬戸の平碗、15世紀前後のものがまとまってある。

J区（第58図、184～205）遺物は、須恵器（184・185）や当遺跡の中世のものでは一番古い時期12世紀後半の青磁碗（186）が出土している。古瀬戸後期（203）、14世紀前半が中心の土師器皿（187・188）、12～13世紀の山茶碗（189～196）、14～15世紀の山茶碗（197～201）がある。全体では13～15世紀のものが多し。近くにこの時期の生活拠点となる遺跡があるものと思われる。東壁の水田耕作土中から、「吉」の墨書のある14世紀後半～15世紀前半の山茶碗が1点（200）出土している。

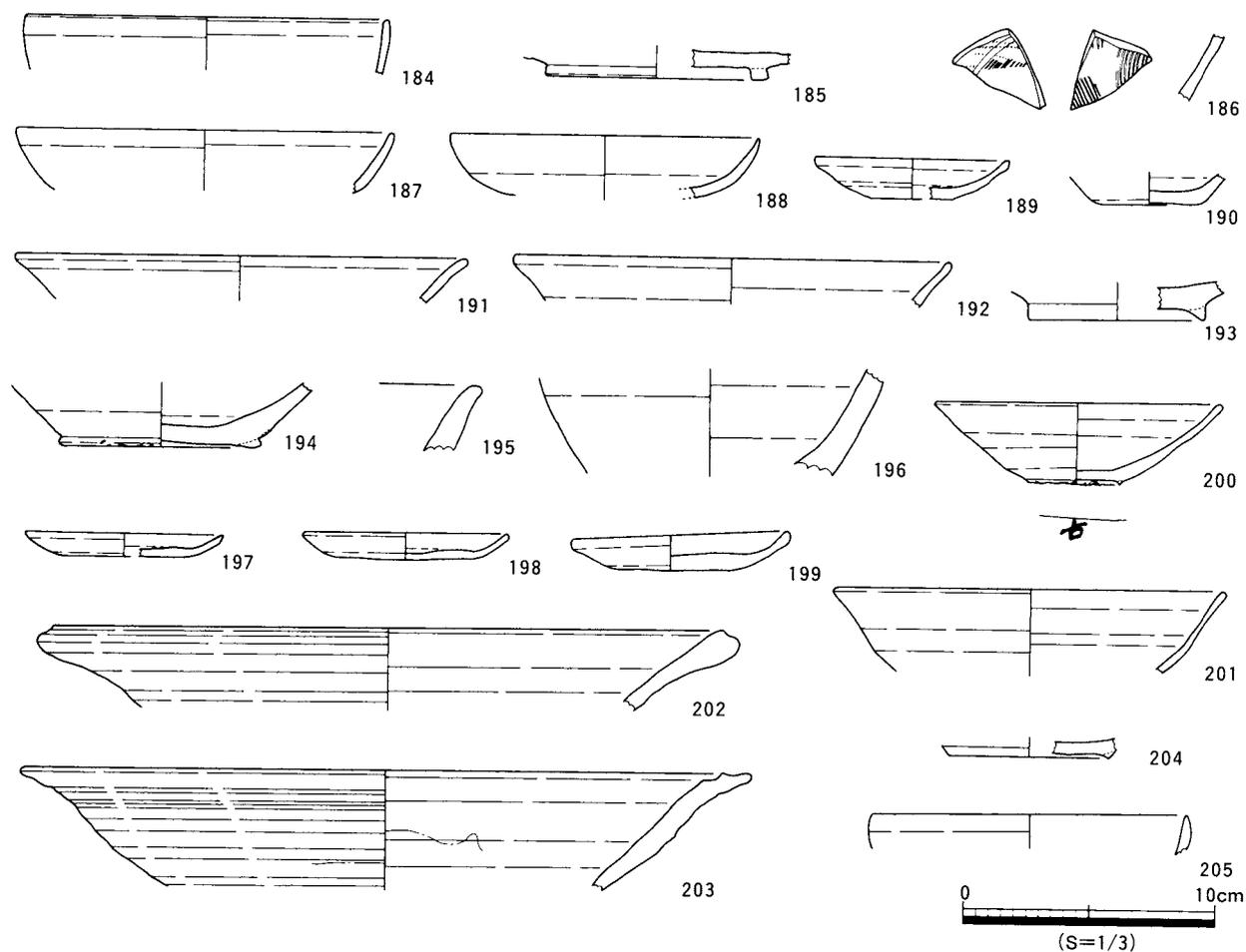
改田遺跡 E区 遺物は中世後期のものが出土している。



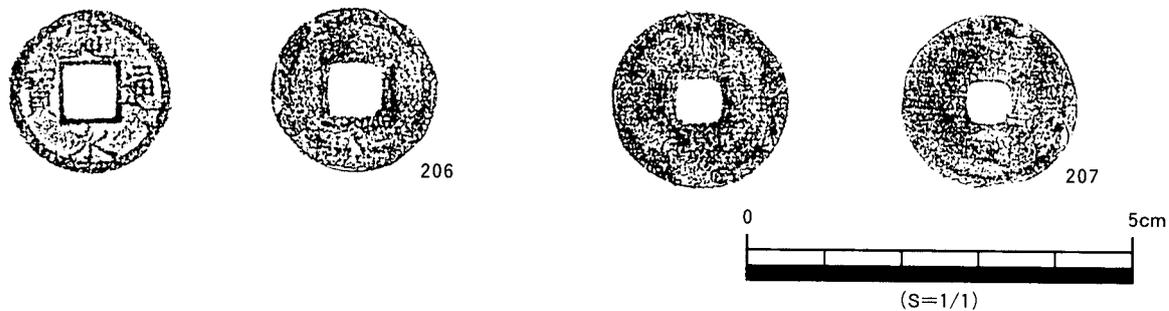
第56図 一本杉遺跡 (A・B・F・G・C区) 出土遺物



第57図 茶屋下遺跡 (H・I区) 出土遺物



第58図 茶屋下遺跡（J区）出土遺物



第59図 茶屋下遺跡（H・I区）出土遺物

表5 土器観察表

掲載 番号	出土区	層位	質量 g	口径cm 長さ	底径cm 幅	器高cm 厚み	口径残存 率 12	底径残存 率 12	胎土	焼成	外面色調	土色帳	内面色調	土色帳	整形・調整 外面	整形・調整 内面	種類	器種	時代	産地	挿図	図版
101	NRC01	M1	7.3	8.0	5.6	1.2	1.5	1.5	密	良好	にぶい黄橙	10YR7 2	灰白	10YR7 1	回転糸切り痕		山茶碗	皿	14~15世紀	北部系	40	22
102	NRC01	M1	2.6	12.4		(1.7)	0.8		密	良好	灰白	5Y7 1	灰白	5Y7 1	自然釉	自然釉	山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	40	22
103	NRC01	M1	11.2		6.0	(4.0)		0.5	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰白	2.5Y7/1			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	40	22
104	NRC02	M1	1.9	12.0		(1.2)	1.0		密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y7/2			山茶碗	皿?	14~15世紀	北部系	40	22
105	F104	I	4.8			(2.5)			密	良好	淡黄	2.5Y8 3	淡黄	2.5Y8 3			土師器	皿	中世後期	京都系	56	23
106	G103	I	32.4			(4.4)			密	良好	褐灰	10YR5/1	褐灰	10YR6 1	釉		陶器	擂鉢	12世紀	播磨東部	56	23
107	G104	I	9.4		6.0	(1.3)		1.8	密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y7/2			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	56	22
108	排土	I	66.3		10.2	(5.5)		3.0	密	良好	灰白	7.5Y7/1	灰白	7.5Y7/1	釉	釉	陶器	徳利	幕末以降(明治)		56	23
109	G102	II	5.7			(2.9)			密	良好	灰白	2.5Y8/2	灰黄	2.5Y6/2	自然釉	自然釉	山茶碗	碗	13世紀	南部系	56	22
110	H101	II	31.1		6.0	(2.0)		4.8	密	良好	にぶい黄橙	10YR7 3	灰白	10YR8 2			山茶碗	碗	13世紀前半	南部系	56	22
111	G99	II	11.4	9.0	6.0	(1.2)	3.5	3.5	密	良好	淡黄	2.5Y8 3	淡黄	2.5Y8 3			山茶碗	皿	14~15世紀	北部系	56	22
112	H98	II	17.3	15.0		(3.5)	3.5		密	良好	灰黄	2.5Y7 2	灰白	2.5Y7 1			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	56	22
113	H97		20.4		4.5	(2.3)		6.0	密	良好	にぶい黄橙	10YR7 3	浅黄橙	10YR8 3			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	56	22
114	G97	II	26.3		7.0	(2.5)		2.5	密	良好	灰白	2.5Y7 1	灰白	2.5Y7 1	回転糸切り痕		山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	56	22
115	H100	II	14.3	25.5		(2.5)	0.5		密	良好	暗赤褐	7.5R3 3	暗赤褐	7.5R3 3	釉	釉	陶器	擂鉢	15世紀末	古瀬戸	56	23
116	G102	II	21.7		5.0	(1.4)		1.5	密	良好	淡黄	2.5Y8 3	淡黄	2.5Y8 3			陶器	碗?	17世紀	志野	56	23
117	G102	II	5.0			(3.2)			密	良好	褐	7.5YR4 3	褐	7.5YR4 3	釉	釉	陶器	天目茶碗	18~19世紀	瀬戸美濃	56	23
118	G102	II	12.8			(1.3)			密	良好	灰白	5Y7 2	淡黄	2.5Y8 3			陶器	蓋	18~19世紀	瀬戸美濃	56	23
119	G101	II	14.0			(1.9)			密	良好	明オリ-7灰	5GY7 1	灰白	5Y8 1	釉		青磁	壺	18~19世紀	不明	56	23
120	G92	II	6.5	8.1	4.4	1.8	1.0	0.5	密	良好	にぶい黄橙	10YR7 3	にぶい黄橙	10YR7 3			土師器	皿	13世紀		56	23
121	H93	II	4.3			(1.0)			やや密	良好	にぶい黄橙	10YR5/3	にぶい黄橙	10YR5/3			土師器	伊勢型鍋	13~14世紀		56	23
122	G92	II	3.6			(1.0)			やや密	良好	灰褐	7.5YR4/2	暗灰黄	2.5Y5 2			土師器	羽釜	中世前半		56	23
123	H93	II	7.7			(2.4)			密	良好	灰オリ-7	5Y4/2	灰オリ-7	5Y4/2	編蓮弁文		青磁	碗	13世紀		56	23
124	H96	II	9.0	13.0		(2.5)	1.5		密	良好	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1			山茶碗	碗	13世紀後半	南部系	56	22
125	G92	II	3.1	8.6	4.8	1.1	0.9	1.4	密	良好	灰白	N7/	灰白	N7/			山茶碗	皿	14~15世紀	北部系	56	22
126	H91	II	12.4	10.4	8.0	1.5	1.5	2.5	密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	煤付着		山茶碗	皿	14~15世紀	北部系	56	22
127	H96	II	13.4	15.2		(3.1)	1.4		密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	自然釉	自然釉	山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	56	22
128	G92	II	22.9	13.7		4.2	2.7		密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	自然釉	自然釉	山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	56	22
129	G92	II	17.2		6.6	(2.0)		2.8	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	56	22
130	H92	II	23.0		5.4	(3.5)		2.5	密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	56	22

掲載 番号	出土区	層位	質量 g	口径cm 長さ	底径cm 幅	器高cm 厚み	口径残存 率 /12	底径残存 率 /12	胎土	焼成	外面色調	土色帳	内面色調	土色帳	整形・調整 外面	整形・調整 内面	種類	器種	時代	産地	挿図	図版
131	H95	II	1.8	15.3		(1.3)	0.3		密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7 2	釉	釉	陶器	卸皿	15世紀	古瀬戸	56	23
132	G92	II	7.6	19.0		(1.2)	0.8		密	良好	灰黄	2.5Y7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	釉	釉	陶器	不明	15世紀	古瀬戸	56	23
133	G93	II	46.0		10.1	(2.3)		2.5	密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y8/1	釉	釉	陶器	不明	15世紀	古瀬戸	56	23
134	G91	II	2.5	15.4		(2.0)	0.5		密	良好	浅黄	7.5Y7/3	浅黄	7.5Y7/3	釉	釉	陶器	端反皿	16世紀前半	瀬戸美濃	56	23
135	H85	I	9.9	8.0	4.0	(1.4)	3.0	3.0	密	良好	褐灰	10YR6/1	灰黄褐	10YR6/2	指押さえ		土師器	皿	15世紀		56	23
136	H84	I	5.4	13.7		(1.8)	0.8		密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3			土師器	皿	中世		56	23
137	H85	I	8.8	8.0	4.6	(1.5)	1.5	3.0	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2			山茶碗	皿	14~15世紀	北部系	56	22
138	G87	I	13.5		5.0	0.9		5.0	密	良好	灰白	10YR7/1	灰白	10YR7/1			山茶碗	皿	14~15世紀	北部系	56	22
139	H85	I	6.0	16.0		(2.6)	1.0		密	良好	灰白	5Y7/2	灰白	5Y7/1		自然釉	山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	56	22
140	排土	I	9.8	13.0		(3.5)	1.0		密	良好	灰黄	2.5Y7 2	灰白	2.5Y7 1			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	56	22
141	H86	I	10.5		5.0	(2.3)		2.0	密	良好	灰黄	2.5Y7 2	灰黄	2.5Y7 2			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	56	22
142	排土	I	14.1		8.0	(2.0)		1.5	密	良好	淡黄	2.5Y8 4	淡黄	2.5Y8 4			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	56	22
143	H84	I	8.6	24.0		(2.0)	0.5		密	良好	灰オリーブ	5Y6 2	灰オリーブ	5Y6 2	釉	釉	陶器	直縁大皿?	15世紀	古瀬戸	56	23
144	H84	I	15.2		5.3	(2.9)		1.0	密	良好	褐 灰白	7.5YR4 3 N7 0	黒褐	7.5YR2 2	釉	釉	陶器	天目茶碗	15世紀	古瀬戸	56	23
145	H80	I	7.6						密	良好	オリーブ灰	2.5GY5 1	オリーブ灰	2.5GY5 1	綺蓮弁文		青磁	碗	13世紀後半		57	23
146	H76	I	11.8	16.2		(3.0)	1.3		密	良好	灰白	2.5Y7 1	灰白	2.5Y7 1			山茶碗	碗	12~13世紀	北部系	57	23
147	H77	I	50.6		8.0	(3.2)		3.2	密	良好	灰黄	2.5Y7 2	灰白	2.5Y8 2			山茶碗	碗	12~13世紀	北部系	57	23
148	H79	I	24.1	26.8		(3.0)	0.7		密	良好	灰白	2.5Y7 1	黄灰	2.5Y6 1			山茶碗	鉢	13~14世紀	北部系	57	23
149	I73	I	5.0	9.5		(1.7)	1.8		密	良好	にぶい黄橙	10YR7 2	灰黄褐	10YR6 2			土師器	皿	14~15世紀	北部系	57	24
150	I73	I	18.3	8.1	4.5	1.3	1.0	7.0	密	良好	灰白	2.5Y7 1	灰白	2.5Y7 1	回転糸切り裏		山茶碗	皿	14~15世紀	北部系	57	24
151	I79	I	5.9	12.4		(1.8)	1.6		密	良好	灰白	N7 0	灰白	10YR7 1			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	57	24
152	I76	I	13.9	12.8		(4.5)	1.4		密	良好	灰白	N7 0	灰白	N7 0			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	57	24
153	排土	I	19.7		4.4	(1.6)		4.5	密	良好	黄灰	2.5Y6 1	黄灰	2.5Y6 1			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	57	24
154	I78	I	12.9		4.8	(2.3)		4.0	密	良好	灰白	2.5Y7 1	灰黄	2.5Y7 2		自然釉	山茶碗	碗	14~15世紀	北部系	57	24
155	I78	I	25.3		3.8	(1.5)		8.5	密	良好	にぶい赤褐	7.5R4 3	暗灰	N3 1	釉	釉	陶器	天目茶碗	15世紀後半	古瀬戸	57	25
156	H76	I	21.7		7.7	1.4		2.0	密	良好	にぶい黄橙	7.5Y5 2 10YR7 2	オリーブ黄	7.5Y1 3	釉	釉	陶器	卸皿	15世紀	古瀬戸	57	25
157	H77	I	19.8	12.6	8.2	(2.9)	0.7	1.7	密	良好	灰白	10YR8 2	にぶい黄橙	10YR7 3	釉	釉	陶器	小碗?	17世紀	志野	57	25
158	I80	I	1.6	6.8			1.0		密	良好	灰白	5Y8 1	にぶい黄橙	10YR7 3	釉	釉	陶器	蓋	18~19世紀	瀬戸美濃	57	24
159	H80	I	5.4		5.8	(1.6)		2.0	密	良好	灰白	2.5Y8 2 2.5Y8 1	灰白	5Y8 2	釉	釉	陶器	香炉?	18~19世紀	瀬戸美濃	57	24
160	I79	I	8.6	6.7	2.7	1.3	3.7	1.2	密	良好	黄灰	2.5Y6 1	灰オリーブ	5Y6 2	口縁部釉		陶器	灯明皿	18~19世紀	瀬戸美濃	57	24
161	H80	I	4.2	6.4		(2.2)	1.1		密	良好	灰白	7.5Y7 2	灰白	7.5Y7 2	釉	釉	陶器	小碗?	18~19世紀	瀬戸美濃	57	24
162	排土	I	5.1	6.8		(2.3)	1.3		密	良好	灰白	7.5Y7 1	灰白	7.5Y7 1	釉	釉	陶器	湯呑?	18~19世紀	瀬戸美濃	57	24

掲載番号	出土区	層位	質量g	口径cm 長さ	口径cm 幅	器高cm 厚み	口径残存率 12	底径残存率 12	胎土	烧成	外面色調	土色帳	内面色調	土色帳	内面色調	土色帳	整形・調整 外面	整形・調整 内面	種類	器種	時代	産地	挿図	図版
163	排土	I	9.5		4.0 (2.2)			3.1	密	良好	灰白	N8 0	灰白	N8 0	釉	釉	陶器	碗	18~19世紀	瀬戸美濃		57	24	
164	I79	I	8.1	12.4		(2.4)	1.5		密	良好	オリーブ黄	5Y6 3	オリーブ黄	5Y6 3	釉	釉	陶器	皿	18~19世紀	瀬戸美濃		57	24	
165	排土	I	13.9	25.0		(3.0)	0.8		密	良好	灰オリーブ	5Y5 3	灰オリーブ	5Y5 3	釉	釉	陶器	直縁大皿	15世紀	古瀬戸		57	24	
166	I68	II	11.8		4.5 (1.4)			1.5	密	良好	灰白	10YR7/1	にぶい黄橙	10YR7/2	自然釉	自然釉	須恵器	碗	9世紀			57	23	
167	I68	II	19.6		9.6 (2.8)			1.5	やや粗	やや粗	灰	7.5Y6/1	灰	7.5Y6/1			山茶碗	鉢	12~13世紀	南部系		57	23	
168	I71	II	5.2	8.3		(1.7)	2.1		密	良好	灰白	7.5YR8/1	灰白	7.5YR8/1			山茶碗	皿	14~15世紀	北部系		57	24	
169	I70	II	46.4		4.5 (3.2)			7.0	密	良好	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1	回転糸切り痕		山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		57	24	
170	I71	II	10.6	15.4		(5.0)	1.1		密	良好	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい褐	7.5YR6/3			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		57	24	
171	I71	II	38.8	15.5		5.0	1.5	2.0	密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		57	24	
172	I71	II	8.8	16.1		(3.2)	1.0		密	良好	灰白	5Y7.1	灰白	5Y7.1	自然釉	自然釉	山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		57	24	
173	I67	II	9.1	13.8		(1.7)	1.3		密	良好	淡黄	2.5Y8 3	暗灰黄	2.5Y4/2	釉(口縁)	釉	陶器	折縁皿	15世紀	瀬戸		57	25	
174	H71	II	60.3		11.0 (3.1)			1.4	やや粗	良好	オリーブ黄	7.5Y6 3	オリーブ黄	7.5Y6 3	釉	釉	陶器	大皿が深皿	15世紀	古瀬戸		57	25	
175	H69	II	11.5		5.0 (1.2)			3.9	やや密	良好	黒褐	5YR3 1	黒褐	5YR3 1	釉	釉	陶器	皿	16世紀前半	瀬戸美濃		57	25	
176	I67	II	25.0		4.3 (1.9)			6.1	やや密	良好	灰黄褐	10YR5 2	灰黄褐	10YR5 2	釉	釉	陶器	天目茶碗	16世紀後半	瀬戸美濃		57	25	
177	I71	II	9.0	10.9		5.7	2.3	0.7	密	良好	灰黄褐	10YR5 2	灰黄褐	10YR5 2	煤付着		陶器	重圓皿	16世紀	瀬戸美濃		57	25	
178	I66	II	45.6		11.0 (2.1)			2.8	やや密	良好	暗赤褐	5YR3 2	にぶい黄	2.5Y6 3	釉	釉	陶器	挿鉢	16世紀	瀬戸美濃		57	25	
179	H69	II	8.1	16.0		(2.4)	0.5		やや密	良好	灰白	2.5Y8 1	灰白	2.5Y8 1	釉	釉	陶器	碗?	17世紀	志野		57	25	
180	H68	II	20.4		6.0 (2.1)			2.0	やや密	良好	灰白	7.5Y8 1	灰白	2.5Y8 2	釉	釉	陶器	碗	17世紀	志野		57	25	
181	I67	II	11.5	8.6		(2.2)	2.1	1.6	密	良好	にぶい褐	7.5YR5 3	灰オリーブ	5Y5 3	釉	釉	陶器	落とし蓋	18~19世紀	不明		57	24	
182	H69	II	31.0	2.7		(3.8)	12.0		密	良好	灰オリーブ	5Y5 3	灰オリーブ	5Y5 3	釉	釉	陶器	徳利	18~19世紀	瀬戸美濃		57	24	
183	排土	I	47.0	26.4		(4.4)	1.0		やや密	良好	灰白	2.5Y8/2	にぶい黄橙	10YR7/2	釉	釉	陶器	不明	幕末以降			57	24	
184	K42	I	2.0	14.5		(2.1)	0.6		密	良好	灰	N6/1	灰白	2.5Y7/1			須恵器	坏身	8世紀			58	23	
185	K43	I	14.7		8.3 (1.2)			2.0	密	良好	灰	N6/1	灰	N6/1			須恵器	坏身	8世紀中~後半			58	23	
186	K42	I	6.1		(2.6)				密	良好	灰オリーブ	7.5Y6/2	オリーブ黄	5Y6/3			青磁	碗	12世紀後半			58	23	
187	K42	I	3.1	9.0		(2.4)	1.0		密	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4			土師器	皿	13世紀			58	24	
188	排土	I	8.3	12.1		(2.6)	0.1		密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3			土師器	皿	13世紀末~14世紀初			58	24	
189	K43	I	12.8	7.6		3.3	1.6	3.0	密	良好	灰白	N7/	灰白	N7/			山茶碗	皿	12~13世紀	南部系		58	23	
190	K43	III	22.4		4.0 (1.3)			12.0	やや密	良好	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1	回転糸切り痕		山茶碗	皿	12~13世紀	南部系		58	23	
191	K44	I	5.5	17.7		(2.8)	1.0		やや密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1			山茶碗	碗	12~13世紀	南部系		58	23	
192	K45	I	5.5	17.0		(1.8)	0.9		密	良好	淡黄	2.5Y8/3	灰白	2.5Y8/2	煤付着?		山茶碗	碗	12~13世紀	南部系		58	23	
193	K45	III	31.5		6.8 (1.6)			4.6	やや粗	良好	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1			山茶碗	碗	12~13世紀	南部系		58	23	
194	K45	III	52.5		7.5 (2.6)			2.8	やや密	良好	にぶい黄橙	10YR7 2	灰白	2.5Y7/1	使用か?		山茶碗	碗	12~13世紀	南部系		58	23	

掲載番号	出土区	層位	質量g	口径cm	底径cm	器高cm	口径残存率/12	底径残存率/12	胎土	焼成	外面色調	土色帳	内面色調	土色帳	整形・調整外面	整形・調整内面	種類	器種	時代	産地	挿図	図版
195	K43	I	8.5			(2.6)		12	やや粗	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7.1			山茶碗鉢	鉢	13世紀	南部系	58	23
196	K42	I	31.5			(4.5)			やや粗	良好	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1			山茶碗鉢	鉢	不明	南部系	58	23
197	K42	I	13.3	7.9	4.5	0.9	3.7	4.0	密	良好	灰白	N7/	灰白	N7/			山茶碗皿	皿	14~15世紀	北部系	58	24
198	K42	I	18.4	8.0	5.4	1.1	4.0	6.0	密	良好	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1	回転糸切り痕		山茶碗皿	皿	14~15世紀	北部系	58	24
199	K43	I	55.9	8.4	4.4	1.7	9.8	12.0	密	良好	灰白	5Y7/1	灰白	N7/	回転糸切り痕 墨? 付着		山茶碗皿	皿	14~15世紀	北部系	58	25
200	K42	I	44.6	11.2	3.6	3.3	3.4	6.1	密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y7.2			山茶碗碗	碗	14世紀後半~15世紀初	北部系	58	25
201	排土	I	8.7	15.1		(3.3)	1.3		密	良好	灰白	2.5Y8/2	灰白	2.5Y7/1			山茶碗碗	碗	14~15世紀	北部系	58	24
202	排土	I	47.9	26.6		(3.2)	1.2		やや密	良好	灰白	N7/	灰白	10Y7/1	自然釉		山茶碗鉢	鉢	14世紀	北部系	58	25
203	排土	I	42.5	28.6		(4.7)	0.3		やや密	良好	オリーブ黄	5Y6.3	オリーブ黄	5Y6.3	釉		陶器	不明	15世紀	古瀬戸	58	25
204	排土	I	4.5		6.4	(0.8)		1.1	やや密	良好	オリーブ黄	5Y6.3	オリーブ黄	5Y6.3	釉		陶器	不明	17世紀	瀬戸美濃	58	25
205	K43	I	2.8	12.4		(1.4)	1.2		密	良好	浅黄	2.5Y7.3	浅黄橙	10YR8.4			土師器皿	皿	18世紀		58	24
206	H76	I	2.10	2.23		0.12									寛永通寶		銭	近世		59	24	
207	I67	II	2.50	2.33		0.09									不明		銭	不明		59	24	

表6 石器観察表

掲載番号	地区名	遺跡名	グリット番号	層位	器種	形態	石材	残存率	刃部属性	形態加工	形成加工	素材剥離技術	所見	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	挿図	図版
1	一本杉	F区	H97	II	石鏃	凹基鏃未製品	珪岩	完形	適用外	SP	不明	不明		20.0	15.9	3.1	0.8	28	16
2	一本杉	F区	H97	II	石鏃	不定形	下呂石	完形	HP	折取	HD	不明	左側辺は折取の後に粗い刃潰し	29.6	26.9	9.7	6.7	28	16
3	一本杉	F区	G98	II	石匙	構形石匙	赤珪岩	右側端部欠	SP・MF	SP	不明	不明		30.8	40.1	5.9	5.0	28	16
4	一本杉	F区	H97	II	剥片	縦長剥片	珪岩	半欠	MF	なし	HD	不明		20.1	18.4	6.6	2.1	28	16
5	一本杉	F区	H97	II	使用痕剥片	縦長剥片	珪岩	完形	MF	なし	(HI)	不明		30.4	31.2	8.4	8.1	28	16
6	一本杉	F区	G97	II	使用痕剥片	削器	珪岩	完形	なし	なし	HD	不明		26.0	16.8	9.2	3.3	28	16
7	一本杉	F区	G98	II	二次加工剥片		赤珪岩	完形	MF	不整HP	HD	不明		23.3	35.3	11.8	7.9	28	16
8	一本杉	F区	G98	II	使用痕剥片	縦長剥片	珪岩	完形	MF	不整HP	(HI)	不明		24.4	16.1	5.0	2.1	28	16
9	一本杉	F区	G99	II	使用痕剥片	石刃状剥片	珪岩	完形	MF	MF	HD	不明		28.8	28.4	9.8	8.5	28	16
10	一本杉	F区	G100	II	削器	石刃状剥片	珪岩	部分欠	不整HP	叩折	HD	不明		37.4	34.7	9.8	13.1	28	16
11	一本杉	F区	G98	II	使用痕剥片		流紋岩	完形	MF	なし	HD	不明	剥片末端辺に微細剥離顕著	62.8	114.8	20.7	164.1	28	16
12	一本杉	F区	H96	II	短冊	硬質砂岩	刃部欠	刃部欠	不明	HD	不明	不明	背面自然面残す	109.7	54.7	19.3	146.1	29	16
13	一本杉	F区	H97	II	打製石斧	パナ	安山岩	基部断片	不明	HD	不明	不明	風化が激しく剥離面が不明瞭	75.5	50.7	21.8	97.8	29	16
14	一本杉	F区	G99	II	打製石斧	パナ	流紋岩	刃部欠	不明	HD	不明	不明		99.5	52.6	26.2	145.8	29	16
15	一本杉	F区	G99	II	打製石斧	不明	安山岩	基部断片	不明	HD	不明	不明	風化が激しく剥離面が不明瞭	78.1	66.9	21.7	122.4	29	16
16	一本杉	F区	H97	II	磨石・敲石		砂岩	完形	円礫面	なし	適用外	不明	風化顕著、被熱資料、主面部に磨面と敲打痕の集中、側面にサラサラの磨面	81.2	64.0	34.9	250.7	29	16
17	一本杉	F区	G100	II	磨石・敲石		安山岩	完形	円礫面	なし	適用外	不明	風化顕著、被熱資料、主面部に磨面と敲打痕の集中、側面にサラサラの磨面	107.5	91.5	47.1	656.5	29	16
18	一本杉	F区	G99	II	磨石・敲石		安山岩	完形	円礫面	なし	適用外	不明	風化顕著、被熱資料、主面部に磨面と敲打痕の集中、側面にサラサラの磨面	120.0	85.1	48.6	74.5	29	16
19	一本杉	G区	H93	III	石匙		珪岩	完形	反不整押圧剥離	なし	不明	不明		29.9	38.4	4.8	3.9	30	16
20	一本杉	G区	G91	II	両極石器		珪岩	完形	なし	なし	不明	不明		35.7	22.5	15.1	12.5	30	16

掲載番号	遺跡名	地区名	グリップ・遺構	層位	器種	形態	石材	残存率	刃部属性	形態形成加工	素材剥離技術	所見	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	挿図	図版
21	一本杉	G区	G91	Ⅲ	剥片		シルト岩	完形	なし	なし	HD		31.1	36.7	12.7	6.7	30	16
22	一本杉	G区	H93	Ⅱ	打製石斧	短冊	硬質砂岩	完形	摩耗・刃こぼれ	HD	不明	背面自然面残す	143.1	50.5	17.7	165.1	30	17
23	一本杉	G区	G94	Ⅱ	打製石斧	短冊	砂岩	完形	摩耗・刃こぼれ	HD	不明		96.3	46.4	12.3	50.5	30	17
24	一本杉	G区	H93	Ⅱ	棒状礫断片		砂岩	断片	なし	なし	適用外	使用痕は観察されない	61.2	45.4	27.9	122.0	30	17
25	一本杉	G区	G94	Ⅱ	磨製石斧		輝緑凝灰岩	基部断片	不明	研磨	不明		53.4	53.6	32.7	122.5	30	17
26	一本杉	G区	H95	Ⅱ	磨石		安山岩	完形	適用外	適用外	適用外	風化顕著、主面部に磨面があったと推定されるが、風化で不明瞭	106.4	92.6	40.9	562.7	30	17
27	一本杉	G区	H93	Ⅱ	砥石(荒砥)		砂岩	断片	適用外	適用外	適用外	裏面は簡理で破損、砥面の湾曲から手持ち砥石の可能性有り、産地不明	71.2	51.8	11.8	42.6	30	17
28	一本杉	G区	H96	Ⅳ	剥片		凝灰岩	両側欠損	なし	なし	S・D	尖頭器もしくは両面加工石器の製作剥片	34.0	28.9	9.3	4.3	31	17
29	一本杉	G区	G96	V	二次加工剥片		珪岩	下部欠損	刃部欠	HD	HD	折れ、鋭状石器(早・前期初頭)の可能性有り	57.0	46.1	14.5	35.7	31	17
30	一本杉	G区	G96	V	石核		泥岩	完形	適用外	適用外	適用外		63.1	88.9	58.3	374.1	31	17
31	一本杉	G区	G95	Ⅳ	礫		砂岩	完形	なし	なし	なし	風化顕著、台石等の断片の可能性はある	157.0	117.6	50.0	1234.5	32	17
32	一本杉	G区	H96	V	自然礫		安山岩	完形	なし	なし	なし	風化顕著	144.1	119.0	44.4	980.2	32	17
33	茶屋下	H区	SXH02	M1	削器		頁岩	完形	HD・MF	折取・HD	HD	34と接合	124.6	97.4	36.3	512.6	33	18-20
34	茶屋下	H区	SXH02	M2	剥片		頁岩	完形	なし	なし	HD	33と接合	157.3	63.5	31.6	301.5	33	18-20
35	茶屋下	H区	SXH02	M2	石核		泥岩	完形	なし	なし	なし	36と接合	109.4	152.6	58.1	888.1	34	18-21
36	茶屋下	H区	SXH02	M2	剥片		泥岩	完形	なし	なし	HD	背面自然面残す。35と接合	94.7	125.9	41.6	454.3	35	18-21
37	茶屋下	H区	H80	I	石匙?	縦形模造品	赤珪岩	完形	MF	HP	なし		42.0	14.8	7.9	4.8	36	18
38	茶屋下	H区	H80	I	削器		珪岩	完形	HP・MF	HP	HvD	ヘラ状石器と同形態	25.6	18.8	7.1	3.3	36	18
39	茶屋下	H区	J73	I	偽石器		珪岩	完形	なし	なし	なし		33.9	26.5	13.5	10.9	36	18
40	茶屋下	H区	J78	Ⅲ	偽石器		珪岩	完形	なし	なし	なし	表面全体摩耗	27.1	31.1	10.5	10.9	36	18
41	茶屋下	J区	K43	I	剥片		珪岩	完形	適用外	適用外	HD	打面は自然面、剥離角は90度	34.3	30.9	8.0	7.5	36	18
42	茶屋下	J区	K43	I	石核		泥岩	完形	適用外	適用外	適用外		62.7	73.7	34.8	134.1	36	19
43	茶屋下	J区	SKJ04	M1	剥片		頁岩	完形	なし	なし	SD	打面は自然面、剥離角は115度	35.6	24.4	12.5	5.8	36	18
44	茶屋下	J区	SXJ02	M4	剥片		頁岩	完形	なし	なし	SD	打面は平坦、剥離角は115度	34.5	34.4	11.8	5.6	36	18
45	茶屋下	I区	排土	I	敲石		砂岩	完形	なし	なし	適用外	端部に敲打痕の集中	157.7	48.3	40.4	418.5	36	19
46	茶屋下	D区	J63	Ⅳ	打製石斧		流紋岩	完形	刃こぼれ	HD	不明		99.0	39.1	15.1	57.8	36	18
47	茶屋下	J区	K46	Ⅲ	砥石(荒砥)		砂岩	端部欠	適用外	適用外	適用外	正面と両側面に砥面、欠損しているが手持ち砥石の可能性有り。産地不明	134.0	87.1	25.0	278.7	36	19

第4章 栗坪遺跡の調査

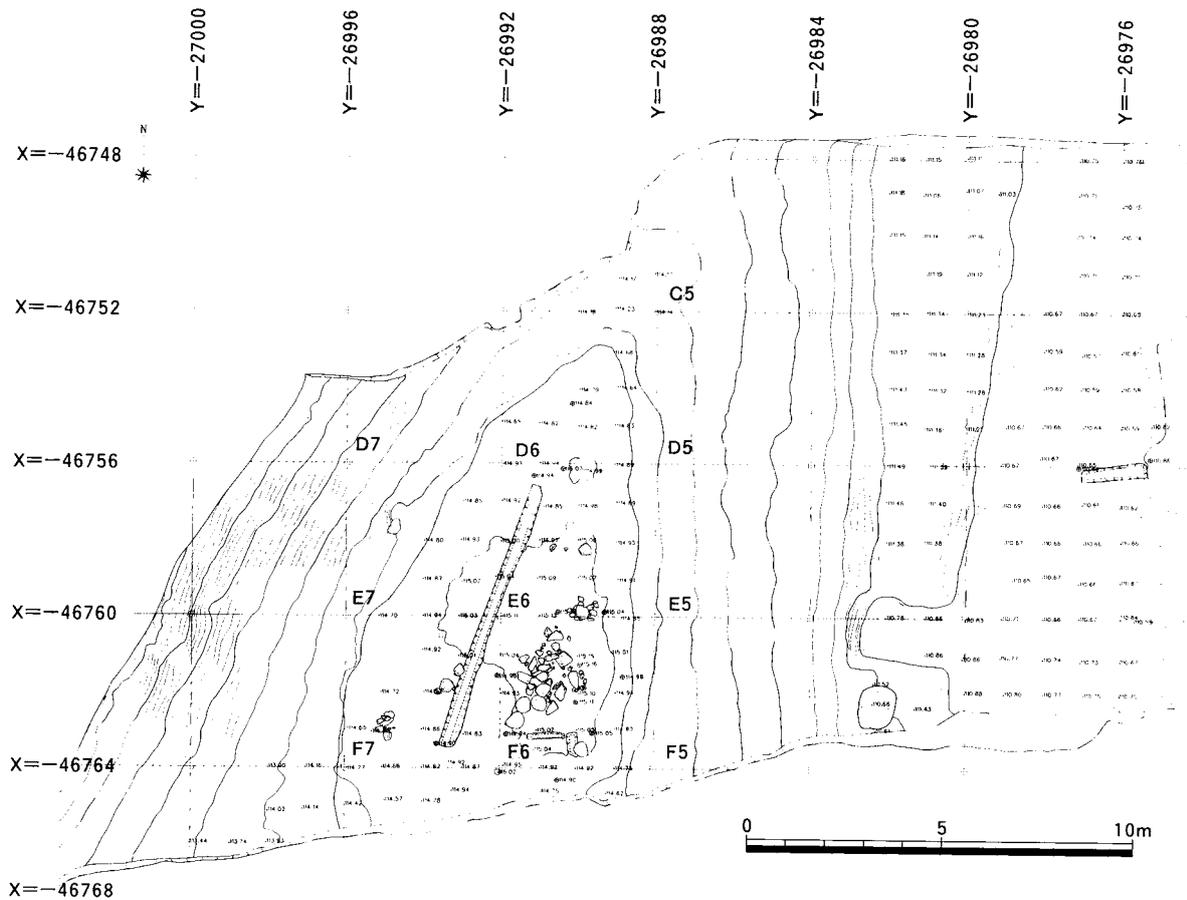
第1節 基本層序

- I 10YR3/2黒褐色土 砂質土 しまりなし：表土
- II 10YR4/3にぶい黄褐色土 砂質土 しまりなし：地山、3cm大の円礫が多く含まれる。段丘礫層。
- III 10YR4/4褐色土 砂質土 しまりなし：地山、段丘礫層。

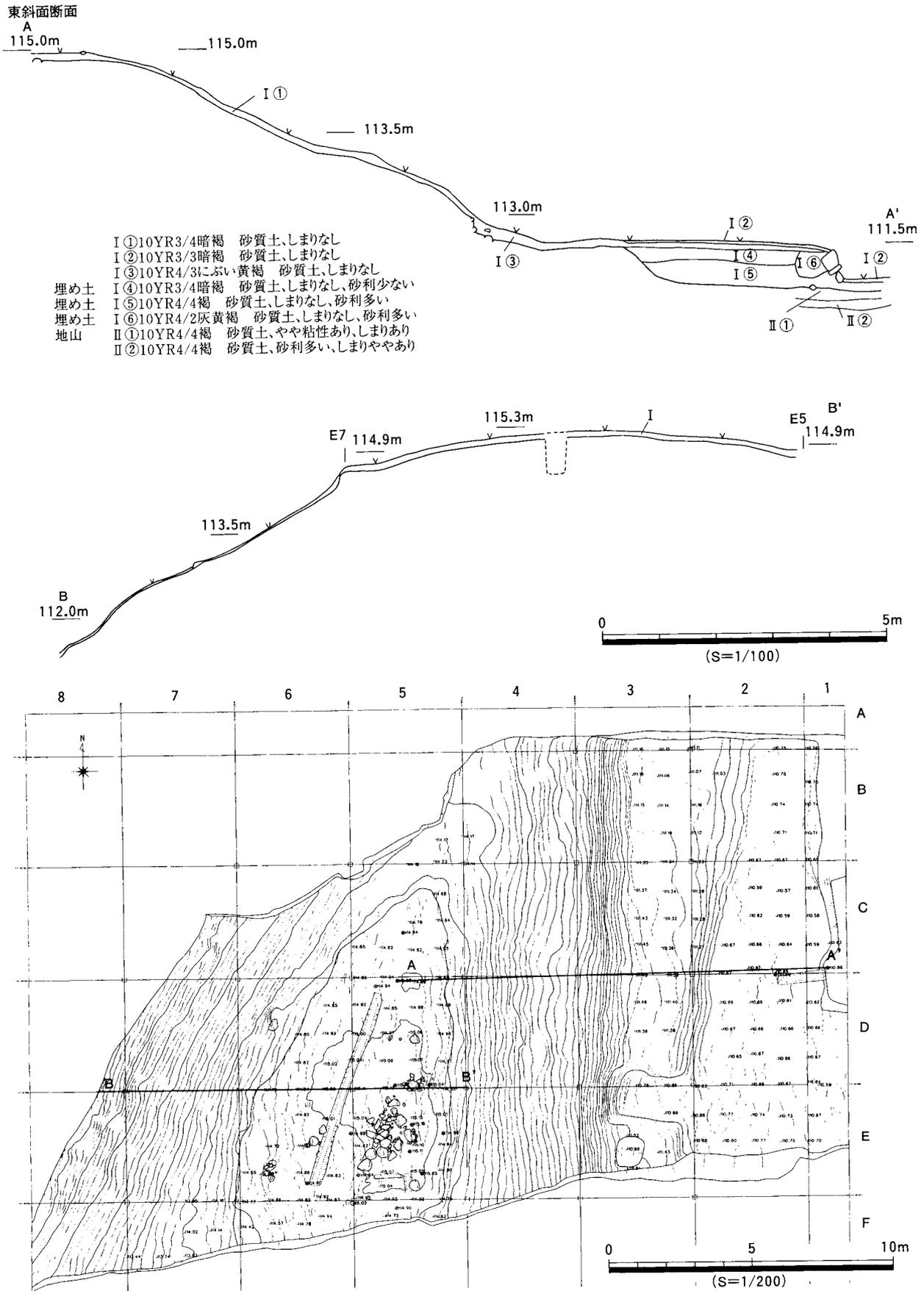
第2節 遺構・遺物の概要

遺構 検出された遺構は山の頂上部にある40cm大の扁平な22個の集石のみである。山の斜面に流れている石も数個見られる。

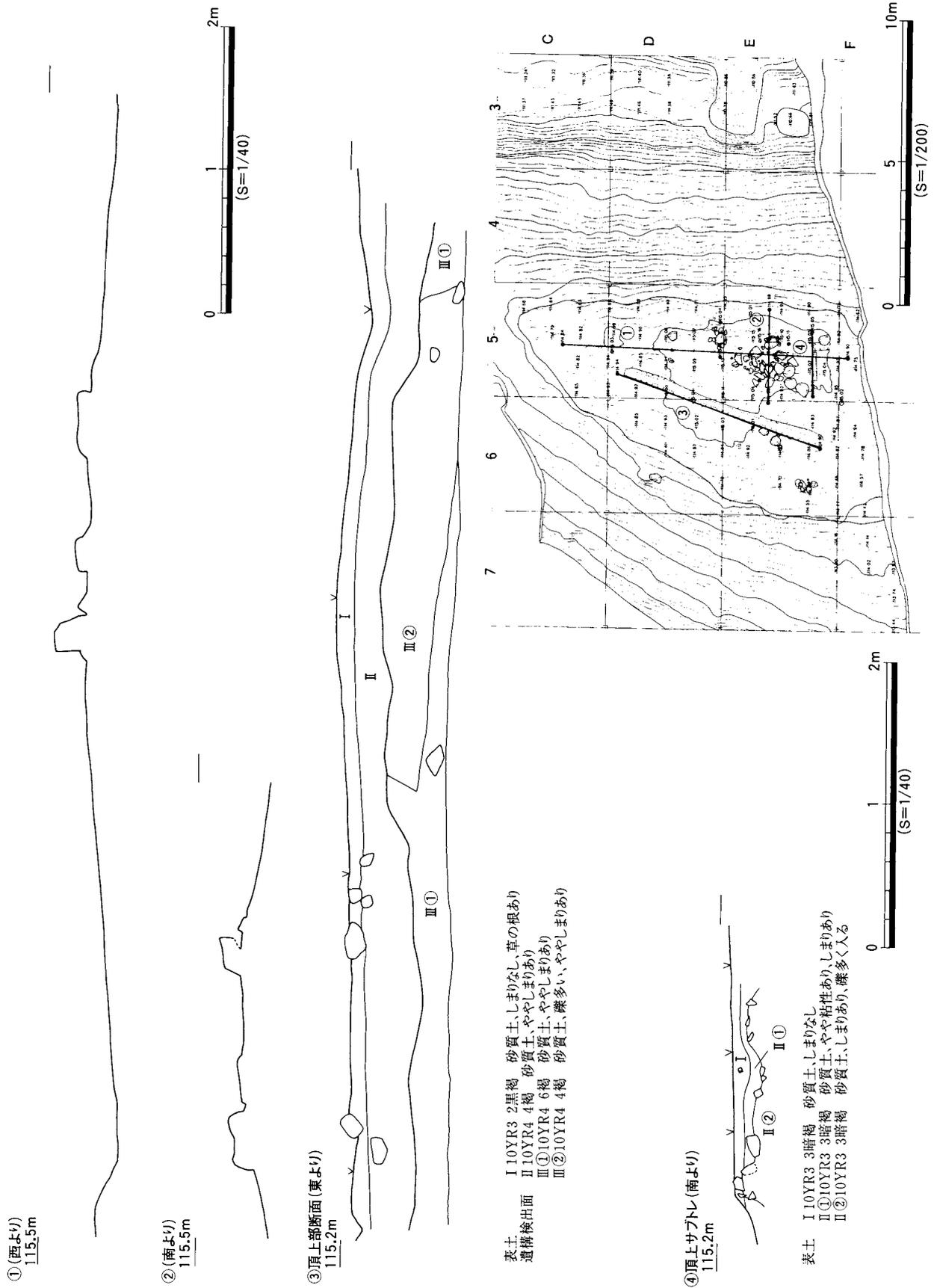
遺物 13～19世紀の遺物のほとんどが、頂上部の石の周辺から出土している。斜面から出土している陶器と磁器は、幕末以降の新しいものである。



第60図 栗坪遺跡 全体図 (S=1/200)



第61図 栗坪遺跡 東西方向断面図



第62図 栗坪遺跡 頂上部断面図

第3節 遺構と遺物

集石（第63・64図）

山の頂上部の平坦面に、幅40cm、厚みが20cmほどの砂岩の川原石が16個、チャートの角礫が6個、平坦面の東南部に集められた状況で出土している。ほとんどの石が表土の上ののっており、表土上の浮いた石をはずしたところ、表土下のにぶい黄褐色土の上にある石は3個になった。このうち2個はレベルが合うとともに石の上面が平坦になっている。これらの石は礎石の可能性も考えられるが、石の下には根石や穴を掘った形跡は見られなかった（第64図参照）。そのため、集石については、ほとんど原位置から動いて片付けられている可能性が考えられる（第63図参照）。

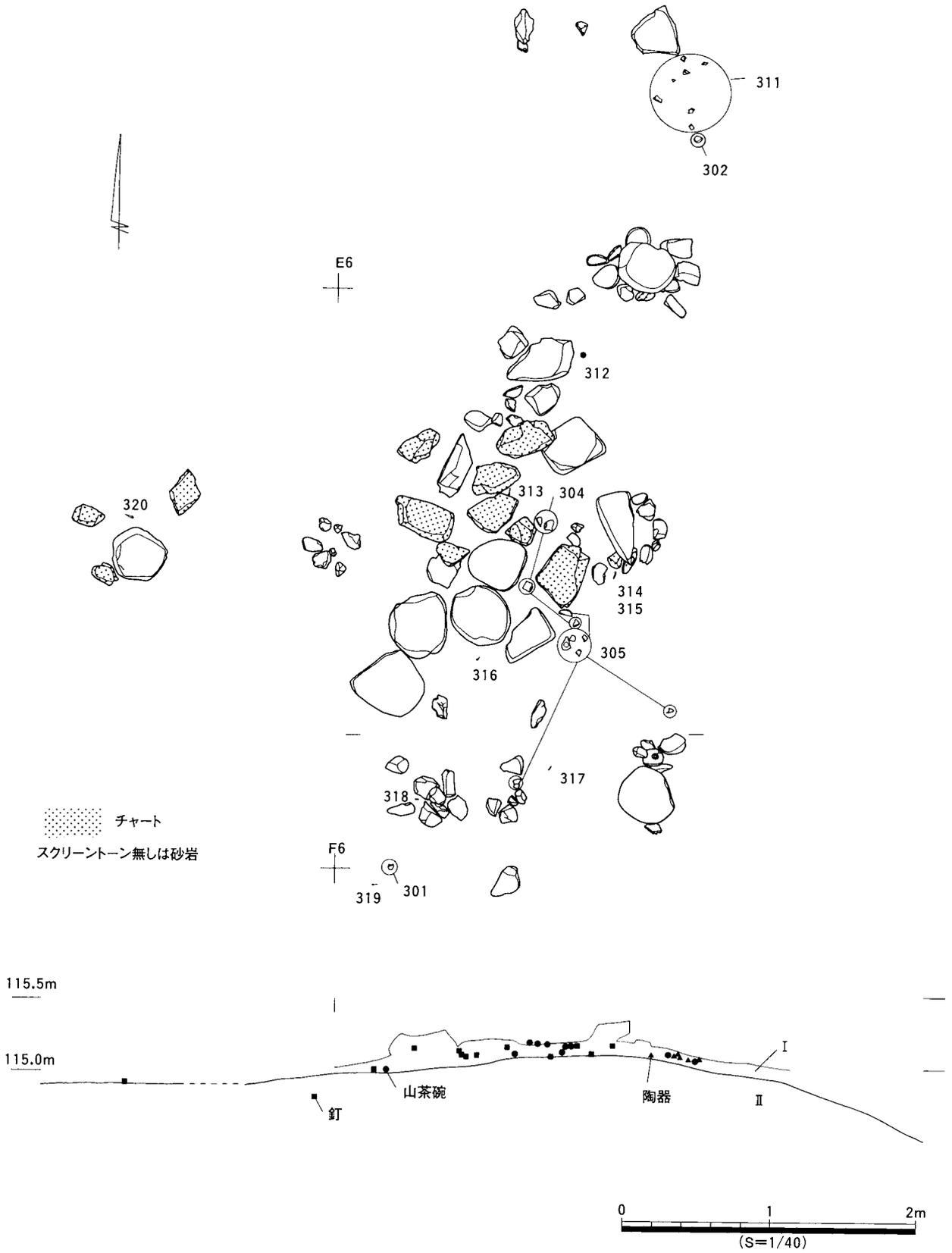
また、頂上を重機で掘り下げたが、下から天井石らしいものも出土せず、河床礫が堆積し隆起してできた尾根筋であると判断し、古墳ではないと判断した。

出土遺物は個体数で、13世紀の山茶碗が3点、14～15世紀の山茶碗が2点、18～19世紀の陶器が6点である。陶器は香炉、湯呑、灯明皿、折縁皿、碗、小坏である。鉄釘は角釘で14点出土している。

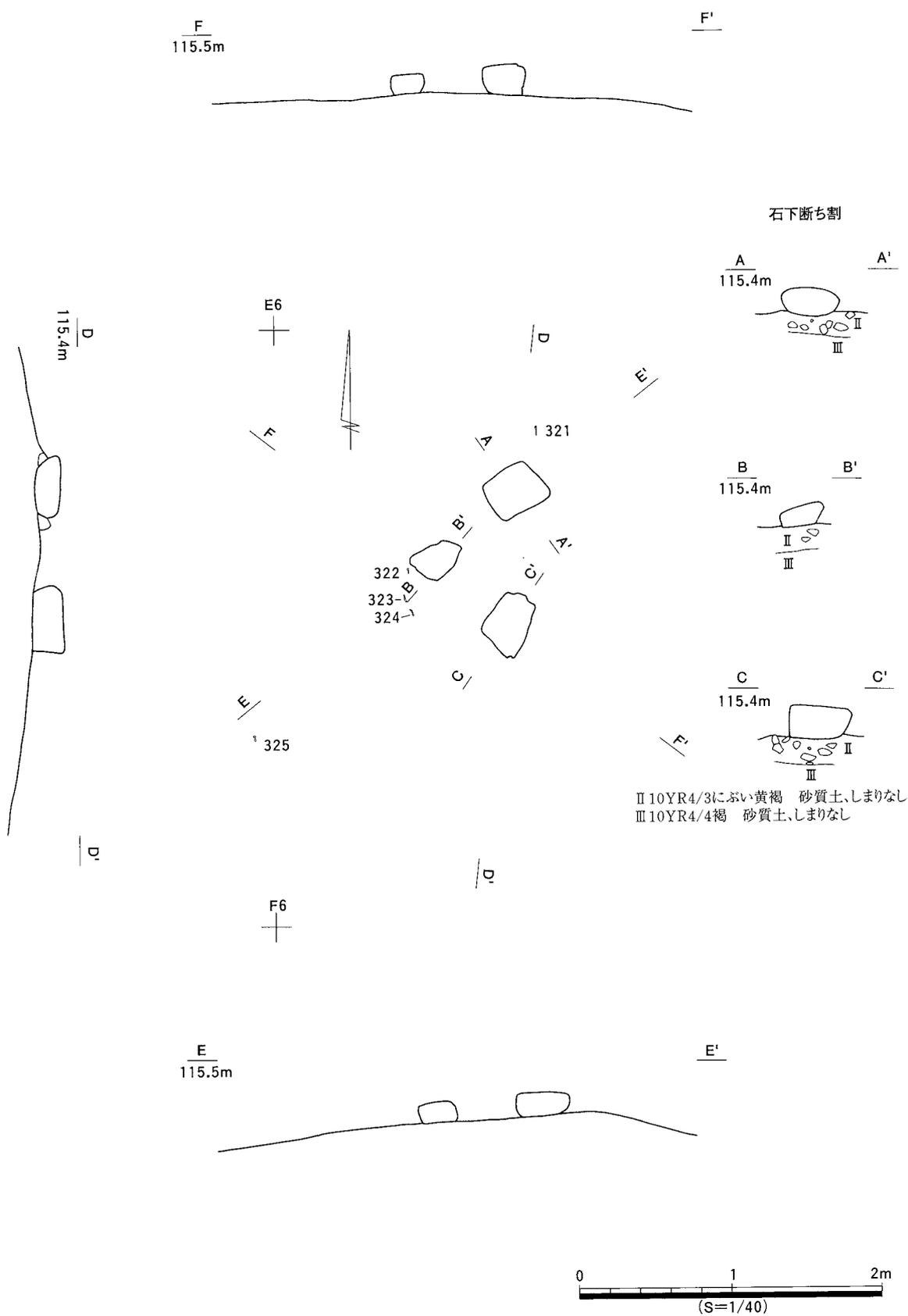
石の周辺には、13・14～15世紀の山茶碗や、18～19世紀の陶器、鉄釘が散布しているが、13～15世紀の遺物と、18～19世紀の遺物は、出土範囲に違いが見られる。18～19世紀の遺物が集石から北にはずれたところ（D 5グリッド）にかたまっているのに対して、13～15世紀の遺物はE 5グリッドの中央部の集石周辺に広く分布している（第63・74図）。鉄釘は13～15世紀の遺物の分布に似ており、2点は石をはずした下から出土している。18～19世紀の時期に、頂上部にあった石と遺物の片付けが行われている可能性が考えられる。特に18～19世紀の陶器は香炉や灯明皿など祭祀的な遺物で、祠を建ててまつりが行われていたものと思われる。

調査区の南側は直線的に削られている。尾根の先端を残して調査区より南には平坦地が作られ、また調査区の南西にも広大な平坦地がある。これらの平坦地は「植林以前のもので、新しくなければ中世～近世に人為的に削平されており、山岳宗教関係の遺跡がある可能性がある。山麓沿いの切り通しは古道である可能性があり、島状に残る高まりは古道に関連したランドマークである可能性がある。宗教的なシンボルであったために人が寄り付かなかったのではないか。近くに集落があり、段丘の中央部と山麓に古道が通り、周辺で祭祀が行われていたといえる。」と宇野隆夫氏から御教示いただいた。

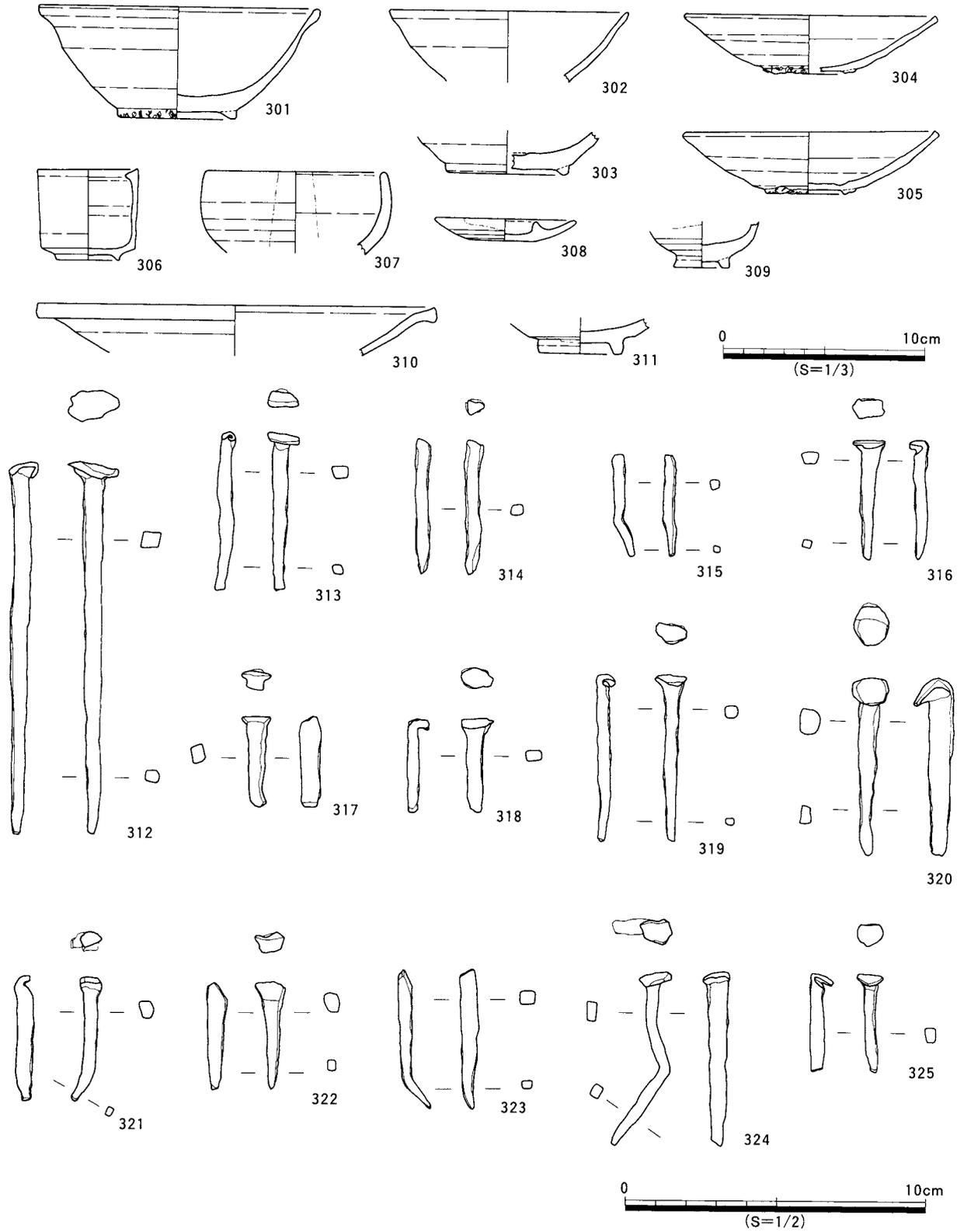
これをうけて、家田清司氏にうかがったところ「中世・近世の寺が調査区より東の山の麓にあった。山麓に集落と古道があり、それが和紙の関係で段丘側に移動して現在の御手洗の集落になった」という。平坦地と古道に関しては現集落以前につくられたものか、それより以前につくられたものかは、現時点では不明である。



第63図 栗坪遺跡 集石 平面図・断面図①



第64図 栗坪遺跡 集石平面図・断面図②



第65図 栗坪遺跡 集石出土遺物

第5章 自然科学分析

第1節 一本杉・茶屋下遺跡の粘土層の薄片観察と化学組成

藤根 久・今村美智子・小村美代子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

茶屋下遺跡の調査では、縄文時代草創期相当層以前の土層として比較的粘土質の堆積物が検出され、調査区J区では、近世と推定される粘土採掘坑も検出された。

この遺跡の周辺域では、ここで検出された粘土層が厚く堆積していることが知られ、古代の灰釉陶器をはじめ、瓦の粘土材料としても現在採掘されている地域でもある。

ここでは、茶屋下遺跡の基盤粘土層について、これら粘土の特徴について検討した。なお、比較試料として美濃市大矢田桜洞の桜洞古窯跡から出土した生焼けの灰釉陶器も同様に調べた。

2. 試料と方法

試料は、一本杉遺跡B区の基盤粘土層（No.1）、茶屋下遺跡H区より採取した基本土層粘土（No.2、No.3）、茶屋下遺跡J区粘土採掘坑（SXJ02）より採取した粘土（No.4～No.6）、美濃市桜洞古窯出土生焼け灰釉陶器（No.7）の計7点である。

以下では、薄片による顕微鏡観察と蛍光X線分析による化学組成の各分析方法について述べる。

[薄片による顕微鏡観察]

ここでは、薄片を作成し偏光顕微鏡を用いた観察を行った。なお、粘土試料は、予め電気炉で750℃、6時間で焼成した。土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片（プレパラート）を作成した。
(1)試料は、始めに岩石カッターなどで整形し（面積約6 cm²程度（2×3 cm））、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着した後、精密岩石薄片作製機を用いて平面を作成し、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2)さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。

(3)その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で分類群ごとに同定・計数した（菱田ほか、1993）。同定・計数は、100μm格子目盛を用いて任意の位置における約50μm（0.05mm）以上の鉱物や複合鉱物類（岩石片）あるいは微化石類（50μm前後）を対象とした。また、この計数とは別に薄片全面について、微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。さらに、粘土量を計算するために、ポイント・カウントを行い、5μm以上の粒子と粘土を一定間隔で400ポイント計数した。

ここで使用した各分類群の詳細は以下の通りである。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるも

のについて珪藻化石(海水種)・珪藻化石(汽水種)・珪藻化石(淡水種)と分類し、同定できないものは珪藻化石(?)とした。なお、各試料中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50 μ m前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や垂鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類(雲母)は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文象構造という)である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO₂%の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などのSiO₂%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石(主に紫蘇輝石)は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO₂%が少ない深成岩、SiO₂%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO₂%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO₂%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO₂%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[ガラス質・軽石型ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス(バブル・ウォール型)や小さな泡をたくさんもつガラス(軽石型ガラス)などがある。主に火山の噴火により噴出された噴

出物と考える。

[複合鉱物類]

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類(含雲母類)、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類(含輝石類)、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類(角閃石類)とした。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒から細粒まで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01~0.05mmのものを小型、0.05~0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類(等粒)として分類した。この複合石英類(等粒)は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

[蛍光X線分析による化学組成]

方法は、予め電気炉を用いて750℃、6時間焼成を行い水分や有機物を除去した。焼成した粘土塊から約2g採取し、セラミック乳鉢(成分 Al_2O_3 :93.4%、 SiO_2 :5%)で粉碎し粉末化した。灰釉陶器は岩石カッターで約2g採取し土壌等の付着を除去するため表面を削り、超音波洗浄し恒温乾燥機で乾燥した。

これら粉末を1.8000g秤量し乾燥させた融剤(無水四ホウ酸リチウム($\text{Li}_2\text{B}_4\text{O}_7$):リチウムメタボレイド(LiBO_2)=8:2)3.6000gと十分混ぜ合わせた。混合試料は、白金るつぼに移し、ビードサンプラー((株)東京科学製NT-2000型)により、約1100℃で400秒間溶融・350秒間混合を行い、ガラスビードを作成した。測定は、フィリップス社(現在、(株)パナリティカルに社名変更)製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX(PW2424型)を用いて検量線法による定量分析を行った。測定元素は、 Na_2O 、 MgO 、 Al_2O_3 、 SiO_2 、 P_2O_5 、 K_2O 、 CaO 、 TiO_2 、 MnO 、 Fe_2O_3 、 Rb 、 Sr である。

3. 結果

[薄片観察による計数結果と特徴]

試料中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した(表9)。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No.1:40~350 μm が多い(最大粒径1.2mm)。石英・長石類》複合石英類(微細)》砂岩質、斜長石(双晶)、雲母類、[片理複合石英類]

No.2:50~240 μm が多い(最大粒径480 μm)。石英・長石類》複合石英類(微細)》砂岩質、斜長石(双晶)、雲母類、ガラス質、角閃石類、ジルコン、珪藻化石(淡水成*Eunotia*属)、植物珪酸体化石多産

No.3:50~600 μm が多い(最大粒径1.2mm)。石英・長石類》複合石英類(微細)》砂岩質、雲母類、

ガラス質、ジルコン、植物珪酸体化石

No.4 : 50~200 μm が多い(最大粒径350 μm)。石英・長石類》複合石英類(微細)》砂岩質、雲母類、斜長石(双晶)、ガラス質、植物珪酸体化石、植物遺体

No.5 : 40~250 μm が多い(最大粒径430 μm)。石英・長石類》複合石英類(微細)》雲母類、カリ長石(微斜長石)、カリ長石(パーサイト)、斜長石(双晶)、ガラス質

No.6 : 50~320 μm が多い(最大粒径800 μm)。石英・長石類》複合石英類(微細)》雲母類、カリ長石(パーサイト)、斜長石(双晶)、ガラス質、ジルコン、植物珪酸体化石少ない

No.7 : 50~250 μm が多い(最大粒径700 μm)。石英・長石類》複合石英類(微細)》雲母類、ガラス質、ジルコン、植物珪酸体化石少ない

[化学組成]

表10に蛍光X線分析結果を示す。分析した結果、 SiO_2 が最も多く約70~77%含まれ、次いで Al_2O_3 が約14~20%、 Fe_2O_3 が約1~3%、 K_2O が約2~4%含まれている。第67図には SiO_2 - Al_2O_3 分布図を示す。 SiO_2 - Al_2O_3 分布図では全体として直線的に右下がりに分布する傾向がある。

また、茶屋下遺跡の基本土層の粘土(No.2とNo.3)と、粘土採掘坑SXJ02の対象粘土(No.4~No.6)の分析値を比較すると、 Na_2O 、 MgO 、 P_2O_5 、 K_2O 、 CaO 、 TiO_2 、 MnO 、 Fe_2O_3 、 Sr 等で分析値に差が見られる。一本杉遺跡B区の基盤粘土層(No.1)と茶屋下遺跡H区の基本土層粘土(No.2とNo.3)を比較すると、 P_2O_5 、 CaO 、 TiO_2 、 MnO 、 Fe_2O_3 、 Rb 、 Sr 等で分析値に差が見られた。

4. 考察

ここでは、薄片観察と蛍光X線分析による化学組成から、各粘土質物の特徴について考察する。なお、これら粘土質物は、比較的良質と思える粘土であり、また近世の粘土採掘坑SXJ02が検出されたこともあり、桜洞古窯から出土した生焼け灰釉陶器と比較した。

[薄片観察による特徴]

各粘土試料の薄片観察では、No.2の粘土部分において植物珪酸体化石が多産し、珪藻化石も含まれていた。これは、粘土が粘性の高い黒色の有機質粘土であり、沼沢地などで堆積した粘土と考える。なお、珪藻化石が極端に少ないが堆積後の珪藻殻の溶出現象と思われる。

これ以外の粘土試料では、植物珪酸体化石や珪藻化石は含まれないかまたは非常に少ない。

砂粒物では、全体として堆積起源の粒子が多いが、比較的粒度が細かいことから、際立った違いは見られない。ただし、No.2では、テフラ起源のガラスが比較的多く含まれていることからテフラ層が挟在する可能性がある(表11)。

なお、50 μm 以上の粒子の計数では、泥岩などの堆積岩類起源と思われる複合石英類(小型)や雲母類に違いが見られた。

なお、ポイント・カウント法による粘土量は、No.2の有機質粘土が最も高く、No.3やNo.7の生焼け灰釉陶器なども高い。

[化学組成]

一般的に土器などの焼物は、主に粘土と砂粒物から構成されるが、対象とする焼物が粘土および砂粒物組成が同一である場合には、化学分布図(例えば SiO_2 - Al_2O_3 分布図)では両者を結んだ直線上に位置することが分かってきた(小村・藤根、2002)。

ここで検討した粘土について蛍光X線分析による化学組成を調べた結果、 SiO_2 - Al_2O_3 分布図においては比較的直線性の高い結果が得られた(第67図;相関係数の2乗値が0.9752と高い)。これは、いずれも層位的に隣接する粘土層であることに起因するためと考えられる。しかし、その他の元素についての化学分布図では、試料No.2、No.3、No.7の一群とその他の一群では、直線性に違いが見られた。特に、 Na_2O 、 MgO 、 K_2O 、 Fe_2O_3 において顕著であり(第68図および第69図)、その他の元素においてもこうした傾向が見られた。

なお、桜洞古窯から出土した灰釉陶器 (No.7) は、No.2 やNo.3 との直線に近いことから、これらの粘土層に近い材料が利用された可能性が高い。

5. まとめ

化学組成から、No.2 とNo.3 あるいは灰釉陶器のNo.7 では、その他試料の一群と主成分元素の多くにおいて違いが見られた。薄片では、テフラ起源のガラスに違いが見られるほか、泥岩などの堆積岩類起源と思われる複合石英類 (小型) や雲母類に違いが見られた。No.2 とNo.3 の粘土は、黒色あるいは黒色粘土混じり有機質粘土である。なお、化学組成の検討から、比較試料とした灰釉陶器は、No.2 あるいはNo.3 に近い特徴をもつ粘土が利用された可能性が考えられる。

さて、No.2 は黒色粘土層であるが、層位的には放射性炭素年代測定結果の $15,840 \pm 50$ yrBP (PLD-1667) に近い年代に堆積したものと考えられる。なお、この下位層では、この黒色粘土がひび割れ内に堆積するオープクラック構造が見られたことから、旧地表面の痕跡と考えられる。なお、この下位層中には、薄片の顕微鏡観察からテフラ起源のガラスが比較的多く含まれていた。このガラスの屈折率を測定したところ範囲が $1.4968 - 1.4995$ (平均 1.4987) であった。この屈折率の値は、AT火山灰の従来値の範囲 $1.498 - 1.501$ (町田・新井、1992) に近いことからAT火山灰と同定される。

縄文時代以降、土器などの焼物類は、基本的には良質の粘土材料が必要であり、こうした粘土が採取できる地域において焼物作りは優位に行われたものとする。これまで焼物類の製作地の推定は多く行われているが、基本となる材料粘土などの検討は貧弱である (車崎ほか、1996)。こうした材料に関する検討がより確かな製作地の推定にもつながる作業である事は間違いない。

こうしたことから、今後、材料として良質の粘土層の広域的な地質調査が不可欠と考え、粘土や砂粒の特徴に関する検討が大切である。

謝辞

美濃市教育委員会からは、桜洞古窯から出土した灰釉陶器の提供を受けました。ここに感謝致します。

引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 2, 73-88.
- 菱田 量・車崎正彦・松本 完・藤根 久 (1993) 岩石学的方法に基づく胎土分析について - 弥生時代後期の土器を例にして -. 日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集, 34-35.
- 小村美代子・藤根 久 (2002) 山茶碗胎土の化学的評価. 日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集, 60-61.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- 車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子 (1996) (39) 土器胎土の材料 - 粘土の起源を中心に -. 日本考古学協会第62回大会研究発表要旨, 153-156.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス [日本列島とその周辺]. 東京大学出版会, 276p.

表8 薄片観察及び蛍光X線分析試料の詳細

試料	遺跡・調査区	遺構・層位	No.	色調	堆積物	備考
1	一本杉遺跡B区	基盤層	S1	灰白色	砂質粘土	
2	茶屋下遺跡H区	基本土層	S1	黒色	有機質粘土	縄文草創期以前 (15,840±50 yrBP)
3			S3	灰色	有機質粘土	Open Crack構造を示す
4	茶屋下遺跡J区	採掘坑SXJ02	S3	灰白色	細砂質粘土	土坑最上位層
5			S2	淡黄色	粘土質細砂	
6			S1	淡黄色	細砂質粘土	土坑最下位層
7	桜洞古窯	灰釉陶器	椀	灰白色		生焼け試料

表9 粘土及び灰釉陶器胎土中の粒子組成一覧表

分類群	1	2	3	4	5	6	7
微化石類							
珪藻化石 (淡水種)	-	2	-	-	-	-	-
植物珪酸体化石	-	119	17	-	-	1	3
鉱物類							
石英・長石類	135	101	100	101	101	103	101
石英・長石類 (含雲母類)	2	6	8	8	13	14	-
斜長石 (双晶)	-	-	-	1	2	4	-
カリ長石 (パーサイト)	1	1	-	1	2	2	-
カリ長石 (微斜長石)	-	-	-	-	-	-	-
雲母類	26	5	18	22	20	20	2
単斜輝石	-	-	1	1	-	-	-
角閃石類	1	-	-	-	-	-	-
ジルコン	-	1	1	1	-	-	1
ガラス質	-	13	28	1	1	4	2
複合鉱物類							
複合雲母類	3	-	-	2	4	1	-
複合鉱物類 (含雲母類)	3	6	8	5	6	3	-
複合石英類 (大型)	3	-	-	-	-	1	-
複合石英類 (中型)	6	2	1	3	7	3	2
複合石英類 (小型)	36	28	39	15	19	17	52
複合石英類 (微細)	19	10	9	4	13	15	2
砂岩質	9	1	4	1	1	1	1
泥岩質	3	-	-	1	-	-	-
その他							
不透明	1	-	3	2	-	-	-
不明	1	-	-	-	-	-	1
総ポイント数	249	295	237	169	189	188	168

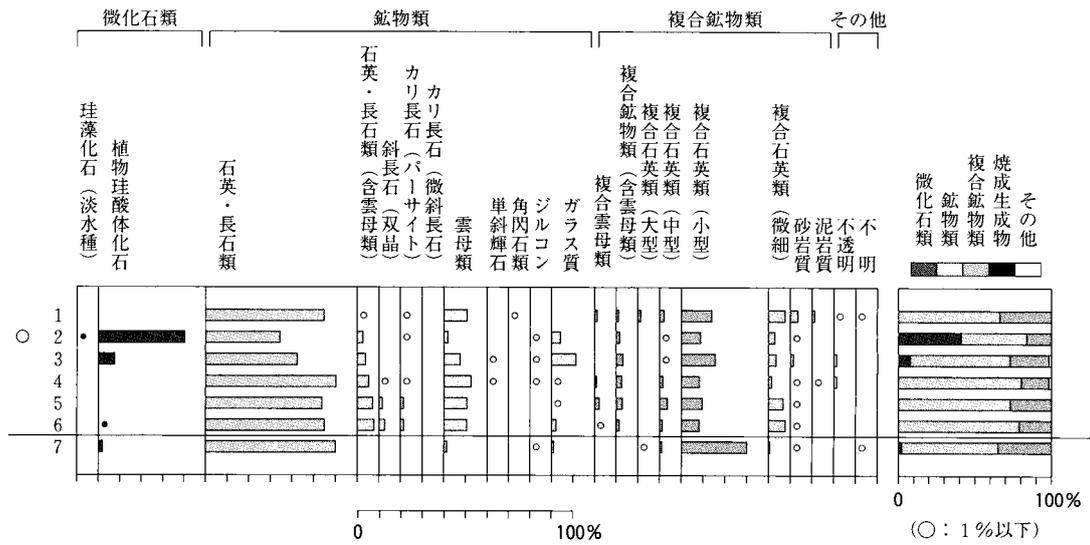
表10 蛍光X線分析による試料の主成分元素(単位:%)と微量元素(単位:ppm)

(化学組成) [主成分元素]Na₂O: 酸化ナトリウム, MgO: 酸化マグネシウム, Al₂O₃: 酸化アルミニウム, SiO₂: 酸化ケイ素, P₂O₅: 酸化リン, K₂O: 酸化カリウム, CaO: 酸化カルシウム, TiO₂: 酸化チタン, MnO: 酸化マンガン, Fe₂O₃: 酸化鉄 [微量元素]Rb: ルビジウム, Sr: ストロニウム

No.	遺跡名	番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	TOTAL	Rb	Sr
1	一本杉遺跡B区		0.19	0.90	13.53	77.32	0.023	2.52	0.12	0.69	0.016	2.17	97.48	125.5	30.7
2	茶屋下遺跡H区	S1	0.21	0.91	17.75	71.66	0.058	2.20	0.43	0.81	0.035	1.88	95.93	145.6	44.2
3		S3	0.24	1.13	19.23	70.11	0.057	2.40	0.30	0.92	0.027	2.39	96.81	152.6	48.6
4	茶屋下遺跡J区	S3	0.62	0.43	18.23	72.14	0.023	3.08	0.19	0.62	0.015	1.65	96.99	138.3	52.9
5		S2	1.02	0.36	16.95	73.55	0.019	3.47	0.18	0.52	0.013	1.38	97.45	141.8	64.4
6		S1	1.21	0.39	17.80	71.68	0.020	3.63	0.20	0.55	0.017	1.35	96.86	158.0	71.5
7	桜洞古窯		0.31	1.05	19.53	69.78	0.030	2.45	0.09	0.99	0.012	2.60	96.85	127.1	38.1
	測定誤差		0.02	0.06	0.07	0.39	0.005	0.03	0.02	0.01	0.002	0.07	-	1.2	3.9
	平均値		0.54	0.74	17.57	72.32	0.033	2.82	0.22	0.73	0.019	1.92	96.91	141.27	50.07
	最大値		1.21	1.13	19.53	77.32	0.058	3.63	0.43	0.99	0.035	2.60	97.48	157.99	71.53
	最小値		0.19	0.36	13.53	69.78	0.019	2.20	0.09	0.52	0.012	1.35	95.93	125.45	30.67

表11 弥生時代中期土器胎土の粘土と砂粒の特徴

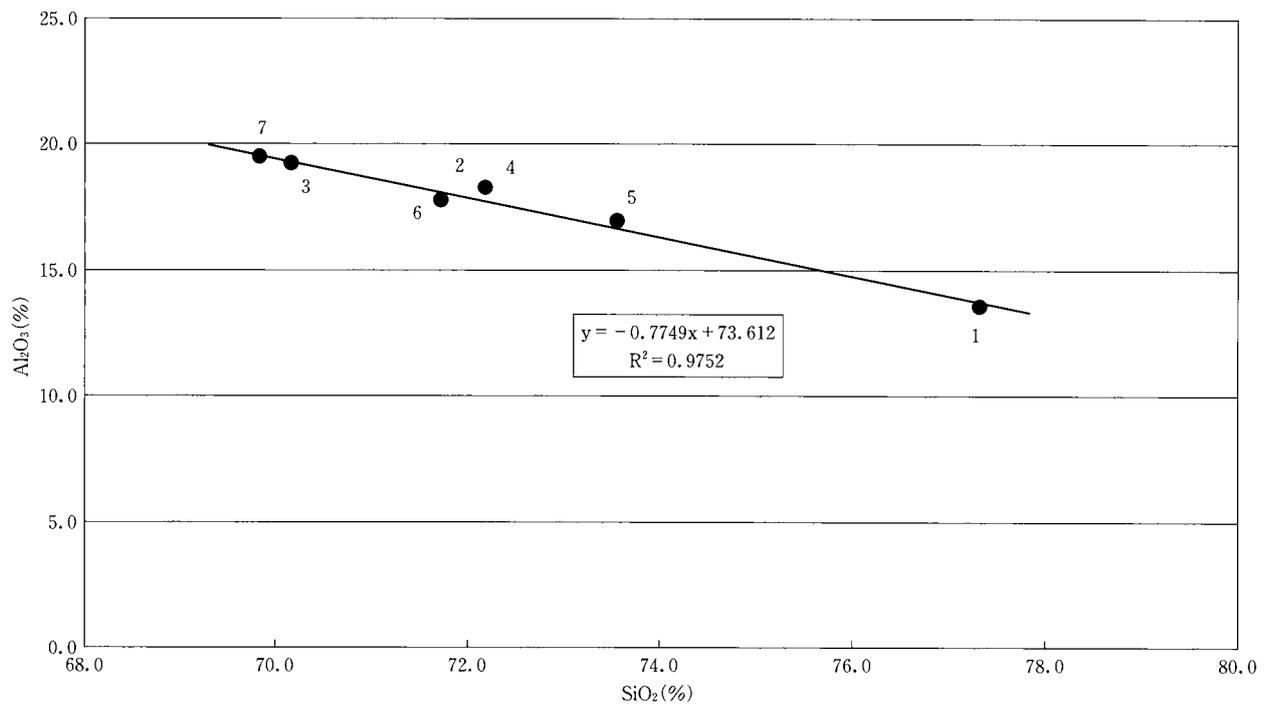
No.	遺跡名	番号	粘土の特徴			砂粒の特徴			植物珪酸体化石		粘土の量 (面積%)	その他
			分類	種類	淡水種珪藻化石	分類	粒度順()は極端な場合、[]は稀	出現頻度	その他			
1	一本杉遺跡B区			その他		C	堆積岩類) [片岩類]			50.00		
2	茶屋下遺跡H区	S1	○	(淡水成)	△	Cf	堆積岩類) テフラ	◎	タケ亜科・ヨシ属など	71.75	縄文草創期以前 (15,840±50 yrBP)	
3		S3		その他		Cb	堆積岩類) 深成岩類、テフラ	△		65.75	AT火山灰挟在	
4	茶屋下遺跡J区	S3		その他		C	堆積岩類) [テフラ]	△		56.75		
5		S2		その他		C	堆積岩類) [テフラ]			48.25		
6		S1		その他		C	堆積岩類) [テフラ]			41.75		
7	桜洞古窯			その他		C	堆積岩類) [テフラ]	△		59.75		



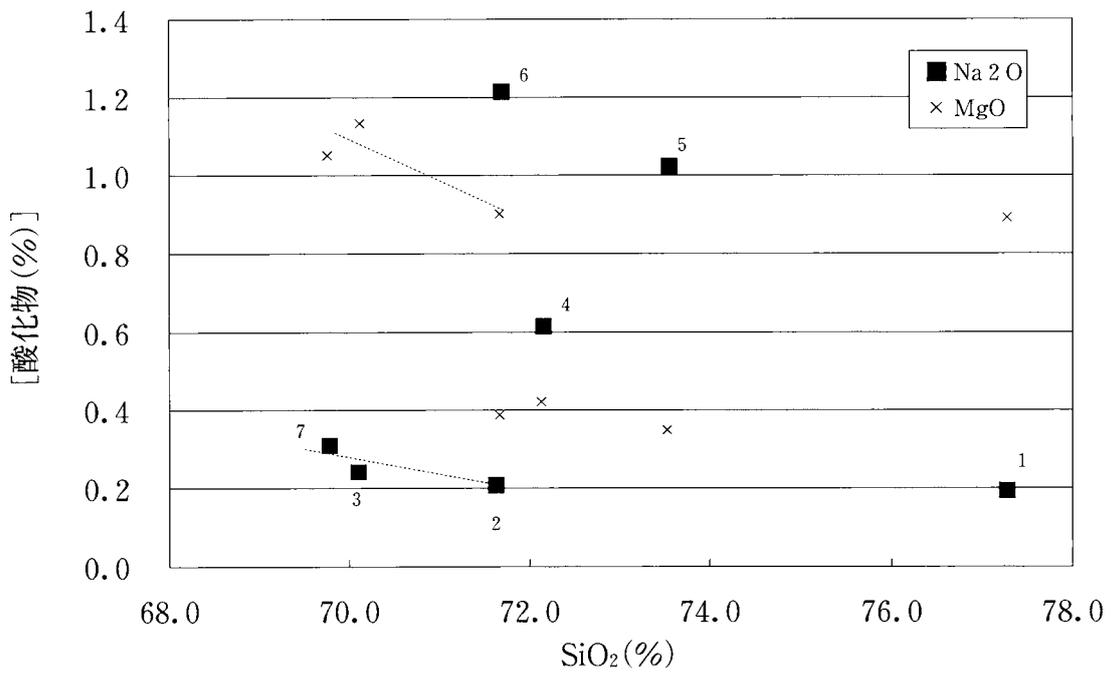
[粘土の区分 (試料番号左)]

○: 淡水成粘土 (淡水種珪藻化石などの出現) ナシ: その他粘土 (微化石類を含まない)

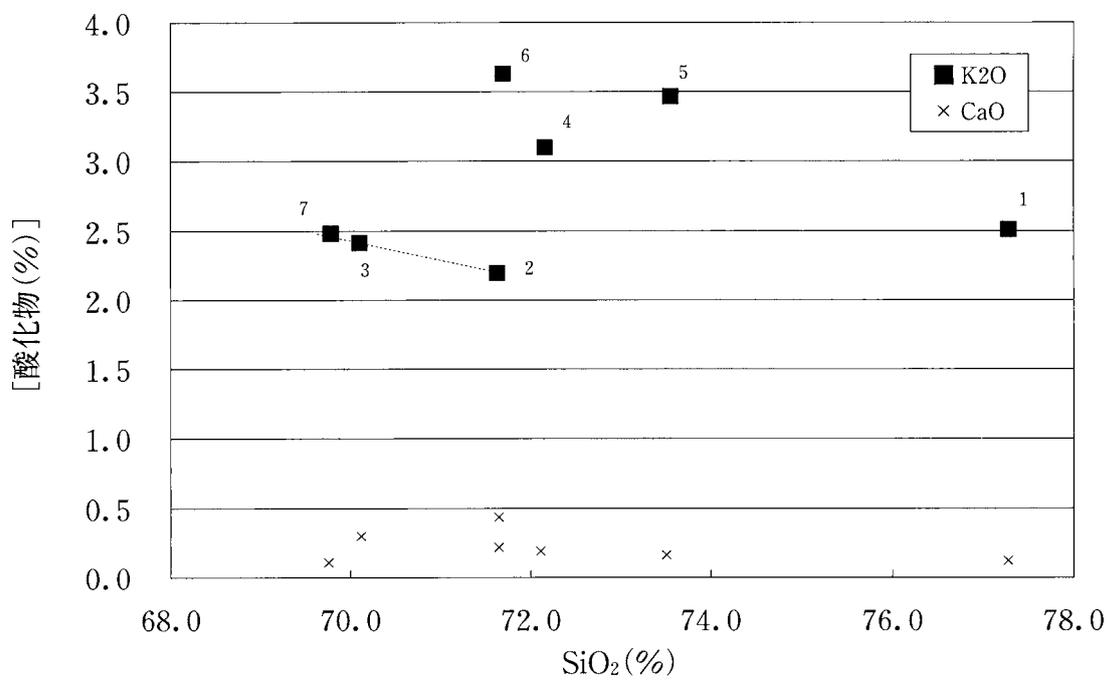
第66図 粘土及び灰釉陶器胎土中の粒子組成 (全分類群を基数とした百分率として表示)



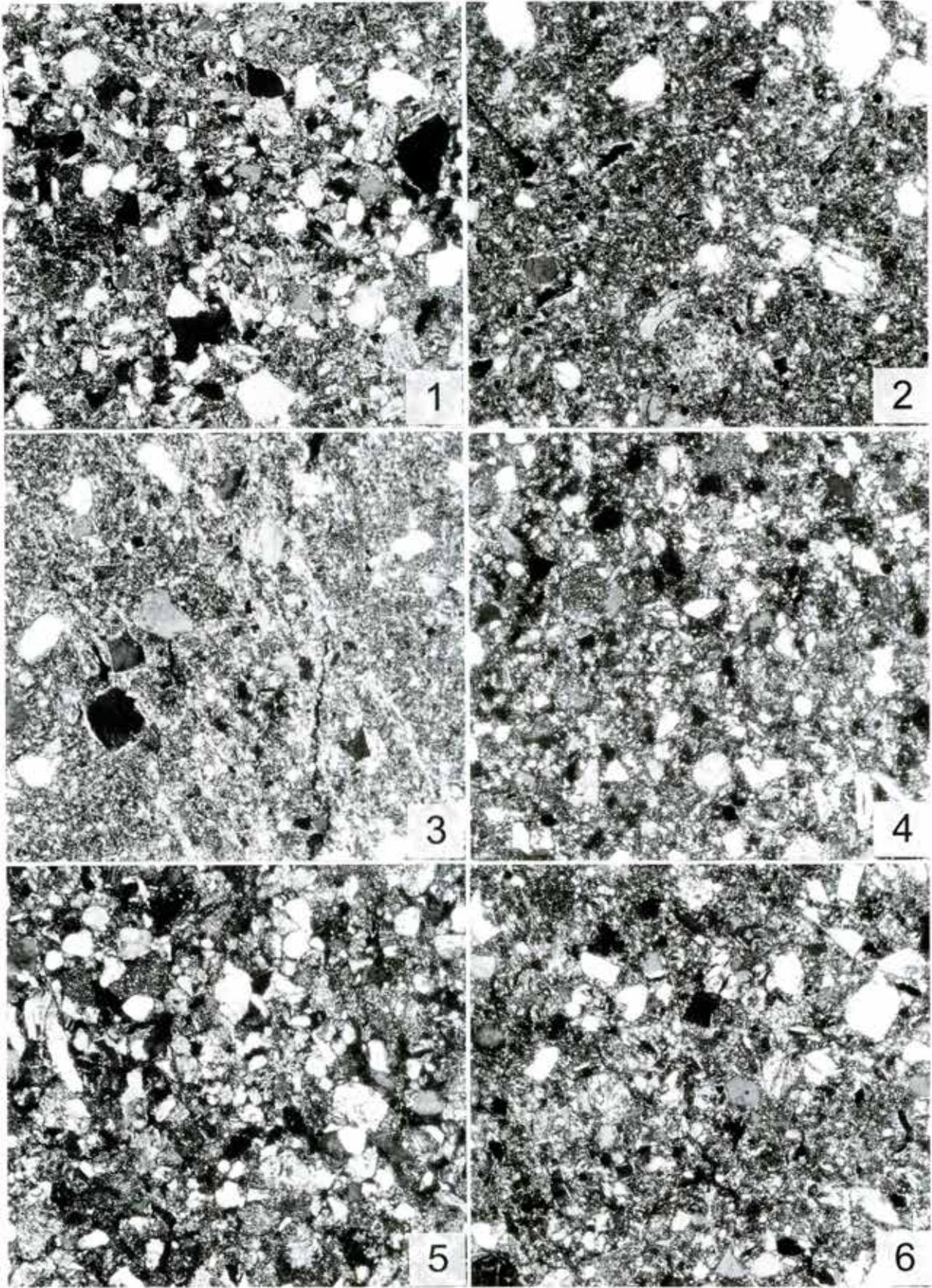
第67図 Al_2O_3 - SiO_2 分布図



第68图 [Na₂O·MgO]-SiO₂分布图



第69图 [K₂O·CaO]-SiO₂分布图



1. 一本杉遺跡B区粘土 2. 茶屋下遺跡H区-S1 3. 茶屋下遺跡H区-S3
4. 茶屋下遺跡J区 SXJ02-S1 5. 茶屋下遺跡J区 SXJ02-S2 6. 茶屋下遺跡J区 SXJ02-S3

文章中図版1 粘土及び灰釉陶器薄片の顕微鏡写真 (スケール; 0.5mm)

第2節 茶屋下遺跡の花粉化石群集

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. 試料

茶屋下遺跡は、岐阜県美濃市に所在する。花粉化石群集の検討は、J区SDJ03の最下層（北壁断面）より採取された1試料について行った。試料は黒褐色砂質粘土であり、時代については出土遺物から12～15世紀と考えられている。

2. 方法

花粉化石の抽出は、試料約2gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

3. 花粉化石群集の記載

同定された分類群数は、樹木花粉21、草本花粉10、形態分類で示したシダ植物胞子2である。樹木花粉の占める割合は60%弱である。その中で、アカガシ亜属が30%程度で最も高率である。次いで、コナラ亜属が約13%、コウヤマキ属が約9%であり、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、シイノキ属、スギ属、マツ属複雑管束亜属、クマシデ属-アサダ属が5%前後である。他では、カキ属などが低率で出現する。草本花粉では、イネ科が20%程度、カヤツリグサ科が10%程度であり、オモダカ属、アリノトウグサ属、オミナエシ属、ヨモギ属、タンポポ亜科などが低率で出現する。

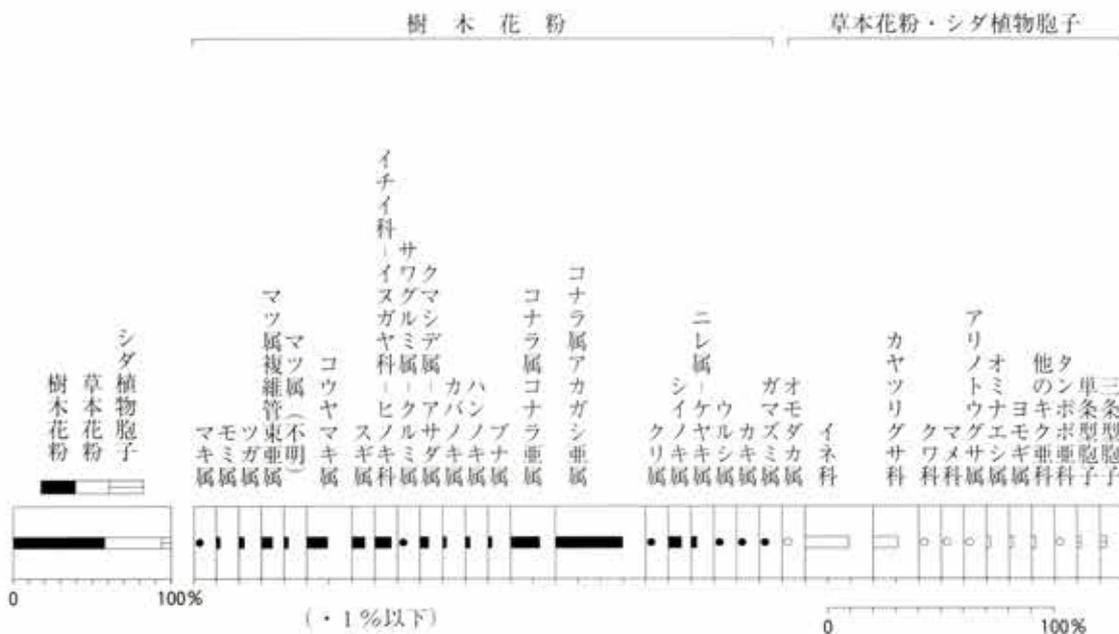
4. 考察

周辺の森林植生については、アカガシ亜属を主体にシイノキ属などをまじえた照葉樹林が発達していたと予想される。主要な要素としては、落葉広葉樹ではコナラ亜属、クマシデ属-アサダ属、針葉樹ではコウヤマキ属をはじめ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、スギ属、マツ属複雑管束亜属であったと考えられる。また、付近には、カキ属が生育していたと考えられるが、カキノキの栽培が行われていた可能性も考えられる。堆積環境については、オモダカ属が生育するような水位の低い湿地ないし水溜りのような環境が予想され、カヤツリグサ科なども生育していたであろう。また、付近には、アリノトウグサ属、オミナエシ属、ヨモギ属、タンポポ亜科などが生育する日当たりの良い草地がみられたであろう。比較的多産するイネ科については、属まで絞り込むことは困難であるが、スキ、シバなどの草地優占種の他、溝内にヨシなどが生育していた可能性も考えられる。

表12 花粉化石産出一覧表

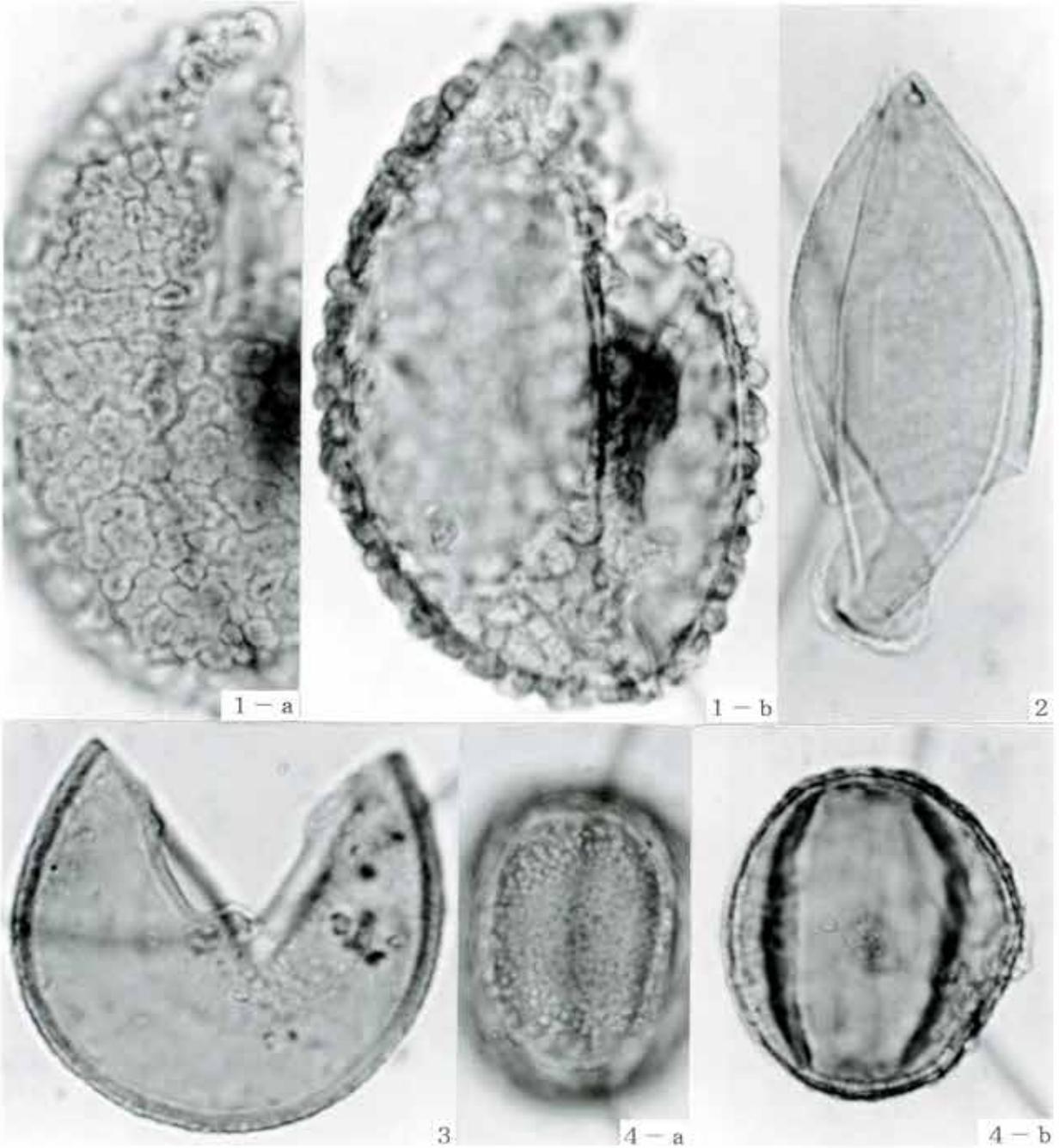
和名	学名	
樹木		
マキ属	<i>Podocarpus</i>	1
モミ属	<i>Abies</i>	5
ツガ属	<i>Tsuga</i>	7
マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	13
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	6
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	23
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	14
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	18
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya</i> - <i>Juglans</i>	1
クマシラ属-アサダ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	10
カバノキ属	<i>Betula</i>	4
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	6
ブナ属	<i>Fagus</i>	4
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	32
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	73
クリ属	<i>Castanea</i>	1
シノキ属	<i>Castanopsis</i>	15
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	8
ウルシ属	<i>Rhus</i>	1
カキ属	<i>Diospyros</i>	1
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	1
草本		
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	1
イネ科	Gramineae	84
カヤツリグサ科	Cyperaceae	48
クワ科	Moraceae	1
マメ科	Leguminosae	1
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	1
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	6
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	7
他のキク亜科	other Tubuliflorae	7
タンポポ科	Liguliflorae	1
シダ植物		
単条型胞子	Monolete spore	7
三条型胞子	Trilete spore	17
樹木花粉	Arboreal pollen	244
草本花粉	Nonarboreal pollen	157
シダ植物胞子	Spores	24
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	425
不明花粉	Unknown pollen	17

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae を示す

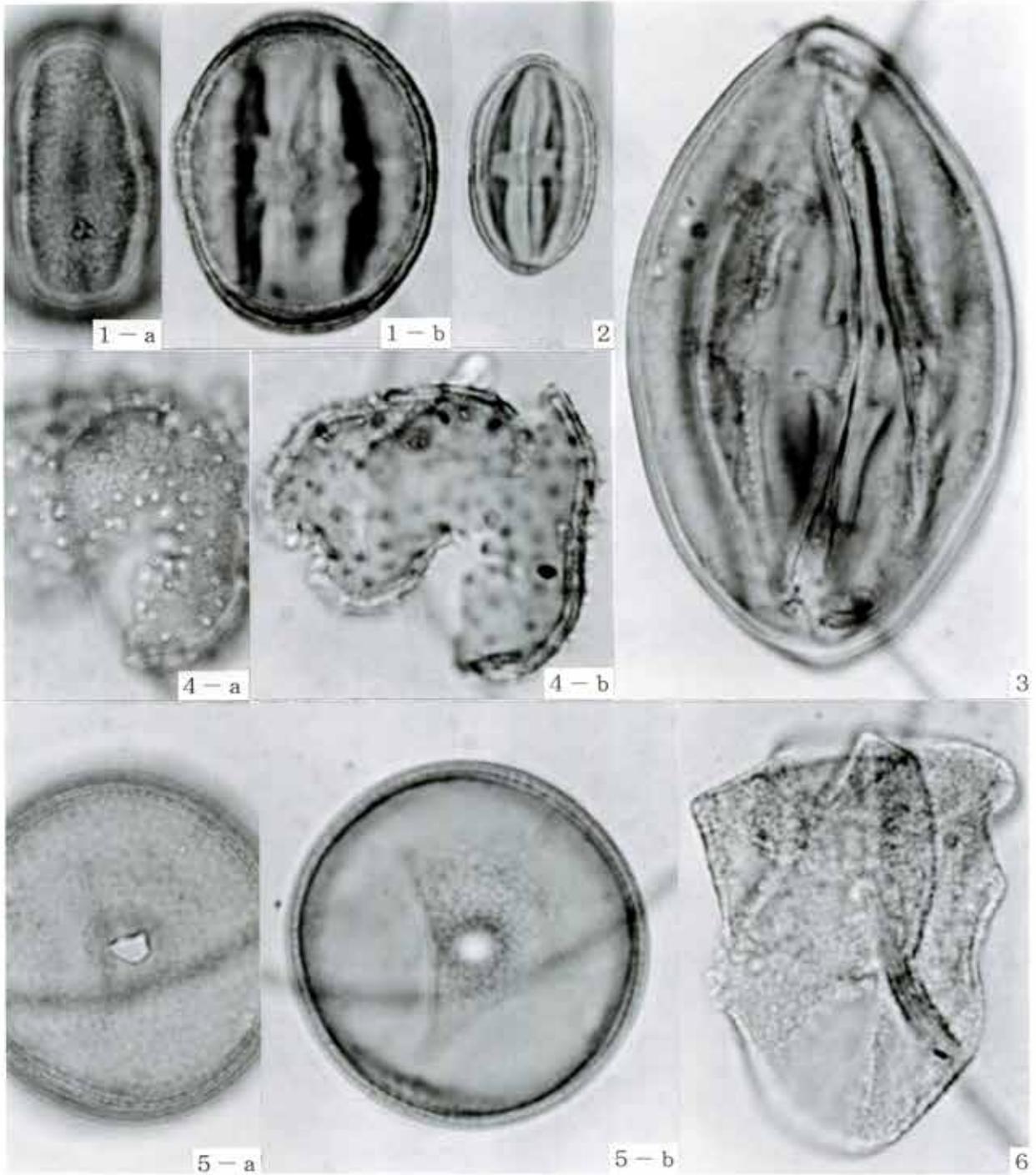


(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

第70図 J区 SDJ03(最下層)の花粉化石分布図



1. コウヤマキ属、PAL.MN 1898
2. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、PAL.MN 1905
3. スギ属、PAL.MN 1900
4. コナラ属コナラ亜属、PAL.MN 1899
文章中図版2 産出した花粉化石 (scale bar : 10 μ m)



1. コナラ属アカガシ亜属、PAL.MN 1896
2. シイノキ属、PAL.MN 1902
3. カキ属、PAL.MN 1897
4. オモダカ属、PAL.MN 1901
5. イネ科、PAL.MN 1904
6. カヤツリグサ科、PAL.MN 1903

文章中図版3 産出した花粉化石 (scale bar : 10 μ m)

第3節 一本杉・茶屋下遺跡の放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

一本杉遺跡より検出された木片および茶屋下遺跡より検出された炭化材の加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、一本杉遺跡より、SIB01から出土した杭より採取した木片 (クリ) 1点、NRC01から出土した木片 (コナラ節) 1点、NRC02の4層 (粘土層) から出土した木片1点、G93Ⅲ層直上から出土した木材 (モミ属) の外側部分より採取した木片1点の併せて4点と、茶屋下遺跡より、H区のSXH02、M2から出土した炭化材 (広葉樹) 1点、計5点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3. 結果

表13に、各試料の同位体分別効果の補正值 (基準値 - 25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値 (yrBP) の算出は、¹⁴Cの半減期として Libby の半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴Cの半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を較正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

¹⁴C年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB4.3 (CALIB3.0のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代較正值は¹⁴C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさを確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさを確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲と

して示された。

引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の¹⁴C年代, p. 3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000 - 0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

表13 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-1665 (AMS)	木片 (クワ) 一本杉 SIB01 杭	-25.6	150 ± 25	cal AD 1680 cal AD 1735 cal AD 1805 cal AD 1930 cal AD 1945	cal AD 1675 - 1695 (16.3%) cal AD 1725 - 1775 (42.7%) cal AD 1800 - 1815 (10.0%) cal AD 1920 - 1940 (20.1%)
PLD-1666 (AMS)	木片 (コナラ節) 一本杉 NRC01	-26.4	1490 ± 30	cal AD 600	cal AD 540 - 605 (100%)
PLD-1667 (AMS)	木片 一本杉 NRC02 4層(粘土層)	-25.1	15840 ± 50	cal BC 16960	cal BC 17250 - 16670 (100%)
PLD-1790 (AMS)	木片 (モミ属) 一本杉 G93Ⅲ層直上	-25.4	660 ± 30	cal AD 1300 cal AD 1375	cal AD 1290 - 1305 (32.7%) cal AD 1355 - 1385 (67.3%)
PLD-2161 (AMS)	炭化材 (広葉樹) 茶屋下H区 SXH02, M2	-26.2	5875 ± 35	cal BC 4770 cal BC 4750 cal BC 4725	cal BC 4780 - 4710 (100%)

第4節 茶屋下遺跡出土炭化材樹種

植田弥生(パレオ・ラボ)

1. はじめに

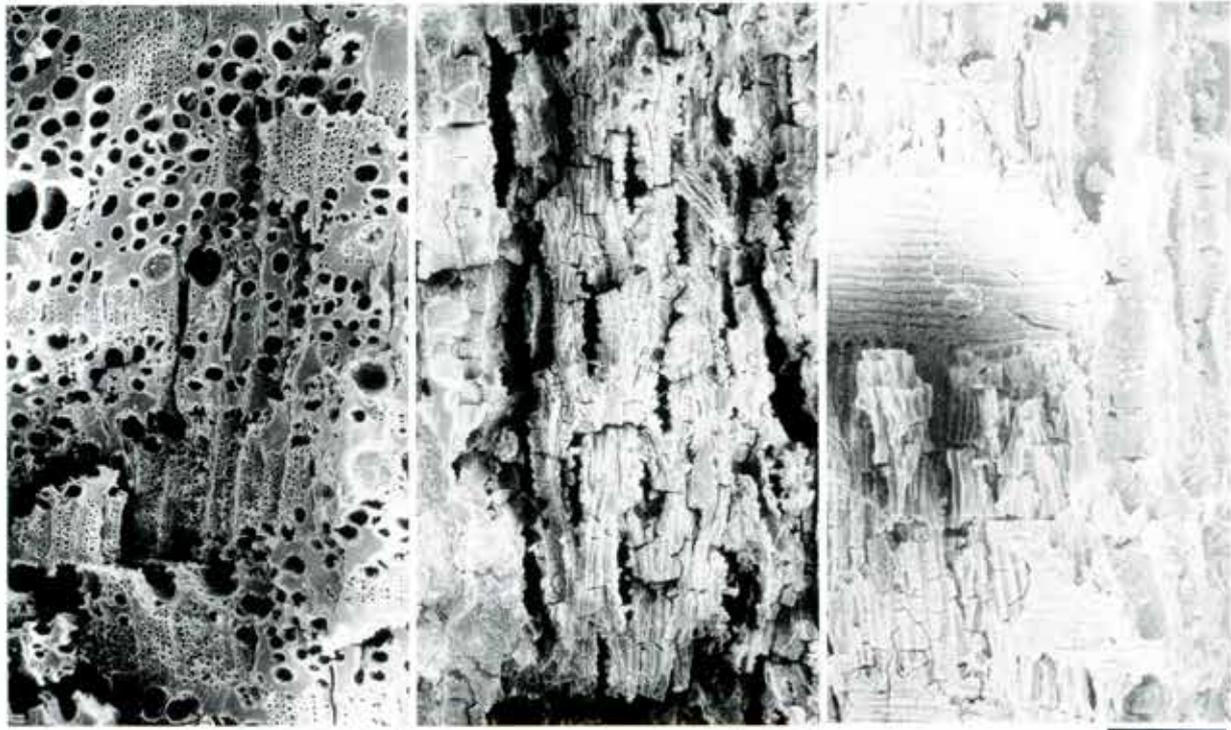
ここでは、SXH02のM2層から出土した炭化材1点の樹種同定結果を報告する。

2. 方法

炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に片歯の剃刀を用いて接線断面と放射断面を弾くように割り、3方向の断面を走査電子顕微鏡で拡大し材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

炭化材は、幅1.5cm、厚み5mm、長さ5cmほどの板状であった。材組織を観察した結果、横断面では大型と小型の管孔が認められるがその配列は不明瞭で規則性は見られず、道管の穿孔は単穿孔であるのが確認され、放射組織は多細胞幅の紡錘形でほぼ同性のようであった(文章中図版4)。この炭化材は保存が悪く、大型の管孔は発砲した穴の恐れもあり、道管を持つ広葉樹材であることは判ったが、分類群を特定できる特徴は認められなかった。



1a 不明広葉樹(横断面)
SXH02 bar:0.5mm

1b 不明広葉樹(接線断面)
SXH02 bar:0.1mm

1c 不明広葉樹(放射断面)
SXH02 bar:0.1mm

文章中図版4 茶屋下遺跡出土炭化材樹種

第6章 まとめ

第1節 一本杉・茶屋下・改田遺跡について

当遺跡の遺構面は主に下層（縄文時代）と上層（中世・近世）の2面であるが、調査区全体が大きな谷の中にあり地層は一定していない。上層直上は道路やほ場整備の攪乱を受けている。南流する自然流路が、東西に長い調査区内に3条検出されている。自然流路の周辺には粘土を採掘してできた窪地が多く、起伏がはげしい地形である。粘土は近世の水田開拓前に採掘されている。下層の最終検出地質の違いからは大きくD区より東と西に分けられる。地形は東が低く、砂地と水を始終含んだ緩い粘土である。西の地形は高く、硬い粘土と細かい礫の地層になる。この違いは字絵図で推定される地形の変化にあてはまる（第71図）。

上層で検出された遺構は中世の溝跡1条と柱穴、近世の石列¹⁾・粘土採掘跡である。近世には低湿地に床土をひいて耕作土を入れて水田に開拓したようである。下層で検出された遺構は縄文時代の自然流路3条と、石器と炭化材が出土した土坑1基である。遺構出土の石器は早期²⁾のものであるが、当遺跡の南西には美濃市教育委員会が調査した縄文時代草創期の渡来川北遺跡がある。当遺跡では遺跡の中心は検出されなかったが、今後の調査で周辺環境が明らかになることを期待したい。

遺物総数からみた土器の組成比は、縄文土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・土師器皿³⁾（京都系土器を含む）・山茶碗（12～13世紀）・古瀬戸・常滑・瀬戸美濃大窯・輸入磁器が少なく、山茶碗（14～15世紀）・瀬戸美濃連房が多い。14世紀後半～15世紀と近世のものが中心で、特に中世の時期の遺物が多い（表14）。当調査区から中世の遺構は少数のみの検出のため、北が高く南が低い地形から考えると、調査区の北側からの流れ込みで、出土量から考えると北にはかなりの遺跡があると思われる。

石器はF区（47%）・G区（22%）・H区（24%）・J区（6%）から出土している（表16）。その他の時代の遺物に比べると出土位置は調査区の西半分にかたよっており、そのほとんどは自然流路の埋土と土坑から出土している。剥片石器はほとんどがチャートで、それ以外の石器は打製石斧と敲石・凹石で石材は安山岩や砂岩である。43・44は板取川の頁岩である⁴⁾。石器は下層から出土した早期のものが約9点で、それ以外は前期末～中期のもので包含層から出土している。（第3章第3節参照）縄文土器はG区から4点のみ小破片が出土しており、時期は不明である。NRC01から出土した流木の年代AD540-605と、NRC02から出土した流木の年代BC17250-16670という時期の遺跡分布も今後の調査で調査区北側の環境が明らかになることを期待したい。下層の調査はNRC02の流木の年代分析結果がきっかけになった。地表下1.5～2mという浅さで19,000年前の地層になる。このことから近世までほとんど開発の手が及ばない大きな谷であったことがいえる。

中世の遺構は、SDJ03とE区の遺構で、中世の遺構の中心は調査区の東端（J・E区）にある。J区とE区は、東側の地質と異なり砂地で、他の地区より12～13世紀の遺物の出土、遺構検出もやや密で、掘立柱建物の柱穴が周辺に並ぶ可能性もある。また、「吉」の墨書のある山茶碗も出土しており、美濃市教育委員会が調査した改田遺跡にも近いことから集落の分布が期待される。

SDJ03の最下層の花粉化石群集にはコナラ属・カキ属が多く、カキが栽培されていた可能性も考え

られる。イネ科が見られるが、水田というほどではないので、SDJ03の埋土出土遺物の時期が12～15世紀であることから、水田開発はこの時期以降と考えられる。

土師器皿⁵⁾はG・I・J区から多く出土しており、中世の遺物中での比率は10.8%である。青磁はG・C・H・J区から1点ずつ出土している。中世陶器はG・I区から多く出土している。12～13世紀の山茶碗がJ区に集中しているのに対して、14～15世紀の山茶碗はE区以外の全地区から多く出土しており、時期別に出土範囲に偏りがみられる。中世の遺物は調査区全体にみられることから(第73図)、北が高く南が低い地形から、北側からの流れ込みと考えると、この時期の遺跡が当調査区の北側にかかなり広範囲に広がっているようである。字絵図(第71図)をみると当遺跡の北西には「中屋敷」、西には「垣内」の小字名があり、中屋敷遺跡・垣内遺跡ともに美濃市教育委員会が一部調査を行っている。字絵図からも中屋敷の区画がはっきりみえる。中屋敷の調査では大量の土師器皿等が出土しており、今後の調査で遺跡の時期や範囲が明らかになることを待ちたいところである。

近世の遺物はB・F区とH・I区から出土している(第73図)。B・F区は石列の付近からの出土であるが、H・I区出土のものは、攪乱を受けた層から出土しているものである。字絵図をみると、当調査区は中屋敷の南東方向にあたり、屋敷の周辺にある田畑を検出しているようである。検出した石列が、東へ行くにつれ南に傾く様子が字絵図と一致する(第71図)。調査区は明治時代には水田になっているようである。

B区の石列近くから出土した木杭をAMS年代測定したところ、年代がAD1725-1775であった。G93のⅢ層直上で出土した材を年代測定したところAD1355-1385で、このことから石器の出土する縄文の包含層上面がこの時期の地表面であったことを意味するともいえよう。

美濃市南西古窯址群の桜洞1号窯出土灰釉陶器碗と調査区出土粘土の蛍光X線分析結果を比較したところ、粘土が似ていることがわかった。古代の遺構は出土していないが、粘土採掘跡は検出している。近所の人の話では最近まで粘土を採掘して瓦を焼いていたとのことである。当調査区で検出したものは近世に近い時期ではないかと考えている。

垣内遺跡は居住域をしめす地名であるのに対して、当遺跡は「一本杉」「茶屋下」「改田」と、居住域には関係しない地名である。また、今回の調査では、明確な居住域を示す遺構が検出できなかった。このことから美濃市が調査した、垣内遺跡と改田遺跡の居住域に挟まれた居住域のない空間域であるといえるのではないだろうか。さらにトレンチ調査に近いので、今回の調査結果からは一本杉・茶屋下・改田の3つの遺跡に分けることが困難であると判断する。

註)

1. 石列は、水田開発時(中世末～近世前半)の耕地区画の例で、水田と畑の境の例であると宇野氏に御教示いただいた。
2. (株)アルカの判定による。
- 3・5. 土師器皿は特に京都系土器の残りがよく3点出土しており、中屋敷の近くに極楽寺という大きい寺があったという伝承から、宗教的な遺跡が近くにある可能性が高いようであると宇野氏より御教示いただいた。
4. 美濃市教育委員会 三島美奈子氏の御教示による。



明治21年10月武儀郡極楽寺字絵図
垣内遺跡図4転用 美濃市遺跡分布地区転用

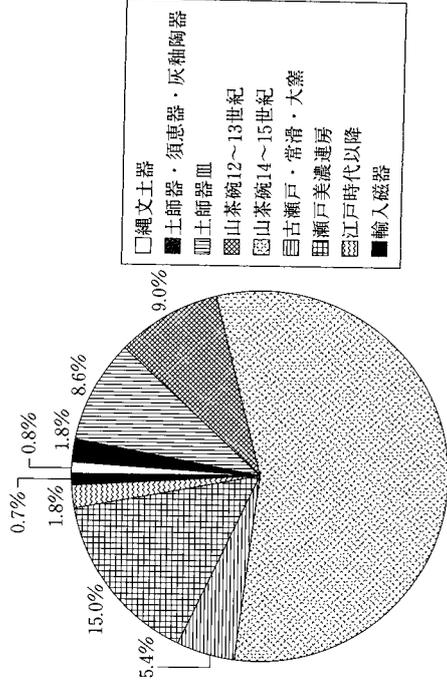
第71図 地籍及び字絵図

表14 器種別土器組成表

遺跡名	一本杉遺跡										茶屋下遺跡						改田E区	破片数計	比率%	口縁部 残存率 個体数	底部残 存率 個体数
	A区	B区	F区	G区	C区	NRC01	NRC02	H区	I区	D区	SDJ01	SDJ02	SDJ03	J区							
縄文土器				4	1													5	0.81		
土師器				2					1									3	0.49		
須恵器									1	2				4				7	1.14	0.05	0.29
灰釉陶器										1								1	0.16		0.13
土師器皿	2	1	3	15	2			6	12				10				53	8.63	0.74	0.29	
山茶碗			1						1								2	0.33	0.53	2.74	
山茶碗12~13C			3	4				4	1			1	5	35			53	8.63		0.23	
山茶碗14~15C	4	5	63	93	20	3	1	55	57	1		1	1	46			350	57.00	2.84	2.58	
古瀬戸		1	2	3	4			2	5	1							18	2.93	0.38	1.28	
常滑陶器				2	1						1						5	0.81			
瀬戸美濃大窯		1		2					6	1							10	1.63	0.10	1.15	
瀬戸美濃連房	4	13	27	1				29	16	2							92	14.98	2.23	1.65	
江戸時代以降		2	3	2					1	2							11	1.79	0.18	1.29	
輸入磁器				1	1			1						1			4	0.65			
破片数計	10	23	102	129	29	3	1	99	102	7	1	2	6	96			614				
比率%	1.63	3.75	16.61	21.01	4.72	0.49	0.16	16.12	16.61	1.14	0.16	0.33	0.98	15.64							

表15 用途別陶器、磁器組成表 (中近世)

遺跡名	一本杉遺跡										茶屋下遺跡						改田E区	破片数計	比率%
	A区	B区	F区	G区	C区	NRC01	NRC02	H区	I区	D区	SDJ01	SDJ02	SDJ03	J区					
供膳具	6	6	72	115	23	3	1	73	80	2		2	6	92	2		483	95.64	
調理具		2	1	2				1	1	1							8	1.58	
煮沸具																	0	0.00	
貯蔵具			2	2	1			1							1		7	1.39	
茶道具			1		1			1	1							4	0.79		
灯火具								1	1							2	0.40		
神仏具								1								1	0.20		
不明																	0		
破片数計	6	8	76	119	25	3	1	78	83	3	0	2	6	92	3	505			
比率%	1.19	1.58	15.05	23.56	4.95	0.59	0.20	15.45	16.44	0.59	0.00	0.40	1.19	18.22	0.59				



第72図 土器組成グラフ

第2節 栗坪遺跡について

当調査区は、舌状に伸びた尾根を、山裾に作られた道¹⁾で切られており孤立した山のようになっている。

出土遺物は13世紀の山茶碗が4点(14%)、14~15世紀の山茶碗が12点(41%)、瀬戸美濃連房の陶器が13点(45%)である(表18)。山茶碗は集石周辺から出土している。陶器はほとんどが集石の北のD5グリッドから出土しており、他は斜面の西と東に転落して2点ずつ出土している。陶器は出土破片数も12点と少ないが、神仏具が8点で、灯火具が1点、茶道具が1点で供膳具が少ないのが特徴である(表20)。鉄釘は角釘で集石周辺から出土しており、E5グリッドから多く出土している。

集石はほとんどが砂岩の川原石で、チャートの角礫が少数ある。石のほとんどが、表土上におき、原位置から移動して集められている様子である。かろうじて3点の石は原位置をとどめているようで、そのうちの2点はレベルが揃っている。

何らかの祭祀跡である可能性は高く、小さい祠のような建物があった可能性も考えられる。石と山茶碗の分布が同じことから、石と山茶碗は一緒に片づけられている。山茶碗の時期に石を使った遺構があり、これを片づけた後に石を利用して近世に祠が建てられたとも考えられる。

註)

1. 道は古道である可能性が高い。古道の南には広範囲で平坦地が広がり、分布調査はされていないが、山岳寺院のようなものが広がる可能性もある。当調査区は孤立した山のようになっており、宗教的ランドマークの役割を果たしていた可能性もあると宇野氏に御教示いただいた。

山茶碗 13世紀							陶器										
	7	6	5	4	3		7	6	5	4	3		7	6	5	4	3
C						C			1	1							
D			1			D			8		1						
E			3			E	2										
F						F											

山茶碗 14~15世紀							釘										
	7	6	5	4	3		7	6	5	4	3		7	6	5	4	3
C						C											
D						D											
E			12			E			14								
F						F											

集石

第74図 遺物分布図

表18 器種別土器組成表

	C4	C5	D3	D5	E5	E7	破片数計	比率%	残存率 ÷ 12	
									口径残存率個体数	底径残存率個体数
山茶碗 12~13世紀				1	3		4	13.79	0.2	1.2
山茶碗 14~15世紀					12		12	41.38	1.4	1.6
瀬戸美濃連房	1	1	1	8		2	13	44.83	1.0	3.7
破片数計	1	1	1	9	15	2	29		2.5	6.4
比率%	3.45	3.45	3.45	31.03	51.72	6.9				

表19 器種別土器組成表 (質量)

	C4	C5	D3	D5	E5	E7	質量計	比率%
山茶碗 12~13世紀				11.0	129.3		140.3	30.35
山茶碗 14~15世紀					178.0		178.0	38.51
瀬戸美濃連房	23.6	2.3	23.7	41.5		52.8	143.9	31.13
質量計	23.6	2.3	23.7	52.5	307.3	52.8	462.2	
比率%	5.11	0.50	5.13	11.36	66.49	11.42		

表20 用途別陶器組成表

	C4	C5	D3	D5	E5	E7	破片数計	比率%	
供膳具						2	2	16.67	碗・折縁皿
茶道具				1			1	8.33	湯呑
灯火具			1				1	8.33	灯明皿
神仏具	1			7			8	66.67	小坏・香炉
破片数計	1	0	1	8	0	2	12		
比率%	8.33	0	8.33	66.67	0	16.67			

圖

版



調査区遠景 (南より)



A区調査前風景 (北より)



B・F区調査前風景 (西より)



H区調査前風景 (西より)



J区調査前風景 (西より)



E区調査前風景 (西より)



A区遺構検出状況 (北より)



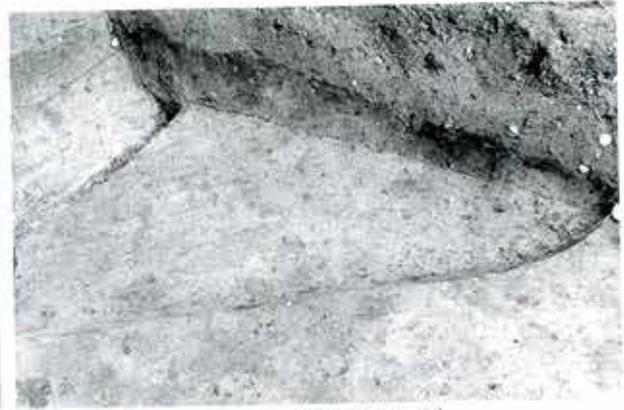
F105、A区北壁断面 (西南より)

調査前風景、一本杉遺跡

図版 2



SDA01 半割 (南西より)



SKA01 完掘 (北より)



SDA01 完掘 (南より)



SKA03 完掘 (西より)



SXA02 断面 (西より)



A区完掘 (北より)



SXA02 完掘 (南より)



A区作業風景

一本杉遺跡



SKB01 検出 (北より)



B区北壁 石列痕跡 (南より)



B区石列検出 (東より)



木杭出土状況 (G104) (南より)



B区石列 断ち割り (東より)



PB08、09完掘 (南より)



PB06完掘 (北より)



PB02完掘 (東より)

一本杉遺跡

図版 4



SKB01 半割 (西より)



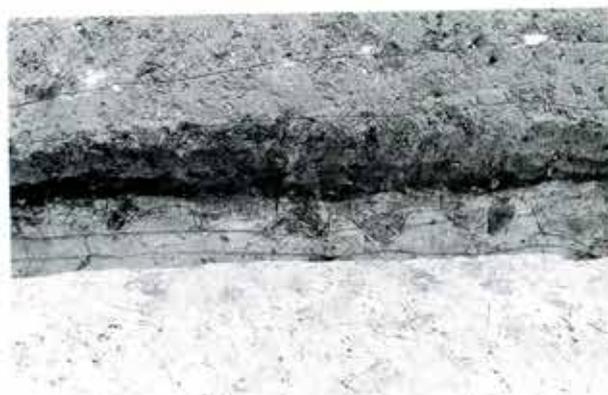
SXB01 半割 (南西より)



SKB01 完掘 (西より)



B区 完掘 (東より)



H95 G区 南壁断面 (北より)



H97 G区 南壁断面 (北より)



H98 F区 南壁断面 (北より)



H100 F区 南壁断面 (北より)

一本杉遺跡



G102 F区 西壁断面 (東より)



F・G区 作業風景



F・G区 上層完掘 (西より)



F区石列 (西より)



F区石列 (北より)

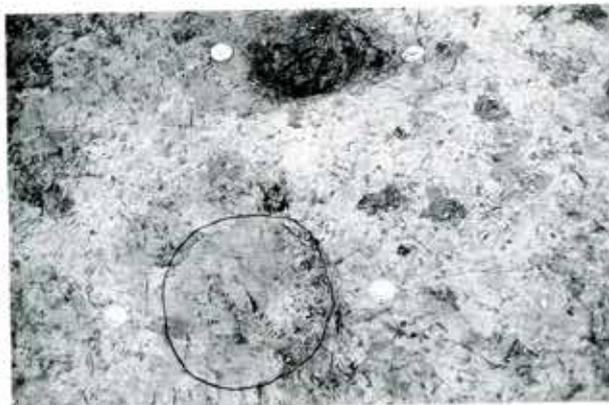


F区石列 (北より)

一本杉遺跡



SXF02 完掘 (北より)



PG01、02 検出 (南より)



SXF03 完掘 (東より)



PG01、05 完掘 (南より)



PG04 検出 (西より)



PG09 検出 (南より)



PG04 完掘 (東より)



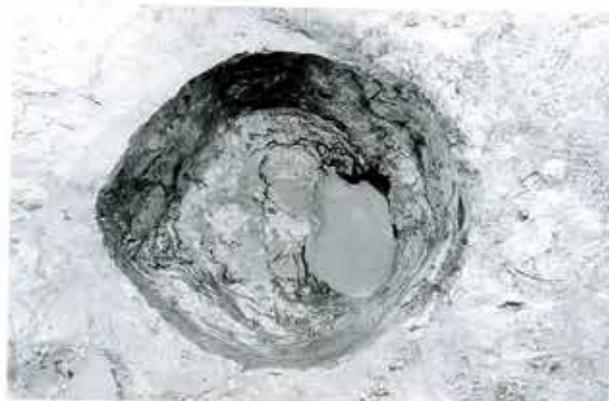
PG09 完掘 (南より)



SKG01 検出 (南より)



SKG02 検出 (南より)



SKG01 完掘 (南より)



SKG02 完掘 (南より)



G区 下層 完掘 (東より)



F区 下層 完掘 (西より)



NRG01 完掘 (東より)



石器出土状況 (西より)

図版 8



石器出土状況 (南より)



G98、H96 石器出土状況 (南より)



石器出土状況 (南より)



C区完掘 (西より)



NRC01 完掘 (南より)



NRC02 断面 (北より)



NRC01 断面 (南西より)



NRC01 遺物出土状況 (南より)

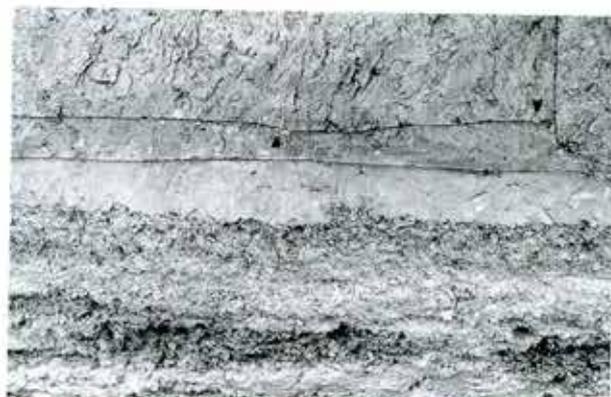
一本杉遺跡



NRC01流木出土状況 (南より)



NRC01流木出土状況 (南より)



174 H区東壁断面 (西より) 東→西へ①



175 H区東壁断面 (西より) ②



176 H区東壁断面 (西より) ③



176 H区東壁断面 (西より) ④



H区完掘 (西より)

一本杉・茶屋下遺跡



SXH02 遺物出土状況 (南より)



SXH02 遺物出土状況 (西より)



SXH02 石器、炭化材出土状況 (西より)



SXH02 暗渠下石器出土状況 (西より)



I区 完掘 (西より)



D区 東壁断面 (西より)



D区完掘 (西より)



PD01完掘 (東より)

茶屋下遺跡



PD02 検出 (南より)



PD03 検出 (南より)



PD02 完掘 (東より)



PD03 Pit 完掘 (東より)



PD04、05検出 (南より)



PD03 完掘 (南より)



PD04、05 完掘 (東より)

茶屋下遺跡



SDD01 断面 (南より)



PD07 完掘 (北より)



SDD01 完掘 (南より)



D区東半分完掘 (南より)



K42 J区南壁 断面 (北より)



SDJ01断面 (南より)



K43 J区南壁断面 (北より)



SDJ01完掘 (南より)



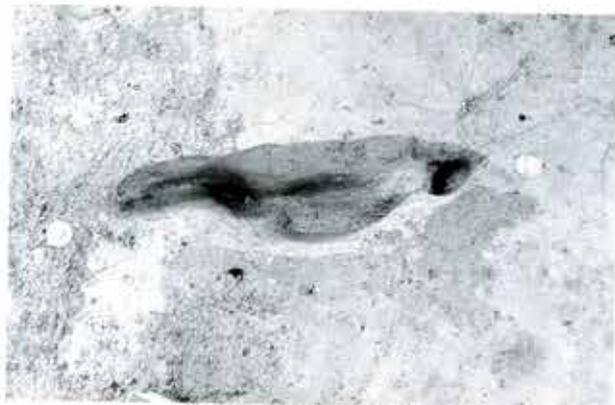
SDJ03 検出 (南より)



PJ03 断面 (北より)



SDJ03 完掘 (南より)



PJ03 完掘 (西より)



SDJ02 断面 (西より)



J区上層東端検出 (東より)



SDJ02完掘 (南より)



SKJ04断面 (西より)

茶屋下遺跡



J区上層東端（西より）



J区上層東端（東より）



SKJ02断面（東南より）



J区完掘（東より）



SKJ02完掘（南より）



J区 下層東側完掘（南より）



J区 下層東側完掘（南より）

茶屋下遺跡



PE01、04 検出 (南東より)



SDE01、02 検出 (南東より)



PE01 完掘 (南より)



SDE01 断面 (北より)



PE04 完掘 (南より)



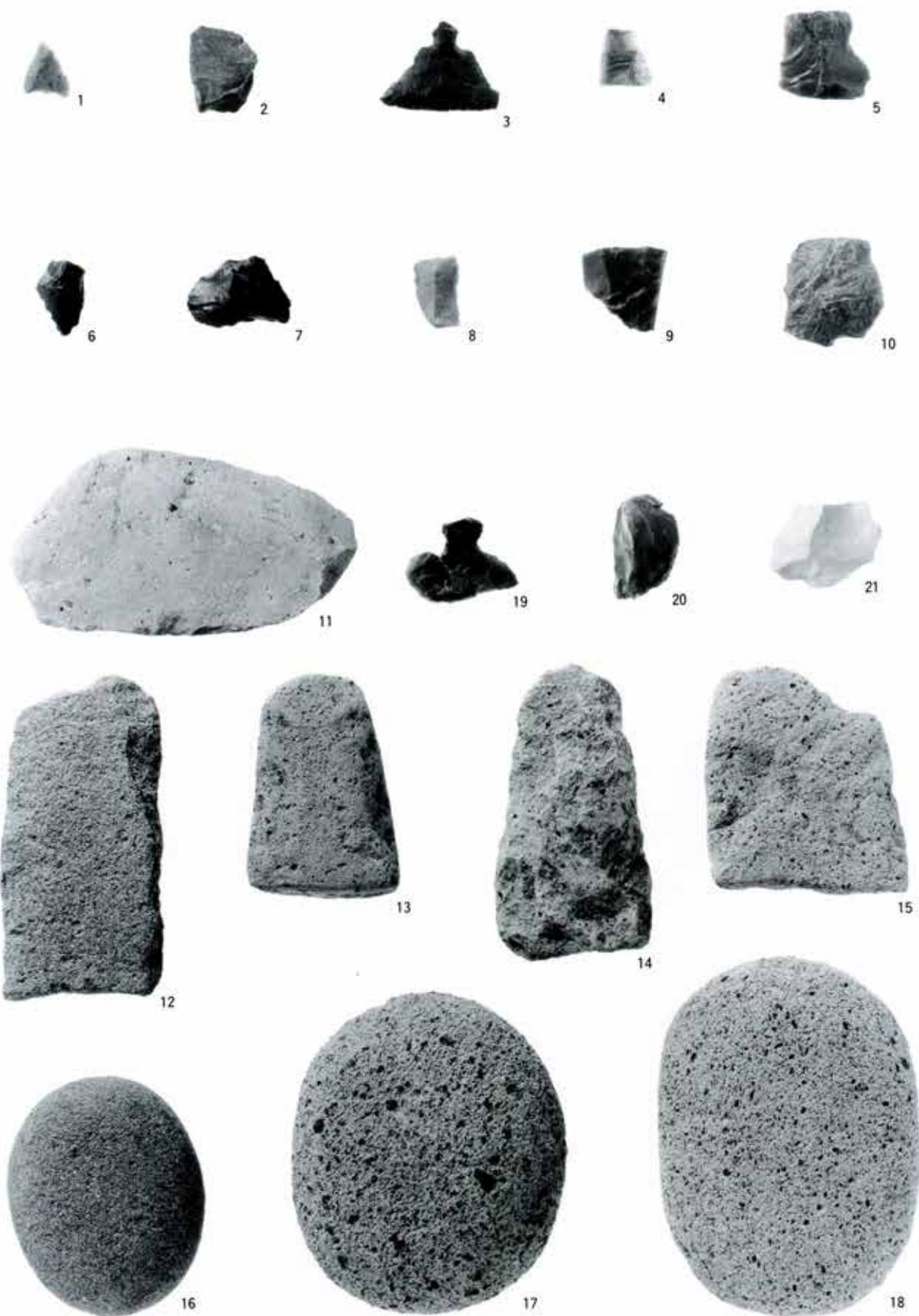
SDE02 断面 (北より)



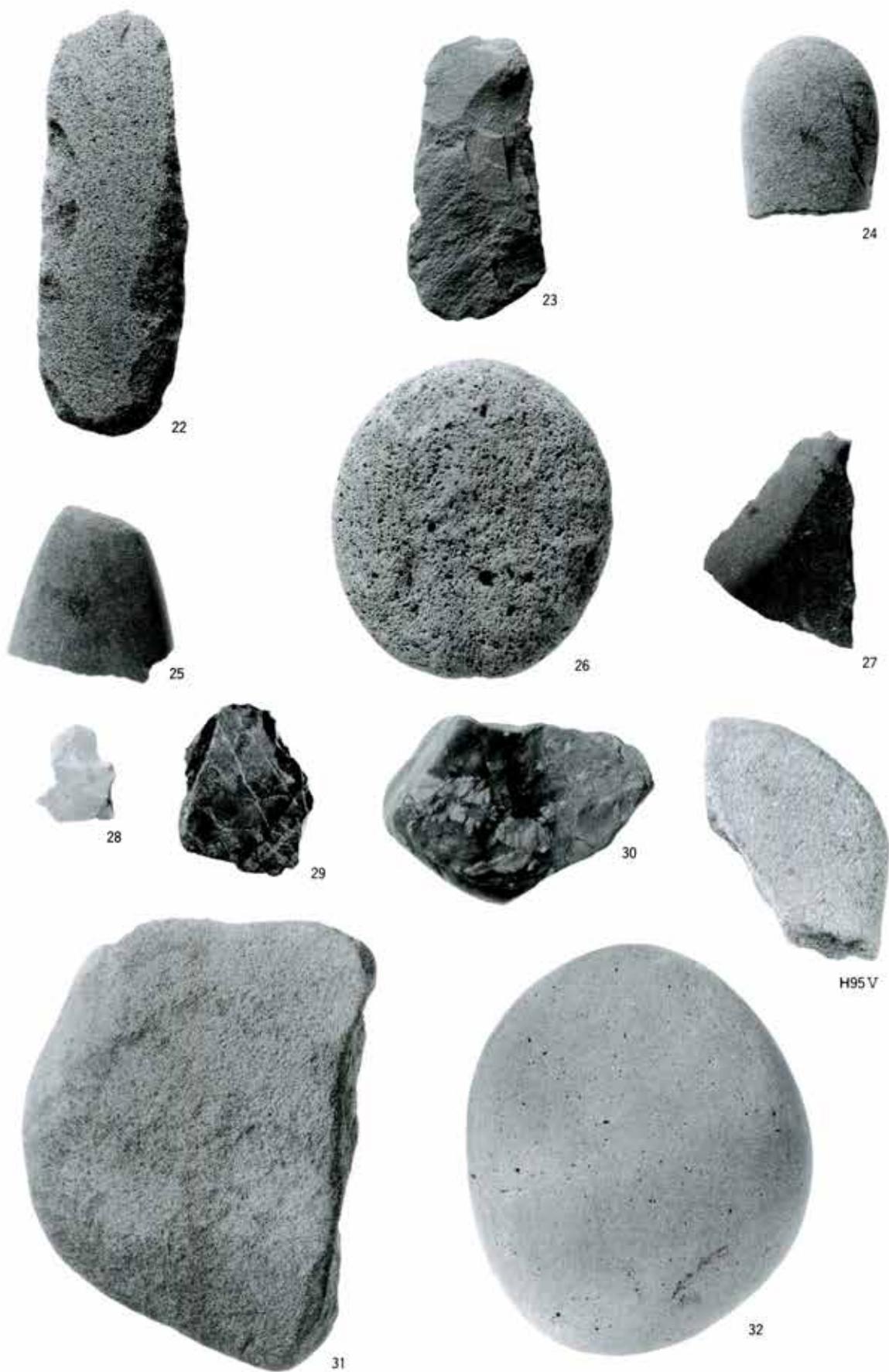
SDE01 完掘 (南より)



SDE02 完掘 (南より)



一本杉遺跡出土石器(1)



一本杉遺跡出土石器(2)



33



34



35



36



46



37



38



39



40



41



43



44

茶屋下遺跡出土石器(1)



42



47



45

一本杉



G102
Ⅲ



H101
Ⅲ

茶屋下



I 75
Ⅲ



H77
Ⅲ

下層の礫にまじっている石

茶屋下



H79
I

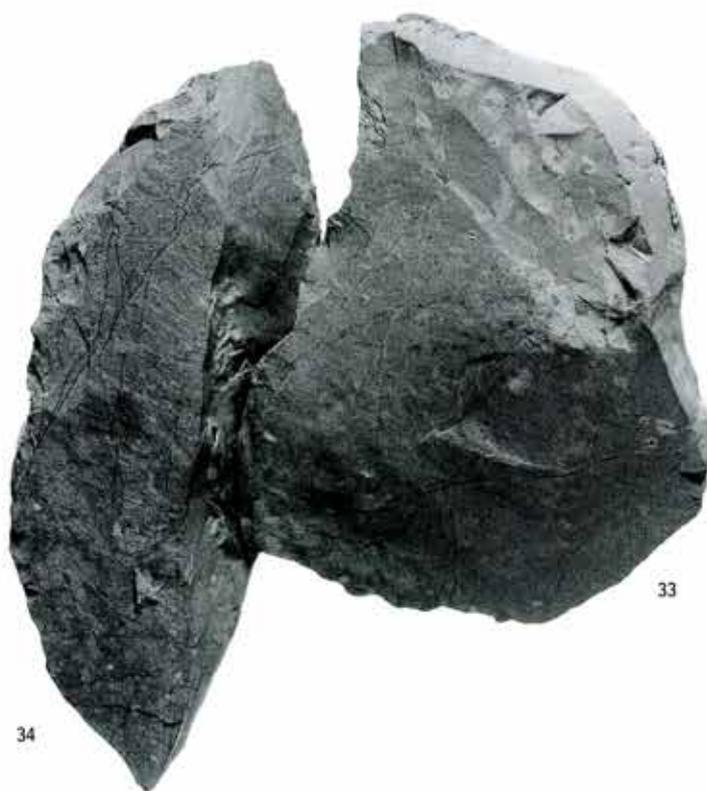
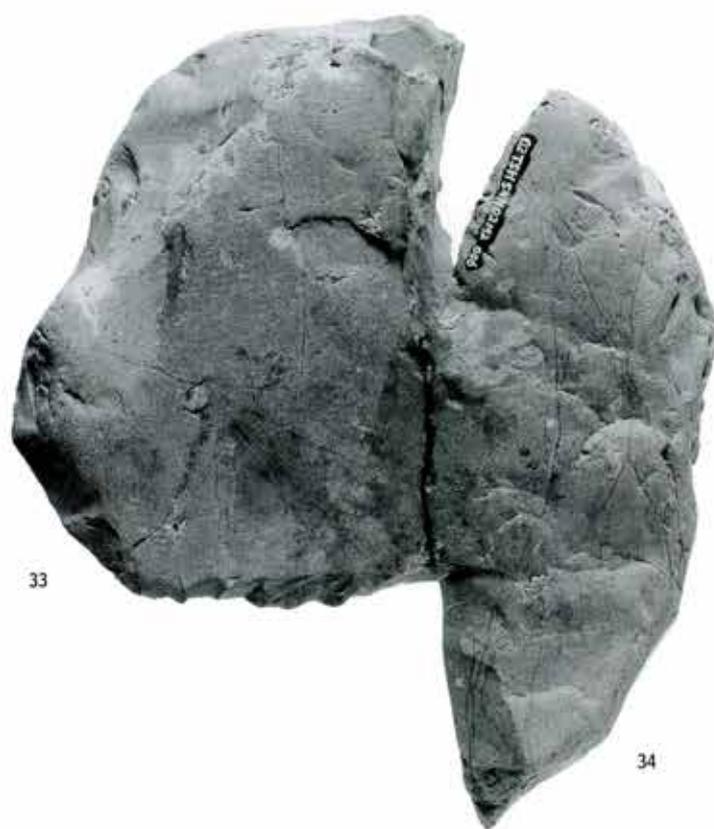


K43
I



I 79
I

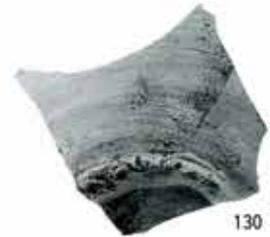
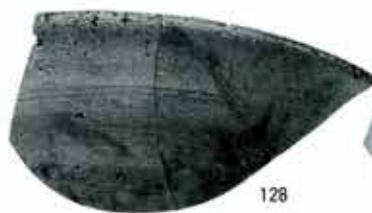
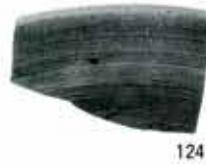
茶屋下遺跡出土石器 (2)

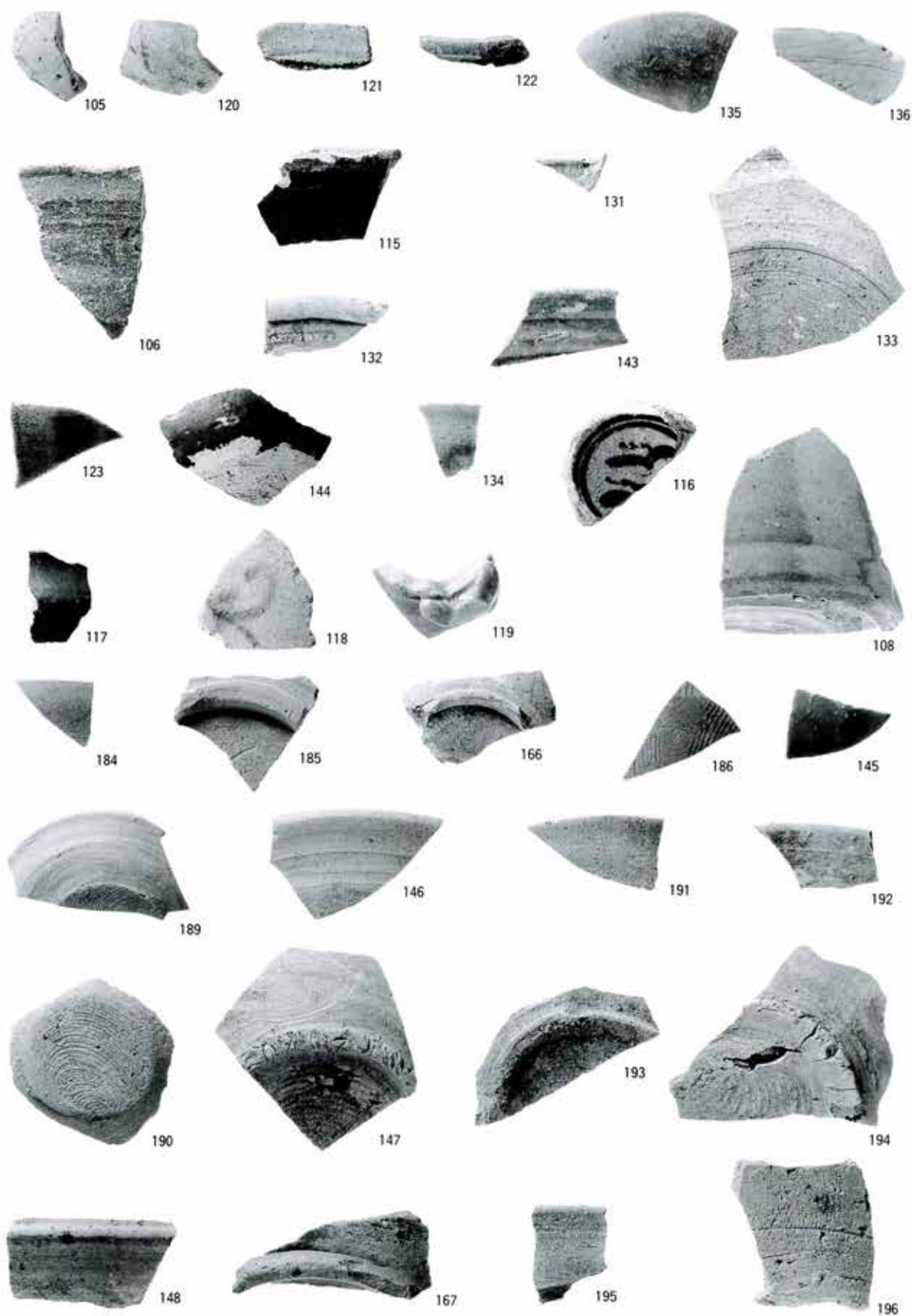


SXH02出土石器 接合状况(1)

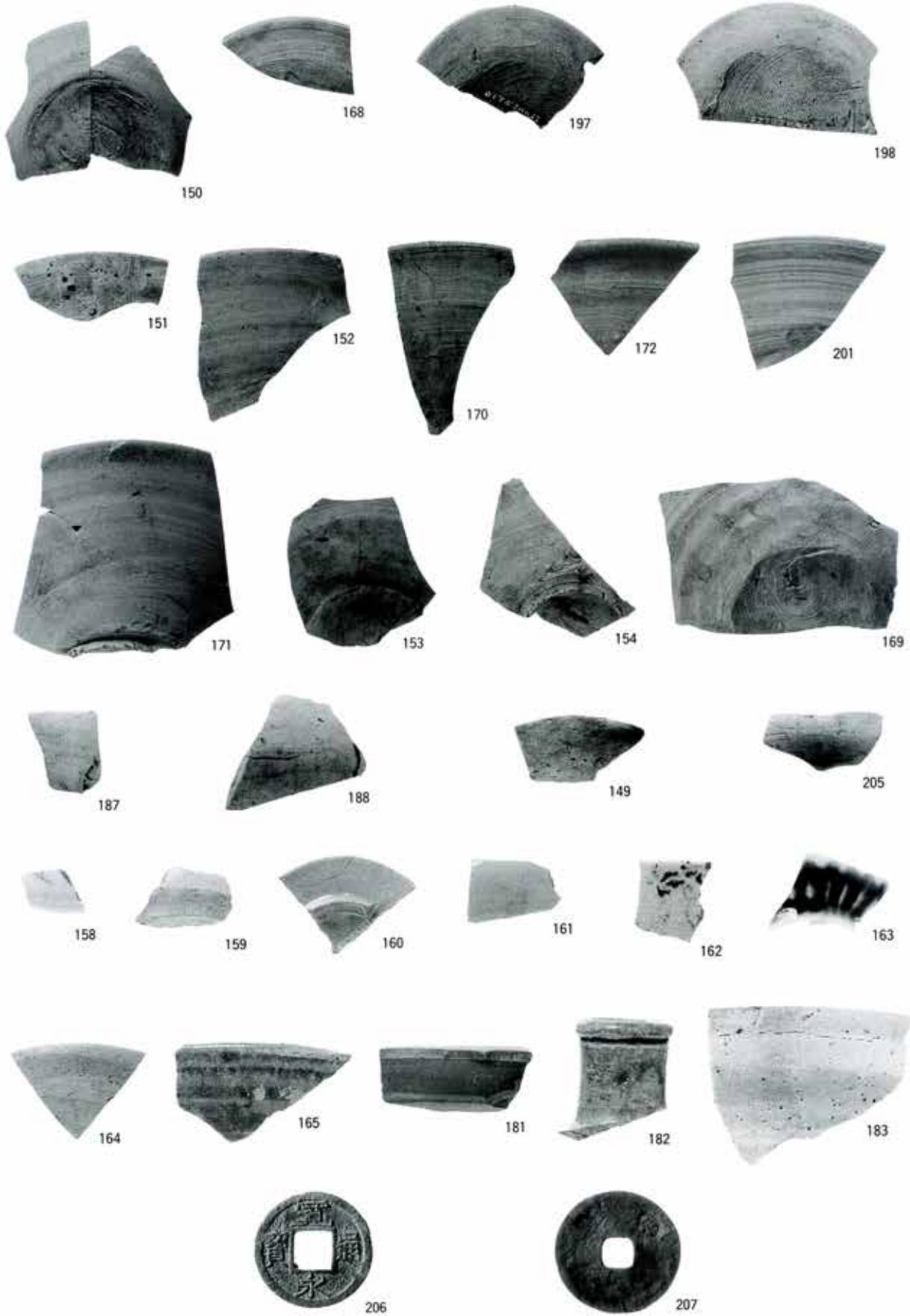


SXH02出土石器 接合状况(2)

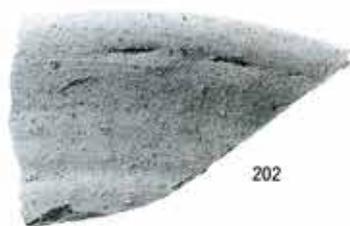




一本杉・茶屋下遺跡出土遺物



茶屋下遺跡出土遺物



202



155



156



173



174



203



175



176



179



180



178



157



177



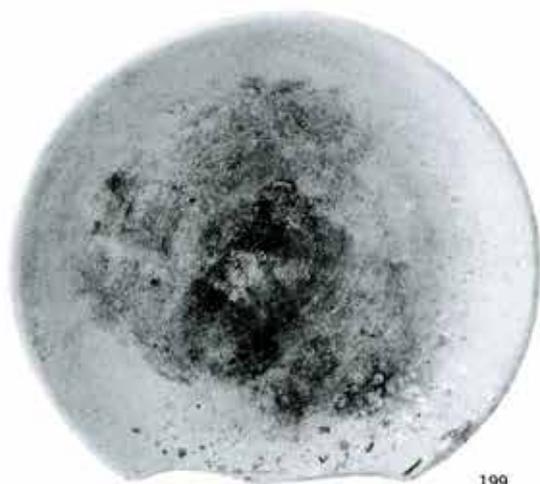
204



200



199



199

茶屋下遺跡出土遺物



遺跡遠景写真 (北より)



調査前東斜面 (東より)



調査前頂上部 (北より)



調査前西斜面 (西より)



遺物出土状況 (305) (南より)



遺物出土状況 (305) (東より)



遺物出土状況 (304) (東より)



遺物出土状況 (311) (東より)



集石検出状況、表土掘削前（南より）



集石検出状況、表土掘削前（西より）



頂上部南北方向試掘トレンチ（東より）



頂上部南北方向試掘トレンチ（東より）



東西方向試掘トレンチ（東より）



東西方向試掘トレンチ（東より）



東西方向試掘トレンチ（南より）



東西方向試掘トレンチ（南より）

栗坪遺跡 集石検出・壁断面



遺跡全景 (東より)



頂上部全景 (北より)



遺跡全景 (西より)



集石検出状況 (北より)



集石検出状況 (南より)



集石検出状況 (西より)



集石検出状況 (東より)



礎石検出状況（南より）



礎石検出状況（東より）



礎石検出状況（西より）



礎石下断割状況（東より）



礎石下断割状況（南より）



礎石下断割断面（東より）

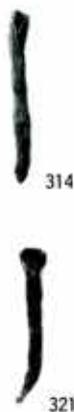


Ⅱ層掘り下げ状況（南より）



頂上部断割状況（東より）

栗坪遺跡 礎石検出、断割、掘り下げ状況



312

320

313

314

315

316

317

318

319

321

322

323

324

325

栗坪遺跡 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	いっぼんすぎ・ちゃやした・かいでんいせき、くりつぼいせき							
書名	一本杉・茶屋下・改田遺跡、栗坪遺跡							
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書							
シリーズ番号	第86集							
編著者名	近藤正枝							
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL058-237-8550							
発行年月日	西暦2004年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いっぼんすぎいせき 一本杉遺跡	ぎふけんみのし 岐阜県美濃市 おおあぎごくらくし 大字極楽寺 あざいっぼんすぎ 字一本杉	21207	09211	35°	136°	20020610～ 20030207	2,000 ㎡	主要地方 道岐阜美 濃線道路 改良工事
			09908	31′	53′			
			08755	46″	24″			
ちゃやしたいせき 茶屋下遺跡	ぎふけんみのし 岐阜県美濃市 あざちやした 字茶屋下	21207						
かいでんいせき 改田遺跡								
くりつぼいせき 栗坪遺跡	ぎふけんみのし 岐阜県美濃市 おおあぎみたらい 大字御手洗 あざくりつぼ 字栗坪	21207	09647	35°	136°	20020805～ 20020913	400㎡	県道御手 洗立花線 道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
一本杉遺跡	散布地	縄文時代 中世～近世	柱穴29基 土坑5基 石列1本 自然流路3条 溝1条	石器 縄文土器 土師器皿 山茶碗 陶磁器		近世の土地区画の石列あり。 渡来川北遺跡（縄文時代草 創期）と同じ粘土層があり、 早期の石器が数点出土して いる。		
茶屋下遺跡	散布地	縄文時代 中世～近世	柱穴11基 土坑5基 粘土採掘穴2基 溝4条	石器 須恵器 土師器皿 山茶碗 陶磁器		土師器皿が多く出土し、周 辺に伝極楽寺の存在が考え られる。渡来川北遺跡と同 じ粘土層があり、早期の石 器が数点出土している。		
改田遺跡	散布地	中世～近世	柱穴2基 溝2条	土師器皿 陶器		掘立柱建物跡が周辺に並ぶ 可能性が高い。		
栗坪遺跡	散布地	中世・近世	集石1基	山茶碗 陶器 鉄釘		「まつり」の跡の可能性が 高い。南に古道と宗教施設 が広がる可能性が高い。		

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第86集

一本杉・茶屋下・改田遺跡
栗坪遺跡

2004年3月19日

編集・発行 財団法人 岐阜県教育文化財団文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 サンメッセ株式会社